岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 730 集

二子城（ふたごじょう）跡発掘調査報告書

第一北上中部工業用水道浄水場建設事業関連遺跡発掘調査

２０２１

岩手県企業局

（公財）岩手県文化振興事業団

二子城跡発掘調査報告書

第一北上中部工業用水道浄水場建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことの出来ない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手県北上市の第一北上中部工業用水道浄水場建設に関連して平成 30 年度及び平成 31 年度・令和元年度に発掘調査を実施した、二子城跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査で、本遺跡は縄文時代には集落と狩り場、古代には集落、中世には城館が営まれていたことが明らかとなりました。特に、縄文時代の集落は、北上北部地域の縄文時代後晩期を考える上で貴重な資料を提供することができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県企業局、北上市埋蔵文化財センターをはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和３年３月

公益財団法人岩手県文化振興事業団
理事長　高橋　嘉行

例　　言

1　本報告書は、岩手県北上市坊舘地内に所在する二子城跡の発掘調査成果を収録したものである。

2　本遺跡の発掘調査は、第一北上中部工業用水道浄水場建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会の調整を経て、岩手県企業局の委託を受けた（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3　岩手県遺跡登録台帳における遺跡コード・遺跡略号は次のとおりである。

遺跡コード：ME46-2214　遺跡略号：FJ-18・19

4　発掘調査期間・調査面積・担当者は次のとおりである。

平成30年度－調査期間：平成 30 年 11 月 1 日～12 月 20 日　面積：1,655㎡

担 当 者：北田 勲・西澤正晴・須原 拓・川村 英・河村美佳・藤田崇志・戦場由裕

平成31年度・令和元年度

－調査期間：平成 31 年 4 月 4 日～令和元年 7 月 31 日　面積：10,901㎡

担 当 者：北田 勲・高木 晃・丸山直美・河村美佳・酒井野々子

5　室内整理期間・担当者は次のとおりである。

整理期間：令和元年 11 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日

担 当 者：北田 勲・丸山直美・河村美佳

6　本報告書の執筆分担は次のとおりである。

Ⅰ：岩手県企業局　Ⅱ：丸山・北田　Ⅲ～Ⅴ：丸山・北田・河村

Ⅵ：（株）加速器分析研究所　Ⅶ：北田

7　各種業務委託は、次のとおりである。

基準点測量：（有）先先測量

航空写真撮影：東邦航空（株）

放射性炭素年代測定：（株）加速器分析研究所

石器・石製品の実測：（株）ラング

石器・石製品の石材鑑定：花崗岩研究会

8　本書では以下の地形図を使用した。

『1/25,000 地形図　土沢・口内』（国土地理院）

『1/50,000 地形図　花巻・北上』（国土地理院）

『北上市都市計画図（成田・更木・北上工業団地・昭和橋）』

9　野外調査及び室内整理にあたり、以下の機関等から御協力をいただいた。

北上市埋蔵文化財センター

10　本遺跡の出土遺物及び諸記録類は岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。

11　これまでに、調査成果の一部を調査概報等において公表しているが、本書の記載内容を正式なものとする。

凡　　例

1　遺構図の用例は次のとおりである。

(1) 遺構実測図の縮尺は下記のとおりである。

竪穴住居跡の炉、土器埋設遺構、焼土遺構　　1/30

竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、溝跡断面、粘土採掘坑　　1/60

溝跡平面　1/100、1/150、1/200、1/250

各図版にはスケール及び縮尺を付した。

(2) 遺構実測図及び本文で示した座標は、平面直角座標Ｘ系に基づいて表示している。

(3) 推定線は破線で表した。また、スクリーントーンを使用して遺構の状況を表した（凡例図参照）。

(4) 遺構内の土器をＰ、石器・礫をＳで示した。

(5) 層位は、基本層序にローマ数字、各遺構堆積土などにアラビア数字を使用した。

(6) 土層色調観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。

2　遺物実測図の用例は次のとおりである。

(1) 遺物実測図の縮尺は、縄文土器 1/3、石器 2/3・1/3・1/5・1/6、土製品 2/3、石製品 2/3・1/3、陶磁器 2/3 で表した。

(2) スクリーントーンを使用して、石器の使用痕を表した（凡例図参照）。

3　写真図版の用例は次のとおりである。

(1) 遺構写真図版については、基本的に平面及び断面写真をセットとし掲載した。

(2) 遺物写真図版については、縮尺は基本的に遺物実測図に準じている。

遺構使用トーン凡例

	焼土(弱)	K20%
	焼土(強)	K40%
	粘土	K10%
	硬化面	K30%

遺物使用トーン凡例

石器

	敲打痕	
	磨敲	K30%
	付着物	K70%
	付着物[鉄]	K50%
	節理	
	使用痕	K20%

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地・環境 …… 2
1　遺跡の位置 …… 2
2　地理的環境 …… 2
（1）遺跡周辺の地形・地質 …… 2
（2）調査区の層序 …… 4
3　歴史的環境 …… 4
（1）二子城の縄張り …… 4
（2）周辺の遺跡と過去の調査 …… 12

Ⅲ　調査・整理の方法 …… 14
1　野外調査の方法 …… 14
（1）調査の方法 …… 14
（2）野外調査の経過 …… 14
2　整理の方法 …… 17
（1）遺構の整理 …… 17
（2）遺物の整理 …… 17
（3）遺物写真の撮影 …… 17
（4）整理の経過 …… 17
3　広報活動 …… 17

Ⅳ　検出遺構 …… 18
1　全体の概要 …… 18
2　縄文時代 …… 20
（1）概要 …… 20
（2）竪穴住居跡 …… 20
（3）土器埋設遺構 …… 25
（4）土坑 …… 27
（5）焼土 …… 43
（6）陥し穴状遺構 …… 45
（7）粘土採掘坑 …… 56
3　古代～中世 …… 57
（1）概要 …… 57
（2）竪穴状遺構 …… 57
（3）城館に関連する遺構 …… 59
4　中世以降 …… 59
（1）概要 …… 59
（2）溝跡 …… 59
（3）柱穴状ピット …… 70

Ⅴ　出土遺物 …… 74
1　土器 …… 74
2　石器 …… 75
3　土製品 …… 101
4　石製品 …… 101
5　陶磁器 …… 101

Ⅵ　自然科学的分析 …… 110
1　放射性炭素年代測定 …… 110
（1）測定対象試料 …… 110
（2）測定の意義 …… 110
（3）化学処理工程 …… 110
（4）測定方法 …… 110
（5）算出方法 …… 110
（6）測定結果 …… 111

Ⅶ　調査のまとめ …… 114
1　縄文時代 …… 114
2　古代～中世 …… 114
報告書抄録 …… 189

図版目次

凡　例　図
第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　遺跡位置図（拡大）…… 3
第３図　基本層序柱状模式図 …… 4
第４図　遺跡周辺の治水地形分類図 …… 5
第５図　二子城想定図 …… 6
第６図　飛勢城実測平面図 …… 7
第７図　周辺の遺跡分布図 …… 10
第８図　周辺の地形とグリッド配置図 …… 15
第９図　調査全体図 …… 19
第10図　部分図１（北区）…… 20
第11図　部分図２（中央区）…… 21
第12図　部分図３（南区）…… 22
第13図　竪穴１～３ …… 24
第14図　竪穴４ …… 25
第15図　土器埋設遺構１～５ …… 26
第16図　土坑１～６、８～16 …… 28
第17図　土坑 17～30 …… 30
第18図　土坑 31～33、35～44 …… 33
第19図　土坑 46～48、50～54、56～63、P176 …… 35
第20図　土坑 64～67、71～77、陥し穴状遺構 25、溝 24・28 …… 39
第21図　土坑 78～86 …… 41
第22図　焼土１～12 …… 44
第23図　陥し穴状遺構 23・28・33・35、６～９ …… 46
第24図　陥し穴状遺構 10～12、18～21、29 …… 48
第25図　陥し穴状遺構 24・30～32・34・36 …… 50
第26図　陥し穴状遺構１～５、13 …… 52
第27図　陥し穴状遺構 14～17・22・26、土坑 49 …… 54
第28図　陥し穴状遺構 27 …… 55
第29図　粘土採掘坑１・２ …… 56
第30図　竪穴５ …… 57
第31図　現況等高線図（坊館推定範囲）…… 58
第32図　溝１・２ …… 60
第33図　溝３～６ …… 61
第34図　溝７・９ …… 63
第35図　溝 11～16 …… 65
第36図　溝 17～19、21・22 …… 67
第37図　溝 24～28 …… 69
第38図　現代に推定される溝 …… 70
第39図　土器（１）…… 76
第40図　土器（２）…… 77
第41図　土器（３）…… 78
第42図　土器（４）…… 79
第43図　土器（５）…… 80
第44図　石器（１）…… 82
第45図　石器（２）…… 83
第46図　石器（３）…… 84
第47図　石器（４）…… 85
第48図　石器（５）…… 86
第49図　石器（６）…… 87
第50図　石器（７）…… 88
第51図　石器（８）…… 89
第52図　石器（９）…… 90
第53図　石器（10）…… 91
第54図　石器（11）…… 92
第55図　石器（12）…… 93
第56図　石器（13）…… 94
第57図　石器（14）…… 95
第58図　石器（15）…… 96
第59図　石器（16）…… 97
第60図　石器（17）…… 98
第61図　石器（18）…… 99
第62図　石器（19）、土製品、石製品 …… 100
第63図　陶磁器 …… 101

表　目　次

第１表　二子城関連の郭・地点の調査履歴 …… 8
第２表　周辺の遺跡一覧表 …… 11
第３表　遺構名対応表 …… 16
第４表　柱穴状ピット計測表 …… 71
第５表　土器観察表 …… 102
第６表　石器観察表 …… 106
第７表　土製品観察表 …… 109
第８表　石製品観察表 …… 109
第９表　陶磁器観察表 …… 109

写真図版目次

写真図版１　遺跡遠景 …… 117
写真図版２　遺跡近景（１）…… 118
写真図版３　遺跡近景（２）…… 119
写真図版４　竪穴１ …… 120
写真図版５　竪穴２…… 121
写真図版６　竪穴３ …… 122
写真図版７　竪穴４ …… 123
写真図版８　竪穴５ …… 124
写真図版９　土器埋設遺構１～３ …… 125
写真図版10　土器埋設遺構４・５、土坑１・２ …… 126
写真図版11　土坑３～６ …… 127
写真図版12　土坑８～12 …… 128
写真図版13　土坑 13～15 …… 129
写真図版14　土坑 16～19 …… 130
写真図版15　土坑 20～23 …… 131
写真図版16　土坑 24～27 …… 132
写真図版17　土坑 28～31 …… 133
写真図版18　土坑 32・33、35・36 …… 134
写真図版19　土坑 37～40 …… 135
写真図版20　土坑 41～44 …… 136
写真図版21　土坑 46～49 …… 137
写真図版22　土坑 49～52 …… 138
写真図版23　土坑 53・54、56・57 …… 139
写真図版24　土坑 58～61、P158 …… 140
写真図版25　土坑 62～65 …… 141
写真図版26　土坑 66・67、71・72 …… 142
写真図版27　土坑 73～75、陥し穴状遺構 25 …… 143
写真図版28　土坑 76～79 …… 144
写真図版29　土坑 80～83 …… 145
写真図版30　土坑 84～86、焼土１ …… 146
写真図版31　焼土１～４ …… 147
写真図版32　焼土５～８ …… 148
写真図版33　焼土９～12 …… 149
写真図版34　陥し穴状遺構 23・28・33・35 …… 150
写真図版35　陥し穴状遺構６～９ …… 151
写真図版36　陥し穴状遺構 10～12 …… 152
写真図版37　陥し穴状遺構 18～20 …… 153
写真図版38　陥し穴状遺構 21・29～31 …… 154
写真図版39　陥し穴状遺構 32・34・36 …… 155
写真図版40　陥し穴状遺構１～４ …… 156
写真図版41　陥し穴状遺構５・13～15 …… 157
写真図版42　陥し穴状遺構 16・17・22・24 …… 158
写真図版43　陥し穴状遺構 26・27、溝１ …… 159
写真図版44　溝１～３ …… 160
写真図版45　溝３・４ …… 161
写真図版46　溝３～６ …… 162
写真図版47　溝７ …… 163
写真図版48　溝９・11・12 …… 164
写真図版49　溝 12・14～16 …… 165
写真図版50　溝 12～16 …… 166
写真図版51　溝 17～19 …… 167
写真図版52　溝 21・22・24 …… 168
写真図版53　溝 24・25 …… 169
写真図版54　溝 25・26 …… 170
写真図版55　溝 26・28、粘土採掘坑１・２ …… 171
写真図版56　西側谷 …… 172
写真図版57　現況ほか …… 173
写真図版58　現況、作業風景、調査区全景 …… 174
写真図版59　調査区全景 …… 175
写真図版60　土器（１）…… 176
写真図版61　土器（２）…… 177
写真図版62　土器（３）…… 178
写真図版63　石器（１）…… 179
写真図版64　石器（２）…… 180
写真図版65　石器（３）…… 181
写真図版66　石器（４）…… 182
写真図版67　石器（５）…… 183
写真図版68　石器（６）…… 184
写真図版69　石器（７）…… 185
写真図版70　石器（８）…… 186
写真図版71　石器（９）…… 187
写真図版72　石器（10）、土製品、石製品、陶磁器 …… 188

Ⅰ　調査に至る経過

二子城跡は、第一北上中部工業用水道浄水場建設事業に伴って、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することになったものである。

岩手県企業局が経営する第一北上中部工業用水道事業において、今般、工業用水需要のさらなる増加が見込まれることから、これに対応するため、新たな浄水場を建設することとしたものである。

二子城跡は、岩手県教育委員会作成の県遺跡台帳登録済、周知の遺跡である。当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県企業局から県教育委員会に対し、平成30年6月4日付企業業第74号「埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた県教育委員会は平成30年8月20日から24日までに試掘調査を実施し、工事に着手するには二子城跡の発掘調査が必要となる旨を平成30年9月7日付教生第860号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により回答した。

その結果を踏まえて県企業局は県教育委員会と協議を行い、発掘調査を公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受諾事業とすることとした。これにより平成30年10月12日付けで岩手県企業局長と公益財団法人岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、二子城跡の発掘調査を実施することとなった。

（岩手県企業局業務課）

第１図　遺跡位置図

Ⅱ　遺跡の立地・環境

1　遺 跡 の 位 置

二子城跡は岩手県北上市二子町坊舘地内に所在し、国土地理院発行50,000分の１地形図「花巻」、「北上」の図幅に含まれ、北緯39度20分７秒、東経141度８分10秒に位置する。本遺跡調査区は、中世に和賀郡を広く治めていた和賀氏の本拠「二子城」の一部、「坊館」に該当する。

二子城跡（別名：飛勢城）は北上川西岸の独立丘陵および河岸段丘上に築かれた県内最大の中世城館跡で、全体規模は南北約2.3㎞、東西約１㎞を測る。北側を東流する飯豊川により区切られ、東側は南流する北上川による比高差10ｍ超の段丘崖と接する。南側は近世に行われた一大干拓事業（註１）によって景観を様変わりさせているが、かつて二子城時代は北上川の氾濫平野上に形成された大沼（後谷地）が水を満々と湛え、南の防御線として存在した。西側には南流する飯豊川支流と、同支流の旧河道、秋子沢から北方に延びる覚禅坊谷地などによって、一帯にぬかるんだ谷地が形成されていた（第５・６図参照）。このように東西南北を自然の要害によって守られた立地に、二子城が築かれた理由があったと考えられる。（丸山）

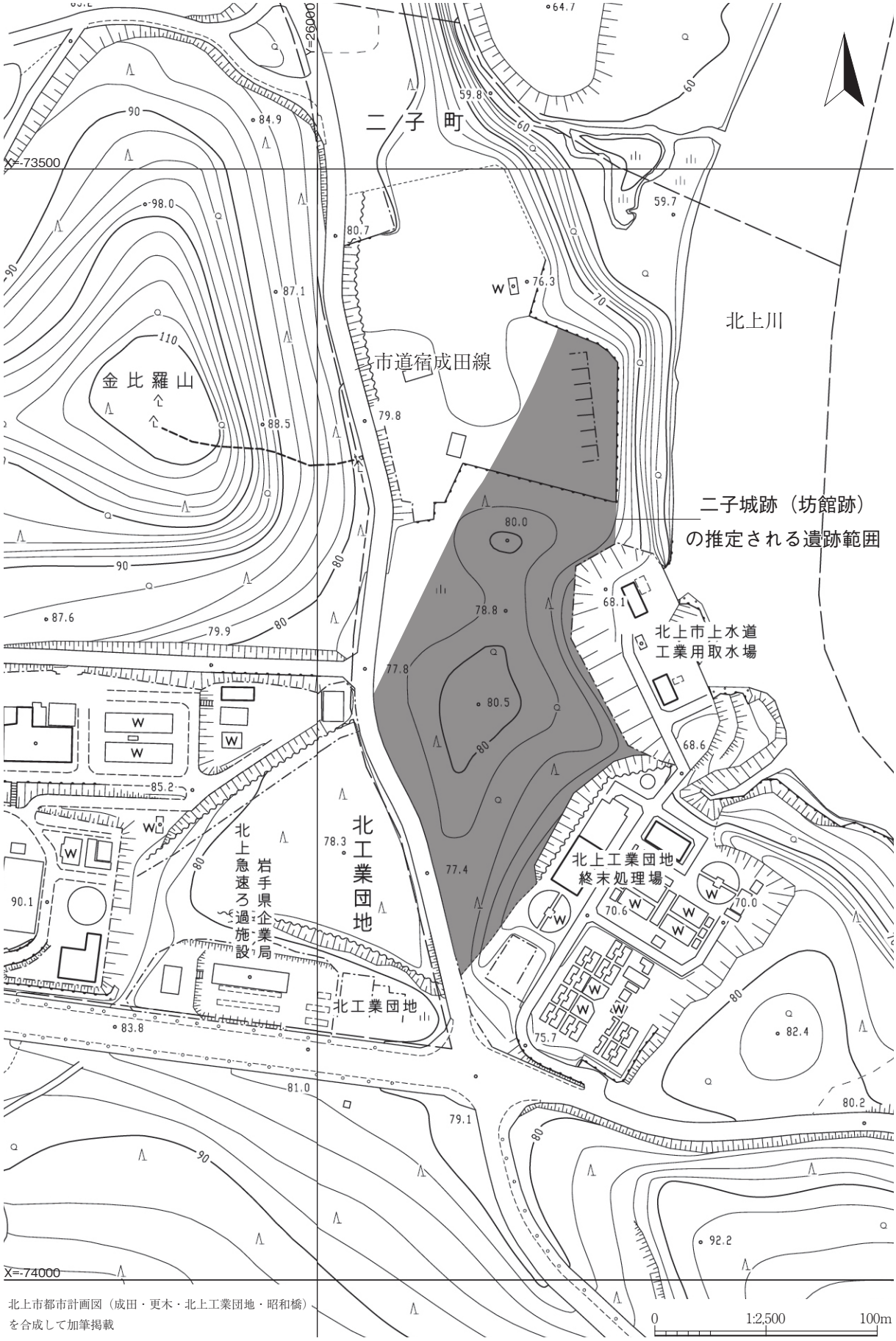
註１　鈴木隆太郎　1913『二子村誌』第十八　108頁　城東文庫・及川雅義　昭和31年（1956）『飛勢城物語』33・34頁　北加美社

2　地 理 的 環 境

（１）遺跡周辺の地形・地質

北上川は流路延長249㎞、流域面積10,150㎢を誇る、東北地方一の大河である。源泉は岩手郡岩手町御堂にあり、奥羽山脈および北上山地に源を発する支流を合わせながら岩手県内を南流し、宮城県の平野部を経て河口に至る。河川沿岸には平野が広く発達するが、盛岡市北部と一関市南東部の２箇所で狭窄部を流れる。この２箇所によって北上川は上・中・下流に分けられる。北上川は中流域において、壮年期の急峻な地形を呈している奥羽山脈と、それとは対照的に老年期に入り緩慢な地形となっている北上高地の間を流れる。北上盆地は北上川とその支流の土砂運搬作用および開析作用によって形成されたものであるが、奥羽山脈に源をもつ支流による流出土砂が北上高地からに比べて圧倒的に多いので、北上川は盆地の東側に偏った流れとなっており、西側には奥羽山脈沿いに複合扇状地と河岸段丘が、東側は準平原である北上高地の残丘の丘陵が発達している。

北上市周辺においても、こうした地形上の特徴は明瞭に見受けられる。北上市周辺の地形は、北上川を境として、西部の扇状地性の台地群と東部の小起伏山地を含む丘陵地帯の二つに区分される。西部の台地群は、奥羽山脈から東流する河川が洪水と流路の変更を繰り返して形成した扇状地や、北上川の旧河床が段丘化したもので、段丘群は高位のものから順に西根段丘・村崎野段丘・金ヶ崎段丘に区分されるが、地域によっては村崎野・金ヶ崎段丘は更に細分される。現在はこれらの台地群を刻んで、和賀川およびその支流の夏油川の両岸に幅１～２㎞の谷底平野が見られる。東部では、一部に台地が発達する地域があるものの大部分は標高200～300ｍ内外の丘陵地で、その中に小起伏山地が散在する。北上川沿いでは幅１～４㎞の平野が開けており、北上川の流路変遷をうかがうことのできる旧河道と自然堤防地形が残存する。



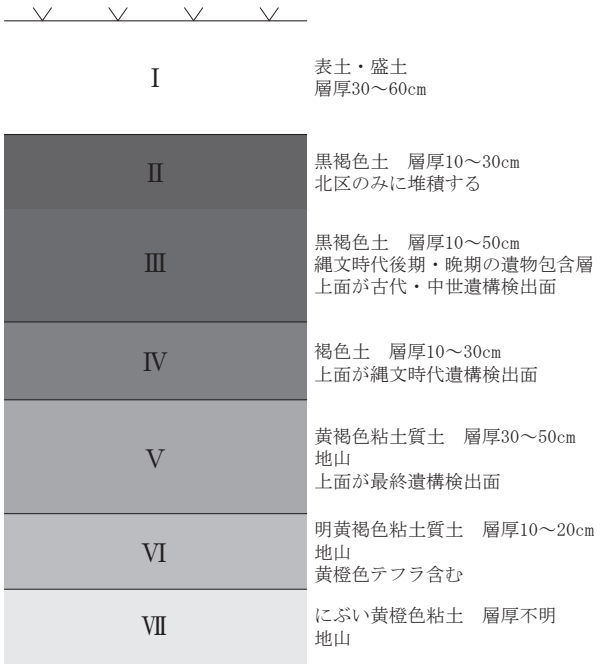
北上市都市計画図（成田・更木・北上工業団地・昭和橋）
を合成して加筆掲載

第２図　遺跡位置図（拡大）

本遺跡のある二子地区は、北および東は北上川を境とし、西は旧奥州街道、南は江戸時代初期に和賀川から引かれた用水路である新堰川を境界とし、更木地区、飯豊地区、黒沢尻地区と接している。北西部に標高 112 mの一ツ森と、これに次ぐ二子の地名の元となった「八幡山」「秋葉山」の二つの小山がある。これに続いて西部から南端までの境界に沿った幅数百m以内の台地は村崎野段丘に区分される。それ以外の二子地区の大部分は標高約 60～70 mの平坦地で、旧河道と自然堤防、氾濫平野が複雑に入り組んだ地形となっている。（丸山）

（２）調査区の層序

第３図に基本層序柱状模式図を示した。調査区は北上川右岸の河岸段丘上に立地しており、北上川がくの字に蛇行する外側に遺跡があることから遺跡東側は 10～20 mの段丘崖が形成されたと推察される。本遺跡も北上川の氾濫時に徐々に削られたと考えられ、川に面する遺構は既に失われている可能性がある。本遺跡の西側には一ツ森があり、この丘陵から土砂が流入した可能性もあるが、本遺跡と一ツ森の間には深い谷が入り込んでいたと見られ、これに区切られた本遺跡には流入土は大きく堆積しなかったと考えられる。黒褐色土が未発達なのは流入土の少ない低丘陵を呈していることに由来していると推定される。Ⅰ層は、近年の人為的な造成や耕作によると見られる。Ⅱ・Ⅲ層の黒褐色土のうち、Ⅱ層は北区のみに認められ、溝１・２はこの上面から掘削されている。Ⅲ層は縄文時代後期や晩期の遺物を少量含む層で、下層のⅣ層褐色土上面で該期の遺構が検出される。Ⅴ層黄褐色粘土質土の上面は縄文時代以降の最終遺構検出面で、重機で表土を剝いだ後の大半の箇所は本層位上面で遺構が検出される。Ⅴ～Ⅶ層地山は、陥し穴状遺構など深い遺構の壁面に確認される層位で、Ⅵ層には黒沢尻由来と見られる黄橙色テフラを混入する。（北田）



第３図　基本層序柱状模式図

３　歴史的環境

（１）二子城の縄張り

城を構成する郭群は、３つの立地に分かれて構築されている。標高 100 mを超える独立丘陵上には、詰めの城である「八幡山」、西の鎮護の「秋葉山」、北の物見台とされる「一ツ森」が立地する。八幡山の頂上からの眺めは良好で、北は花巻（鳥谷ケ崎）方面から遠く東根山・岩手山を眼前におさめ、東から南にかけては更木方面一帯から追手門、大沼のある後谷地方面までを見渡すことができる。南西から西側に向けては「秋葉山」、北西から北側に向けては「一ツ森」からの眺望が開けており、丘陵上に築かれたそれぞれの郭が敵の動向を監視する物見台の役割を相互に果たしたものと想定される。

1：25,000 土沢・口内

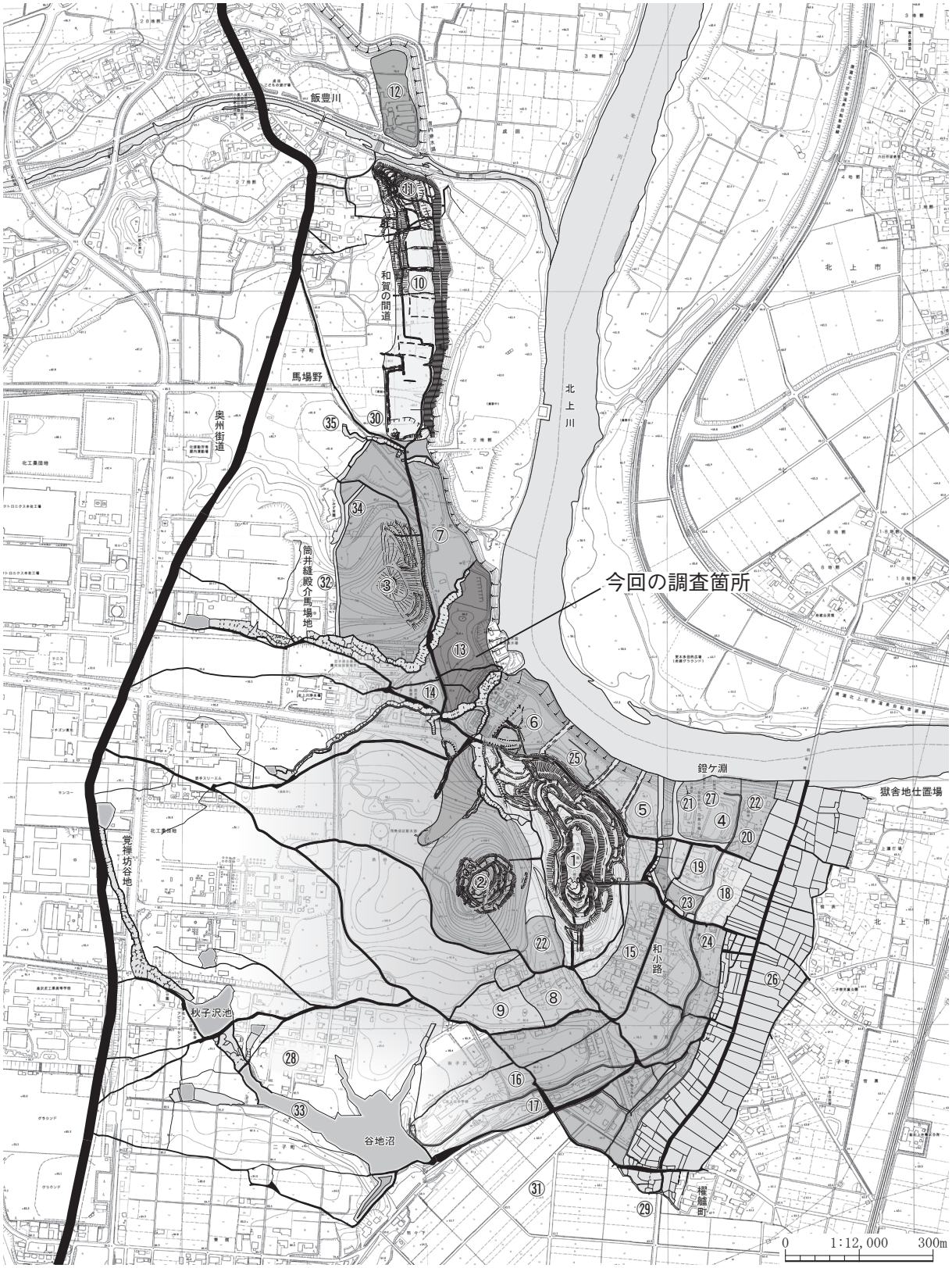
山地・丘陵地　台地　自然堤防　旧川微高地

扇状地　氾濫平野　旧河道・旧落堀　干拓地

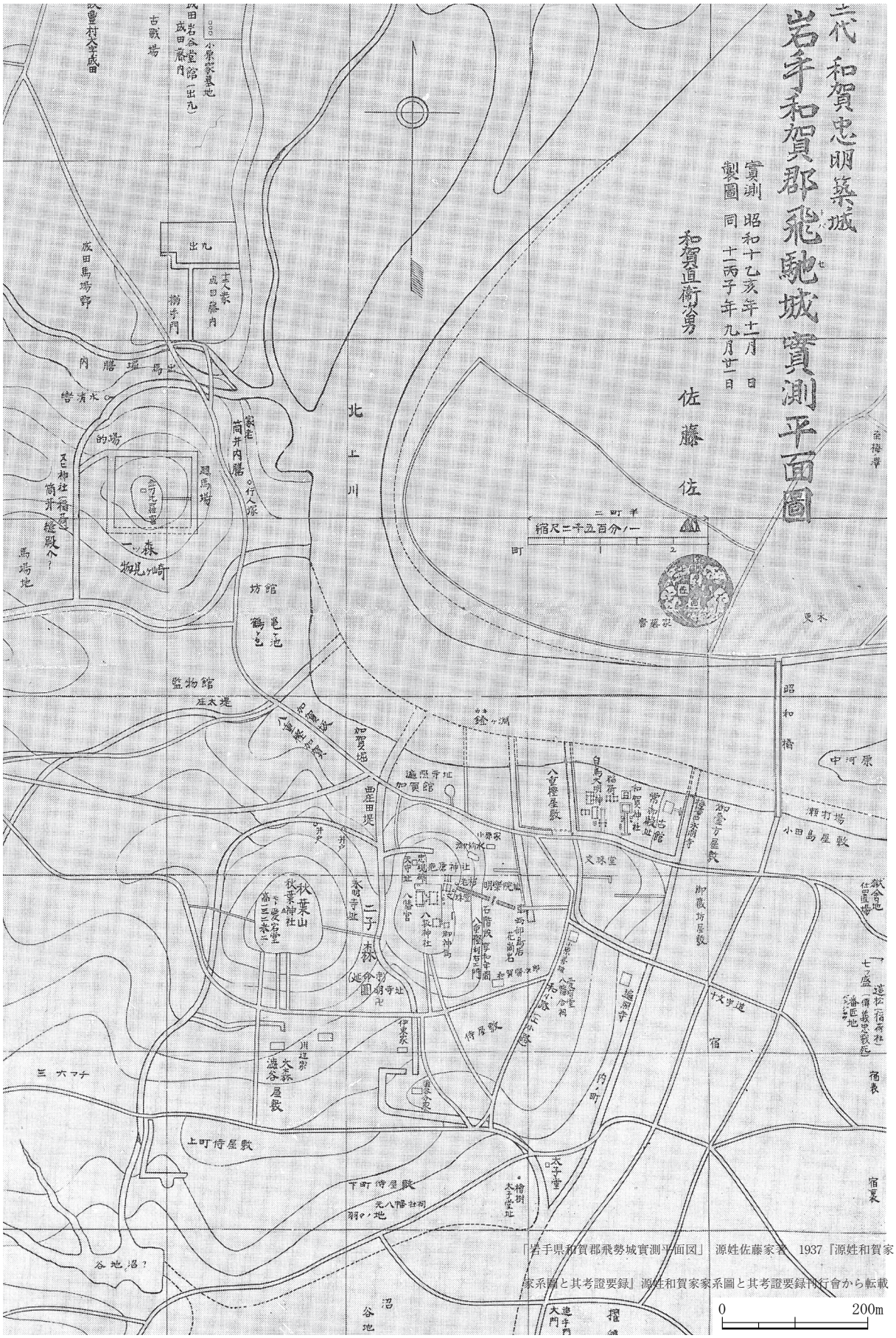
崖　計画堤防（完成）　計画堤防（暫定）

第４図　遺跡周辺の治水地形分類図

1	八幡山（飛勢ケ森）	8	大森屋敷	15	侍屋敷	22	永明寺跡	29	追手門
2	秋葉山（元愛宕）	9	渋谷屋敷	16	上町侍屋敷	23	山ノ神神社	30	搦手門
3	一ツ森（物見ケ崎）	10	成田岩田堂館跡	17	下町侍屋敷	24	遍照寺	31	後谷地
4	白鳥館（城主居館）	11	八森館	18	御蔵坊屋敷	25	遍照寺跡	32	一夜堀
5	八重樫屋敷	12	成田館	19	文殊院	26	宿（城下町）	33	齋藤堀
6	加賀館	13	坊館（正法寺跡）	20	御台方屋敷	27	和賀神社	34	くつわ清水
7	筒井内膳屋敷	14	監物館	21	白鳥大明神	28	齋藤九郎右衛門屋敷	35	内膳堀



第５図　二子城想定図



「岩手県和賀郡飛勢城實測平面図」　源姓佐藤家著　1937『源姓和賀家家系圖と其考證要録』源姓和賀家家系圖と其考證要録刊行會から転載

第６図　飛勢城実測平面図

第１表　二子城関連の郭・地点の調査履歴

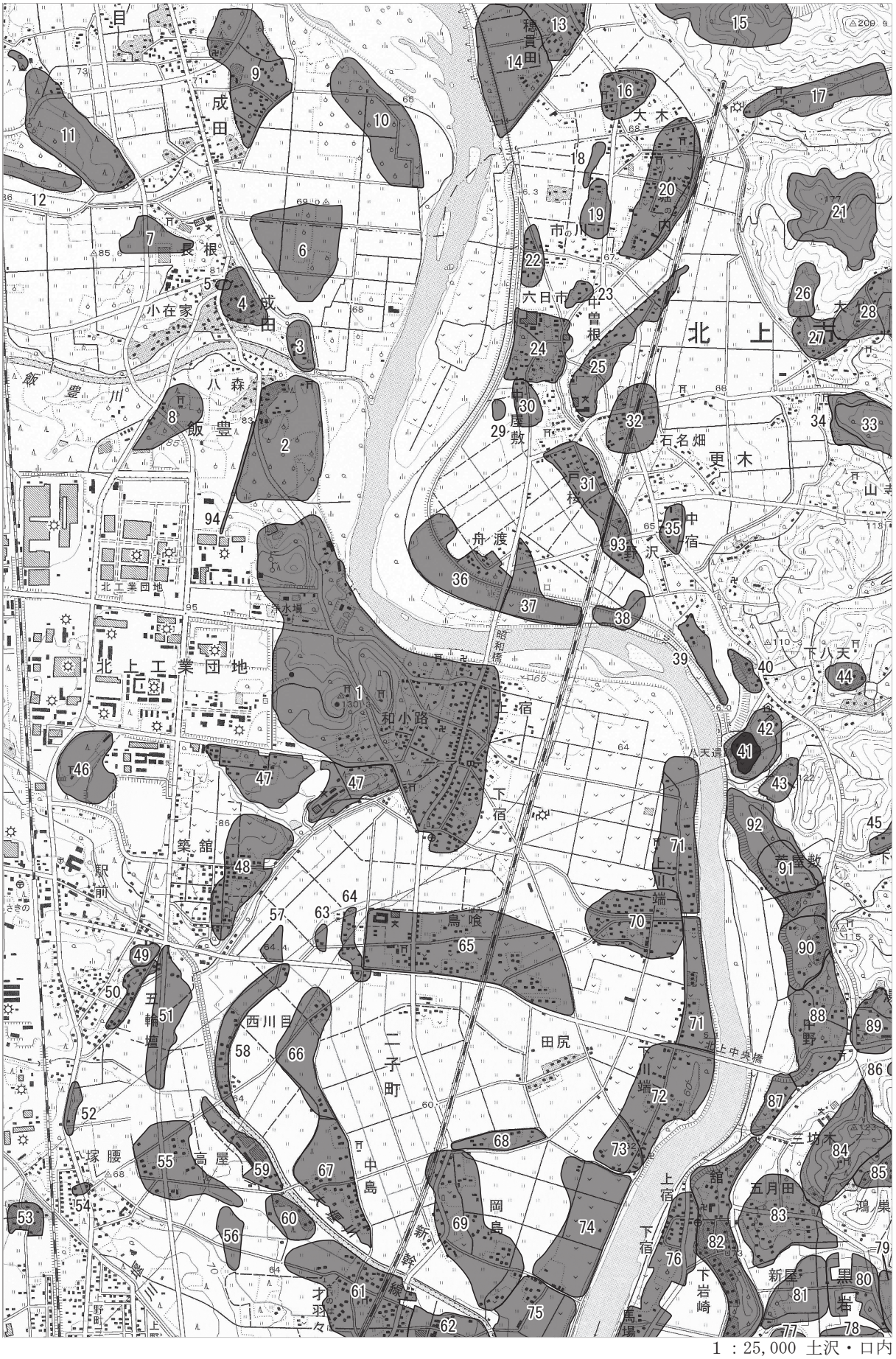
№.	郭・地点	原因	調査期間	面積	遺構	遺物	調査機関	発行年	書名
1	秋子沢（第一次）	北上川堤防築造工事に伴う農地造成	昭和 41 年７月６日～21 日	明記なし	古代の竪穴住居跡９棟	平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器片、石製品、鉄製品・鉄滓、植物種子、縄文土器・石器片	北上市教育委員会	1976	「北上市二子町秋子沢遺跡調査報告」『北上市史第１巻 原始・古代（一）』北上市史刊行会
	秋子沢（第二次）	学術調査（昭和 42 年度文科省科研費及び北上市）	昭和 42 年８月 20 日～31 日	明記なし	古代の竪穴住居跡７棟、溝１条	平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器片、鉄製品	北上市教育委員会・早稲田大学	1976	「北上市二子町秋子沢遺跡調査報告」『北上市史第１巻 原始・古代（一）』北上市史刊行会
2	行人塚	セメント工場拡張	昭和 49 年６月 10 日～６月 14 日	200㎡	近世墳墓２基	寛永通宝２枚	北上市教育委員会	1975	本堂寿一「二子行人塚遺跡」『日本考古学年報 27』日本考古学協会 1974 年版
3	加賀館	工業団地汚水終末処理場建設（1977 の報告書には北上工業団地特定公共下水道終末処理場建設との記述）	昭和 49 年９月１日～９月 10 日	3,000㎡	堀２条、時期不明の小溝２本（1977 の報告書には大濠・２条の溝が走る柵列との記述）	縄文後期土器片、打製石斧、かわらけ片（1977 の報告書には縄文期の土器片、打製石斧、中世の陶器片との記述）	北上市教育委員会	1975 1977	本沢慎輔「二子城遺跡」『日本考古学年報 27』日本考古学協会 1974 年版　「Ⅱ 調査に至る経緯」『二子城跡坊館遺跡調査報告書』北上市教育委員会文化財調査報告第 21 集
4	秋葉山	水道給水タンク建設	昭和 52 年 10 月１日～11 月 10 日	明記なし	近世墳墓１基、鎌倉時代以降の竪穴状遺構１棟	出土せず	北上市教育委員会	1977	『二子城跡秋葉山遺跡調査概報』北上市教育委員会
5	坊館	工業用水導水管布設路線及び取水場建設	昭和 52 年４月 14 日～５月 31 日	明記なし	縄文期の溝状土坑１ケ所、性格不明の土坑４ケ所	縄文早期の土器片・石器	北上市教育委員会	1977	『二子城跡坊館遺跡調査報告書』北上市教育委員会文化財調査報告第 21 集
6	加賀館	北上川東岸遺跡詳細分布調査関連	昭和 60 年	明記なし	中世の溝跡１条、これより新しい炭窯跡１基	縄文土器片、石器・石製品	北上市教育委員会	1986	「加賀館」『北上川東岸遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ（口内地区）』北上市教育委員会文化財調査報告第 43 集
7	くつわ清水	しみず斎園拡張工事	昭和 62 年３月 22 日～31 日（試掘）、昭和 63 年４月 11 日～（本調査）	明記なし	縄文時代の袋（フラスコ）状土坑１基、平安時代の土坑４基（墓に関連か）、中世の堀・土塁、土坑２基	縄文土器片・石器片、平安時代の土師器小片、鉄製品	北上市教育委員会	1989	『くつわ清水遺跡調査報告書』北上市文化財調査報告書第 51 集
8	坊館	第三北上中部工業用水道施設建設	昭和 63 年 10 月４日～11 月 12 日	1,360㎡	縄文時代の竪穴住居２棟、土器埋設炉１基、焼土遺構１基、溝状陥し穴２基、土坑６基、縄文以降近世初頭の建物様土坑 55 基、柱穴状小土坑 19 基	縄文土器・土製品・石器・石製品、平安時代の土師器片、瓦器片、陶器片、鉄製品片	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1989	『坊館跡発掘調査報告書』岩文振埋文調報第 145 集
9	物見崎（物見ケ崎）	第三北上中部工業用水道施設建設	平成元年４月７日～６月 20 日	1,945㎡	縄文時代の竪穴住居 18 棟、土坑１基、炭窯跡５基、溝跡４条	縄文（前期主体）土器、弥生土器、剥片石器	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1990	『物見崎遺跡・監物館跡発掘調査報告書』岩文振埋文調報第 157 集
10	監物館	第三北上中部工業用水道施設建設	平成元年４月７日～６月 20 日	300㎡	時期不明の溝跡１条	出土せず	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1990	『物見崎遺跡・監物館跡発掘調査報告書』岩文振埋文調報第 157 集
11	白鳥館	二子地区遺跡詳細分布調査	平成３年	明記なし	遺構間の重複多い。整地層、掘立柱建物跡、竪穴住居、土坑、溝状遺構らしきプランを確認	縄文土器（早期後半）、平安時代の土師器・須恵器、陶磁器（15～16 世紀代・19 世紀代）、石製品、古銭、青銅製品、鉄製品	北上市教育委員会	1991	「二子城白鳥館」『二子地区遺跡詳細分布調査報告書』北上市文化財調査報告第 65 集
12	馬場野	工場用地造成工事	平成３年４月 15 日～６月 24 日	約 7,000㎡	縄文晩期の土坑７基、焼土１基、溝３条、柱穴状土坑 330 基	縄文時代晩期の土器片、石器片、陶磁器片（18～19 世紀代）	北上市教育委員会	1992	『馬場野遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告第２集
13	八幡山（Ａ・Ｂ区）	内容確認	平成 10 年 10 月７日～12 月 16 日	460㎡	中世の整地痕跡、掘立柱建物跡 19 棟、柱穴列８列	中国産青磁（14 世紀後～15 世紀前半）、古瀬戸、在地産甕類（被熱遺物を含む）。国産陶磁器の年代幅は 13 世紀後～15 世紀前で、主体は 14 世紀後～15 世紀前半	北上市教育委員会	2004	『二子城跡』北上市埋蔵文化財調査報告第 65 集
	八幡山（Ｃ～Ｆ区）		平成 11 年 10 月 18 日～12 月 16 日	190㎡	中世の整地痕跡、堀跡・土塁、掘立柱建物跡 14 棟	中国産青磁・陶器（14 世紀後～15 世紀前半）、古瀬戸、大窯製品、在地産甕類（被熱遺物を含む）。国産陶磁器の年代幅は 13 世紀後～16 世紀中葉で、主体は 14 世紀後～15 世紀前半）	北上市教育委員会	2004	『二子城跡』北上市埋蔵文化財調査報告第 65 集
	八幡山（Ｈ～Ｊ区）		平成 12 年５月９日～７月４日	1079㎡	中世の整地痕跡、掘立柱建物跡 17 棟、柱穴列３列	中国産染付（15 世紀後～16 世紀中葉）、古瀬戸、大窯製品、志野焼（被熱遺物を含む）。国産陶磁器の年代幅は 13 世紀後～17 世紀初で、16 世紀後～17 世紀初のものが主体	北上市教育委員会	2004	『二子城跡』北上市埋蔵文化財調査報告第 65 集

№.	郭・地点	原因	調査期間	面積	遺構	遺物	調査機関	発行年	書名
14	白鳥館（N・L区）	内容確認	平成13年7月3日～25日	25㎡	中世の整地痕跡、堀跡・土塁、掘立柱建物跡10棟、柱穴列3列	中国産青磁・染付（14世紀後～15世紀前､16世紀後～17世紀初）、古瀬戸、大窯製品、在地産甕類。国産陶磁器の年代幅は13世紀後～17世紀初で、14世紀後～17世紀初のものが主体	北上市教育委員会	2004	『二子城跡』北上市埋蔵文化財調査報告第65集
	白鳥館（L・M区）		平成14年3月18日～7月29日	144㎡			北上市教育委員会	2004	『二子城跡』北上市埋蔵文化財調査報告第65集
	白鳥館（O・P区）	公園内トイレ設置	平成15年11月12日～12月15日	50㎡			北上市教育委員会	2004	『二子城跡』北上市埋蔵文化財調査報告第65集
15	五輪壇	内容確認	平成13年10月4日～11月21日	96㎡	中世後半～近世初頭の火葬集団墓、墓に伴う堀跡2条、堀状の落ち込み1箇所、集石5箇所、墓壙5基、火葬骨のまとまり2箇所、土坑4基	永楽通宝・寛永通宝、鉄製品	北上市教育委員会	2004	『五輪壇遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告第66集
16	成田岩田堂	緊急地方道路整備事業成田更木地区	平成19年7月2日～11月16日	4,800㎡	縄文時代の陥し穴9基、平安時代の方形周溝1基、中世の堀跡1条、土塁1条、掘立柱建物跡9棟、溝跡2条、時期不明の土坑12基	縄文土器・弥生土器・石器、平安時代の土師器・須恵器・鉄製品	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	2008	『成田岩田堂館遺跡発掘調査報告書』岩文振埋文調報第540集
17	奥州街道	北上工業団地造成	平成30年6月7日～7月下旬	約600㎡	街道の側溝、街道脇の土手、縄文時代の陥し穴1基	明記無し	北上市教育委員会	未刊	

北上川西岸の河岸段丘上には重臣屋敷群・侍屋敷群・寺院跡などが独立丘陵の裾野を取り巻くように存在している。重臣屋敷については、持ち主の名前が判明しているものはそれほど多くはないが、飯豊川と北上川で区切られた空間の外側に位置し、二子城北端の出城的な役割を担ったと考えられる「成田館」（註1）や二子城家老を務めた筒井内膳・縫殿助父子の屋敷跡と伝わる郭、同じく「斎藤堀」の名の由来となった斎藤九郎衛門の屋敷跡と伝わる地点などが伝承と共に伝わっている。「侍屋敷」については八幡山・秋葉山より南に広がる丘陵裾野からおおむね段丘縁辺までの地点が該当すると推定され、北上川の段丘崖を挟んで上段に「侍屋敷」･「上町侍屋敷」の名が見える（同図参照）。

「坊館」「永明寺跡」は寺院跡に該当する。「坊館」は、和賀氏の祖先が居城を更木から飛勢ケ森に移した時、坊館の場所に「正法寺」を建立し、和賀氏の祈祷所としたものである。しかし「正法寺」は奥州仕置きの兵乱で一切を焼失することとなり、その後現在の「金剛山遍照寺」の場所に寺号を変えて再興されたと伝わる（註2）。第6図の坊館の区画に見える「鶴ヶ池」「亀ヶ池」の名称は、関連する記述として天保2年の『二子物語』の中に「鶴ヶ池、亀ヶ池トテ池有也」、大正2年（1913）の『二子村誌』にある監物館の項に「館址に鶴ヶ池・亀ヶ池の二小池あり、今は埋没して僅かに痕跡を止むるのみ。此地和賀の士、監物と称するものの館址にして鶴亀を飼養せるは前述の小池なり」とあり、この資料が元になっていると考えられる。「永明寺跡」は同じく更木から対岸の二子城に居を移した時に飛勢ケ森と秋葉山の間の森合というところに移り、和賀氏代々の保護を受けていたとされる寺院の跡である。現在の梅澤山永明寺については、天文4年に現在地に再興されたものという。

城主居館である「白鳥館（古館・御館）」は、北上川の屈曲点の段丘上に立地する。白鳥館の名称は『二子村誌』の中に見え「今の白鳥館なり、里人御館（おたて）と称す。和賀氏の常の御殿を建てたる処なり」とある。南に隣接する文珠院とともに、周囲150ｍ×250ｍの範囲を二重堀によって区画された唯一の空間で、重要な郭であったことがうかがえる。白鳥館の西側には現在も白鳥大明神が祀られている。和賀氏本家が深く信仰していたとされ、和賀氏発祥の地の宮城県苅田郡から苅田郡白鳥庄（しらとりのしょう）の鎮守を移転したものと伝承されている。白鳥館の中央に位置する「和賀神社」は昭和10年に宿出身の実業家及川銀太郎氏の篤志で創建されたもので、祭神として和賀一族の祖霊を祀る。現在、県道清水野－村崎野線が通っている地点については平成13年から15年にかけて行われた発掘調査の結果、白鳥館と文珠院の郭間を区切る堀であったことが判明している（註3）。



1：25,000 土沢・口内

第７図　周辺の遺跡分布図

第２表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡ｺｰﾄﾞ	遺跡名	種別	時代
1	ME46-2214	二子城	集落跡、城館跡	縄文・中世
2	ME46-1221	成田岩田堂館	散布地、城館跡	縄文・弥生・古代・中世
3	ME46-0292	成田館	城館跡	中世
4	ME46-0169	下成田	集落跡	縄文・平安
5	ME46-0167	成田一里塚	一里塚	近世
6	ME46-0242	成田Ⅲ	散布地	平安・縄文・古代
7	ME46-0146	成田長根	集落跡	平安
8	ME46-1126	成田	集落、窯跡	古代・縄文
9	ME36-2260	成田Ⅱ	散布地	古代
10	ME36-2285	成田Ⅰ	散布地	古代
11	ME36-2191	沖Ⅱ	集落跡	古代
12	ME46-0110	小中野	散布地	縄文
13	ME36-2313	穂貫田	集落跡	古代
14	ME36-2371	駒板	集落跡	縄文・平安
15	ME36-2319	薬師館	城館跡	中世
16	ME36-2377	大木	散布地	縄文・古代
18	ME46-0315	山口	集落跡	平安
19	ME46-0335	小川屋敷	集落跡	縄文・平安
20	ME46-0318	大木堀ノ内	散布地	平安
21	ME47-0026	大竹廃寺	寺院跡	平安
22	ME46-0343	市の川Ⅰ	散布地	平安
23	ME46-0374	市の川Ⅱ	散布地	平安・近世
24	ME37-2076	長志田	散布地	縄文
24	ME46-0392	六日市	集落跡	弥生・平安・近世
25	ME46-0386	中曽根	集落跡	平安
26	ME47-0065	大森	散布地	平安
27	ME47-0085	大竹Ⅲ	散布地	旧石器・縄文
28	ME47-0077	童子洞	散布地	縄文
29	ME46-1321	中の屋敷Ⅱ	散布地	平安
30	ME46-1312	中の屋敷Ⅰ	散布地	平安
31	ME46-1354	戸桜	散布地	縄文・弥生・平安・近世
32	ME46-1326	石名畑	散布地	平安
33	ME47-1028	館山	散布地	縄文
34	ME47-1028	更木館	城館跡	中世
35	ME46-1368	中宿	散布地	縄文
36	ME46-1390	舟渡Ⅰ	散布地・集落跡	縄文・弥生・平安
37	ME46-2314	舟渡Ⅱ	集落跡	平安・近世
38	ME46-2306	野沢Ⅱ	集落跡	縄文・弥生・平安・近世
39	ME47-2051	八天北	集落跡	平安
40	ME47-2032	羽久保館	城館跡	中世
41	ME47-2072	下欠野館	城館跡	中世
42	ME47-2062	八天	集落跡	縄文
43	ME47-2084	牛繰	散布地	縄文
44	ME47-2036	天王館	城館跡	中世
45	ME57-0008	沢目	散布地	縄文
46	ME46-2183	伊勢	散布地	近世
47	ME46-2283	秋子沢	集落跡	平安
48	ME56-0220	築館	散布地	平安
49	ME56-0165	五輪壇	墳墓	中世
50	ME56-0184	南田Ⅱ	散布地	縄文
51	ME56-0195	南田Ⅰ	集落跡	縄文・平安
52	ME56-1142	明神Ⅰ	散布地	古代
53	ME56-1099	下春木場	集落跡	縄文
54	ME56-1161	二子一里塚	一里塚	近世
55	ME56-1155	高屋Ⅰ	散布地	古代
56	ME56-1189	高屋Ⅱ	散布地	古代
57	ME56-0251	堰向Ⅰ	散布地	縄文・古代
58	ME56-0189	堰向Ⅱ	集落跡	平安・近世
59	ME56-1138	明神Ⅱ	集落	縄文・平安
60	ME56-1280	野田Ⅱ	散布地	縄文
61	ME56-2213	野田Ⅰ	集落跡	縄文・弥生・平安
62	ME56-2249	中居俵Ⅲ	集落跡	平安
63	ME56-0254	鳥喰Ⅲ	散布地	古代
64	ME56-0254	鳥喰Ⅱ	散布地	古代
65	ME56-0259	鳥喰Ⅰ	集落跡	古代
66	ME56-1101	西川目	集落跡	平安
67	ME56-1263	中島	集落跡	縄文・古代
68	ME56-1340	相野野	散布地	古代
69	ME56-1289	岡島	集落跡	縄文・弥生・古代
70	ME56-0346	上川端Ⅱ	散布地	古代
71	ME56-0349	上川端Ⅰ	散布地	平安
72	ME56-1338	下川端	集落跡	平安
73	ME56-1329	尻引	集落跡	縄文・弥生・平安
74	ME56-1385	中村	集落跡	平安
75	ME56-2343	千苅	集落跡	平安
76	ME56-1388	黒岩宿	集落跡	縄文・弥生・平安
77	ME57-2043	片月	散布地	縄文
78	ME57-2047	四十九里Ⅲ	散布地・墳墓	縄文・中世
79	ME57-2029	四十九里Ⅱ	散布地	縄文
80	ME57-2028	四十九里Ⅰ	散布地	縄文・平安
81	ME57-2013	菅田	集落跡	縄文・平安
82	ME57-2011	黒岩城	散布地・城館跡	縄文・平安・中世
83	ME57-1083	白山廃寺	寺院跡	平安
84	ME57-1056	鴻巣Ⅰ	散布地	縄文・平安
85	ME57-1058	鴻巣Ⅱ	散布地	縄文・弥生・古代
86	ME57-1120	神行田	散布地	縄文
87	ME57-1023	三坊木館	城館跡・散布地	中世・縄文
88	ME57-0055	三坊木	集落跡	縄文・平安
89	ME57-0097	湯沢Ⅰ	集落跡	縄文・平安・近世
90	ME57-0065	小田島館	城館跡	中世
91	ME57-0024	平沢堀ノ内	城館跡	中世
92	ME57-0013	烏森	集落跡	縄文・平安
93	ME46-1386	野沢Ⅰ	集落跡	縄文・平安
94	ME46-1159	奥州街道・成田道	街道	近世

白鳥館の南側には二重堀で囲まれた「文珠院」と呼ばれる郭が連続しているが、この郭については『二子物語』の中で「此西之山ハ和賀時代之時、愛宕堂建給ふ所也。今ニ石塔之跡有なり。和賀没落之後、御堂を建置候得共、嵐に吹落ニて今ハ八幡山ノ東成文珠院屋敷ニ文珠堂ト愛宕堂ト被建置ル也。今ハ愛宕山江秋葉堂建也。此山之西南ニ当て一休和尚之文珠堂被立候跡有、今ハ八幡之東文珠院之所江奉移シなり」の記述がある。一休和尚が建てたとされるお堂の伝承については享保 11 年頃（1726 頃）に書かれた『和賀郷村志』内に「文珠堂荒迹」「五輪壇文珠堂」の記述が見える（註４）。『二子物語』によれば、これが後に白鳥館の隣接区に移築された「文珠院」の引用の元ということになろうか。

一方、『二子村誌』には文珠院について「古舘の南なり、近年迄愛宕堂ありしが、今は村社の境内に遷し奉れり。此地何人の館なりしか明ならず、或は白鳥館の内かとも思はる、要害の構なり。」とある。この頃には、一休和尚の…という記述は見えず、愛宕堂が近年まであったという事と、要害の構えであることから白鳥館の一部と考えられる、という内容が述べられているのみである。

文珠院の南に隣接する二重堀の外郭には堀が途切れて土橋状を呈する出入口施設がある。これを入るとその奥には「山ノ神神社」が祀られた小規模な空間が存在する。

さらに段丘下の沖積平野には、「上町侍屋敷」からつづく「下町侍屋敷」が立地し、その更に東側には「御蔵坊屋敷」また、城主居館である白鳥館の位置する段丘縁の下は、城主の母親の屋敷「御台方屋敷」があったと伝わる一角が存在する。また、一番東側には街道を取り巻くように「宿」と呼ばれる城下集落が形成されている。（同図参照）。　（丸山）

参考文献および註釈

註１　戸部正直　1698「奥羽永慶軍記　巻三十五」 近藤瓶城編　1901『史籍集覧』史ノ第八冊　近藤出版部　所収

「其勢（和賀勢）百八十騎八森ヲ後ニアテ、小川ヲ前ニシテ岩田堂ニ陣ヲ張ル寄手（南部勢）行懸ニ成田藤内カ舘ヲ焼拂ヒ夫ヨリ岩田堂ニ取掛ル」という記述があることから、八森を背にして眼下を流れていたのは飯豊川、成田藤内の館というのは成田館であったのではないかとの推定による。

註２　富岡理翁　天保２年（1831）『二子物語』・及川雅義　昭和 31 年（1956）『飛勢城物語』34 頁　北加美社

註３　北上市教育委員会　2004『二子城跡』17 頁　北上市埋蔵文化財調査報告書第 65 集

註４　松井道圓　享保 11 年頃（1726 頃）『和賀郷村志』

（２）周辺の遺跡と過去の調査

岩手県登録台帳によると、平成 30 年 12 月 31 日現在で北上市には登録遺跡が 554 遺跡確認されている。このうち、二子城を中心として 25,000 分の１の版面に収まる 94 遺跡を掲載した。個別の遺跡の内容については第２表を参照されたい。また、二子城の郭やそれに関連する地点の調査が昭和 41 年から 14 遺跡、22 地点にわたって行われている。これまでの調査履歴をまとめたものが第１表である。この中で、今回の調査地点の過去の調査である坊館遺跡と、隣接する遺跡である物見崎遺跡・監物館跡の調査について、調査成果の概要を記載する。

昭和 52 年の坊館跡の調査は北上市教育委員会が実施し、今回の調査区内の中央区と南区の間にある導水管部分と下水道終末処理場の建物建設部分を対象に調査が行われた。調査から、縄文時代の溝状土坑（本報告の陥し穴状遺構）１基、性格不明の土坑４基を確認した。遺物は、縄文時代早期の田戸下層式を主体に、蛇王洞Ⅱ、明神裏Ⅲ式に相当する土器 10 数点、石器 20 数点を出土した。導水管部分から縄文時代の遺構が確認されたが、中世など他の時代の遺構・遺物は見つからなかった。また、南東側の建物建設部分はトレンチ調査を行ったが、遺構・遺物は皆無とのことである（北上市教委 1977）。

昭和 63 年の坊館跡の調査は当センターが実施し、今回の調査区に隣接する地点を対象に行われた。調査から、縄文時代後期後葉の竪穴住居跡１棟と後期末葉～晩期初頭の竪穴住居跡１棟の計２棟を検

出し、この他に住居跡と同時期の土器埋設炉１基と焼土遺構１基、溝状の陥し穴状遺構２基、縄文時代の土坑６基（このうち、１基は墓坑と推定）、縄文時代以降で近代初頭までの間と考えられる建物跡様の土坑 55 個、柱穴状小土坑 19 個を確認した。遺物は、縄文時代早期、後期～晩期初頭の土器、土製品（土偶１点）、平安時代の土師器、近世～近代の陶器、瓦器、石器、石製品（石棒石剣類・石製円盤）、金属製品（鉄鏃か１点）を出土した。主に縄文時代の遺構のみが検出され、城館に伴う遺構は確認されなかった。確認された建物跡様の土坑群については今回の調査でも検出され、近現代の養蚕のために栽培された桑畑の痕跡と推定される（（財）岩文埋 1989）。

また、平成元年の物見崎遺跡・監物館跡の調査も当センターが実施し、今回の調査区の市道を挟んだ西側に隣接する地点を対象に行われた。調査から、縄文時代前期前葉の竪穴住居跡 14 棟と後期の竪穴住居跡２棟、弥生時代初頭の竪穴住居跡２棟の計 18 棟を検出した。この他に、後期以降の土坑１基、近世以降の炭窯跡５基、中世と推定される土塁状遺構１条、集石状遺構１基、溝跡１条を確認した。遺物は、縄文時代前期前葉、中期前葉、後期の土器と、弥生時代初頭、後期の土器、土製品（土偶５点・円盤状土製品１点）、石器、陶磁器５点（中世の染付碗１点含む）を出土した。縄文時代前期前葉の遺構は今回の調査でも確認されており、分布域に広がりを持つ。また、中世の遺構・遺物が見つかっており、本遺跡の年代にも関連すると考えられる（（財）岩文埋 1990）。

本遺跡周辺の戦国時代～安土桃山時代の様子について、北上市立博物館刊行の『和賀一族の興亡　総集編』51 頁から以下に抜粋する。

「二子城の搦手は馬場野と呼ばれる飯豊川にかけての北側平坦地です。この一帯は一つ森（物見ヶ崎）を中心にして監物館、坊館、内膳館といった、寺院や家臣屋敷跡と思われる平坦地が取り巻き、その端はくつわ清水（現在のしみず斉園）から流れる内膳堀でした。この付近は和賀氏一族が慶長５年（1600）に花巻城攻め（和賀氏は天正 18 年（1590）に豊臣秀吉によって二子城を追放され、その年に一時奪還したものの、翌年の再仕置によって完全に追放されました。その後、領地奪還の思いから伊達政宗を頼り、その決起が慶長５年でした。この年は関ヶ原の戦いで、日本全国騒然とし、和賀一族はこの争乱の年に南部側の拠点花巻城を攻撃したのでした）を決行した陣地でした。当時すでに二子城は朽果てて籠城適わず、わずかに残った内膳の子筒井縫殿助の屋敷に集結したと伝えられています。一夜堀といって近郷近住の人をかき集めて堀を一夜に掘り上げたという伝承もあり、慶長５年時のそうした修築が考えられる地です。しかしここに筒井氏の屋敷が残っていたということは、ここまでが往事の城内であり、筒井氏はその搦手口の守備を担い、当時、この搦手口から稗貫領へと通ずる主要道が貫き、城外の北をさらに成田氏が守っていたという配置が考えられます。

発掘調査では、しみず斉園付近から空堀跡が発見されました。これなどは一揆勢が花巻城攻めの本陣とした工事跡のようです。馬場野にも一部堀跡が認められ、和賀勢はこの一帯までにわか仕立ての陣地とした可能性が大です。そして飯豊川右岸には八王子森という出崎があり、川を渡って成田藤内の居館がありました。こうした本城周囲の何重という防備は他の大名クラスの城館にも考えられることであり、城外であっても家臣屋敷を点在させ、有事には急遽集結できる態勢にあったことと思われます」（北上市博 2000）。　（北田）

参考文献（（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター→（財）岩文埋）

北上市教育委員会 1977『二子城跡坊舘遺跡調査報告書』文化財調査報告第 21 集

北上市立博物館 2000「六　戦国期から安土桃山時代にかけての城館と軍団」『和賀一族の興亡　総集編』北上川流域の自然と文化シリーズ（21）

（財）岩文埋 1989『坊館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 145 集

（財）岩文埋 1990『物見崎遺跡・監物館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 157 集

Ⅲ　調査・整理の方法

１　野外調査の方法

（１）調 査 の 方 法

今回の調査区は、生コン工場跡地と導水管部分に区切られた３地点で、生コン工場跡地北側の調査区を北区、生コン工場跡地南側から導水管部分までを中央区、導水管部分から南側を南区と呼称する。

調査地は北上川右岸の河岸段丘上にある標高 77～80 ｍの平坦面及び緩斜面地で、調査対象面積は 12,556㎡である。現況は山林で、人工的に植林した杉林とこれに接する雑木林であった。また、中央区西側に開けた箇所があり、昭和には畑が作られていたと考えられる。西側谷部分は、昭和 20 年代までは深い谷であったがその後に埋め立てられ、昭和 40 年代には現況と同様に平坦に造成が行われたと見られる。昭和 50 年代前半には既に工場としての利用が行われている。

調査は、伐採作業の進捗と浄水場工事工程に合わせて平成 30 年度に北区 1,152㎡と中央区北側 503㎡の計 1,655㎡を行い、残りの中央区 5,700㎡と南区 5,201㎡の計 10,901㎡を平成 31 年度・令和元年度に行った。

各遺構の調査方法については、陥し穴状遺構や土坑、ピットなど小型の遺構は二分法で行い、竪穴住居跡などの大型の遺構や複雑な堆積を呈する遺構は、随時四分法などを用いて行った。四分法で調査した場合、出土した遺物を北東側 QNE、北西側 QNW、南東側 QSE、南西側 QSW を付して取り上げた。また、各々について堆積土層観察用のセクションベルトを設け、土層を観察しながら精査を進めた。

この際、土層の堆積状況、遺物の出土状況、遺構の完掘状況を中心に写真撮影及び実測を随時行った。実測は、平面図はＣＵＢＩＣ社製遺構実測ソフト「遺構くん」を用いて光波トランシットによる電子平板測量を行い、微細図・断面図は手取りで図化した。

遺構・遺物の写真撮影については、キヤノンＥＯＳ６Ｄ（デジタルカメラ・1,200 万画素）と中判カメラマミヤ 645（６×4.5 モノクローム）を使用した。また、平成 30 年 12 月 13 日に平成 30 年度調査区のラジコンヘリによる写真撮影を行い、翌令和元年７月 22 日にはセスナによる平成 31 年度・令和元年度調査区全体の写真撮影を実施した。

遺構実測図の縮尺は 1/20 を基本としたが、竪穴住居跡の炉や土器埋設遺構、焼土遺構は 1/10、その他の遺構や土層断面なども種類や規模により各縮尺を用いて遺構実測図（第一原図）を作成した。掲載については、凡例に挙げた縮尺にリサイズしている。

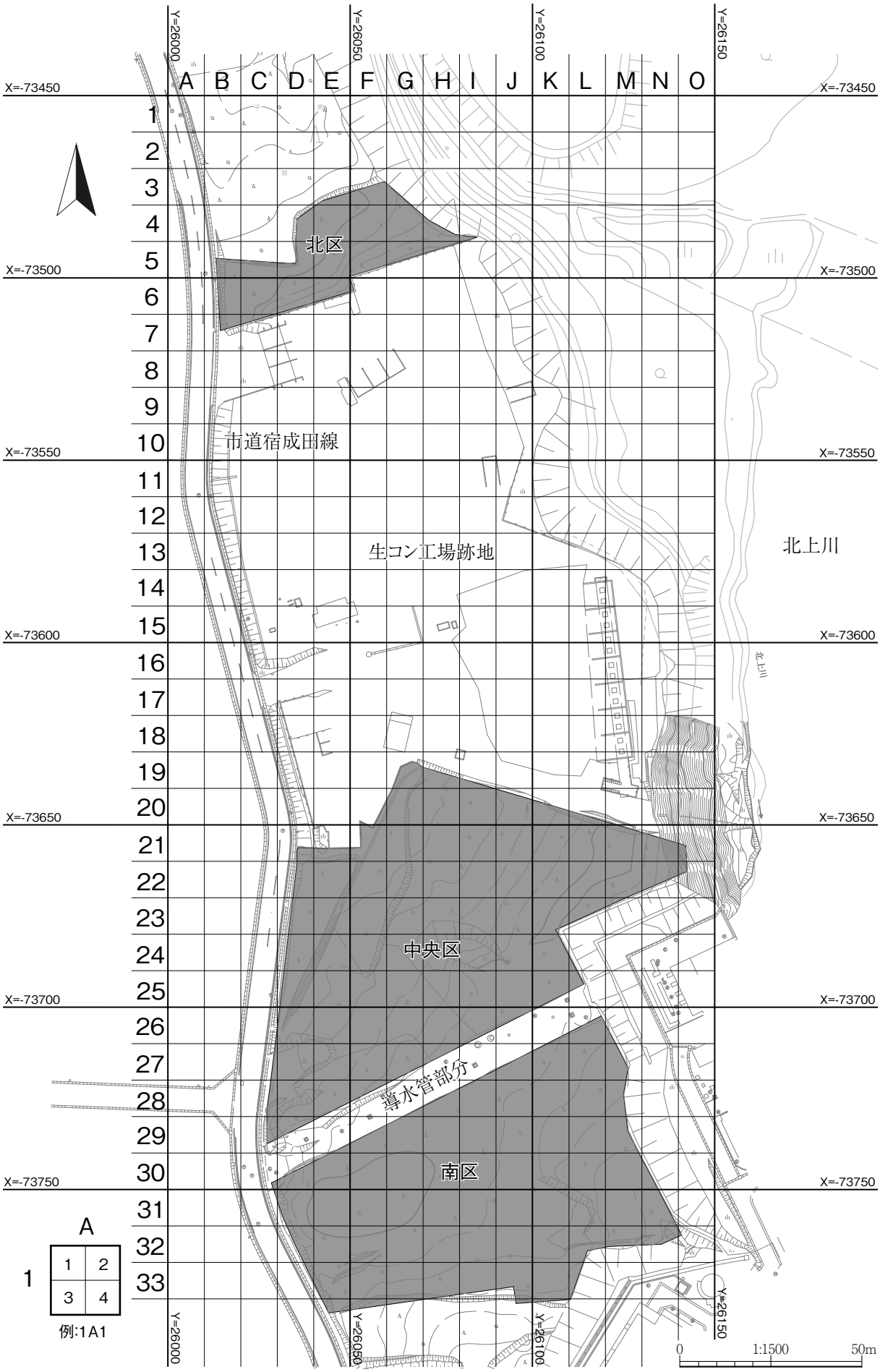
なお、調査の進行上、土層断面の写真や実測を省略し、状態の記録や計測等のみに留めた遺構もある。

遺物の取り上げ方は、遺構内出土分については出土遺構名と出土層位を記した。包含層など遺構外遺物は、出土地点・基本層位（または近接するセクション層位）を記入して取り上げた。

（２）野外調査の経過

【平成 30 年度】

11 月５日午後から、調査を開始した。現場設営・安全対策を行い、北区から作業に着手した。11 月６日から木枝など雑物の撤去、調査区境の試掘を進めた。北上森林組合による北区の伐採作業は、11 月９～14 日に行われた。11 月 15 日から重機による表土除去を行った。11 月９日、委託者と現地



第８図　周辺の地形とグリッド配置図

協議を行い、当初調査区の変更を確認した。11 月３週目前半には北区の表土除去が完了し、人力による遺構検出に入る。表土除去は引き続き中央区北側に着手し、11 月 21 日に完了した。11 月後半は北区の精査と中央区北側の遺構検出を進める。北区は想定よりも遺構密度が低く、溝、土坑、陥し穴状遺構、柱穴状ピットが少量確認された。12 月１週目、北区の精査が終了。中央区北側の精査も大半の遺構に着手する。12 月２週目までにすべての遺構精査が終了。12 月 13 日、ラジコンヘリによる空中写真撮影。12 月 14 日、終了確認。精査と並行して、次年度調査区の現況地形測量を行う。12 月 17～20 日、重機による埋め戻しと委託者から依頼された調査区内の抜根処理を行う。12 月 20 日、調査終了し撤収した。

【平成 31 年度・令和元年度】

４月４日午後から、調査を開始した。現場設営・安全対策を行い、雑物の撤去と試掘を行った。４月 11 日、降雪の影響で作業休止。４月９日から重機作業を開始。４月９日は調査区内のＵ字側溝の撤去、４月 10 日から西側谷の表土除去を行う。埋土にタイヤやコンクリート片、モルタルなど産業廃棄物を多量に含んでおり、分別に時間がかかる。並行して中央区東側の表土除去を進める。中央区の中央に調査以前から高さ３～４ｍの土山があり、重機で断ち割って確認を行ったが、ここ 40～50 年前の堆積と観察されたため写真撮影とフィールドカード記載のみ記録し、除去した。５月の連休明けに西側谷に重機でトレンチ掘削を行ったところ、深さ 2.5 ｍの盛土の下に厚さ１ｍの有機質土（無遺物）を堆積するのみで自然地形と判断されたことから写真撮影とフィールドカード記載のみ記録し、精査を終了、埋め戻しを行った。５月３週目、中央区の重機による表土除去を完了。コンクリート敷き部分に仮置きした排土を調査終了箇所に運搬する。人力は遺構検出を中心に進める。５月４週目、南区表土除去の準備のため、導水管部分に養生を行う。中央区の精査を進める。５月最終週、南区の重機による表土除去を開始。５月 27・28 日、浄水場建設のためのボーリング調査測量。５月 30 日、

第３表　遺構名対応表

掲載遺構名	現場遺構名
竪穴 1	竪穴 1
竪穴 2	竪穴 2
竪穴 3	竪穴 3
竪穴 4	竪穴 6
竪穴 5	竪穴 7
土器埋設遺構 1	土器埋設遺構 1
土器埋設遺構 2	土器埋設遺構 2
土器埋設遺構 3	土器埋設遺構 3
土器埋設遺構 4	土器埋設遺構 4
土器埋設遺構 5	土器埋設遺構 5
土坑 1	土坑 1
土坑 2	土坑 2
土坑 3	土坑 3
土坑 4	土坑 4
土坑 5	土坑 5
土坑 6	土坑 6
陥し穴状遺構 6	土坑 7
土坑 8	土坑 8
土坑 9	土坑 9
土坑 10	土坑 10
土坑 11	土坑 11
土坑 12	土坑 12
土坑 13	土坑 13
土坑 14	土坑 14
土坑 15	土坑 15
土坑 16	土坑 16（2018）
土坑 86	土坑 16（2019）
土坑 17	土坑 17
土坑 18	土坑 18
土坑 19	土坑 19
土坑 20	土坑 20
土坑 21	土坑 21
土坑 22	土坑 22

掲載遺構名	現場遺構名
土坑 23	土坑 23
土坑 24	土坑 24
土坑 25	土坑 25
土坑 26	土坑 26
土坑 27	土坑 27
土坑 28	土坑 28
土坑 29	土坑 29
土坑 30	土坑 30
土坑 31	土坑 31
土坑 32	土坑 32
土坑 33	土坑 33
陥し穴状遺構 32	土坑 34
土坑 35	土坑 35
土坑 36	土坑 36
土坑 37	土坑 37
土坑 38	土坑 38
土坑 39	土坑 39
土坑 40	土坑 40
土坑 41	土坑 41
土坑 42	土坑 42
土坑 43	土坑 43
土坑 44	土坑 44
登録抹消	土坑 45
土坑 46	土坑 46
土坑 47	土坑 47
土坑 48	土坑 48
土坑 49	土坑 49
土坑 50	土坑 50
土坑 51	土坑 51
土坑 52	土坑 52
土坑 53	土坑 53
土坑 54	土坑 54
陥し穴状遺構 33	土坑 55

掲載遺構名	現場遺構名
土坑 56	土坑 56
土坑 57	土坑 57
土坑 58	土坑 58
土坑 59	土坑 59
土坑 60	土坑 60
土坑 61	土坑 61
土坑 62	土坑 62
土坑 63	土坑 63
土坑 64	土坑 64
土坑 65	土坑 65
土坑 66	土坑 66
土坑 67	土坑 67
陥し穴状遺構 34	土坑 68
陥し穴状遺構 35	土坑 69
陥し穴状遺構 36	土坑 70
土坑 71	土坑 71
土坑 72	土坑 72
土坑 73	土坑 73
土坑 74	土坑 74
土坑 75	土坑 75
土坑 76	土坑 76
土坑 77	土坑 77
土坑 78	土坑 78
土坑 79	土坑 79
土坑 80	土坑 80
土坑 81	土坑 81
土坑 82	土坑 82
土坑 83	土坑 83
土坑 84	土坑 84
土坑 85	土坑 85
陥し穴状遺構 1	陥し穴状遺構 1
陥し穴状遺構 2	陥し穴状遺構 2
陥し穴状遺構 3	陥し穴状遺構 3

掲載遺構名	現場遺構名
陥し穴状遺構 4	陥し穴状遺構 4
陥し穴状遺構 5	陥し穴状遺構 5
陥し穴状遺構 7	陥し穴状遺構 7
陥し穴状遺構 8	陥し穴状遺構 8
陥し穴状遺構 9	陥し穴状遺構 9
陥し穴状遺構 10	陥し穴状遺構 10
陥し穴状遺構 11	陥し穴状遺構 11
陥し穴状遺構 12	陥し穴状遺構 12
陥し穴状遺構 13	陥し穴状遺構 13
陥し穴状遺構 14	陥し穴状遺構 14
陥し穴状遺構 15	陥し穴状遺構 15
陥し穴状遺構 16	陥し穴状遺構 16
陥し穴状遺構 17	陥し穴状遺構 17
陥し穴状遺構 18	陥し穴状遺構 18
陥し穴状遺構 19	陥し穴状遺構 19
陥し穴状遺構 20	陥し穴状遺構 20
陥し穴状遺構 21	陥し穴状遺構 21
陥し穴状遺構 22	陥し穴状遺構 22
陥し穴状遺構 23	陥し穴状遺構 23
陥し穴状遺構 24	陥し穴状遺構 24
陥し穴状遺構 25	陥し穴状遺構 25
陥し穴状遺構 26	陥し穴状遺構 26
陥し穴状遺構 27	陥し穴状遺構 27
陥し穴状遺構 28	陥し穴状遺構 28
陥し穴状遺構 29	陥し穴状遺構 29
陥し穴状遺構 30	陥し穴状遺構 30
陥し穴状遺構 31	陥し穴状遺構 31
焼土 1	焼土 1
焼土 2	焼土 2
焼土 3	焼土 3
焼土 4	焼土 4
焼土 5	焼土 5
焼土 6	焼土 6

掲載遺構名	現場遺構名
焼土 7	焼土 7
焼土 8	焼土 8
焼土 9	焼土 9
焼土 10	焼土 10
焼土 11	焼土 11
焼土 12	焼土 12
溝 1	溝 1
溝 2	溝 2
溝 3	溝 3
溝 4	溝 4
溝 5	溝 5
溝 6	溝 6
溝 7	溝 7
溝 3 と同一	溝 8
溝 9	溝 9
溝 4 と同一	溝 10
溝 11	溝 11
溝 12	溝 12
溝 13	溝 13
溝 14	溝 14
溝 15	溝 15
溝 16	溝 16
溝 17	溝 17
溝 18	溝 18
溝 19	溝 19
粘土採掘坑 1	溝 20
溝 21	溝 21
溝 22	溝 22
粘土採掘坑 2	溝 23
溝 24	溝 24
溝 25	溝 25
溝 26	溝 26
溝 27	溝 27
溝 28	溝 28

県生涯学習文化財課立ち会いで、ボーリング調査のためのやぐら設置。ボーリング調査が並行して行われる（～６月２週目まで）。６月１週目、南区東側崖部分に大型土のう 30 袋を設置し、土砂流出対策を行う。６月 17 日、南区の重機による表土除去を完了する。６月 20 日、中央区の精査を終了。６月 21 日、中央区の部分終了確認。６月 21 日、（有）先先測量による南区の基準点設置。６月後半、南区の精査を進める。遺構密度が低く、７月末終了を考える。７月前半、南区の遺構精査を進めるが、方形の陥し穴状遺構埋土が堅く掘削に手こずる。７月 22 日、セスナによる航空写真撮影。７月 24 日から、導水管部分養生の撤去。安全柵の撤去も並行する。７月 24 日、終了確認。残りの精査を行い、７月 31 日、調査を終了し撤収した。

２　整 理 の 方 法

（１）遺 構 の 整 理

遺構実測ソフトで図化してきた遺構図データを基に、註記や遺構の切り合い、配置などを検討しながら担当調査員が平面図を作成した。断面図は、担当調査員が第二原図を作成し、トレース図化を行った。平面図及び断面図のレイアウトなどは調査員が行った。

遺構図版は、各々遺構順に掲載した。遺構名は現場段階で命名したものを室内整理で掲載遺構名に付け直した（第３表参照）。

（２）遺 物 の 整 理

遺物は種類ごとに大別し、掲載遺物・要観察遺物を選別した上で登録番号を付けた。

本報告書掲載にあたっては、登録番号に改めて掲載番号を付した。ただし、観察表には索引しやすいようにいずれの番号も載せた。観察表の（　）内数値は残存値、〈　〉内数値は推定値である。

遺物実測は、石器・石製品について高精度の実測図を短期間で完成させるために、（株）ラングが特許取得している「物体の構造線自動抽出システム」による図化を行った。

（３）遺物写真の撮影

遺物写真は、当センター写場にて写真技師が撮影を行った。撮影には、キヤノンＥＯＳ５Ｄ（デジタルカメラ・1,200 万画素）を使用した。

（４）整 理 の 経 過

・令和元年 11 月１日～令和２年３月 31 日（作業員３名体制）

３　広　報　活　動

・調査概報　『平成 30 年度発掘調査報告書』岩文埋第 708 集　2019 年３月発行
・調査概報　『令和元年度発掘調査報告書』岩文埋第 721 集　2020 年３月発行

Ⅳ 検 出 遺 構

1 全 体 の 概 要

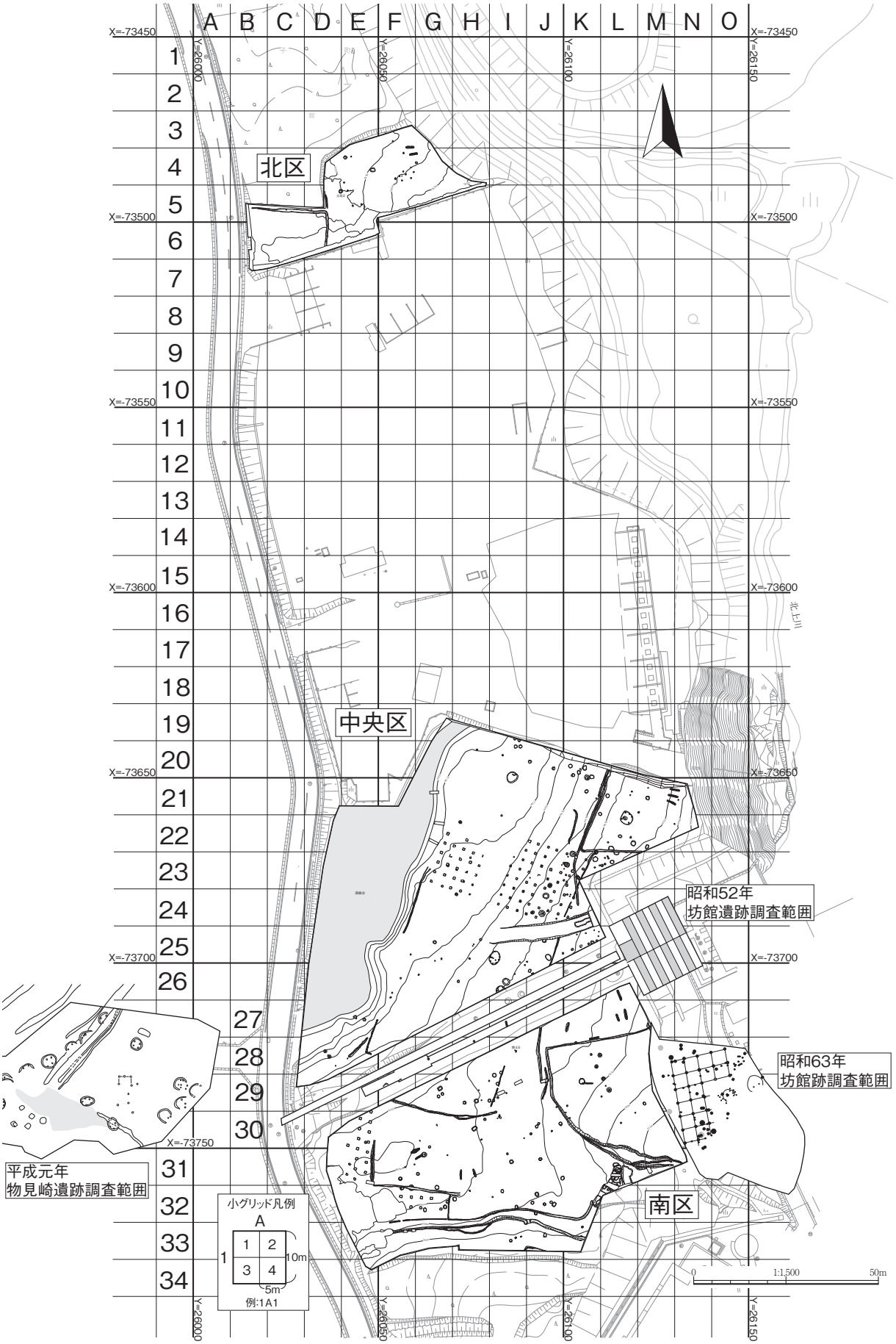
今回の調査から、縄文時代の竪穴住居跡４棟・土器埋設遺構５基・土坑 80 基・陥し穴状遺構 36 基・焼土 12 基・柱穴状ピット 94 個・粘土採掘坑２箇所、古代～中世の竪穴状遺構１棟・曲輪１箇所、中世以降の溝跡 24 条、柱穴状ピット 110 個を確認した。

第９図に調査全体図、第 10 図に部分図１（北区）、第 11 図に部分図２（中央区）、第 12 図に部分図３（南区）を示した。

北区は、生コン工場跡地北側の範囲である。伝承によると、中世二子城の時期の筒井内膳屋敷の地点にあたるが、南半は生コン工場によって削平され、南端の深い谷は埋め立てられたと考えられる。今回の北区調査範囲の南側は生コン工場跡地と接しているが、高さ２ｍを超える擁壁で垂直に区切られており、その擁壁北側も幅１ｍ強は裏込めの砕石が充填されていた。西側は市道宿成田線と接しており、現地表の上に約１ｍの盛土が敷設されている。東側は、河岸段丘の段丘崖でやや内側に入り込んでおり、崩落を繰り返している。調査区の標高は 78～80 ｍで、中央付近には黒沢尻由来の黄橙色テフラを含むⅥ層が露出していたことから、本来の地形面は中央がやや盛り上がっていた可能性がある。調査区からは、縄文時代の陥し穴状遺構（溝状）２基・土坑３基、中世以降の溝跡２条、柱穴状ピット 16 個を確認した。溝１はＬ字に曲がることから区画溝と見られるが内部から遺構は確認されなかった。

中央区は、生コン工場跡地南側から導水管部分までの範囲である。中央区と南区は、中世二子城の時期は坊館の地点にあたる。西側から北側にかけては深い谷に区切られており、また南側は加賀館との間にも深い谷が入り込んでいる間の範囲である。本来の坊館範囲は中央区の北側まで広がるが、生コン工場跡地によって失われている。西側谷は前述の筒井内膳屋敷地点との間にある谷の一部で、トレンチ調査の結果、調査区内の最深部で深さ約４ｍ（現地表から約５ｍ）あり、西側の立ち上がりは市道西側の一ツ森（物見ヶ崎）の裾まで広がる深い谷であることが想定された。遺構は、標高 76.5～80.0 ｍ付近に広がっており、縄文時代の竪穴住居跡４棟、土器埋設遺構１基、土坑 36 基、陥し穴状遺構（円形）８基、陥し穴状遺構（溝状）３基、中世以降の溝跡６条、柱穴状ピット 141 個、現代と推定される溝跡１条を確認した。また、中央区と南区の全体が中世の坊館と考えられ、二子城に関連する郭の可能性がある。

南区は、導水管部分から南側までの範囲である。前述の通り、中世二子城の時期は坊館地点にあたる。市道を挟んだ西側には家臣屋敷と伝えられる監物館が位置するが、地形面はほぼ地続きとなっている。この市道部分は、明治時代には道として利用されていた記録があり、前掲の『和賀一族の興亡総集編』には、「搦手口から稗貫領へと通ずる主要道が貫き」の記述がある（北上市博 2000）。現在は舗装道路となっているが、坊館、監物館とこの道との関わりについては不明である。調査区東側は、昭和 63 年の調査で縄文時代後期後葉の竪穴住居跡１棟と後期末葉～晩期初頭の竪穴住居跡１棟の計２棟を検出し、この他に住居跡と同時期の土器埋設炉１基と焼土遺構１基が確認されている（（財）岩文埋 1989）。遺構は、標高 77.0～80.0 ｍの全域に散在しており、土器埋設遺構４基、土坑 41 基、陥し穴状遺構（方形）４基、陥し穴状遺構（円形）９基、陥し穴状遺構（溝状）10 基、粘土採掘坑２箇所、中世以降の溝跡 16 条、柱穴状ピット 48 個を確認した。


A B C D E F G H I J K L M N O
X=-73450
X=-73500
X=-73550
X=-73600
X=-73650
X=-73700
X=-73750
Y=26000
Y=26050
Y=26100
Y=26150
北区
中央区
南区
昭和52年
坊館遺跡調査範囲
昭和63年
坊館跡調査範囲
平成元年
物見崎遺跡調査範囲
北上川
小グリッド凡例
A
1 2
3 4
10m
5m
例:1A1
0 1:1,500 50m

第９図　調査全体図

第10図　部分図1（北区）

2　縄　文　時　代

（1）概　　要

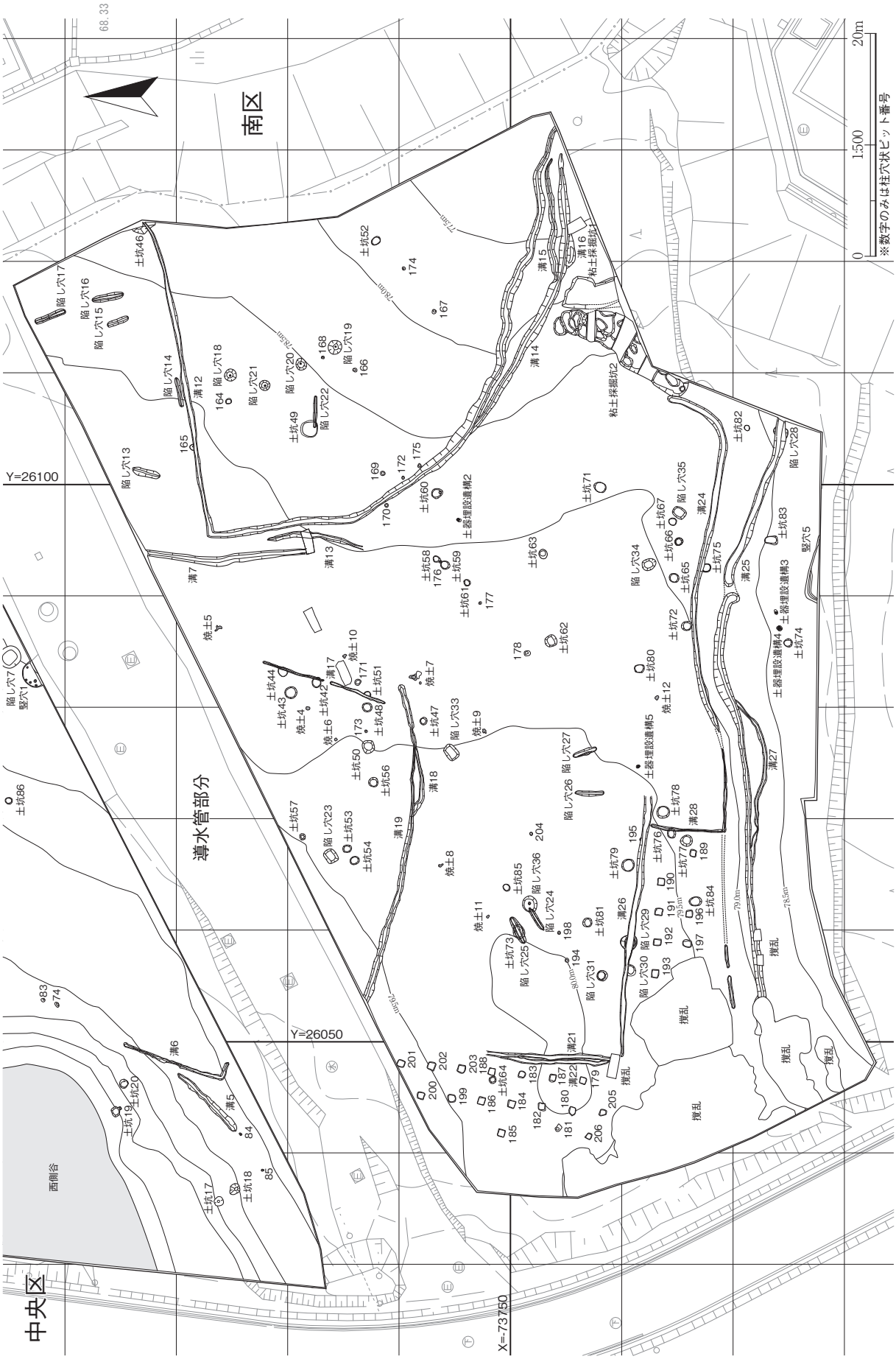
縄文時代は、竪穴住居跡４棟・土器埋設遺構５基・土坑80基・陥し穴状遺構36基・焼土12基・柱穴状ピット94個・粘土採掘坑２箇所を確認した。縄文時代の遺構は調査区全域から確認されているが、中央区は後期の遺構、南区は晩期の遺構が多い傾向がある。陥し穴状遺構は平面形から方形、円形、溝状に分けられ、方形基調は南区、溝状はより川沿いのエリアに２個一対に確認される場合がある。以下、遺構種別に記載するが、柱穴状ピットは中世以降の章にまとめて示す。

（2）竪 穴 住 居 跡

竪穴１（第13図、写真図版４）

中央区南側のＸ＝-73708、Ｙ＝26084付近に位置する。南側は導水管部分にかかっており、北半のみを確認した。規模・形状は、残存値で長径2.45ｍ、短径（1.18）ｍの円形を呈する。床面は、黄褐色粘土質シルトで構成されており、ほぼ平坦に作られている。遺構の残存は良好だが、南半は調査区外へ延びている。東壁は0.2ｍ、西壁は0.1ｍを測り、外傾しながらやや急斜度に立ち上がる形状である。埋土は４～６層の計３層で構成されており、中央付近に黒褐色シルトが認められるが全体には暗褐色シルト主体である。床面からＰ１～５の柱穴状ピット５個を確認したが、規則性は見られない。

第 11 図　部分図２（中央区）


南区
中央区
導水管部分
西側谷
Y=26100
Y=26050
X=-73750
1:500
20m
※数字のみは柱穴状ピット番号
68.33
78.500
78.000
79.500
80.000
79.000
78.500
79.000
土坑46
陥し穴17
陥し穴16
陥し穴15
陥し穴14
溝12
164
陥し穴18
陥し穴21
陥し穴20
168
陥し穴19
166
土坑49
陥し穴22
165
陥し穴13
土坑52
174
167
溝15
溝16
粘土採掘坑1
溝14
粘土採掘坑2
169
172
175
170
土坑60
土器埋設遺構2
土坑71
土坑82
陥し穴28
溝7
溝13
土坑58
176
土坑59
土坑61
177
土坑63
陥し穴34
土坑66
土坑67
陥し穴35
溝24
土坑83
竪穴5
土坑65
土坑75
溝25
土器埋設遺構3
焼±5
178
土坑62
土坑72
土器埋設遺構4
土坑74
陥し穴7
竪穴1
焼±10
溝17
171
土坑51
土坑44
土坑43
焼±4
焼±6
土坑42
焼±7
土坑80
焼±12
173
土坑48
土坑47
陥し穴33
焼±9
土器埋設遺構5
土坑86
土坑50
土坑56
溝18
陥し穴27
陥し穴26
土坑78
溝27
土坑57
陥し穴23
土坑53
土坑54
溝19
焼±8
204
溝28
195
土坑76
土坑77
189
土坑85
陥し穴36
陥し穴24
焼±11
198
土坑81
溝26
190
土坑84
土坑73
陥し穴25
194
陥し穴31
陥し穴29
191
192
196
197
陥し穴30
193
83
74
溝6
201
202
203
188
土坑64
183
137
溝22
179
205
200
199
186
184
185
182
180
181
206
溝21
撹乱
土坑20
土坑19
溝5
84
85
土坑17
土坑18

第12図　部分図3（南区）

また、調査範囲内から炉は検出されなかった。

埋土から晩期前葉の深鉢片と早期中葉の深鉢片、剥片15点が出土していることから、晩期前葉に廃絶した遺構の可能性がある。

竪穴２（第13図、写真図版５）

中央区南側のＸ＝-73697、Ｙ＝26083付近に位置する。黄褐色粘土質シルトの地山面で遺構検出したところ、黒褐色の楕円形プランとして確認した。規模・形状は、残存値で長径3.75ｍ、短径2.83ｍの楕円形を呈する。床面は黄褐色粘土質シルトで構成されており、斜面下方に向かってやや傾斜するもののほぼ平坦に作られている。遺構の残存は良好で、北壁0.03ｍ、南壁0.05ｍ、東壁0.08ｍ、西壁は0.05ｍを測り、外傾しながら緩やかに立ち上がる形状である。埋土は１～４層の計４層で構成されており、黒褐色シルト主体である。床面からＰ１～14の柱穴状ピット14個を確認した。Ｐ４～13の10個は壁に沿って等間隔で検出されたことから、壁柱穴の可能性がある。また、床面から炉は検出されなかった。

埋土から出土した炭化物について放射性炭素年代測定を実施したところ、暦年較正年代で2150calBC-2023calBC（２σ、86.4％）の結果を得た（Ⅵ－１参照）。

埋土から１・２縄文土器（早期中葉）、96石鏃、147二次加工ある剥片、Ｐ12埋土から185特殊磨石を出土し、掲載した。この他に、埋土から42点の剥片を出土した。埋土から出土した早期中葉の土器と年代測定結果に齟齬が生じているが、より新しい年代を優先して竪穴３と同じく後期前葉に廃絶した遺構と考える。（北田）

竪穴３（第13図、写真図版６）

中央区東側のＸ＝-73659、Ｙ＝26118付近に位置する。黄褐色粘土質シルトの地山面で遺構検出したところ、黒褐色の不整円形プランとして確認した。規模・形状は、長径3.23ｍ、短径3.21ｍの不整円形を呈する。床面は黄褐色粘土質シルトで構成されており、ほぼ平坦に作られている。遺構の残存は浅いが良好で、北壁0.15ｍ、南壁0.03ｍ、東壁0.05ｍ、西壁は0.07ｍを測り、外傾しながら緩やかに立ち上がる形状である。埋土は炭化物粒を少量混入する褐色シルトの単層で構成されており、にぶい黄褐色シルトを含む。床面中央やや西寄りに地床炉１基を検出した。規模・形状は、長軸0.66ｍ、短軸0.5ｍの不整形の強変焼土と、その周りに長軸1.16ｍ、短軸0.86ｍの炭化物の広がりを持つ。焼土は、深さ0.07ｍまで赤褐色に変化している。また、床面からＰ１～５の柱穴状ピット５個を確認した。いずれも主柱穴と考えられ、方形の梁間の北側中央に柱穴を配置している。

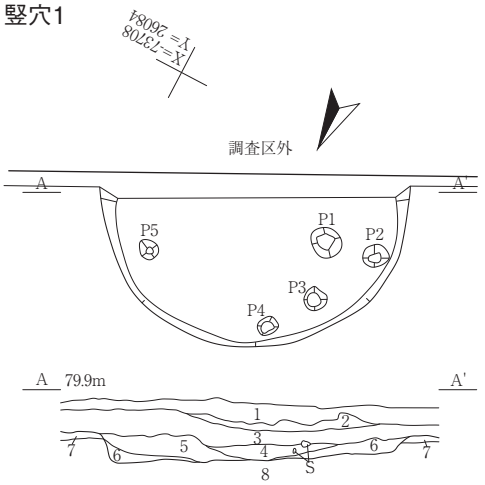
埋土から出土した炭化物について放射性炭素年代測定を実施したところ、暦年較正年代で2146calBC-2020calBC（２σ、87.8％）の結果を得た（Ⅵ－１参照）。

炉埋土及び焼土上面から３～８後期前葉の深鉢片と、床面から197台石を出土し、掲載した。この他に、埋土から４点の剥片を出土した。炉から出土した後期前葉の土器と年代測定結果から、後期前葉に廃絶した遺構と考えられる。（丸山）

竪穴４（第14図、写真図版７）

中央区北側のＸ＝-73648、Ｙ＝26086付近に位置する。黄褐色粘土質シルトの地山面で遺構検出したところ、黒褐色の不整円形プランとして確認した。規模・形状は、長径3.14ｍ、短径2.72ｍの不整円形を呈する。床面は黄褐色粘土質シルトで構成されており、ほぼ平坦に作られている。遺構の残

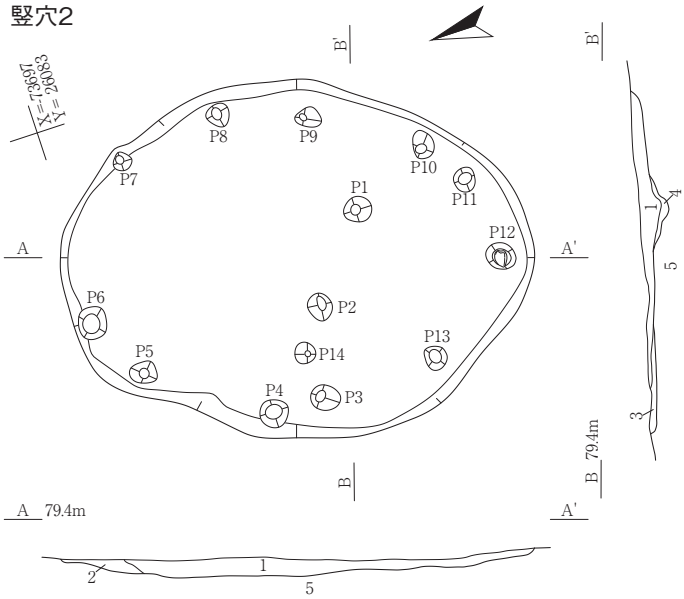
竪穴1



竪穴1
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合土
　表土、パイプライン建設時の撹乱土
2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 旧表土層
3 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
7 10YR3/4暗褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中～やや密
8 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中～やや強 締まりやや密 地山

竪穴1　P1～5共通
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 10YR4/6褐色地山ブロックφ１㎝２～３％混入

竪穴2

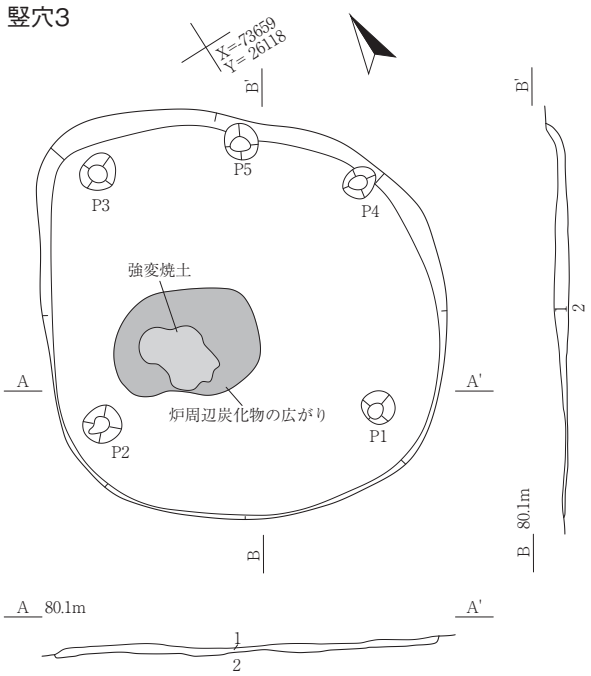


竪穴2
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 掘りすぎか
4 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 床面ピットか
5 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

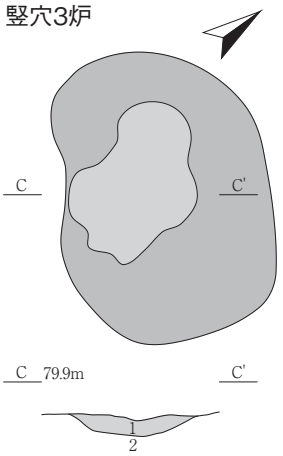
竪穴2　P2・3　P3は剥片出土
1 10YR2/1黒色シルト 粘性中 締まり中 10YR4/6褐色地山ブロック
　露状に少量含む　２～３％含む

竪穴2　P4～11共通
1 10YR3/2黒褐色シルト 粘性中 締まり中 10YR4/6褐色地山ブロック
　露状に10％含む

竪穴3



竪穴3炉



竪穴3炉
1 2.5YR4/8赤褐色シルト 粘性やや弱
　締まりやや疎 強変焼土
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト
　粘性やや弱 締まりやや密 地山

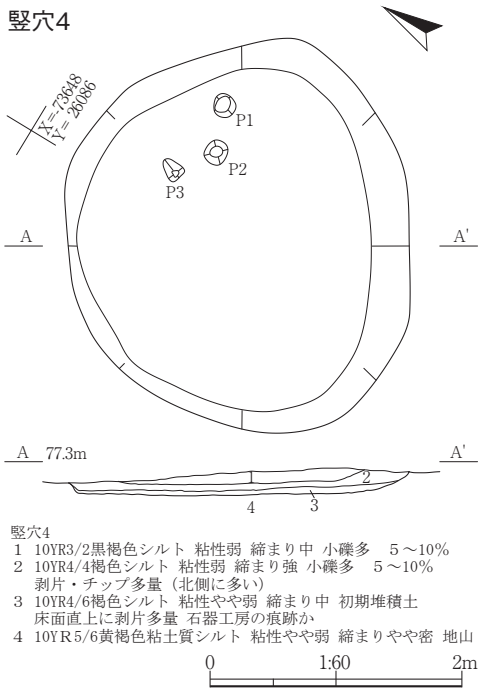
竪穴3
1 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや弱 と10YR5/4にぶい黄褐色シルトの
　混合土７：３　炭化物粒φ２～10mm１％含む
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
竪穴3　P1～5共通
1 10YR3/2黒褐色シルト 粘性中 締まりやや弱
2 10YR5/3にぶい黄褐色シルト 粘性中 締まりやや弱

0　1:30　1m
※竪穴３炉
0　1:60　2m

第13図　竪穴１～３

存は浅いが良好で、南東壁 0.15 m、北西壁 0.08 mを測り、外傾しながら緩やかに立ち上がる形状である。埋土は、小礫を多く含む黒褐色～褐色シルトの３層で構成されており、床面付近の２・３層中に剥片・チップを多量に混入する。特に、床直上には多量の剥片が広がっており、石器製作を行った痕跡と考えられる。床面から、Ｐ１～３の柱穴状ピット３個を確認した。３個は北側床面に集中しており、規則性は認められない。その他、炉などの床面施設は検出されなかった。

床面及び埋土から少量の土器を出土したが、掲載に至らなかった。出土した土器は、晩期後葉の浅鉢と早期中葉の深鉢片である。石器は、床面中央から 88 石槍、埋土から 140・143 スクレイパー類、床面及び埋土から 150～161 接合資料１～５が出土し、掲載した。また遺構内から出土した剥片・チップの総量は 593 点である。以上、少量出土した土器から晩期後葉に廃絶した遺構と考えられる。（北田）



第 14 図　竪穴４

（３）土器埋設遺構

土器埋設遺構１（第 15 図、写真図版９）

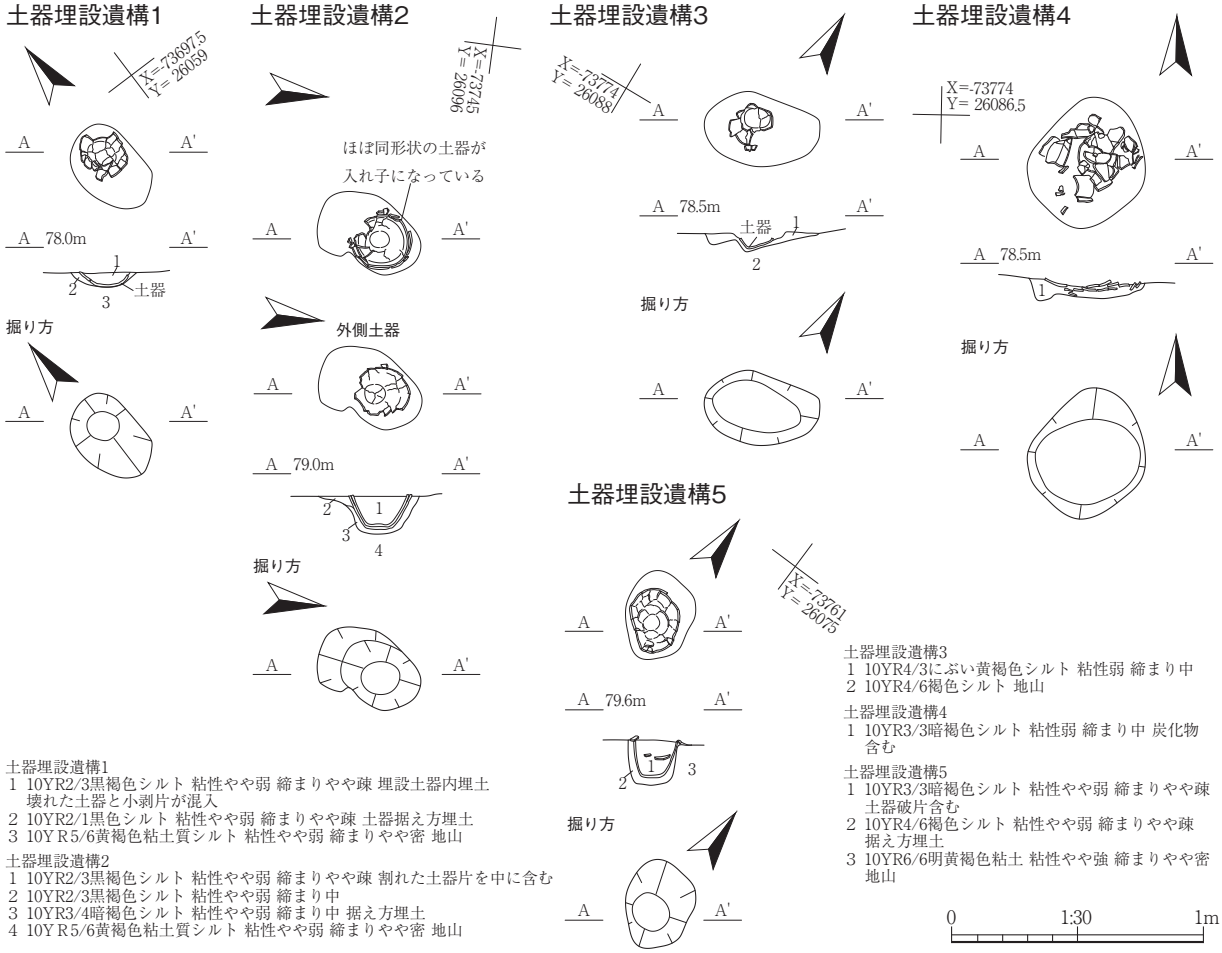
中央区西側のＸ＝-73697.5、Ｙ＝26059 付近に位置する。規模・形状は、長径 0.38 m、短径 0.25 mの楕円形、断面は皿形で深さは 0.06 mである。内部には 9a・b 深鉢が正位の状態で底面に設置されていたと見られるが、遺構上部は耕作などによって失われていた。土器内埋土は黒褐色シルトの単層で、内部には壊れた土器片と剥片１点が混入していた。土器内の土壌をサンプリングして確認したが、内容物の痕跡は確認されなかった。9a・b 深鉢の年代から、縄文時代晩期前葉の遺構と考えられる。

土器埋設遺構２（第 15 図、写真図版９）

南区中央やや東側のＸ＝-73745、Ｙ＝26096 付近に位置する。規模・形状は長径 0.85 m、短径 0.52 mの不整円形、断面は鍋底形で深さは 0.29 mである。内部には 10・11 の２点の深鉢が入れ子になって設置されていた。２点はほぼ同形状で、貼り付くようにぴったり填まっており、10 深鉢の中に 11 深鉢が入れられていた。土器内埋土は黒褐色シルトの単層で、内部には壊れた土器片が混入していた。土器内の土壌をサンプリングして確認したが、内容物の痕跡は確認されなかった。10・11 深鉢の年代から、縄文時代晩期前葉の遺構と考えられる。

土器埋設遺構３（第 15 図、写真図版９）

南区南端のＸ＝-73774、Ｙ＝26088 付近に位置する。規模・形状は長径 0.46 m、短径 0.3 mの楕円形、断面は不整な皿形で深さは 0.08 mである。内部には 12 深鉢が正位の状態で底面に設置されていたと見られるが、遺構上部は耕作などによって失われていた。土器内埋土はにぶい黄褐色シルトの単層で、土壌をサンプリングして確認したが、内容物の痕跡は確認されなかった。12 深鉢の年代から、縄文時代晩期前葉の遺構と考えられる。



第 15 図　土器埋設遺構 1 ～ 5

土器埋設遺構 4（第 15 図、写真図版 10）

南区南端の X = -73774、Y = 26086.5 付近に位置する。規模・形状は長径 0.54 m、短径 0.47 m の略円形、断面は不整な皿形で深さは 0.08 m である。内部には 13 深鉢が潰れた状態で確認されたが、底部は見つからないことから推察すると、倒立して設置されていたと考えられる。土器内埋土は炭化物を少量含む暗褐色シルトの単層で、土壌をサンプリングして確認したが内容物の痕跡は確認されなかった。13 深鉢の年代から、縄文時代晩期前葉の遺構と考えられる。

土器埋設遺構 5（第 15 図、写真図版 10）

南区中央やや南側の X = -73761、Y = 26075 付近に位置する。規模・形状は長径 0.36 m、短径 0.26 m の不整な楕円形、断面は鍋底形で深さは 0.18 m である。内部には 14 深鉢が正位の状態で底面に設置されていた。土器内埋土は土器破片を含む暗褐色シルトの単層で、土壌をサンプリングして確認したが内容物の痕跡は確認されなかった。14 深鉢の年代から、縄文時代晩期前葉の遺構と考えられる。

（北田）

（4）土　　坑

土坑１（第 16 図、写真図版 10）

北区北端のＸ＝-73482、Ｙ＝26040 付近に位置する。規模・形状は長径 0.88 m、短径 0.85 mの不整方形、断面は不整な皿形で深さは 0.18 mである。埋土から後期前葉と早期中葉の土器が少量出土したが、掲載に至らなかった。出土土器から、縄文時代後期前葉に廃絶した遺構と考えられる。

土坑２（第 16 図、写真図版 10）

北区中央付近のＸ＝-73491、Ｙ＝26039 付近に位置する。規模・形状は長軸 0.94 m、短軸 0.9 mの不整な方形、断面は不整形で深さは 0.27 mである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

土坑３（第 16 図、写真図版 11）

北区中央付近のＸ＝-73485、Ｙ＝26048 付近に位置する。規模・形状は長径 1.43 m、短径 1.03 mの不整形、断面は皿形で深さは 0.33 mである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

土坑４（第 16 図、写真図版 11）

中央区北端のＸ＝-73646、Ｙ＝26101 付近に位置する。規模・形状は長径 1.02 m、短径 1.0 mの円形、断面は皿形で深さは 0.14 mである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

土坑５（第 16 図、写真図版 11）

中央区北端のＸ＝-73648、Ｙ＝26102 付近に位置する。規模・形状は長径 1.02 m、短径 0.84 mの不整円形、断面は皿形で深さは 0.18 mである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

土坑６（第 16 図、写真図版 11）

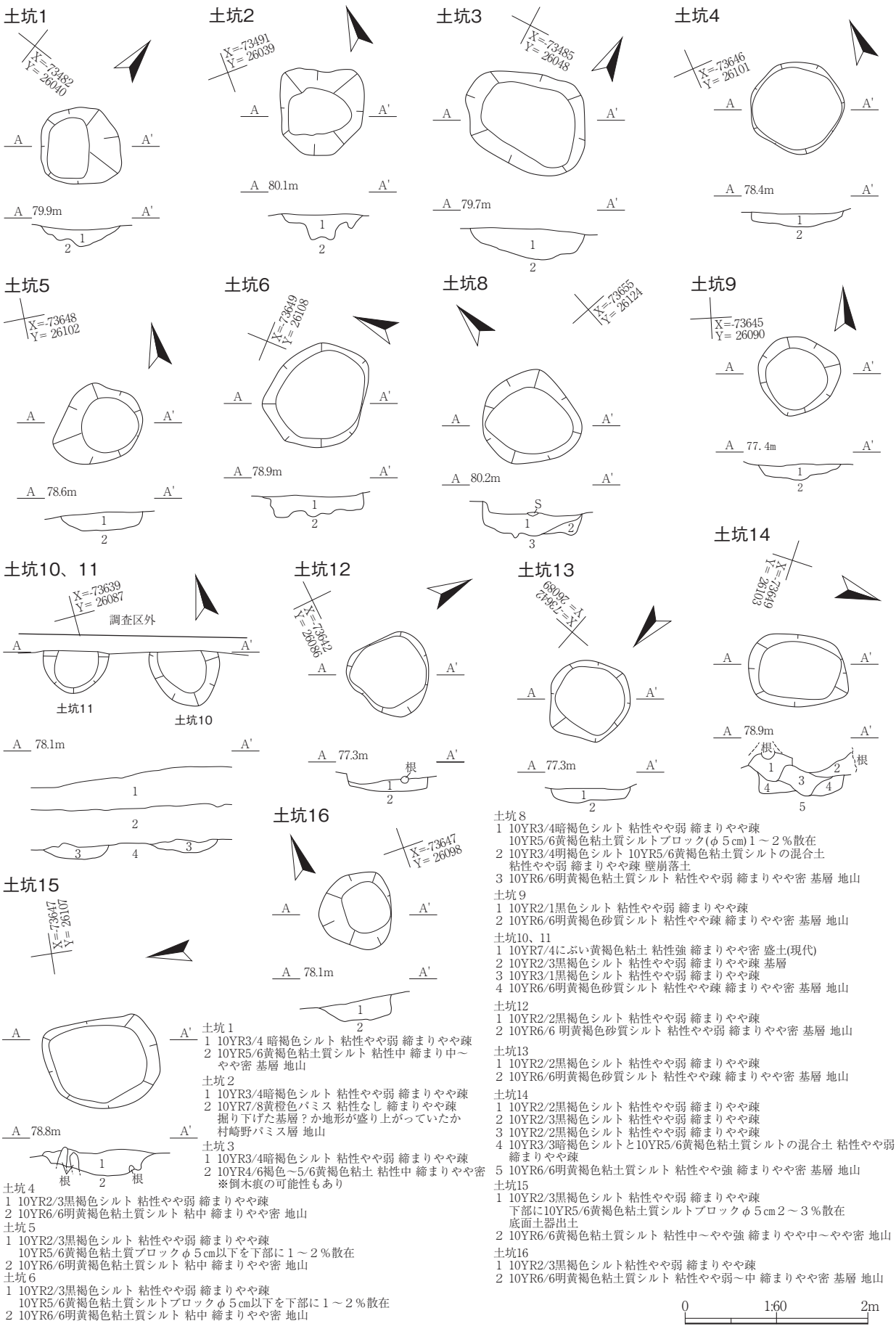
中央区北端のＸ＝-73649、Ｙ＝26108 付近に位置する。規模・形状は長径 1.18 m、短径 1.05 mの不整円形、断面は鍋底形で深さは 0.22 mである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

土坑８（第 16 図、写真図版 12）

中央区北端東側のＸ＝-73655、Ｙ＝26124 付近に位置する。規模・形状は長径 1.1 m、短径 1.06 mの不整円形、断面は鍋底形で深さは 0.2 mである。遺構検出面から、181 特殊磨石、200・201 自然礫が出土した。自然礫は人為的に設置した可能性があることから、墓坑として利用されたと考えられる。埋土から後期初頭～前葉の 15 深鉢が出土しており、この時期までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑９（第 16 図、写真図版 12）

中央区北端のＸ＝-73645、Ｙ＝26090 付近に位置する。規模・形状は長径 0.9 m、短径 0.87 mの略



土坑１
１ 10YR3/4 暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
２ 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中～やや密 基層 地山

土坑２
１ 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
２ 10YR7/8黄橙色パミス 粘性なし 締まりやや疎
掘り下げた基層？か地形が盛り上がっていたか
村崎野パミス層 地山

土坑３
１ 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
２ 10YR4/6褐色～5/6黄褐色粘土 粘性中 締まりやや密
※倒木痕の可能性もあり

土坑４
１ 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
２ 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘中 締まりやや密 地山

土坑５
１ 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR5/6黄褐色粘土質ブロックφ５cm以下を下部に１～２％散在
２ 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘中 締まりやや密 地山

土坑６
１ 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロックφ５cm以下を下部に１～２％散在
２ 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘中 締まりやや密 地山

土坑８
１ 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック(φ５cm)１～２％散在
２ 10YR3/4明褐色シルト 10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合土
粘性やや弱 締まりやや疎 壁崩落土
３ 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 基層 地山

土坑９
１ 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
２ 10YR6/6明黄褐色砂質シルト 粘性やや疎 締まりやや密 基層 地山

土坑10、11
１ 10YR7/4にぶい黄褐色粘土 粘性強 締まりやや密 盛土(現代)
２ 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 基層
３ 10YR3/1黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
４ 10YR6/6明黄褐色砂質シルト 粘性やや疎 締まりやや密 基層 地山

土坑12
１ 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
２ 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 基層 地山

土坑13
１ 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
２ 10YR6/6明黄褐色砂質シルト 粘性やや疎 締まりやや密 基層 地山

土坑14
１ 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
２ 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
３ 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
４ 10YR3/3暗褐色シルトと10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや疎
５ 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 基層 地山

土坑15
１ 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
下部に10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロックφ５cm２～３％散在
底面土器出土
２ 10YR6/6黄褐色粘土質シルト 粘性中～やや強 締まりやや中～やや密 地山

土坑16
１ 10YR2/3黒褐色シルト粘性やや弱 締まりやや疎
２ 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まりやや密 基層 地山

第16図　土坑１～６、８～16

円形、断面は皿形で深さは 0.17 mである。埋土から晩期と考えられる少量の土器を出土しているが、細片で掲載に至らなかった。出土土器の所属時期から、縄文時代晩期の遺構と考えられる。

土坑 10（第 16 図、写真図版 12）

中央区北端のX＝-73639、Y＝26087 付近に位置する。北半は調査区外へ延びており不明である。土坑 11 に隣接する。規模・形状は、残存値で長径 0.72 m、短径（0.45）mの略円形、断面は皿形で深さは 0.13 mである。埋土から後～晩期と考えられる少量の土器を出土しているが、細片で掲載に至らなかった。出土土器の時期から、縄文時代後晩期の遺構と考えられる。

土坑 11（第 16 図、写真図版 12）

中央区北端のX＝-73639、Y＝26087 付近に位置する。北半は調査区外へ延びており不明である。土坑 10 に隣接する。規模・形状は、残存値で長径（1.14）m、短径 0.74 mの楕円形、断面は皿形で深さは 0.13 mである。出土遺物はなく時期を特定できないが、隣接する土坑 10 と堆積状況が似ることから、縄文時代後晩期の遺構と推定される。

土坑 12（第 16 図、写真図版 12）

中央区北端のX＝-73642、Y＝26086 付近に位置する。規模・形状は長径 0.93 m、短径 0.9 mの不整円形、断面は皿形で深さ 0.13 mである。埋土から後～晩期と考えられる少量の土器を出土しているが、細片で掲載に至らなかった。出土土器の時期から、縄文時代後晩期の遺構と考えられる。

土坑 13（第 16 図、写真図版 13）

中央区北端のX＝-73642、Y＝26089 付近に位置する。規模・形状は長径 0.96 m、短径 0.88 mの不整円形、断面は皿形で深さ 0.16 mである。出土遺物はないが、隣接する土坑 12 と同形状であることから、同じく縄文時代後晩期の遺構と考えられる。

土坑 14（第 16 図、写真図版 13）

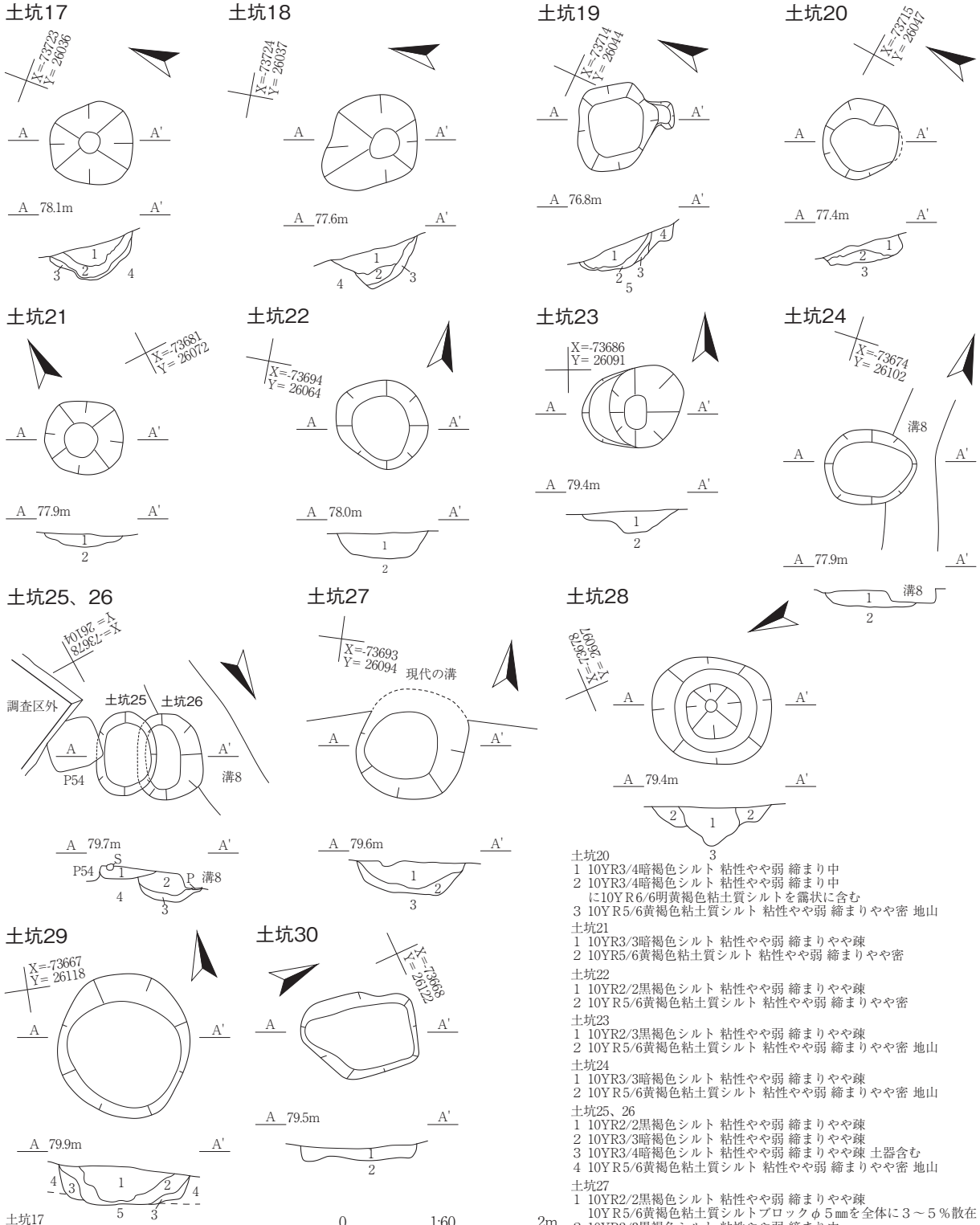
中央区北端のX＝-73649、Y＝26103 付近に位置する。規模・形状は長径 1.06 m、短径 0.79 mの楕円形、断面は皿形で深さ 0.25 mである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

土坑 15（第 16 図、写真図版 13）

中央区北端のX＝-73647、Y＝26107 付近に位置する。規模・形状は長径 1.26 m、短径 0.98 mの楕円形、断面は皿形で深さ 0.25 mである。埋土から晩期初頭～前葉の 16 深鉢が出土しており、埋土からも晩期の土器片が出土していることからこの時期に廃絶した遺構と考えられる。

土坑 16（第 16 図、写真図版 14）

中央区北端のX＝-73647、Y＝26098 付近に位置する。規模・形状は長径 0.84 m、短径 0.79 mの不整円形、断面は皿形で深さは 0.24 mである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。



土坑17
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 に
　10YR7/4にぶい黄橙色テフラ(To-Cu)を露状に含む
2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
4 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

土坑18
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
4 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

土坑19
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まり中 と10YR5/6黄褐色砂質シルトの混合土
3 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 重複ピットか
5 10YR6/6明黄褐色砂質シルト　 粘性やや弱 締まりやや密 地山

土坑20
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
　に10YR6/6明黄褐色粘土質シルトを露状に含む
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

土坑21
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密

土坑22
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密

土坑23
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

土坑24
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

土坑25、26
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 土器含む
4 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

土坑27
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロックφ5㎜を全体に3～5％散在
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック2～3㎝大1～2％散在
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

土坑28
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

土坑29
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
5 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

土坑30
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

第17図　土坑17～30

土坑 17（第 17 図、写真図版 14）

中央区南西端のＸ＝-73723、Ｙ＝26036 付近に位置し、土坑 18 と隣接する。規模・形状は長径 0.83 m、短径 0.82 mの略円形、断面は皿形で深さは 0.33 mである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

土坑 18（第 17 図、写真図版 14）

中央区南西端のＸ＝-73724、Ｙ＝26037 付近に位置し、土坑 17 に隣接する。規模・形状は長径 1.1 m、短径 0.93 mの不整形、断面は鍋底形で深さは 0.38 mである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

土坑 19（第 17 図、写真図版 14）

中央区南西側のＸ＝-73714、Ｙ＝26044 付近に位置し、土坑 20 に隣接する。規模・形状は長径 0.94 m、短径 0.85 mの不整形、断面は鍋底形で深さは 0.22 mである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

土坑 20（第 17 図、写真図版 15）

中央区南西側のＸ＝-73715、Ｙ＝26047 付近に位置し、土坑 19 に隣接する。規模・形状は長径 0.81 m、短径 0.74 mの円形、断面は皿形で深さは 0.18 mである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

土坑 21（第 17 図、写真図版 15）

中央区中央のＸ＝-73681、Ｙ＝26072 付近に位置する。規模・形状は長径 0.77 m、短径 0.72 mの略円形、断面は皿形で深さは 0.13 mである。埋土から剥片３点を出土しているが時期は特定されないことから、周辺遺構の所属時期と同じく縄文時代の遺構と考えたい。

土坑 22（第 17 図、写真図版 15）

中央区中央南側のＸ＝-73694、Ｙ＝26064 付近に位置する。規模・形状は長径 0.9 m、短径 0.87 mの略円形、断面は皿形で深さは 0.24 mである。埋土から 187 特殊磨石、晩期と考えられる少量の土器片、剥片 17 点が出土していることから、該期には廃絶した遺構と考えられる。

土坑 23（第 17 図、写真図版 15）

中央区南東側のＸ＝-73686、Ｙ＝26091 付近に位置する。規模・形状は長径 1.03 m、短径 0.77 mの楕円形、断面は皿形で深さは 0.23 mである。埋土から縄文土器を少量、剥片１点が出土していることから、広く縄文時代の遺構と考える。

土坑 24（第 17 図、写真図版 16）

中央区南東側のＸ＝-73674、Ｙ＝26102 付近に位置し、溝８に東半を切られる。規模・形状は長径（0.9）m、短径 0.74 mの楕円形、断面は皿形で深さは 0.17 mである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

土坑 25（第 17 図、写真図版 16）

中央区南東側のＸ＝-73678、Ｙ＝26104 付近に位置し、東側を P54 に切られ、西側で土坑 26 と重複しこれを切る。規模・形状は長径 0.83 m、短径（0.59）mの楕円形、断面は皿形で深さは 0.13 mである。出土遺物はないが、土坑 26 との重複関係から縄文時代の遺構と考えられる。

土坑 26（第 17 図、写真図版 16）

中央区南東側のＸ＝-73678、Ｙ＝26104 付近に位置し、東側で土坑 25 と重複しこれに切られる。規模・形状は長径 0.84 m、短径（0.65）mの楕円形、断面は皿形で深さは 0.27 mである。底面から晩期前葉の 17 深鉢が出土していることから、該期に廃絶した遺構と考えられる。

土坑 27（第 17 図、写真図版 16）

中央区南東側のＸ＝-73693、Ｙ＝26094 付近に位置し、北側で現代と推定される溝と重複しこれに切られる。規模・形状は長径（1.1）m、短径 1.04 mの略円形、断面は皿形で深さは 0.32 mである。埋土上位から 162 石核と剥片 1 点が出土しているが、所属時期は特定できないことから広く縄文時代の遺構と考える。

土坑 28（第 17 図、写真図版 17）

中央区南東側のＸ＝-73678、Ｙ＝26097 付近に位置する。規模・形状は長径 1.17 m、短径 1.04 mの楕円形、断面は皿形で深さは 0.38 mである。埋土から後期前葉の 18 壺と剥片 4 点が出土していることから、該期には埋没していた遺構と考える。

土坑 29（第 17 図、写真図版 17）

中央区南東側のＸ＝-73667、Ｙ＝26118 付近に位置する。規模・形状は長径 1.4 m、短径 1.27 mの楕円形、断面は鍋底形で深さは 0.37 mである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

土坑 30（第 17 図、写真図版 17）

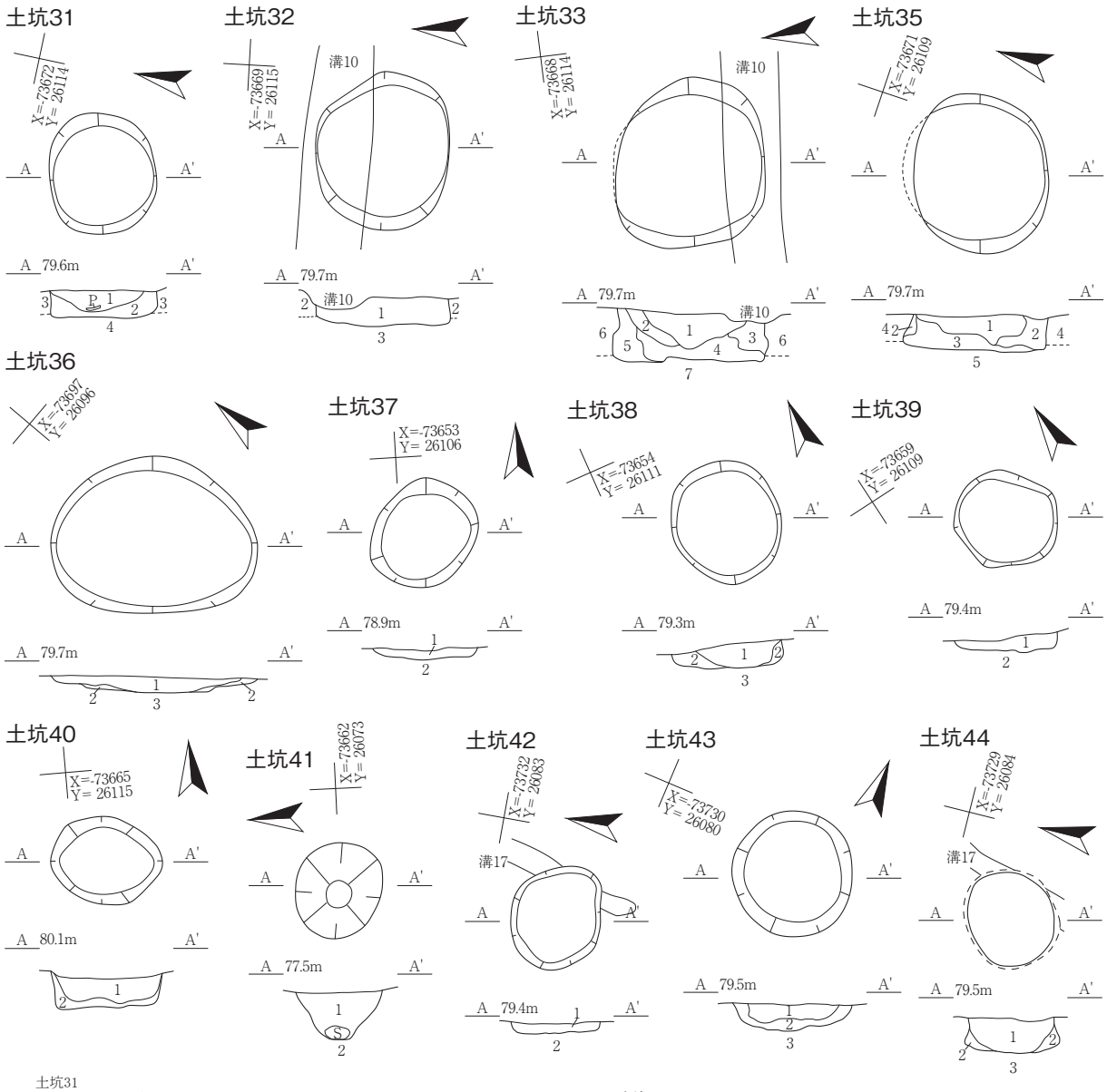
中央区南東側のＸ＝-73668、Ｙ＝26122 付近に位置する。規模・形状は長径 1.14 m、短径 0.84 mの不整形、断面は皿形で深さは 0.12 mである。埋土から晩期と考えられる土器片少量と剥片 7 点を出土していることから、該期までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 31（第 18 図、写真図版 17）

中央区南東側のＸ＝-73672、Ｙ＝26114 付近に位置する。規模・形状は長径 1.07 m、短径 0.93 mの略円形、断面は鍋底形で深さは 0.23 mである。埋土から後期初頭～前葉と考えられる 19 深鉢、晩期前葉の少量の壺・深鉢片、剥片 4 点が出土していることから、晩期前葉までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 32（第 18 図、写真図版 18）

中央区南東側のＸ＝-73669、Ｙ＝26115 付近に位置し、北側を溝 10 に切られる。規模・形状は長径 1.4 m、短径（1.16）mの楕円形、断面は鍋底形で深さは 0.26 mである。埋土から晩期前葉と考え



土坑31
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
　１㎝角の炭化材１～２％散在　土器多い
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まり中
3　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山
4　10YR7/8黄橙色パミス　粘性やや弱　締まりやや密　地山
　村崎野火山灰？

土坑32
1　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山
3　10YR7/8黄橙色パミス　粘性やや弱　締まりやや密　地山

土坑33
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
3　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　壁面崩落土
4　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
　10YR7/8黄橙色パミス１㎝　１～２％含む
5　10YR4/6褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　壁面崩落土
6　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山
7　10YR7/8黄橙色パミス　粘性やや弱　締まりやや密　地山

土坑35
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　壁面崩落土含む
3　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
4　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山
5　10YR7/8黄橙色パミス　粘性やや弱　締まりやや密　地山　村崎野火山灰か

土坑36
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まり中
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まり中
3　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

土坑37
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック１～２㎝　２～３％散在
2　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

土坑38
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
3　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

土坑39
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

土坑40
1　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　粘性中　締まり中　炭化物粒φ３～５㎜
　１％
2　10YR5/6黄褐色シルト　粘性中　締まり中　と10YR4/3にぶい黄褐色
　シルトの混合土

土坑41
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

土坑42
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

土坑43
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
　主体に10YR5/6黄褐色粘土質シルトが混じる　崩落土
3　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

土坑44
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
　主体に10YR5/6黄褐色粘土質シルトが混じる　崩落土
3　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山

0　1:60　2m

第18図　土坑31～33、35～44

られる 20 鉢、石鏃 1 点、剥片 1 点、晩期前葉の深鉢片が少量出土していることから、晩期前葉までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 33（第 18 図、写真図版 18）

中央区南東側のＸ＝-73668、Ｙ＝26114 付近に位置し、南側を溝 10 に切られる。規模・形状は長径 1.5 m、短径（1.3）mの楕円形、断面は鍋底形で深さは 0.45 mである。埋土から後期初頭～前葉と考えられる少量の土器片と、203 焼粘土塊が少量出土していることから、該期までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 35（第 18 図、写真図版 18）

中央区南東側のＸ＝-73671、Ｙ＝26109 付近に位置する。規模・形状は長径 1.4 m、短径 1.16 mの楕円形で北側はややオーバーハングしており、断面は鍋底形で深さは 0.28 mである。埋土から後期初頭～前葉と考えられる少量の土器片と剥片 2 点が出土していることから、該期までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 36（第 18 図、写真図版 18）

中央区南東側のＸ＝-73697、Ｙ＝26096 付近に位置する。規模・形状は長径 1.79 m、短径 1.36 mの楕円形、断面は皿形で深さは 0.13 mである。埋土から細かい微量の縄文土器片と篦状石器 1 点、二次加工ある剥片 1 点、剥片 17 点が出土しており、広く縄文時代の遺構と遺構と考えておきたい。

土坑 37（第 18 図、写真図版 19）

中央区北側のＸ＝-73653、Ｙ＝26106 付近に位置する。規模・形状は長径 0.97 m、短径 0.83 mの楕円形、断面は皿形で深さは 0.08 mである。埋土から晩期前葉と考えられる 21 注口、晩期と考えられる少量の土器片が出土していることから、該期までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 38（第 18 図、写真図版 19）

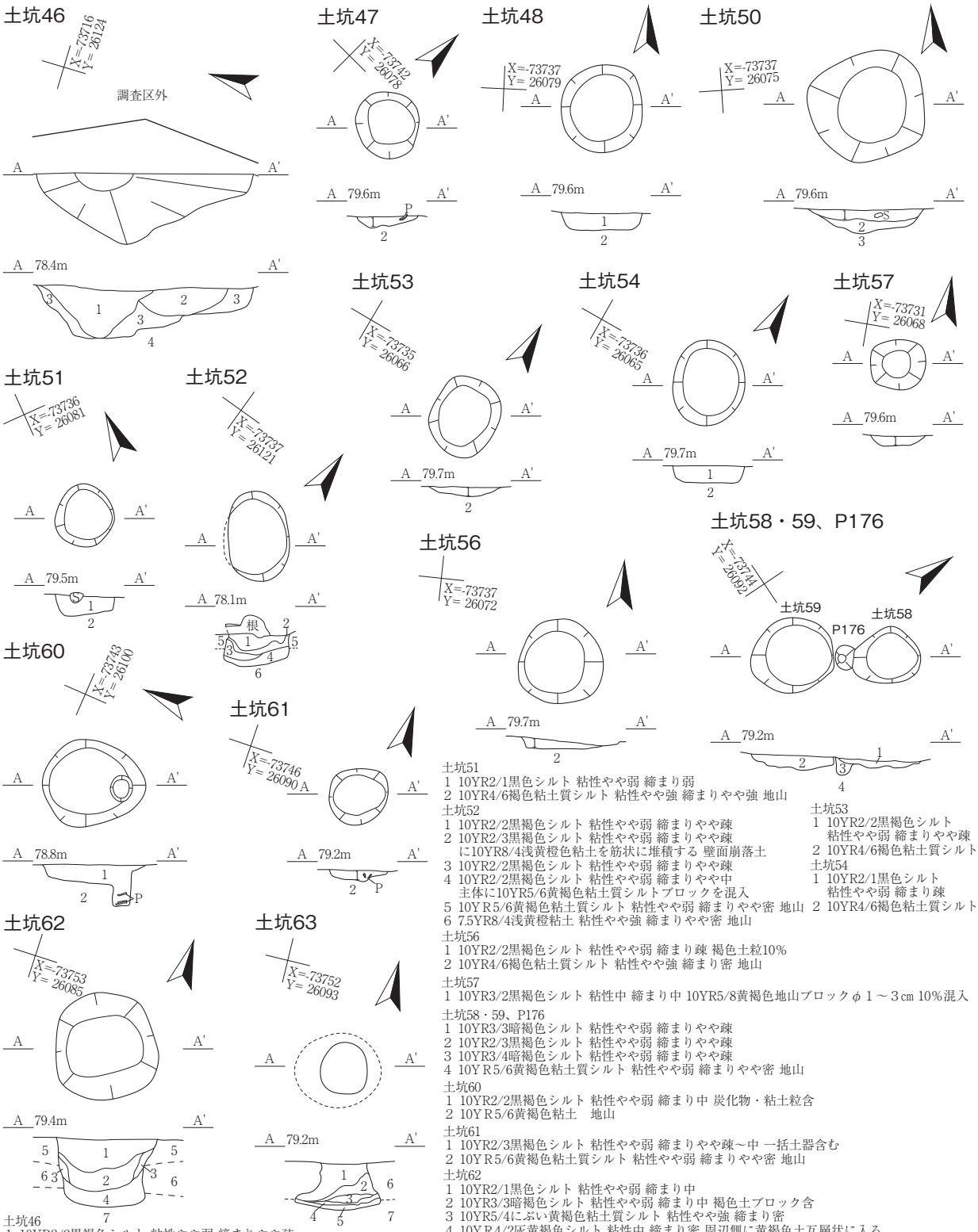
中央区北東側のＸ＝-73654、Ｙ＝26111 付近に位置する。規模・形状は長径 1.08 m、短径 0.95 mの略円形、断面は鍋底形で深さは 0.22 mである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

土坑 39（第 18 図、写真図版 19）

中央区北東側のＸ＝-73659、Ｙ＝26109 付近に位置する。規模・形状は長径 0.92 m、短径 0.85 mの略円形、断面は鍋底形で深さは 0.13 mである。埋土から後期初頭～前葉と考えられる少量の土器片が出土していることから、該期までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 40（第 18 図、写真図版 19）

中央区北東側のＸ＝-73665、Ｙ＝26115 付近に位置する。規模・形状は長径 0.97 m、短径 0.76 mの楕円形、断面は鍋底形で深さは 0.24 mである。埋土下位から晩期と考えられる微量の土器片が出土していることから、該期までに廃絶した遺構と考えられる。



土坑46
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR2/2黒褐色シルト主体に10YR5/6黄褐色粘土質シルト
　ブロック５～10㎝全体に散在
4 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

土坑47
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 土器含む
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

土坑48
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや強 地山

土坑50
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まり疎
2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 褐色土ブロック５％
3 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まり密 地山

土坑51
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まり弱
2 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや強 地山

土坑52
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
　に10YR8/4浅黄橙色粘土を筋状に堆積する 壁面崩落土
3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや中
　主体に10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロックを混入
5 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
6 7.5YR8/4浅黄橙粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山

土坑53
1 10YR2/2黒褐色シルト
　粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR4/6褐色粘土質シルト 地山

土坑54
1 10YR2/1黒色シルト
　粘性やや弱 締まり疎
2 10YR4/6褐色粘土質シルト 地山

土坑56
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり疎 褐色土粒10％
2 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まり密 地山

土坑57
1 10YR3/2黒褐色シルト 粘性中 締まり中 10YR5/8黄褐色地山ブロックφ１～３㎝ 10％混入

土坑58・59、P176
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

土坑60
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 炭化物・粘土粒含
2 10YR5/6黄褐色粘土　地山

土坑61
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎～中 一括土器含む
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

土坑62
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まり中
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 褐色土ブロック含
3 10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まり密
4 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性中 締まり密 周辺側に黄褐色土互層状に入る
5 10YR5/4にぶい黄褐色粘土　地山
6 10YR4/6褐色　粘土質シルト　地山
7 10YR6/3にぶい黄褐色粘土　地山

土坑63
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR6/8明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁面崩落土
4 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎～中 粘土気味
5 10YR2/3黒褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中 と10YR6/4にぶい黄橙色粘土の混合土
　初期堆積土
6 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山
7 10YR8/4浅黄橙色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山

0　1:60　2m

第19図　土坑46～48、50～54、56～63、P176

土坑 41（第 18 図、写真図版 20）

中央区中央西側のＸ＝-73662、Ｙ＝26073 付近に位置する。規模・形状は長径 0.83 m、短径 0.75 mの略円形、断面は逆台形で深さは 0.4 mである。埋土から前期と考えられる少量の土器、134 楔形石器と剥片 14 点、底面から 198 台石が出土していることから、前期までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 42（第 18 図、写真図版 20）

南区中央北側のＸ＝-73732、Ｙ＝26083 付近に位置する。規模・形状は長径 0.92 m、短径 0.78 mの不整円形、断面は鍋底形で深さは 0.08 mである。埋土から後期前葉～中葉と考えられる少量の土器と剥片１点が出土していることから、該期までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 43（第 18 図、写真図版 20）

南区中央北側のＸ＝-73730、Ｙ＝26080 付近に位置する。規模・形状は長径 1.1 m、短径 1.05 mの円形、断面は皿形で深さは 0.23 mである。埋土から晩期前葉と考えられる 22 鉢、後期初頭～前葉と考えられる少量の土器、剥片５点が出土しており、晩期前葉までに埋没した遺構と考えられる。

土坑 44（第 18 図、写真図版 20）

南区中央北側のＸ＝-73729、Ｙ＝26084 付近に位置する。規模・形状は長径 0.8 m、短径 0.75 mの略円形の開口部から、底部は長径 0.86 m、短径 0.83 mの円形袋状に広がる。深さは、0.3 mである。埋土から後期初頭～前葉と考えられる少量の土器片と篦状石器１点、剥片４点が出土しており、該期までに埋没した遺構と考えられる。

土坑 46（第 19 図、写真図版 21）

南区北東端のＸ＝-73716、Ｙ＝26124 付近に位置する。規模・形状は長径 2.16 m、短径（0.72）mの不整形、断面も不整形で深さは 0.47 mである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と考えられる。

土坑 47（第 19 図、写真図版 21）

南区中央北側のＸ＝-73742、Ｙ＝26078 付近に位置する。規模・形状は長径 0.68 m、短径 0.65 mの円形、断面は皿形で深さは 0.11 mである。埋土から後期初頭～前葉と考えられる少量の土器片が出土しており、該期までに埋没した遺構と考えられる。

土坑 48（第 19 図、写真図版 21）

南区中央北側のＸ＝-73737、Ｙ＝26079 付近に位置する。規模・形状は長径 0.88 m、短径 0.81 mの円形、断面は鍋底形で深さは 0.17 mである。埋土から、晩期前葉と考えられる 23・24 注口と同時期の土器片、石核１点、特殊磨石１点、剥片３点が出土しており、晩期前葉までに埋没した遺構と考えられる。

土坑 49（第 27 図、写真図版 21・22）

南区北東側のＸ＝-73731、Ｙ＝26106 付近に位置し、陥し穴状遺構 22 と重複するが本遺構が新しい。

規模・形状は長径 1.28 m、短径 1.27 mの略円形の開口部から、底部は長径 1.53 m、短径 1.52 mの略円形フラスコ形に広がる。深さは、0.46 mである。埋土上位を中心に、晩期初頭～前葉と考えられる 25 壺、26～28 鉢、29～32 深鉢、晩期前葉の土器片（深鉢片多い）、埋土から 93 石鏃、篦状石器１点、石核１点、剥片 49 点、202 円盤状土製品が出土しており、晩期前葉までに埋没した遺構と考えられる。

土坑 50（第 19 図、写真図版 22）

南区中央北側のＸ＝-73737、Ｙ＝26075 付近に位置する。規模・形状は長径 1.17 m、短径 1.12 mの不整円形、断面は皿形で深さは 0.23 mである。埋土から晩期前葉と考えられる土器片がビニール１袋、剥片７点が出土しており、該期までに埋没した遺構と考えられる。

土坑 51（第 19 図、写真図版 22）

南区中央北側のＸ＝-73736、Ｙ＝26081 付近に位置する。規模・形状は長径 0.63 m、短径 0.59 mの円形、断面は鍋底形で深さは 0.17 mである。埋土から晩期と考えられる少量の土器片、剥片１点が出土しており、該期までに埋没した遺構と考えられる。

土坑 52（第 19 図、写真図版 22）

南区中央北側のＸ＝-73737、Ｙ＝26121 付近に位置する。規模・形状は長径 0.9 m、短径 0.61 mの楕円形、断面は鍋底形で深さは 0.33 mである。埋土から晩期と考えられる少量の土器片、剥片３点が出土しており、該期までに埋没した遺構と考えられる。

土坑 53（第 19 図、写真図版 23）

南区中央北側のＸ＝-73735、Ｙ＝26066 付近に位置する。規模・形状は長径 0.79 m、短径 0.66 mの楕円形、断面は皿形で深さは 0.08 mである。埋土から剥片１点が出土しているが所属時期は特定できない。周辺の隣接遺構から晩期に推定される。

土坑 54（第 19 図、写真図版 23）

南区中央北側のＸ＝-73736、Ｙ＝26065 付近に位置する。規模・形状は長径 0.86 m、短径 0.72 mの楕円形、断面は鍋底形で深さは 0.17 mである。埋土から晩期と考えられる土器片が少量、剥片２点が出土しており、該期までに埋没した遺構と考えられる。

土坑 56（第 19 図、写真図版 23）

南区中央北側のＸ＝-73737、Ｙ＝26072 付近に位置する。規模・形状は長径 0.85 m、短径 0.84 mの略円形、断面は皿形で深さは 0.1 mである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から晩期の遺構と考えられる。

土坑 57（第 19 図、写真図版 23）

南区中央北側のＸ＝-73737、Ｙ＝26072 付近に位置する。規模・形状は長径 0.55 m、短径 0.51 mの略円形、断面は皿形で深さは 0.09 mである。出土遺物はないが、周辺遺構の所属時期から晩期の遺構と考えられる。

土坑 58（第 19 図、写真図版 24）

南区中央のX＝-73744、Y＝26092 付近に位置し、P176 と重複し本遺構が新しい。規模・形状は長径 0.85 m、短径 0.57 mの不整楕円形、断面は皿形で深さは 0.07 mである。埋土から晩期と考えられる土器片が少量出土しており、該期までに埋没した遺構と考えられる。

土坑 59（第 19 図、写真図版 24）

南区中央のX＝-73744、Y＝26092 付近に位置し、P176、土坑 58 と隣接する。規模・形状は長径 0.83 m、短径 0.77 mの略円形、断面は皿形で深さは 0.15 mである。底面から 205 石棒類が出土しており、埋土からは晩期前葉と考えられる深鉢片、剥片 1 点が出土しており、該期までに埋没した遺構と考えられる。

土坑 60（第 19 図、写真図版 24）

南区中央東側のX＝-73743、Y＝26100 付近に位置する。規模・形状は長径 1.03 m、短径 0.87 mの楕円形、断面は皿形で深さは 0.18 mである。底面南側に、長径 0.25 m、短径 0.22 m、深さ 0.22 mの円形副穴を伴う。底面から晩期前葉と考えられる 33 壺、埋土から晩期末葉と考えられる 34 鉢と浅鉢や深鉢片、台石 1 点、剥片 12 点、埋土から晩期と考えられる土器片が少量出土しており、晩期末葉までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 61（第 19 図、写真図版 24）

南区中央東側のX＝-73746、Y＝26090 付近に位置する。規模・形状は長径 0.58 m、短径 0.57 mの略円形、断面は皿形で深さは 0.09 mである。埋土から晩期前葉と考えられる 35 鉢と同時期の土器片が少量出土しており、該期までに埋没した遺構と考えられる。

土坑 62（第 19 図、写真図版 25）

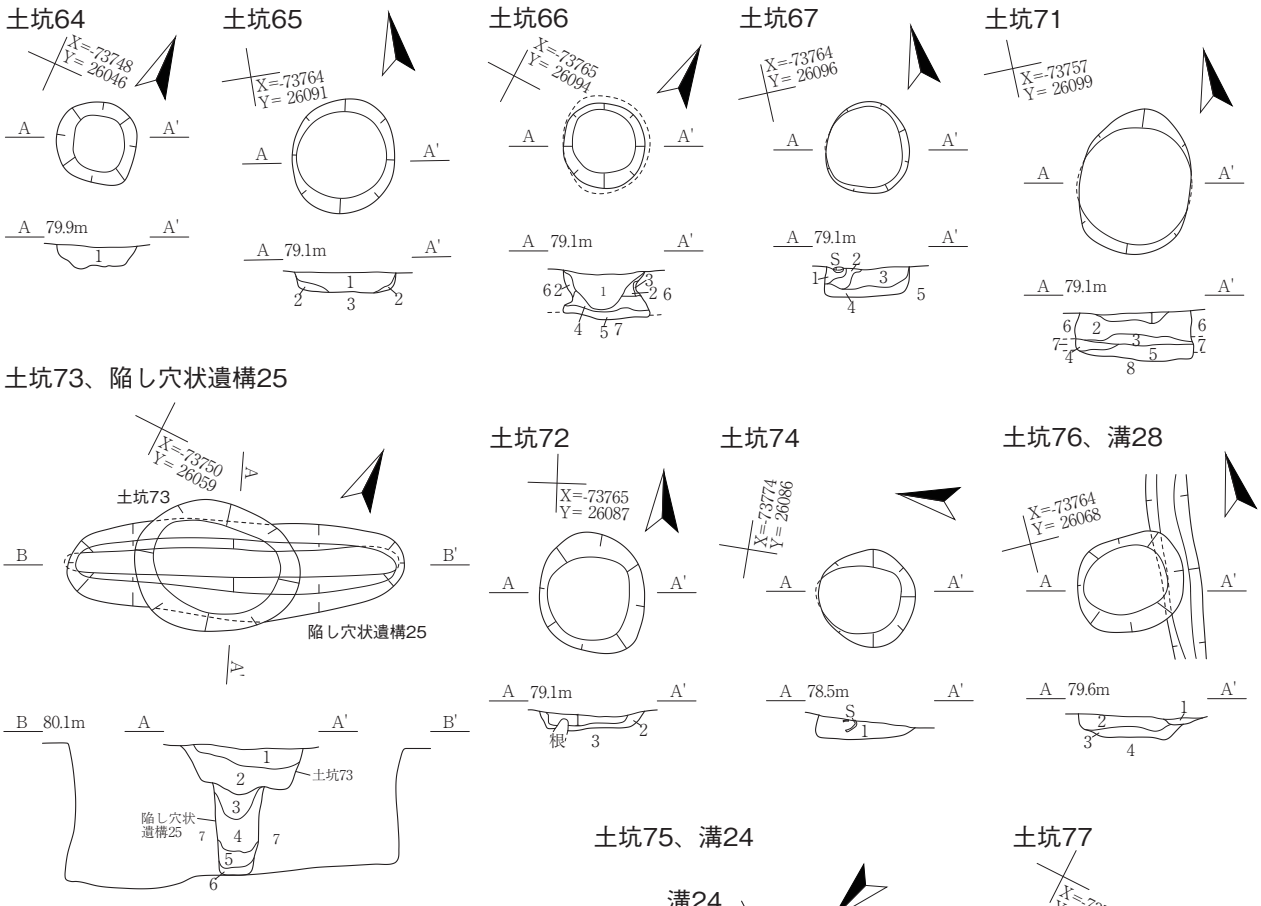
南区中央のX＝-73753、Y＝26085 付近に位置する。規模・形状は長径 1.07 m、短径 1.03 mの不整円形、断面は鍋底形で深さは 0.67 mである。埋土から特殊磨石 1 点が出土しているが所属時期は特定できない。周辺の隣接遺構から晩期に推定される。

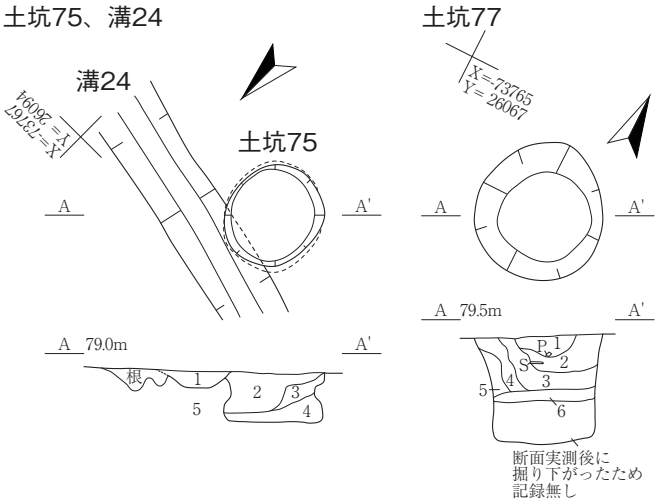
土坑 63（第 19 図、写真図版 25）

南区中央のX＝-73752、Y＝26093 付近に位置する。規模・形状は長径 0.52 m、短径 0.46 mの不整円形の開口部から、底部は長径 0.87 m、短径 0.75 mの楕円形フラスコ形に広がる。深さは、0.46 mである。埋土から 124 篦状石器のほか、後期前葉と見られる少量の土器片、剥片 5 点が出土しており、該期までに埋没した遺構と考えられる。

土坑 64（第 20 図、写真図版 25）

南区北西側のX＝-73748、Y＝26046 付近に位置する。規模・形状は長径 0.64 m、短径 0.63 mの円形、断面は皿形で深さは 0.18 mである。埋土から晩期前葉と考えられる 36 深鉢が出土しており、該期までに埋没した遺構と考えられる。





土坑64
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性中 締まり中
10YR6/6明黄褐色ブロック（地山）φ1～5cm
5%含む

土坑65
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

土坑66
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
主体に10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロック2～3cm散在
3 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり中
崩落土
4 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
と10YR6/6明黄褐色粘土質シルトの混合土
6 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
7 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中～やや強 締まりやや密 地山

土坑67
1 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト主体に
10YR6/6明黄褐色粘土ブロック3～5cm散在　崩落土
4 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山

土坑71
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
4 10YR5/6黄褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR6/8明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中
6 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
7 10YR6/8明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
8 10YR8/4浅黄橙色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山

土坑72
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 主体に
10YR6/6明黄褐色粘土質シルトブロック1cm散在
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや強 地山

土坑73・陥し穴状遺構25
1 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性中 締まり強 炭化物粒2%、土器片含む
土坑73
2 10YR3/1黒褐色シルト 粘性中 締まり強 炭化物粒3%　地山ブロック
φ2～3%含む 土坑73
3 10YR7/6黄褐色シルト 粘性中 締まり強 10YR4/1褐灰色シルト霜状に
20%含む
4 10YR7/6黄褐色シルト 粘性中 締まり強 層下位に褐灰色シルト霜状に堆積
5 10YR7/4にぶい黄橙色シルト 粘性中 締まりやや強
6 10YR4/1褐灰色シルト 粘性やや強 締まりやや強 地山霜状に含む
7 10YR8/6黄橙色シルト 粘性やや強 締まりやや強 地山

土坑74
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性弱 締まり中 炭化物含む

土坑75、溝24
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性弱 締まり疎
2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性弱 締まり中 炭化物含む
3 10YR3/2黒褐色シルト 粘性弱 締まり中 褐色土ブロック含む
4 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり密 固結している
5 10YR4/6褐色シルト　地山

土坑76、溝28
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 撹乱
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎に10YR5/6黄褐色粘土質シルト
ブロック2～3cm少量散在
4 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

土坑77
1 10YR3/2黒褐色シルト 粘性中 締まり中 炭化物ブロックφ5mmを1%、土器片含む
2 10YR3/2黒褐色シルト 粘性中 締まり中 10YR7/6明黄褐色シルト 地山を霜状に10%含む
3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘性やや強 締まりやや強 10YR7/6明黄褐色シルト
（地山）ブロックφ1～4cm を30%含む
4 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘性やや強 締まりやや強
5 10YR7/6明黄褐色シルト 粘性やや強 締まりやや強 地山崩落層 10YR4/2灰黄褐色シルト
を霜状に10%含む
6 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや強 締まりやや強 と10YR6/8明黄褐色シルトの混合土
（6：4）

0　1:60　2m

第20図　土坑64～67、71～77、陥し穴状遺構25、溝24・28

土坑 65（第 20 図、写真図版 25）

南区中央南側のＸ＝-73764、Ｙ＝26091 付近に位置する。規模・形状は長径 0.89 m、短径 0.8 mの略円形、断面は鍋底形で深さは 0.15 mである。埋土から晩期と考えられる土器片が少量出土しており、該期までに埋没した遺構と考えられる。

土坑 66（第 20 図、写真図版 26）

南区中央南側のＸ＝-73765、Ｙ＝26094 付近に位置する。規模・形状は長径 0.66 m、短径 0.62 mの円形の開口部から、底部は長径 0.76 m、短径 0.67 mの楕円形フラスコ形に広がる。深さは、0.35 mである。埋土から晩期前葉と考えられる 37 注口、同時期の土器片が少量、剥片３点が出土しており、該期までに埋没した遺構と考えられる。

土坑 67（第 20 図、写真図版 26）

南区中央南側のＸ＝-73764、Ｙ＝26096 付近に位置する。規模・形状は長径 0.72 m、短径 0.64 mの円形、断面は鍋底形で深さは 0.21 mである。埋土から縄文のみ施文の土器片が微量出土していることから、縄文時代の遺構と広く捉えておきたい。

土坑 71（第 20 図、写真図版 26）

南区中央南側のＸ＝-73757、Ｙ＝26099 付近に位置する。規模・形状は長径 1.14 m、短径 0.95 mの楕円形、断面は鍋底形で深さは 0.37 mである。東西がややオーバーハングすることから、袋状土坑の可能性がある。埋土から篦状石器１点、剥片６点が出土しているが時期は特定されないことから、周辺遺構と同じく晩期の遺構と考えたい。

土坑 72（第 20 図、写真図版 26）

南区中央南側のＸ＝-73765、Ｙ＝26087 付近に位置する。規模・形状は長径 0.93 m、短径 0.81 mの楕円形、断面は皿形で深さは 0.13 mである。埋土から、晩期前葉と見られる少量の土器片、剥片３点が出土していることから、該期までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 73（第 20 図、写真図版 27）

南区中央南側のＸ＝-73750、Ｙ＝26059 付近に位置する。陥し穴状遺構 25 と重複し、本遺構が新しい。規模・形状は長径 1.29 m、短径 1.03 mの楕円形、断面は鍋底形で深さは 0.36 mである。埋土から、晩期前葉と見られる 38・39 精製深鉢と同時期の注口など土器片、磨石１点、凹石１点、剥片６点が出土していることから、該期までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 74（第 20 図、写真図版 27）

南区中央南側のＸ＝-73774、Ｙ＝26086 付近に位置する。規模・形状は長径 0.76 m、短径 0.74 mの円形、断面は皿形で深さは 0.16 mである。北側がややオーバーハングする。埋土から、晩期前葉と考えられる 40 精製深鉢と同時期の深鉢片、剥片４点が出土していることから、該期までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 75（第 20 図、写真図版 27）

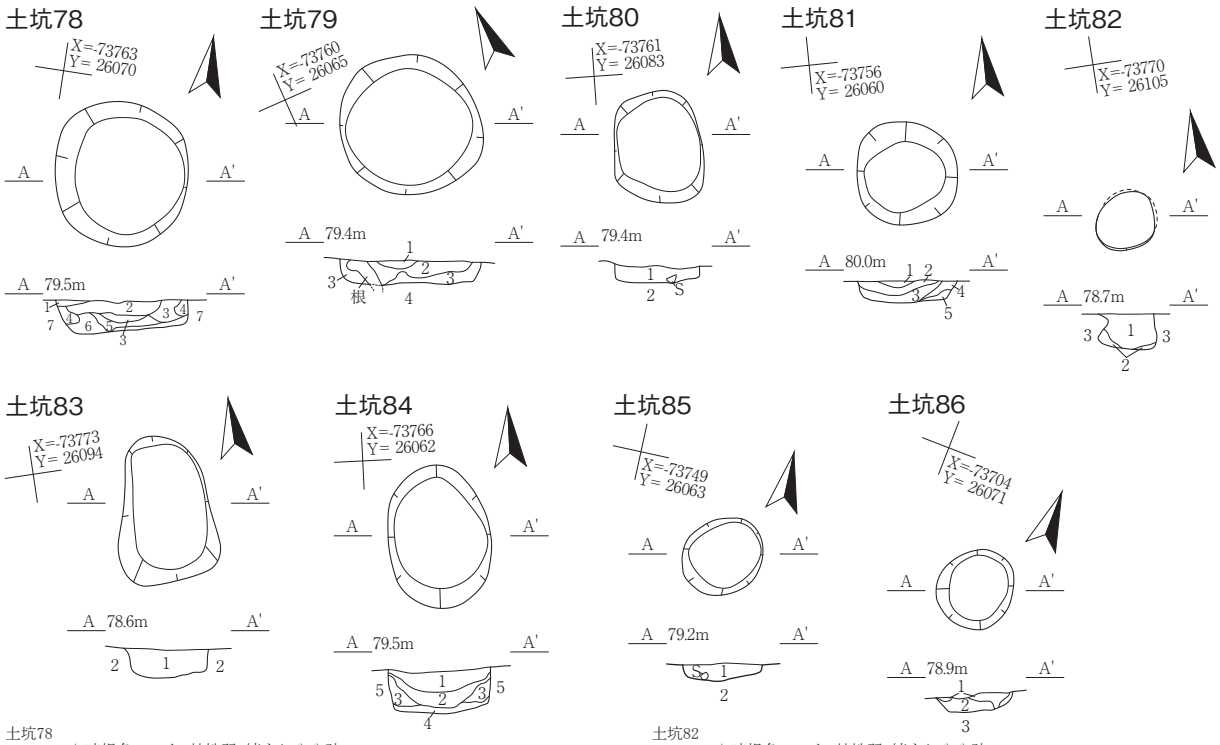
南区中央南側のＸ＝-73767、Ｙ＝26094 付近に位置し、北側を溝 24 に切られる。規模・形状は長径 0.81 m、短径 0.7 mの楕円形の開口部から、底部は長径 0.83 m、短径 0.77 mの楕円形袋状に広がる。埋土から、晩期前葉と考えられる 41 精製深鉢と同時期の深鉢片、石核 1 点、剥片 17 点、204 焼成粘土塊が出土しており、該期までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 76（第 20 図、写真図版 28）

南区南西側のＸ＝-73764、Ｙ＝26068 付近に位置し、東側を溝 28 に切られる。規模・形状は長径 0.85 m、短径 0.73 mの楕円形、断面は皿形で深さは 0.16 mである。埋土から剥片 3 点が出土しているが所属時期は特定されないことから、周辺遺構と同じく晩期の遺構と考えたい。

土坑 77（第 20 図、写真図版 28）

南区南西側のＸ＝-73765、Ｙ＝26067 付近に位置する。規模・形状は長径 1.07 m、短径 1.0 mの円



土坑78
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性弱　締まりやや疎
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性弱　締まりやや疎
3　10YR3/2黒褐色シルト　粘性弱　締まりやや疎　炭化物含む
4　10YR6/4にぶい黄橙色シルト　粘性弱　締まりやや疎
5　10YR2/2黒褐色シルト　粘性弱　締まりやや疎
6　10YR3/2黒褐色シルト　粘性弱　締まりやや疎　炭化物含む
7　10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルト　地山

土坑79
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　主体に10YR7/6明黄褐色ブロック3cm含む
2　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
3　10YR3/4暗褐色シルト主体に10YR6/4にぶい黄橙色粘土ブロック2～3cm少量散在
4　10YR6/4にぶい黄橙色粘土　粘性やや強　締まりやや密　地山

土坑80
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
　10YR6/6明黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや強

土坑81
1　10YR4/2灰黄褐色シルト　粘性中　締まり中
2　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　粘性中　締まり中　10YR7/6黄褐色シルト地山ブロックφ5mmを3%含む
3　2層と同じで更に炭化物粒φ5～10mmを3%含む
4　10YR7/4にぶい黄橙色シルト　粘性中　締まり中と10YR4/3にぶい黄褐色シルトの混合土（5:5）
5　10YR5/8黄褐色シルト　粘性中　締まり中　10YR4/3にぶい黄褐色シルトを露状に含む地山再堆積層

土坑82
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性弱　締まりやや疎
2　10YR4/4褐色シルト　粘性弱　締まり中
3　10YR6/6明黄褐色粘土　地山

土坑83
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性弱　締まりやや疎　炭化物含む
2　10YR4/6褐色粘土質シルト　地山

土坑84
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや疎　5mm以下の炭化物１%散在
2　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや疎　1cm以下の炭化物５%散在
3　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱～中　しまり中　崩落土
4　10YR4/4褐色シルト　粘性やや弱　しまりやや疎　初期堆積土
5　10YR6/6明黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱～中　しまりやや密　地山

土坑85
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　炭化物5mm　1～2%散在
2　10YR6/6明黄褐色粘土　粘性やや弱　締まりやや密　地山

土坑86
1　10YR2/1黒色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　土器少量混入
2　10YR4/4褐色粘土質シルト　粘性中　締まり中
3　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性中　締まりやや密　地山

0　1:60　2m

第 21 図　土坑 78～86

形、断面はビーカー形で深さは 0.83 mである。埋土から、晩期前葉と考えられる 42 注口と同時期の土器片少量、剥片５点が出土しており、該期までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 78（第 21 図、写真図版 28）

南区南西側のＸ＝-73763、Ｙ＝26070 付近に位置する。規模・形状は長径 1.16 m、短径 1.04 mの略円形、断面は鍋底形で深さは 0.26 mである。埋土から、晩期前葉～中葉と考えられる 43・44 鉢、晩期前葉の 45 注口、46 精製深鉢と同時期の土器片ビニール１袋、121 篦状石器、剥片 59 点が出土しており、該期までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 79（第 21 図、写真図版 28）

南区南西側のＸ＝-73760、Ｙ＝26065 付近に位置する。規模・形状は長径 1.13 m、短径 1.12 mの円形、断面は鍋底形で深さは 0.18 mである。埋土から晩期と考えられる土器片少量、剥片１点が出土しており、該期までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 80（第 21 図、写真図版 29）

南区中央南側のＸ＝-73761、Ｙ＝26083 付近に位置する。規模・形状は長径 0.89 m、短径 0.72 mの楕円形、断面は鍋底形で深さは 0.13 mである。埋土から縄文土器片少量、二次加工ある剥片１点、特殊磨石１点、台石１点が出土しており、周辺遺構の所属時期である晩期までに廃絶した遺構と推定される。

土坑 81（第 21 図、写真図版 29）

南区西側のＸ＝-73756、Ｙ＝26060 付近に位置する。規模・形状は長径 0.82 m、短径 0.80 mの略円形、断面は皿形で深さは 0.18 mである。埋土から後期前葉と考えられる 47 深鉢、晩期前葉と考えられる土器片少量、剥片１点が出土しており、晩期前葉までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 82（第 21 図、写真図版 29）

南区南東端のＸ＝-73770、Ｙ＝26105 付近に位置する。規模・形状は長径 0.46 m、短径 0.45 mの円形の開口部から、底部は長径 0.48 m、短径 0.47 mの円形袋状に広がる。深さは、0.28 mである。埋土から晩期前葉と考えられる 48 精製深鉢と同時期の土器片少量、剥片３点が出土しており、該期までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 83（第 21 図、写真図版 29）

南区南東側のＸ＝-73773、Ｙ＝26094 付近に位置する。規模・形状は長径 1.17 m、短径 0.80 mの不整楕円形、断面は鍋底形で深さは 0.23 mである。埋土から晩期初頭～前葉と考えられる 49 深鉢と同時期の土器片微量、剥片２点が出土しており、該期までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 84（第 21 図、写真図版 30）

南区南西側のＸ＝-73766、Ｙ＝26062 付近に位置する。規模・形状は長径 1.14 m、短径 0.81 mの楕円形、断面は鍋底形で深さは 0.34 mである。埋土から、後期前葉と考えられる 50 深鉢、中期末葉と考えられる 51 深鉢と同時期の土器片ビニール１袋、埋土上位から剥片３点が出土しており、後期

初頭までに廃絶した遺構と考えられる。

土坑 85（第 21 図、写真図版 30）

南区西側のＸ＝-73749、Ｙ＝26063 付近に位置する。規模・形状は長径 0.68 m、短径 0.58 mの楕円形、断面は皿形で深さは 0.14 mである。埋土から、縄文のみ施文の土器片が微量と 206 石棒が出土していることから、縄文時代の遺構と広く捉えておきたい。

土坑 86（第 21 図、写真図版 30）

中央区中央南側のＸ＝-73704、Ｙ＝26071 付近に位置する。規模・形状は長径 0.65 m、短径 0.6 mの円形、断面は皿形で深さは 0.14 mである。埋土から、後期前葉と考えられる 52 壺が出土していることから、該期までに廃絶した遺構と考えられる。（北田）

（５）焼　　土

焼土１（第 22 図、写真図版 30・31）

中央区南東側のＸ＝-73674、Ｙ＝26111 付近に位置し、焼土１～３を並んで検出した。規模・形状は、長さ 0.48 m、幅 0.32 mの楕円形、被熱した深さは 0.1 mである。橙色～赤色に強変しており、現地性の焼土と考えられる。出土遺物はなく詳細な所属時期は特定できないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と広く捉えておきたい。

焼土２（第 22 図、写真図版 31）

中央区南東側のＸ＝-73674、Ｙ＝26111 付近に位置し、焼土１～３を並んで検出した。規模・形状は、長さ 0.5 m、幅 0.49 mの不整形、被熱した深さは 0.1 mである。焼土層の間に灰白色粘土が挟まれており、焼土範囲を超えて長径 0.72 m、短径 0.5 mの不整な楕円形に広がっており、人為的に敷設されたと考えられる。焼土は橙色～赤色に強変しており、現地性の焼土と考えられる。出土遺物はなく詳細な所属時期は特定できないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と広く捉えておきたい。

焼土３（第 22 図、写真図版 31）

中央区南東側のＸ＝-73674、Ｙ＝26111 付近に位置し、焼土１～３を並んで検出した。規模・形状は、長さ 0.52 m、幅 0.48 mの不整形、遺構中央が撹乱されているが、被熱した深さは 0.1 mである。赤色に強変しており、現地性の焼土と考えられる。出土遺物はなく詳細な所属時期は特定できないが、周辺遺構の所属時期から縄文時代の遺構と広く捉えておきたい。

焼土４（第 22 図、写真図版 31）

南区中央北側のＸ＝-73732、Ｙ＝26079.5 付近に位置する。規模・形状は、長さ 0.35 m、幅 0.29 mの楕円形、被熱した深さは 0.04 mである。出土遺物はなく詳細な所属時期は特定できないが、周辺遺構の所属時期から晩期の遺構と考えられる。

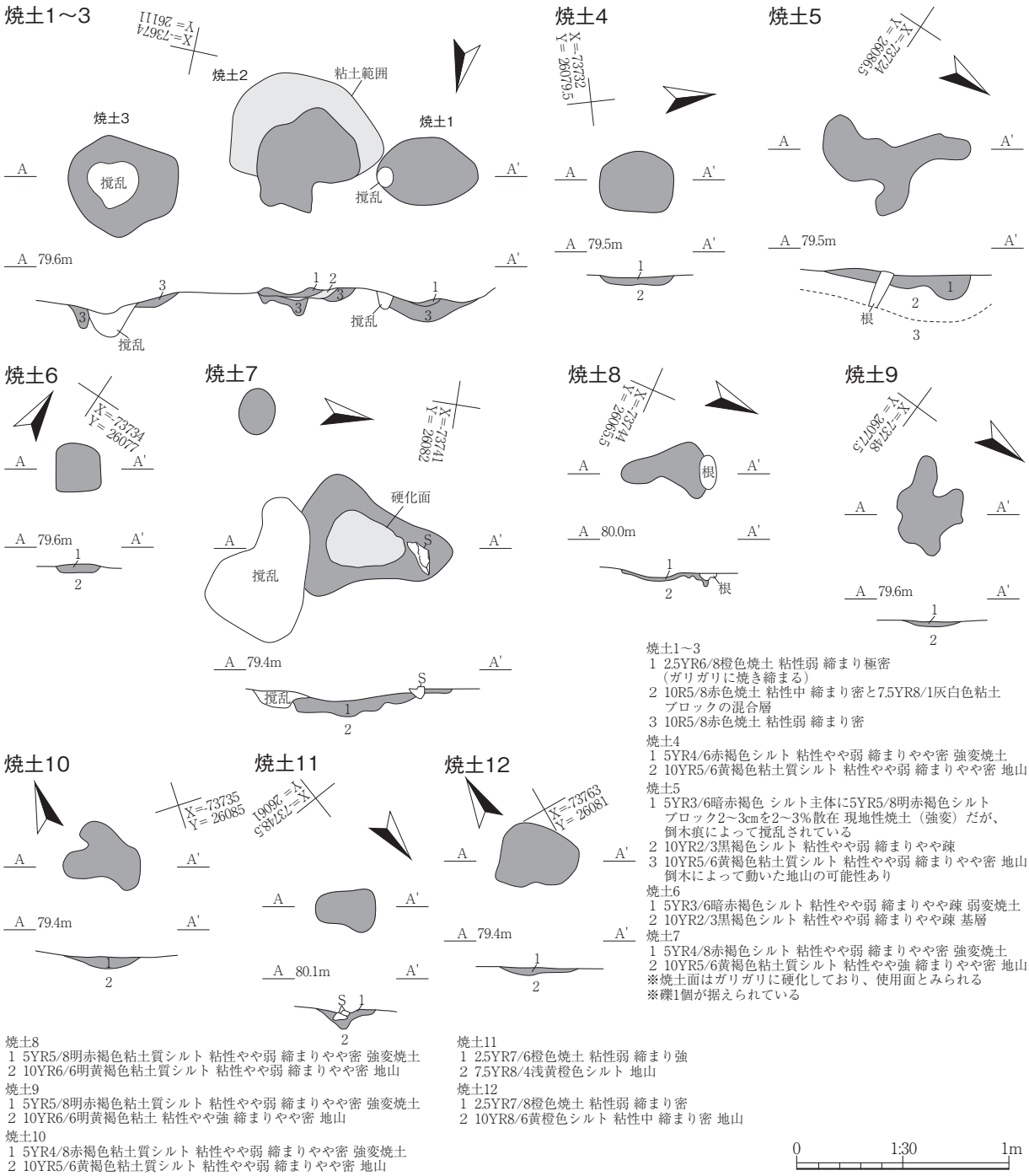
焼土５（第 22 図、写真図版 32）

南区中央北側のＸ＝-73724、Ｙ＝26086.5 付近に位置する。規模・形状は、長さ 0.69 m、幅 0.36 mの不整形、被熱した深さは 0.12 mである。暗赤褐色に強変しており、撹乱されているが現地性の焼

土と考えられる。２層から縄文土器が微量と剥片２点が出土しており、周辺遺構の所属時期から晩期の遺構と考えられる。

焼土６（第 22 図、写真図版 32）

南区中央北側のＸ＝-73734、Ｙ＝26077 付近に位置する。規模・形状は、長さ 0.23 m、幅 0.21 m の方形、被熱した深さは 0.04 mである。明赤褐色に弱変しており、現地性の焼土と考えられる。出土遺物はなく詳細な所属時期は特定できないが、周辺遺構の所属時期から晩期の遺構と考えられる。



第 22 図　焼土１～12

焼土７（第 22 図、写真図版 32）

南区中央北側のＸ＝-73741、Ｙ＝26082 付近に位置し、南側が撹乱されている。規模・形状は、長さ（0.68）m、幅 0.52 mの不整形、被熱した深さは 0.07 mである。北側に礫１個が据えられており、この内側が長さ 0.37 m、幅 0.27 mの不整形に硬化している。このことから、礫は炉を構成していたものと推定される。焼土は赤褐色に強変しており、現地性の焼土と考えられる。上面から晩期の土器片が微量出土していることから、該期に埋没した遺構と考えられる。

焼土８（第 22 図、写真図版 32）

南区中央西側のＸ＝-73744、Ｙ＝26065.5 付近に位置し、北側を根によって撹乱されている。規模・形状は、長さ推定 0.4 m、幅 0.27 mの不整形、被熱した深さは 0.02 mである。明赤褐色に強変しており、現地性の焼土と考えられる。上面から、縄文のみ施文の土器片が微量出土しているが、詳細な時期は特定されない。周辺遺構の所属時期から、晩期の遺構と推定される。

焼土９（第 22 図、写真図版 33）

南区中央のＸ＝-73748、Ｙ＝26077.5 付近に位置する。規模・形状は、長さ 0.47 m、幅 0.31 mの不整形、被熱した深さは 0.02 mである。明赤褐色に強変しており、現地性の焼土と考えられる。出土遺物はなく詳細な所属時期は特定できないが、周辺遺構の所属時期から晩期の遺構と考えられる。

焼土 10（第 22 図、写真図版 33）

南区中央北側のＸ＝-73735、Ｙ＝26085 付近に位置する。規模・形状は、長さ 0.36 m、幅 0.26 mの不整形、被熱した深さは 0.06 mである。赤褐色に強変しており、現地性の焼土と考えられる。上面から晩期の土器片が微量出土していることから、該期に埋没した遺構と考えられる。

焼土 11（第 22 図、写真図版 33）

南区中央西側のＸ＝-73748.5、Ｙ＝26061 付近に位置する。規模・形状は、長さ 0.28 m、幅 0.2 mの不整形、被熱した深さは 0.07 mである。橙色に強変しており、現地性の焼土と考えられる。出土遺物はなく詳細な所属時期は特定できないが、周辺遺構の所属時期から晩期の遺構と考えられる。

焼土 12（第 22 図、写真図版 33）

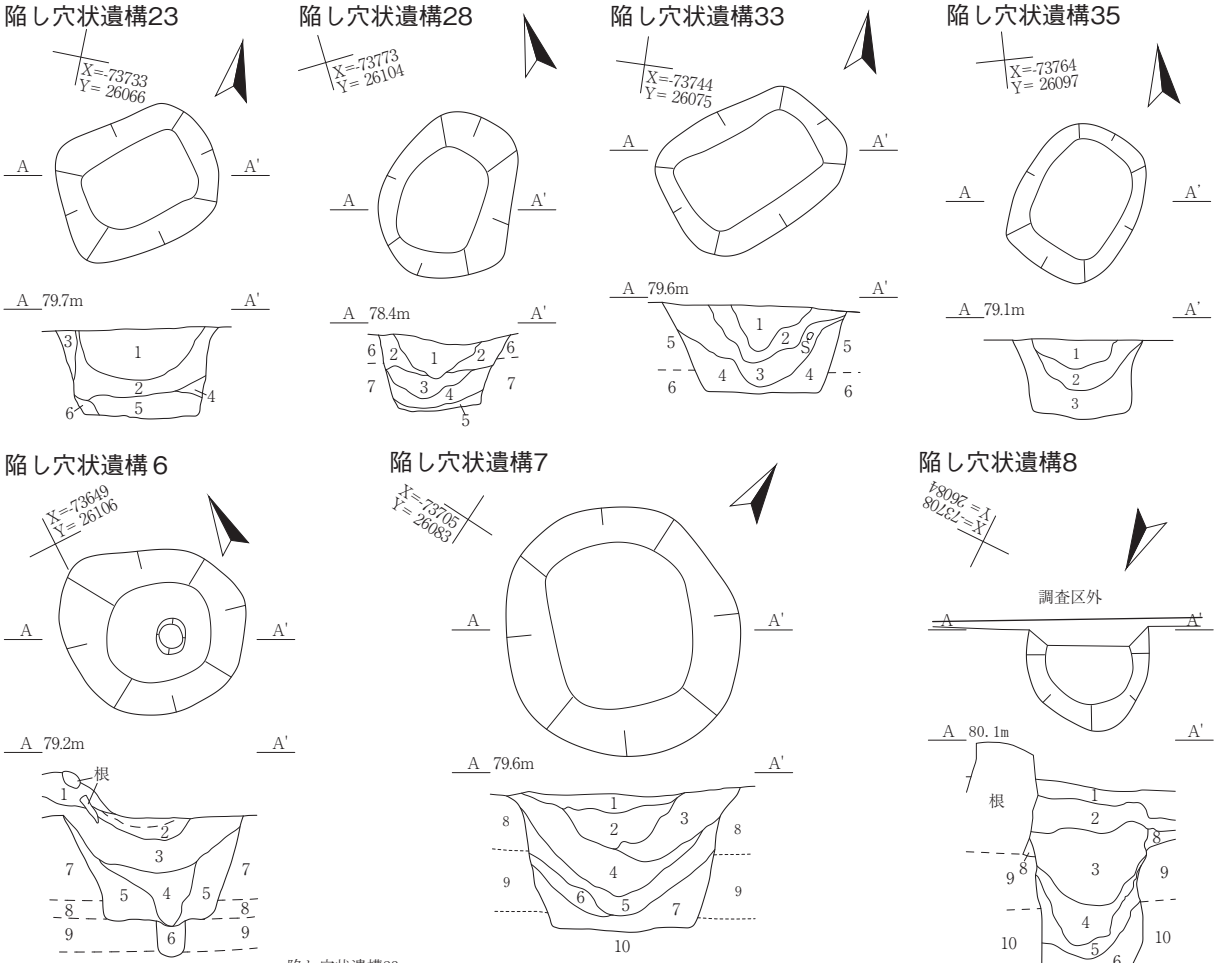
南区中央南側のＸ＝-73763、Ｙ＝26081 付近に位置する。規模・形状は、長さ 0.36 m、幅 0.3 mの不整形、被熱した深さは 0.04 mである。橙色に強変しており、現地性の焼土と考えられる。出土遺物はなく詳細な所属時期は特定できないが、周辺遺構の所属時期から晩期の遺構と考えられる。（北田）

（６）陥し穴状遺構

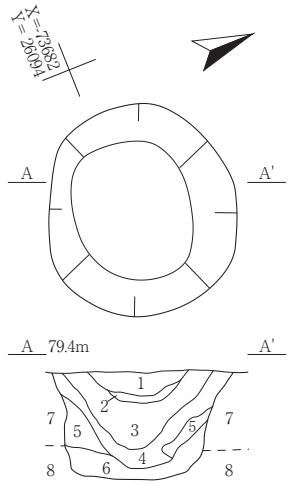
〈方形基調〉

陥し穴状遺構 23（第 23 図、写真図版 34）

南区中央北側のＸ＝-73733、Ｙ＝26066 付近に位置する。規模・形状は、長さ 1.28 m、幅 1.06 mの方形、深さは 0.71 mである。埋土上位から早期中葉～後葉の土器片微量と剥片３点、埋土下位から薄手の縄文土器片微量と剥片１点が出土していることから、縄文時代早期もしくはそれ以前の遺構と考えられる。



陥し穴状遺構9



陥し穴状遺構23
1　7.5YR2/2黒褐色シルト　粘性中　締まり密　2.5YR5/8明赤褐色φ3～5㎜を2%含む
2　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　粘性中　締まり密　10YR5/6黄褐色ブロックφ1㎝を1%含む
3　10YR6/6明黄褐色シルト　粘性中　締まり密
4　10YR5/6黄褐色シルト　粘性強　締まり密
5　10YR4/2灰黄褐色シルト　粘性強　締まり密
6　10YR7/8黄橙色シルト　粘性強　締まり密　10YR4/2灰黄褐色シルト3%含む

陥し穴状遺構28
1　7.5YR2/3極暗褐色粘土質シルト　粘性弱　締まり密　炭化物含む
2　10YR6/6明黄褐色粘土　粘性強　締まり密　壁面に沿って黒褐色土薄く堆積
3　10YR3/3暗褐色粘土質シルト　粘性弱　締まり密　2層の粘土層ラミナ状に含む
4　10YR6/6明黄褐色粘土　粘性強　締まり密
5　7.5YR3/3極暗褐色シルト　粘性弱　締まりやや密
6　10YR6/6明黄褐色粘土　地山
7　10YR7/2にぶい黄橙色粘土　地山

陥し穴状遺構33
1　7.5YR2/2黒褐色粘土質シルト　粘性中　締まりやや密　褐色・赤褐色土粒5%含む
2　7.5YR3/4暗褐色粘土質シルト　粘性中　締まり密　非常に硬く締まる
3　7.5YR4/3褐色粘土質シルト　粘性中　締まり密　非常に硬く締まる
4　10YR4/6褐色粘土質シルト　粘性中　締まり密　崩落ブロックか　非常に硬く締まる
5　10YR5/8黄褐色粘土　地山
6　10YR4/6褐色粘土　地山

陥し穴状遺構35
1　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや強
2　10YR5/3にぶい黄褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや強
3　10YR6/6明黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まり強　地山

陥し穴状遺構6
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　基層
2　10YR7/8黄橙色パミス　粘性なし　締まり中～やや密　To-Cu二次堆積層
3　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
4　10YR3/3暗褐色　粘性やや弱　締まりやや疎
5　10YR3/4明褐色シルト　粘性やや疎　締まりやや疎に10YR5/6黄橙色粘土質シルト
6　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎に10YR6/6黄褐色粘土質シルトブロックを混入　人為的な埋め戻しも多いが逆茂木設置痕の可能性あり
7　10YR6/明黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱～中　締まりやや密　地山
8　10YR7/4にぶい黄橙色粘土　粘性やや密　締まりやや密　地山
9　10YR7/6明黄褐色粘土　粘性やや強　締まりやや密　地山
10　10YR8/4浅黄褐色砂質シルト　粘性中　締まりやや密　地山

陥し穴状遺構7
1　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR6/8明黄褐色テフラ　粘性なし　締まり中　To-Cu二次堆積層
3　10YR3/4暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
4　10YR2/2黒褐色シルト(やや粘土質)　粘性やや弱～中　締まりやや疎　3層との互層で流入している
5　10YR4/6褐色粘土質シルト　粘性やや弱～中　締まりやや疎　3層が互層で流入する壁面崩落土層
6　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱～中　締まりやや疎　3層が互層で流入する壁面崩落土層
7　10YR3/4暗褐色粘土質シルト　粘性やや弱～中　締まりやや疎　10YR5/6黄褐色粘土質シルトが互層に堆積する初期流入土+崩落土層
8　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや強　締まりやや密　地山
9　10YR6/8明黄褐色粘土　粘性やや強　締まりやや密　地山
10　10YR8/3浅黄橙色粘土　粘性強　締まり密　地山

陥し穴状遺構8
1　10YR8/4浅黄橙色粘土質シルト　粘性中　締まり密　10YR6/6明黄褐色粘土質シルトの混合土　パイプライン建設時の盛土
2　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　旧表土層
3　10YR2/1黒色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
4　10YR2/1黒色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロックφ1㎝以下2～3%散在
5　10YR4/4褐色粘土質シルト　粘性やや弱～中　締まりやや疎　壁面崩落土1
6　10YR4/6褐色粘土質シルト　粘性中　締まりやや疎　壁面崩落土2
7　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
8　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　基層
9　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性中　締まりやや密　地山
10　10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト　粘性中　締まりやや密　地山
11　10YR8/4浅黄橙色粘土　粘性やや強　締まりやや密　地山

陥し穴状遺構9
1　10YR2/3黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
2　10YR3/3暗褐色シルト　粘性なし　締まりやや疎　主体に10YR6/8明黄褐色テフラ(To-Cu二次堆積層)を混入
3　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
4　10YR2/2黒褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎
5　10YR3/3暗褐色シルト　粘性やや弱　締まりやや疎　主体に10YR5/6黄褐色粘土質シルトを混入　壁面崩落土含む
6　10YR2/3黒褐色シルト主体に10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロックを20%散在　壁面崩落土含む
7　10YR5/6黄褐色粘土質シルト　粘性やや弱　締まりやや密　地山
8　10YR8/4浅黄橙色粘土　粘性やや強　締まりやや密　地山

0　1:60　2m

第23図　陥し穴状遺構23・28・33・35、6～9

陥し穴状遺構 28（第 23 図、写真図版 34）

南区南東端のX＝-73773、Y＝26104 付近に位置し、溝 25 に切られる。規模･形状は、長さ 1.36 m、幅 1.1 mの方形、深さは 0.61 mである。出土遺物はないが、堆積状況と同形状遺構の年代から縄文時代早期もしくはそれ以前の遺構と考えられる。

陥し穴状遺構 33（第 23 図、写真図版 34）

南区中央のX＝-73744、Y＝26075 付近に位置する。規模・形状は、長さ 1.45 m、幅 1.08 mの方形、深さは 0.7 mである。埋土上位から 123 篦状石器、埋土下位から剥片 1 点を出土したが詳細な時期は特定できない。堆積状況と同形状遺構の年代から縄文時代早期もしくはそれ以前の遺構と考えられる。

陥し穴状遺構 35（第 23 図、写真図版 34）

南区南東側のX＝-73764、Y＝26097 付近に位置する。規模・形状は、長さ 1.23 m、幅 0.95 mの方形、深さは 0.63 mである。埋土から剥片 1 点を出土したが詳細な時期は特定できない。堆積状況と同形状遺構の年代から縄文時代早期もしくはそれ以前の遺構と考えられる。

〈円形基調〉

陥し穴状遺構６（第 23 図、写真図版 35）

中央区中央北側のX＝-73649、Y＝26106 付近に位置する。規模・形状は、長さ 1.48 m、幅 1.32 mの楕円形、深さは 1.3 mである。底面に、長さ 0.28 m、幅 0.22 m、深さ 0.25 mの副穴を 1 個伴う。２層中に、To-Cu テフラを二次堆積する。埋土中位から、早期後葉の薄手の縄文土器片微量が出土していること、埋土上位に To-Cu テフラを二次堆積することから、前期初頭～前葉には廃絶していた遺構と考えられる。

陥し穴状遺構７（第 23 図、写真図版 35）

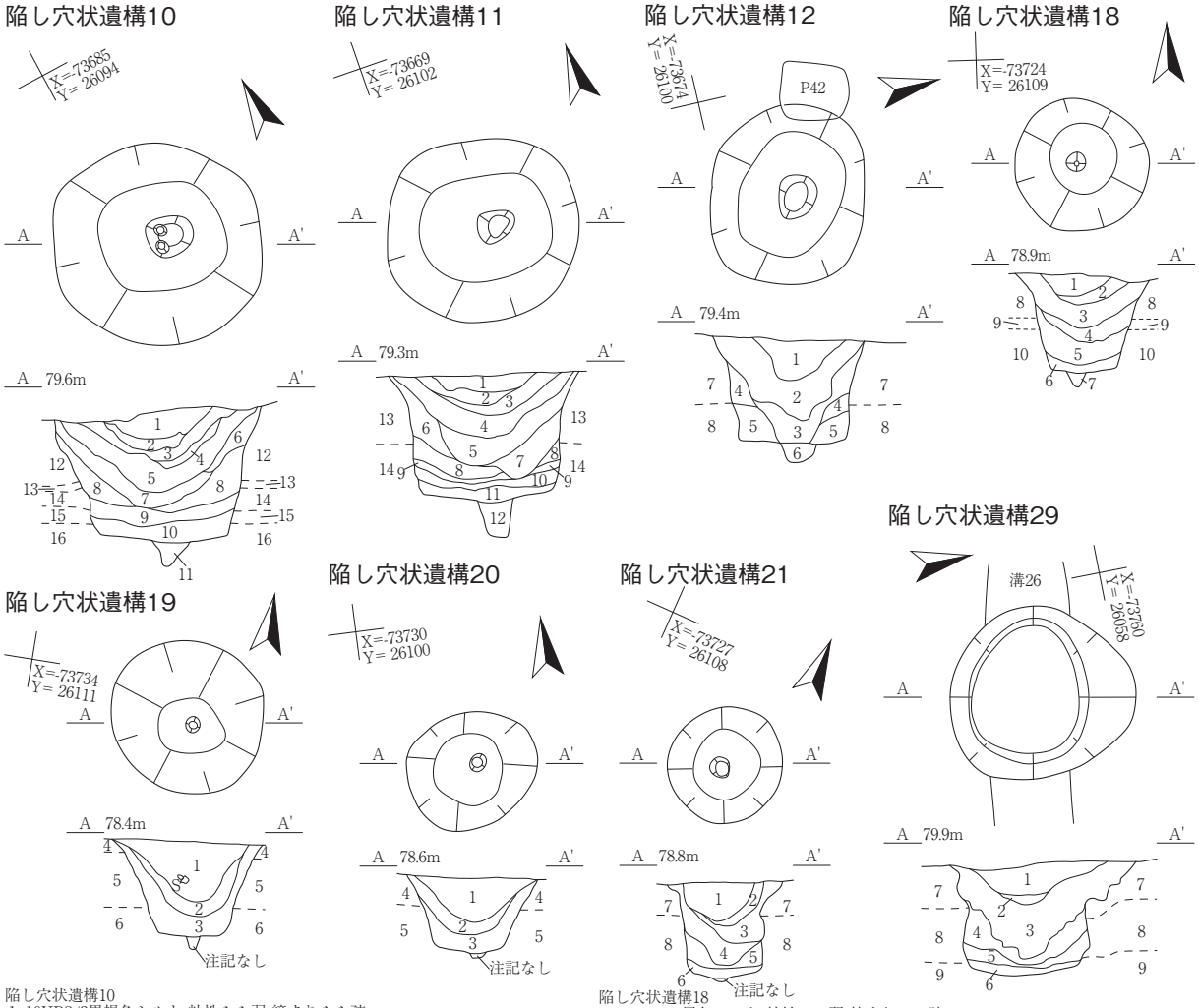
中央区中央南端のX＝-73705、Y＝26083 付近に位置する。規模・形状は、長さ 1.98 m、幅 1.86 mの円形、深さは 1.08 mである。２層中に、To-Cu テフラを二次堆積する。埋土上～中位から後期前葉～中葉の土器片微量、特殊磨石２点、剥片 20 点が出土しており、また埋土上位には To-Cu テフラを二次堆積することから、前期初頭～前葉には廃絶していた遺構と考えられる。

陥し穴状遺構８（第 23 図、写真図版 35）

中央区南東端のX＝-73708、Y＝26084 付近に位置する。規模・形状は、残存値で長さ 0.96 m、幅（0.75）mの円形、深さは 1.21 mである。埋土上～中位から、前期前葉の土器片微量と剥片３点が出土しており、該期には埋没した遺構と考えられる。

陥し穴状遺構９（第 23 図、写真図版 35）

中央区南東側のX＝-73682、Y＝26094 付近に位置する。規模・形状は、長さ 1.68 m、幅 1.48 mの円形、深さは 0.85 mである。２層中に、To-Cu テフラを二次堆積する。埋土から、早期後葉の薄手の縄文土器片微量と二次加工ある剥片 1 点が出土しており、埋土上位に To-Cu テフラを二次堆積することから、前期初頭～前葉には廃絶していた遺構と考えられる。



陷し穴状遺構10
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 下が10YR6/8明黄褐色、上が10YR7/4にぶい黄橙色To-Cuテフラ二次堆積層 粘性なし 締まりやや疎～中
3 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
7 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
8 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 壁面崩落土
9 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 壁面崩落土
11 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 副穴
12 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
13 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山
14 10YR6/8明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 地山
15 10YR7/8黄橙色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山
16 10YR8/4浅黄橙色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山

陷し穴状遺構11
1 下層が10YR7/8黄橙色、上層が10YR6/4にぶい黄橙色To-Cuテフラ二次堆積層 粘性なし 締まりやや弱
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎と10YR4/4褐色シルトの混合土
7 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎と10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合土
8 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁面崩落土
9 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁面崩落土
11 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 初期堆積土
12 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや強 締まり弱 炭化物粒φ1mmを1%、地山粘土質シルト10%を霜状に混入
13 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
14 10YR8/6黄橙色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山

陷し穴状遺構12
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 と10YR4/6褐色シルトの互層
4 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色粘土質シルトの互層　壁面崩落土を含む
6 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 副穴
7 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
8 10YR7/6明黄褐色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山

陷し穴状遺構18
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 崩落土
6 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
7 10YR4/4褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 副穴
8 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
9 10YR6/8明黄褐色パミス 粘性やや弱～弱 締まりやや密 地山
10 10YR8/4浅黄橙色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山

陷し穴状遺構19
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR4/4褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや疎
3 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まり中
4 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや強 地山
5 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性やや強 締まり密 地山
6 10YR8/4浅黄橙色粘土 粘性強 締まり密 地山

陷し穴状遺構20
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR4/4褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中
4 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
5 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性やや強 締まり密 地山

陷し穴状遺構21
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/4暗褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり中
3 10YR3/3暗褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中
4 10YR3/2黒褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中
5 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中
6 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 初期堆積土
7 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
8 10YR8/4浅黄橙色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山

陷し穴状遺構29
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR6/6明黄褐色テフラ 粘性弱 締まりやや疎 To-Cuテフラ二次堆積層
3 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり中 崩落土
5 10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルト 粘性中 締まり中に10YR3/3暗褐色シルトを筋状に混入　粘性やや弱　しまり中　崩落土
6 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 初期堆積土
7 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
8 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
9 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山

0　1:60　2m

第24図　陷し穴状遺構10～12、18～21、29

陥し穴状遺構 10（第 24 図、写真図版 36）

中央区南東側のＸ＝-73685、Ｙ＝26094 付近に位置する。規模・形状は、長さ 1.66 m、幅 1.64 m の略円形、深さは 1.08 mである。底面に、長さ 0.38 m、幅 0.33 m、深さ 0.2 mの副穴を 1 個伴う。２層中に、To-Cu テフラを二次堆積する。埋土上位から、早期中葉の土器片少量、144 スクレイパー類、微細剥離痕ある剥片 1 点、石核 1 点、剥片 25 点を出土しており、また埋土上位に To-Cu テフラを二次堆積することから、前期初頭～前葉には廃絶していた遺構と考えられる。

陥し穴状遺構 11（第 24 図、写真図版 36）

中央区南東側のＸ＝-73669、Ｙ＝26102 付近に位置する。規模・形状は、長さ 1.58 m、幅 1.47 m の略円形、深さは 1.0 mである。底面に、長さ 0.32 m、幅 0.25 m、深さ 0.28 mの副穴を 1 個伴う。１層中に、To-Cu テフラを二次堆積する。出土遺物はないが、埋土上位に To-Cu テフラを二次堆積すること、同形状の周辺遺構の年代から前期初頭～前葉には廃絶していた遺構と考えられる。

陥し穴状遺構 12（第 24 図、写真図版 36）

中央区南東側のＸ＝-73674、Ｙ＝26100 付近に位置する。P42 と重複し切られる。規模・形状は、長さ 1.46 m、幅 1.23 mの楕円形、深さは 0.82 mである。底面に、長さ 0.37 m、幅 0.32 m、深さ 0.16 mの副穴を 1 個伴う。埋土から剥片 1 点を出土しているが時期は特定できない。同形状の周辺遺構の年代から前期初頭～前葉には廃絶していた遺構と考えられる。

陥し穴状遺構 18（第 24 図、写真図版 37）

南区北東側のＸ＝-73724、Ｙ＝26109 付近に位置する。規模・形状は、長さ 1.08 m、幅 1.07 mの円形、深さは 0.78 mである。底面に、長さ 0.16 m、幅 0.15 m、深さ 0.11 mの副穴を 1 個伴う。埋土から剥片 4 点を出土しているが時期は特定できない。同形状の周辺遺構の年代から前期初頭～前葉には廃絶していた遺構と考えられる。

陥し穴状遺構 19（第 24 図、写真図版 37）

南区中央東側のＸ＝-73734、Ｙ＝26111 付近に位置する。規模・形状は、長さ 1.24 m、幅 1.22 m の円形、深さは 0.76 mである。底面に、長さ 0.12 m、幅 0.11 m、深さ 0.1 mの副穴を 1 個伴う。出土遺物はないが、同形状の周辺遺構の年代から前期初頭～前葉には廃絶していた遺構と考えられる。

陥し穴状遺構 20（第 24 図、写真図版 37）

南区北東側のＸ＝-73730、Ｙ＝26100 付近に位置する。規模・形状は、長さ 1.05 m、幅 0.93 mの略円形、深さは 0.58 mである。底面に、長さ 0.15 m、幅 0.12 m、深さ 0.03 mの副穴を 1 個伴う。埋土から剥片 3 点を出土しているが時期は特定できない。同形状の周辺遺構の年代から前期初頭～前葉には廃絶していた遺構と考えられる。

陥し穴状遺構 21（第 24 図、写真図版 38）

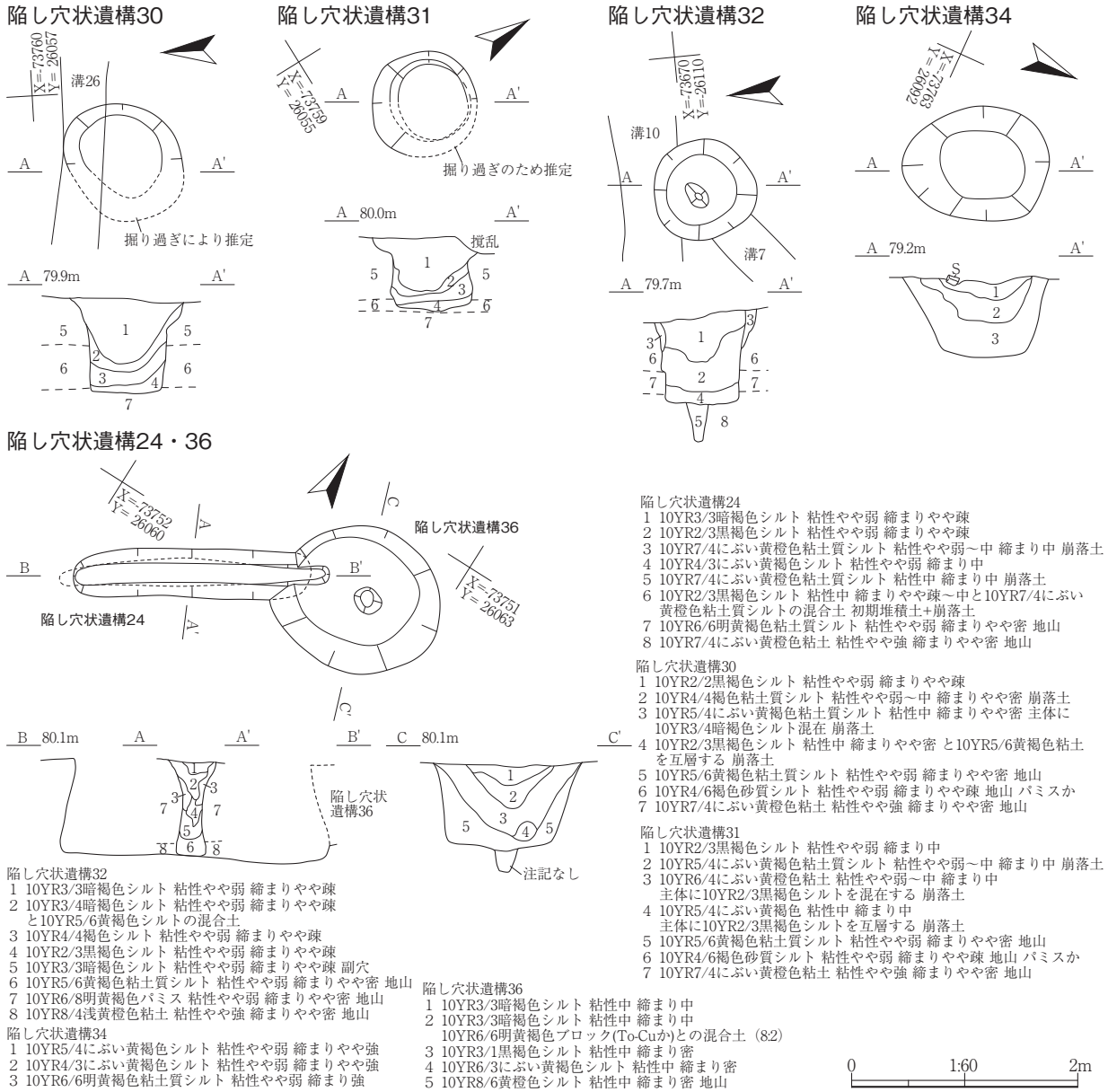
南区北東側のＸ＝-73727、Ｙ＝26108 付近に位置する。規模・形状は、長さ 0.94 m、幅 0.93 mの円形、深さは 0.74 mである。底面に、長さ 0.17 m、幅 0.16 m、深さ 0.02 mの副穴を 1 個伴う。出土遺物はないが、同形状の周辺遺構の年代から前期初頭～前葉の遺構と考えられる。

陥し穴状遺構 29（第 24 図、写真図版 38）

南区南西側のX＝-73760、Y＝26058 付近に位置し、溝 26 に切られる。規模・形状は、長さ 1.49 m、幅 1.4 mの略円形、深さは 0.89 mである。２層中に、To-Cu テフラを二次堆積する。埋土上位から、スクレイパー類１点が出土しているが時期は特定できない。埋土上位に To-Cu テフラを二次堆積することから、前期初頭～前葉には廃絶していた遺構と考えられる。

陥し穴状遺構 30（第 25 図、写真図版 38）

南区南西側のX＝-73760、Y＝26057 付近に位置し、溝 26 に切られる。規模・形状は、推定値で長さ〈1.04〉m、幅 1.02 mの略円形、深さは 0.84 mである。出土遺物はないが、同形状の周辺遺構の年代から前期初頭～前葉の遺構と考えられる。



第 25 図　陥し穴状遺構 24・30～32・34・36

陥し穴状遺構 31（第 25 図、写真図版 38）

南区南西側のＸ＝-73759、Ｙ＝26055 付近に位置する。規模・形状は、推定値で長さ〈0.94〉ｍ、幅〈0.93〉ｍの円形、深さは 0.6 ｍである。出土遺物はないが、同形状の周辺遺構の年代から前期初頭～前葉の遺構と考えられる。

陥し穴状遺構 32（第 25 図、写真図版 39）

中央区南西側のＸ＝-73670、Ｙ＝26110 付近に位置し、溝７・10 に切られる。規模・形状は、長さ 0.9 ｍ、幅 0.89 ｍの円形、深さは 0.8 ｍである。底面に、長さ 0.26 ｍ、幅 0.16 ｍ、深さ 0.33 ｍの副穴を１個伴う。出土遺物はないが、同形状の周辺遺構の年代から前期初頭～前葉の遺構と考えられる。

陥し穴状遺構 34（第 25 図、写真図版 39）

南区中央南側のＸ＝-73763、Ｙ＝26092 付近に位置する。規模・形状は、長さ 1.3 ｍ、幅 1.02 ｍの楕円形、深さは 0.68 ｍである。埋土上位から、剥片４点が出土しているが所属時期は特定できないが、同形状の周辺遺構の年代から前期初頭～前葉の遺構と考えられる。

陥し穴状遺構 36（第 25 図、写真図版 39）

南区中央西側のＸ＝-73751、Ｙ＝26063 付近に位置し、陥し穴状遺構 24 に切られる。規模・形状は、推定値で長さ〈1.5〉ｍ、幅 1.31 ｍの楕円形、深さは 0.71 ｍである。底面に、長さ 0.25 ｍ、幅 0.24 ｍ、深さ 0.18 ｍの副穴を１個伴う。２層中に、To-Cu テフラと考えられる堆積が認められる。副穴埋土から剥片１点を出土しているが時期は特定できない。埋土上位に To-Cu テフラと考えられる明黄褐色ブロックが堆積することから、前期初頭～前葉には廃絶していた遺構と考えられる。

〈溝状基調〉

陥し穴状遺構１（第 26 図、写真図版 40）

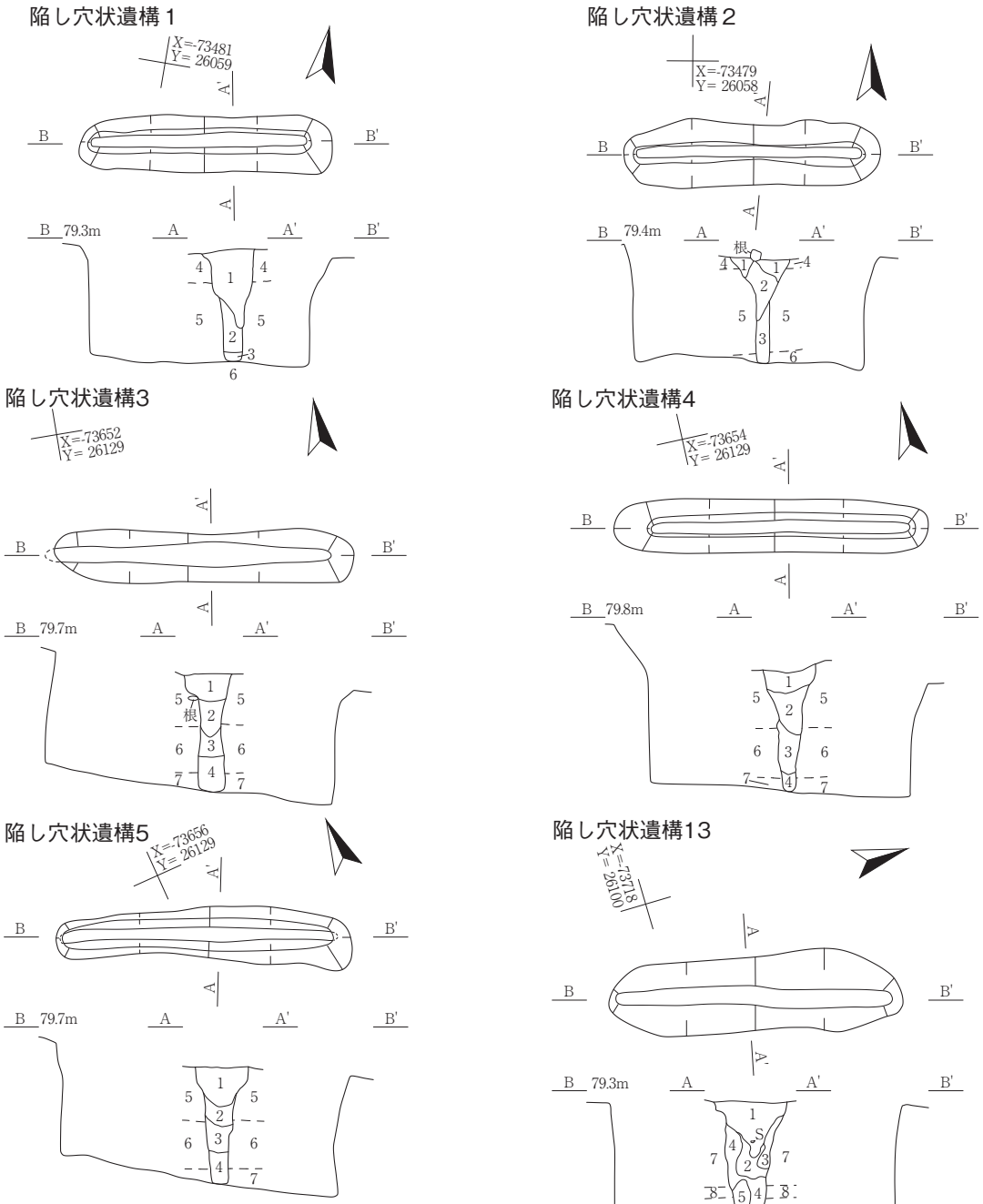
北区北東側のＸ＝-73481、Ｙ＝26059 付近に位置し、陥し穴状遺構２と隣接する。規模・形状は、長さ 2.21 ｍ、幅 0.5 ｍの溝状、深さは 0.98 ｍである。出土遺物はないが、前期初頭～前葉までに廃絶していた円形基調の陥し穴状遺構を切る出土例と晩期前葉の土坑に切られる出土例、埋土中に To-Cu テフラを堆積しないことから、これよりも新しい中～後期の遺構と推定される。

陥し穴状遺構２（第 26 図、写真図版 40）

北区北東側のＸ＝-73479、Ｙ＝26058 付近に位置し、陥し穴状遺構１と隣接する。規模・形状は、長さ 2.23 ｍ、幅 0.54 ｍの溝状、深さは 0.92 ｍである。埋土中位から、早期中葉の土器片微量を出土している。また、前期初頭～前葉までに廃絶していた円形基調の陥し穴状遺構を切る出土例と晩期前葉の土坑に切られる出土例、埋土中に To-Cu テフラを堆積しないことから、これよりも新しい中～後期の遺構と推定される。

陥し穴状遺構３（第 26 図、写真図版 40）

中央区北東端のＸ＝-73652、Ｙ＝26129 付近に位置し、陥し穴状遺構４・５と隣接する。規模・形状は、長さ 2.58 ｍ、幅 0.48 ｍの溝状、深さは 1.03 ｍである。埋土中位から、前期末葉と考えられる 53 深鉢片と同時期の土器片少量を出土している。また、前期初頭～前葉までに廃絶していた円形基



陷し穴状遺構1
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎～中 地山
5 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中 下部に村崎野パミス 地山
6 10YR6/2灰黄褐色粘土 粘性強 締まりやや密 地山

陷し穴状遺構2
1 10YR3/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/3黒褐色シルトと10YR4/6褐色粘土質シルトの混合 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR4/6褐色シルトに5層が少量散在 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎～中 地山
5 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中 下部に村崎野パミス 地山
6 10YR6/2灰黄褐色粘土 粘性強 締まりやや密 地山

陷し穴状遺構3
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/4暗褐色シルトと10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合土 粘性やや弱
締まりやや疎
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 崩落土
4 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロックφ5cmを1～2%散在
5 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘中 締まりやや密 地山
6 10YR8/4浅黄橙色パミス(焼石か) 粘性なし 締まり中～やや密 地山亜
7 10YR8/6黄橙色粘土 粘性やや強 締まり密 地山

0　1:60　2m

陷し穴状遺構4
1 10YR4/4褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR6/8明黄褐色粘土質シルト 粘中 締まりやや疎 壁面崩落土層
4 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 初期堆積土
5 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘中 締まりやや密 地山
6 10YR8/4浅黄橙色パミス(焼石か) 粘性なし 締まり中～やや密 地山
7 10YR8/6黄橙色粘土 粘性やや強 締まり密 地山

陷し穴状遺構5
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR5/6黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 壁面崩落土層
4 10YR3/4暗褐色シルト 粘やや弱 締まりやや疎
5 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘中～やや疎 締まりやや密 地山
6 10YR8/4浅黄橙色砂質シルトとパミス 粘性なし 締まりやや密 地山
7 10YR8/3浅黄橙色砂質シルト 粘土 粘性やや強 締まり密 地山

陷し穴状遺構13
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中と
10YR5/6黄褐色粘土質シルトの混合土 崩落土
3 10YR4/4褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 崩落土
4 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密
5 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 根撹乱
6 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 初期堆積土
7 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
8 10YR7/8黄橙色パミス 粘性やや弱 締まりやや密 地山
9 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山

第26図　陷し穴状遺構１～５、13

調の陥し穴状遺構を切る出土例と晩期前葉の土坑に切られる出土例、埋土中に To-Cu テフラを堆積しないことから、これよりも新しい中～後期の遺構と推定される。

陥し穴状遺構４（第 26 図、写真図版 40）

中央区北東端のＸ＝-73654、Ｙ＝26129 付近に位置し、陥し穴状遺構３・５と隣接する。規模・形状は、長さ 2.72 m、幅 0.48 mの溝状、深さは 1.03 mである。埋土中位から、縄文土器片を微量出土しているが所属時期は特定できない。前期初頭～前葉までに廃絶していた円形基調の陥し穴状遺構を切る出土例と晩期前葉の土坑に切られる出土例、埋土中に To-Cu テフラを堆積しないことから、これよりも新しい中～後期の遺構と推定される。

陥し穴状遺構５（第 26 図、写真図版 41）

中央区北東端のＸ＝-73656、Ｙ＝26129 付近に位置し、陥し穴状遺構３・４と隣接する。規模・形状は、長さ 2.56 m、幅 0.45 mの溝状、深さは 1.02 mである。出土遺物はないが、前期初頭～前葉までに廃絶していた円形基調の陥し穴状遺構を切る出土例と晩期前葉の土坑に切られる出土例、埋土中に To-Cu テフラを堆積しないことから、これよりも新しい中～後期の遺構と推定される。

陥し穴状遺構 13（第 26 図、写真図版 41）

南区北東側のＸ＝-73718、Ｙ＝26100 付近に位置する。規模・形状は、長さ 2.55 m、幅 0.65 mの溝状、深さは 1.0 mである。埋土から後晩期の土器片少量のほか、141 スクレイパー類、165 石核、石鏃２点、篦状石器２点、二次加工ある剥片１点、剥片 24 点が出土している。また、前期初頭～前葉までに廃絶していた円形基調の陥し穴状遺構を切る出土例と晩期前葉の土坑に切られる出土例、埋土中に To-Cu テフラを堆積しないことから、これよりも新しい中～後期の遺構と推定される。

陥し穴状遺構 14（第 27 図、写真図版 41）

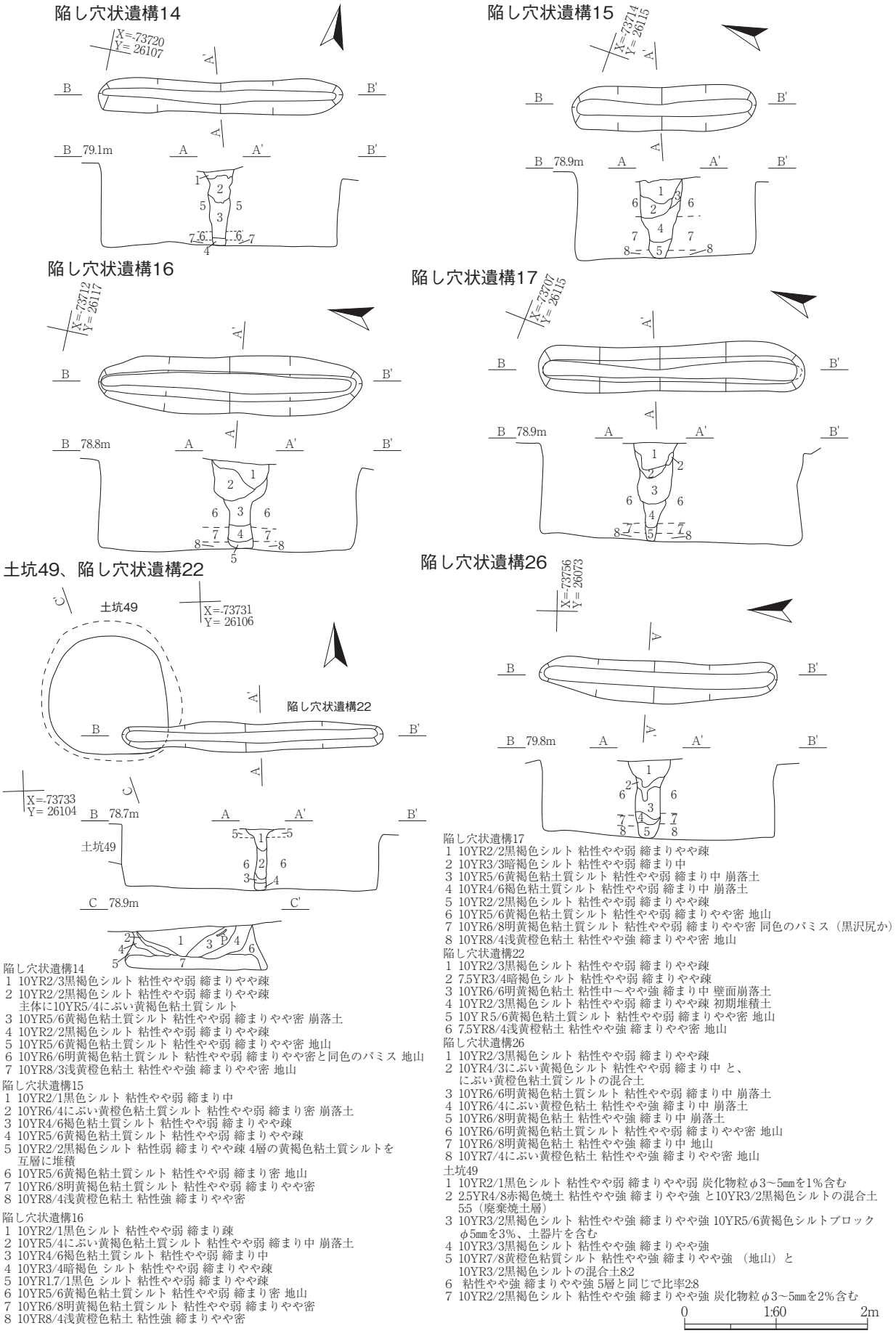
南区北東側のＸ＝-73720、Ｙ＝26107 付近に位置する。規模・形状は、長さ 2.67 m、幅 0.33 mの溝状、深さは 0.83 mである。埋土から、早期後葉の土器片少量、剥片３点が出土している。また、前期初頭～前葉までに廃絶していた円形基調の陥し穴状遺構を切る出土例と晩期前葉の土坑に切られる出土例、埋土中に To-Cu テフラを堆積しないことから、これよりも新しい中～後期の遺構と推定される。

陥し穴状遺構 15（第 27 図、写真図版 41）

南区北東端のＸ＝-73714、Ｙ＝26115 付近に位置する。規模・形状は、長さ 2.02 m、幅 0.48 mの溝状、深さは 0.87 mである。埋土上位から、篦状石器１点、剥片４点が出土しているが所属時期は特定できない。早期後葉の土器片少量が出土している。また、前期初頭～前葉までに廃絶していた円形基調の陥し穴状遺構を切る出土例と晩期前葉の土坑に切られる出土例、埋土中に To-Cu テフラを堆積しないことから、これよりも新しい中～後期の遺構と推定される。

陥し穴状遺構 16（第 27 図、写真図版 42）

南区北東端のＸ＝-73712、Ｙ＝26117 付近に位置する。規模・形状は、長さ 2.87 m、幅 0.65 mの溝状、深さは 0.93 mである。出土遺物はないが、前期初頭～前葉までに廃絶していた円形基調の陥



陷し穴状遺構14
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
主体に10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 崩落土
4 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
6 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密と同色のパミス 地山
7 10YR8/3浅黄橙色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山

陷し穴状遺構15
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まり中
2 10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり密 崩落土
3 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
4 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR2/2黒褐色シルト 粘性弱 締まりやや疎 4層の黄褐色粘土質シルトを
互層に堆積
6 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり密 地山
7 10YR6/8明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密
8 10YR8/4浅黄橙色粘土 粘性強 締まりやや密

陷し穴状遺構16
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まり疎
2 10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 崩落土
3 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中
4 10YR3/4暗褐色 シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
5 10YR1.7/1黒色 シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり密 地山
7 10YR6/8明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密
8 10YR8/4浅黄橙色粘土 粘性強 締まりやや密

陷し穴状遺構17
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 崩落土
4 10YR4/6褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 崩落土
5 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
6 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
7 10YR6/8明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 同色のパミス（黒沢尻か）
8 10YR8/4浅黄橙色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山

陷し穴状遺構22
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 7.5YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性中～やや強 締まり中 壁面崩落土
4 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 初期堆積土
5 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
6 7.5YR8/4浅黄橙粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山

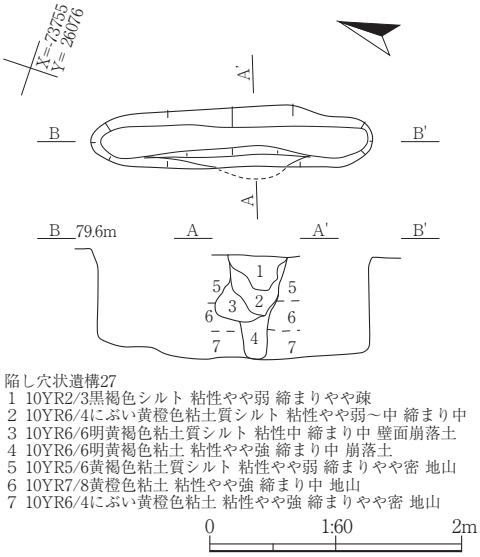
陷し穴状遺構26
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 と、
にぶい黄橙色粘土質シルトの混合土
3 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まり中 崩落土
4 10YR6/4にぶい黄橙色粘土 粘性やや強 締まり中 崩落土
5 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性やや強 締まり中 崩落土
6 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
7 10YR6/8明黄褐色粘土 粘性やや強 締まり中 地山
8 10YR7/4にぶい黄橙色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山

土坑49
1 10YR2/1黒色シルト 粘性やや弱 締まりやや弱 炭化物粒φ3～5㎜を1％含む
2 2.5YR4/8赤褐色焼土 粘性やや強 締まりやや強 と10YR3/2黒褐色シルトの混合土
5:5（廃棄焼土層）
3 10YR3/2黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや強 10YR5/6黄褐色シルトブロック
φ5㎜を3％、土器片を含む
4 10YR3/3黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや強
5 10YR7/8黄橙色粘質シルト 粘性やや強 締まりやや強 （地山）と
10YR3/2黒褐色シルトの混合土8:2
6 粘性やや強 締まりやや強 5層と同じで比率2:8
7 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや強 締まりやや強 炭化物粒φ3～5㎜を2％含む

第27図　陷し穴状遺構14～17・22・26、土坑49

し穴状遺構を切る出土例と晩期前葉の土坑に切られる出土例、埋土中に To-Cu テフラを堆積しないことから、これよりも新しい中～後期の遺構と推定される。

陷し穴状遺構27



陷し穴状遺構27
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルト 粘性やや弱～中 締まり中
3 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まり中 壁面崩落土
4 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性やや強 締まり中 崩落土
5 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
6 10YR7/8黄橙色粘土 粘性やや強 締まり中 地山
7 10YR6/4にぶい黄橙色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山

第 28 図　陷し穴状遺構 27

陷し穴状遺構 17（第 27 図、写真図版 42）

南区北東端の X＝-73707、Y＝26115 付近に位置する。規模・形状は、長さ 2.9 m、幅 0.55 mの溝状、深さは 1.08 mである。埋土から、166・167 石核、篦状石器 1 点が出土しているが所属時期は特定できない。前期初頭～前葉までに廃絶していた円形基調の陷し穴状遺構を切る出土例と晩期前葉の土坑に切られる出土例、埋土中に To-Cu テフラを堆積しないことから、これよりも新しい中～後期の遺構と推定される。

陷し穴状遺構 22（第 27 図、写真図版 42）

南区北東側の X＝-73731、Y＝26106 付近に位置し、土坑 49 に切られる。規模・形状は、長さ 2.85 m、幅 0.33 mの溝状、深さは 0.67 mである。出土遺物はないが、晩期前葉と考えられる土坑 49 に切られること、前期初頭～前葉までに廃絶していた円形基調の陷し穴状遺構を切る出土例、埋土中に To-Cu テフラを堆積しないことから、中～後期の遺構と推定される。

陷し穴状遺構 24（第 25 図、写真図版 42）

南区中央西側の X＝-73752、Y＝26060 付近に位置し、陷し穴状遺構 36 を切る。規模・形状は、残存値で長さ（2.27）m、幅 0.45 mの溝状、深さは 0.83 mである。出土遺物はないが、前期初頭～中葉には廃絶していた陷し穴状遺構 36 を切ること、晩期前葉の土坑に切られる出土例、埋土中に To-Cu テフラを堆積しないことから、中～後期の遺構と推定される。

陷し穴状遺構 25（第 20 図、写真図版 27）

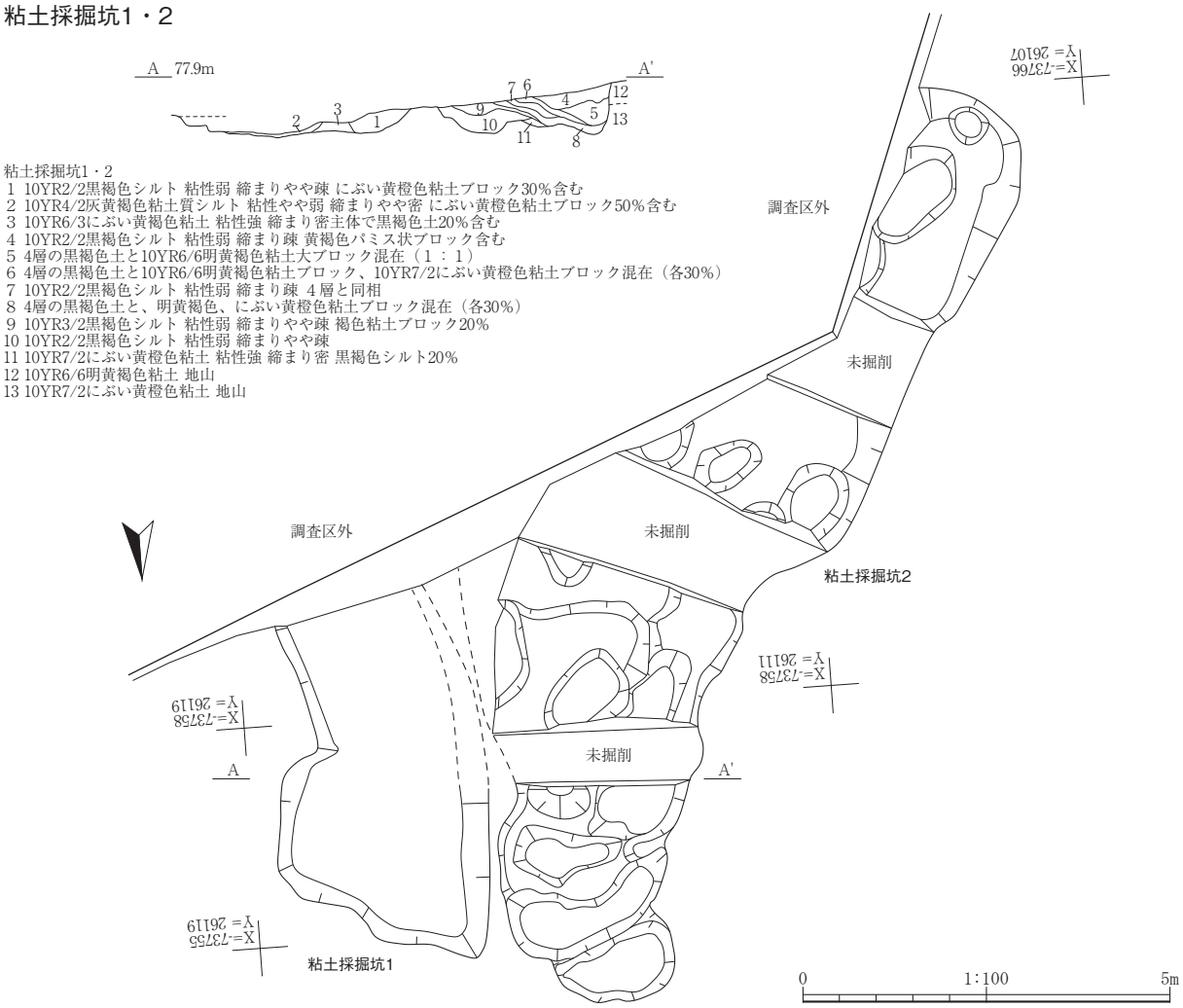
南区中央西側の X＝-73750、Y＝26059 付近に位置し、土坑 73 に切られる。また、陷し穴状遺構 24 と隣接する。規模・形状は、残存値で長さ 2.62 m、幅 0.75 mの溝状、深さは 0.98 mである。出土遺物はないが、晩期前葉の土器を出土する土坑 73 に切られ、埋土中に To-Cu テフラを堆積しないことから、中～後期の遺構と推定される。

陷し穴状遺構 26（第 27 図、写真図版 43）

南区中央の X＝-73756、Y＝26073 付近に位置し、陷し穴状遺構 27 と隣接する。規模・形状は、長さ 2.58 m、幅 0.46 mの溝状、深さは 0.85 mである。出土遺物はないが、前期初頭～前葉までに廃絶していた円形基調の陷し穴状遺構を切る出土例と晩期前葉の土坑に切られる出土例、埋土中に To-Cu テフラを堆積しないことから、中～後期の遺構と推定される。

陷し穴状遺構 27（第 28 図、写真図版 43）

南区中央の X＝-73755、Y＝26076 付近に位置し、陷し穴状遺構 26 と隣接する。規模・形状は、長さ 2.23 m、幅 0.49 mの溝状、深さは 0.82 mである。出土遺物はないが、前期初頭～前葉までに廃



第29図　粘土採掘坑１・２

絶していた円形基調の陥し穴状遺構を切る出土例と晩期前葉の土坑に切られる出土例、埋土中にTo-Cuテフラを堆積しないことから、中～後期の遺構と推定される。（北田）

（7）粘 土 採 掘 坑

粘土採掘坑１・２（第29図、写真図版55）

南区南東側のX＝-73755～-73766、Y＝26107～26119の間に位置し、南側は調査範囲外へ延びる。規模・形状は、粘土採掘坑１が残存値で長さ（5.1）m、幅2.9 mの不整形、深さは0.25 mである。粘土採掘坑２は残存値で長さ13.1 m、幅（3.25）mの不整形、深さは0.6 mである。粘土採掘坑１の底面は凹凸が少ないが、粘土採掘坑２は底面に複数の小土坑を伴っている。小土坑は重なり合っており、不規則に認められる。遺構底面には明黄褐色やにぶい黄橙色粘土が広がっていることから、良質な粘土を求めて掘削した結果と考えられる。４層には黄褐色パミス状ブロックを含んでおり、To-Cuテフラが混入していると考えられることから、前期初頭～中葉には廃絶していた遺構と推定される。出土遺物は、粘土採掘坑１の埋土から二次加工ある剥片１点、石核３点、剥片11点が出土している。また、粘土採掘坑２の埋土から108・112篦状石器、148二次加工ある剥片、164・168石核、180礫器、縄文のみ施文の土器片微量、篦状石器４点、楔形石器１点、スクレイパー類６点、二次加工ある剥片６点、石核１点、剥片46点、磨製石斧未成品１点、特殊磨石１点、磨石１点、敲石２点、凹石２点、石錘か１点、台石１点が出土している。（北田）

3　古代～中世

（1）概　　要

古代～中世は、竪穴状遺構１棟・曲輪１箇所を確認した。古代と考えられる竪穴状遺構は、南区南端から確認されているが、該期の遺物は出土しておらず詳細は不明である。また、中央区と南区の全体が中世の坊館跡の一部と考えられ、二子城に関連する曲輪の可能性がある。以下、遺構種別に記載する。

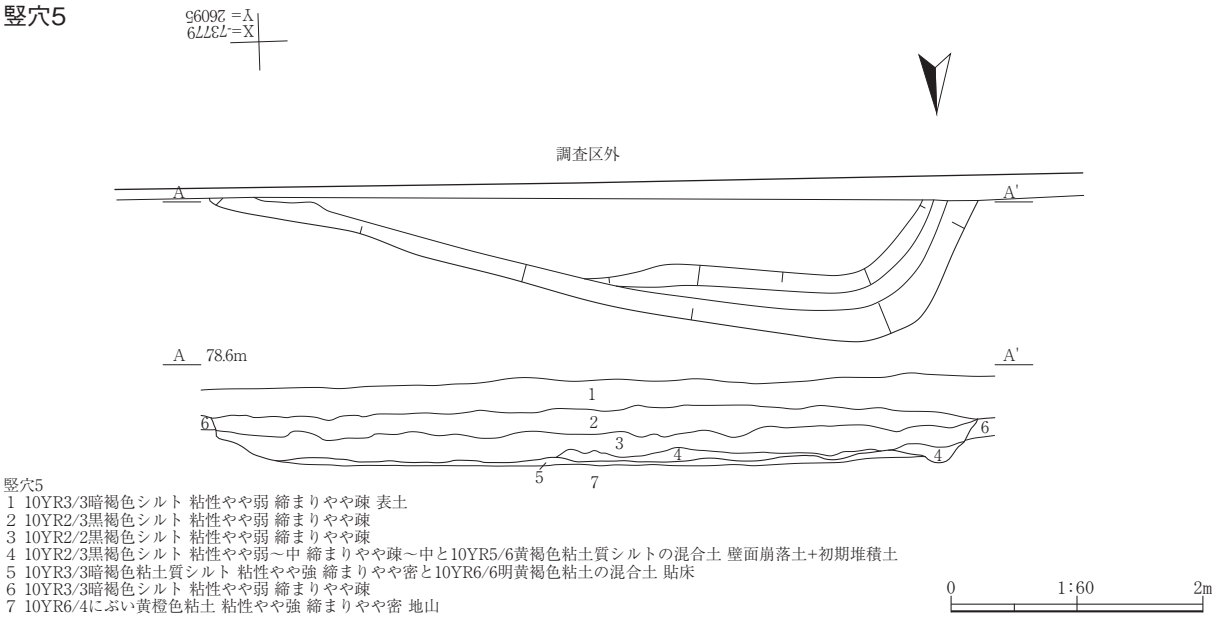
（2）竪穴状遺構

竪穴５（第30図、写真図版８）

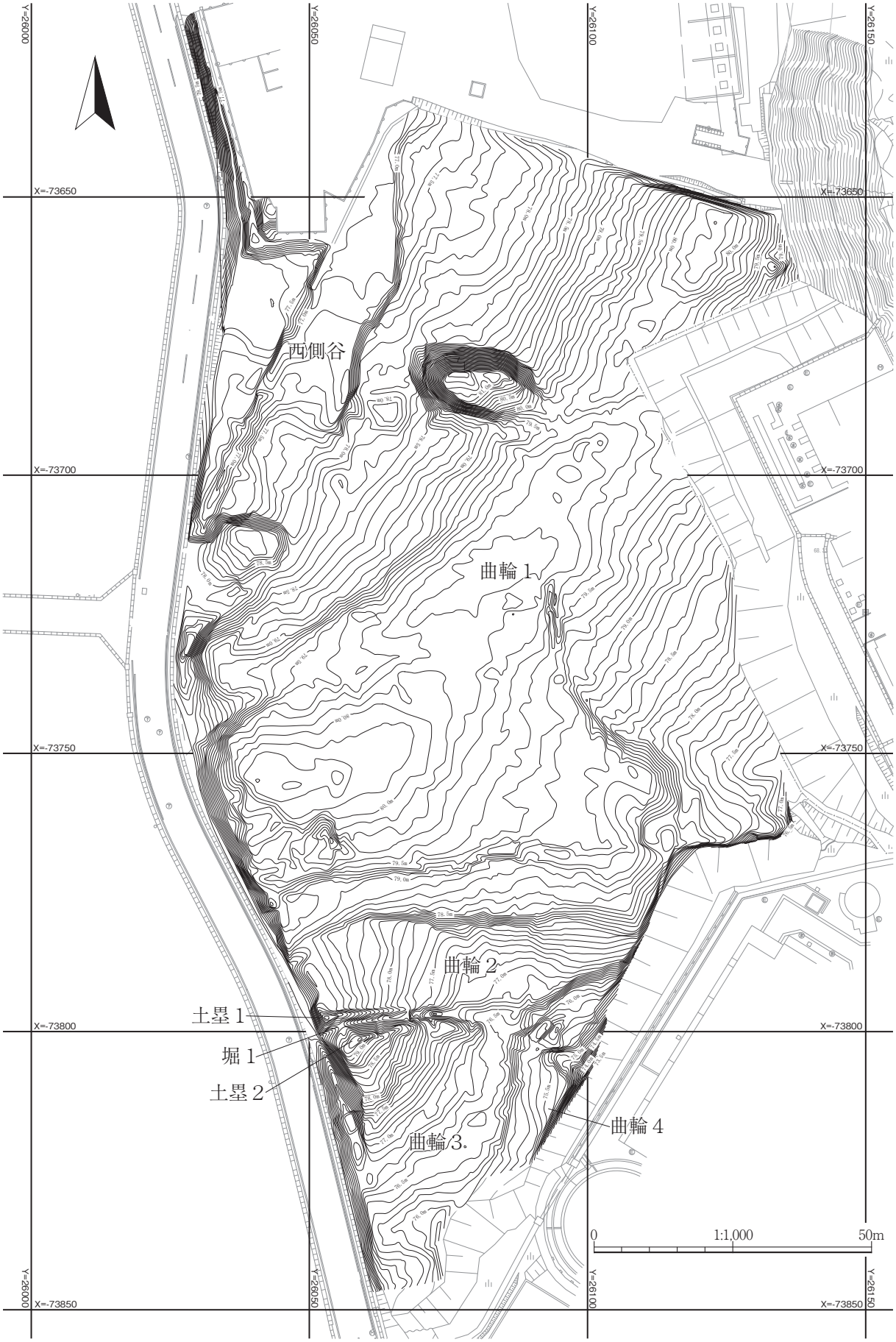
南区南端のＸ＝-73779、Ｙ＝26095付近に位置する。調査区境界の７層地山のにぶい黄橙色粘土上面で、方形と考えられる黒褐色プランを検出した。規模･形状は、残存値で長さ（6.1）ｍ、幅（1.13）ｍ、北辺の推定される長さは5.9ｍの方形を呈すると推定される。床面はほぼ平坦に構築されており、暗褐色粘土質シルトの貼床が６㎝程度敷設されている。調査区内の遺構の残存は良好で、北壁0.32ｍ、西壁0.3ｍで外傾しながら緩やかに立ち上がる形状であるが、南側の調査区外約１ｍ先は後世の削平によって急に落ち込んでおり、遺構も切られていると推定される。埋土は貼床も含めて計４層で構成されており、２～４層はいずれも黒褐色シルト主体である。５層は暗褐色粘土質シルトと明黄褐色粘土の混合土で構築されている。床面の北辺中央から西辺にかけて、壁溝が認められる。深さは７～８㎝程で、床面最下層と同じ埋土であることから、廃絶時は開口していたと見られる。

埋土から、186特殊磨石、192敲石、194凹石、晩期前葉の土器片少量、磨製石斧未成品１点、剥片14点が出土した。

出土は縄文時代の遺物のみであるが、形状から古代～中世の遺構の可能性がある。調査区南側に、中世と考えられる造成の影響を受けていることから考えると、古代の遺構と推定される。　　（北田）



第30図　竪穴５



第 31 図　現況等高線図（坊館推定範囲）

（３）城館に関連する遺構

曲輪１（第 31 図）

西側谷と東側の段丘崖に区切られた範囲を曲輪１とした。曲輪１は、北西から南東方向に延びる尾根上の丘陵を持ち、北西と南東方向に緩傾斜面を有する微地形で構成される。

現況では、北西側の緩傾斜面上に周囲の土を盛り上げたマウンドが存在するが、断ち割って確認したところ、現代に造成された残土山であることが分かった。また、南区南側に窪地や小規模の段が認められるが、これについても現代の造成による痕跡と考えられる。西側谷はトレンチ調査の結果、現地表面から約５m下がることが分かったが、堆積土のうち上部３～４mはおそらく昭和 40～50 年代のごく最近に埋め立てられたと考えられ、谷本来の堆積層は１m程度と見られる。また、現況で市道から約 30 m付近までは、タイヤやコンクリート片などの産業廃棄物が大量に投棄された痕跡が確認される。

調査区外の南側には、現況調査で曲輪２～４と考えられる平坦面と、曲輪２と曲輪３の間に東西に走る堀１、その南北両側に土塁１と土塁２を確認した。ただし、現代の造成の影響も少なくないことから、今後本調査が入れば変更されることも十分に考えられる。

曲輪１は、中世城館に関わる普請や作事の痕跡は確認されなかったが、近年の造成による影響も少なからず受けていると考えられる。中央区から南区にかけての調査範囲は、伝承では坊館跡と伝えられており、和賀氏の祖先が居城を更木から飛勢ケ森に移した時、坊館の場所に「正法寺」を建立し、和賀氏の祈祷所とされたとあるが、今回調査の検出面で捉えられる建物などの痕跡は認められなかった。しかし、坊館の範囲は北側の生コン工場跡地部分や調査区南側も残っていることも含めて、今後検討を要する。（北田）

４　中　世　以　降

（１）概　　要

中世以降は、溝跡 24 条・柱穴状ピット 110 個を確認した。溝跡の大半は時期を特定できる遺物を出土しておらず、堆積状況から中世以降としたが近現代までの広い時期幅を想定している。また、確認した柱穴状ピット 110 個は、近現代の桑畑など植栽痕の可能性もある。以下、遺構種別に記載する。

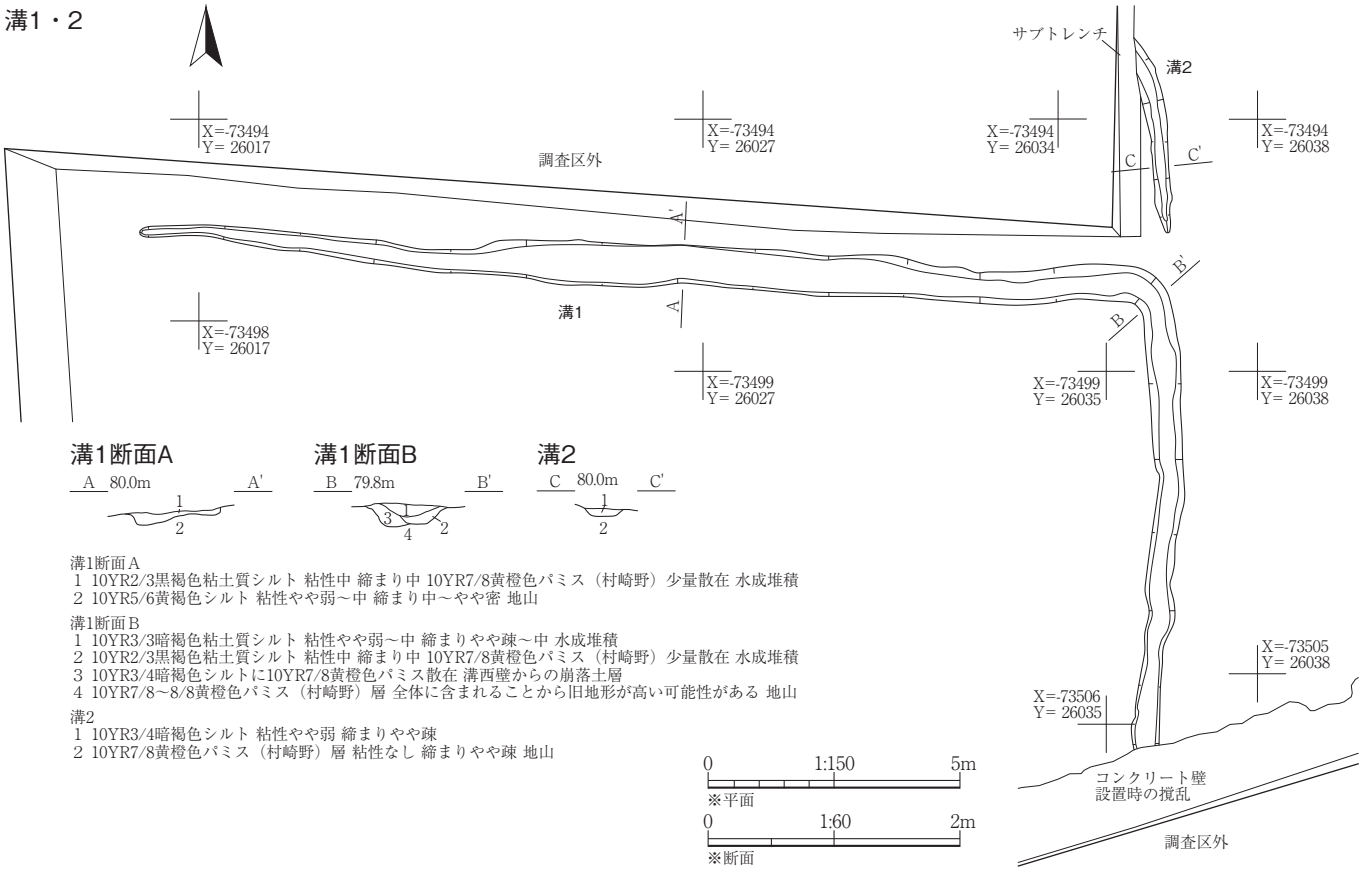
（２）溝　　跡

溝１（第 32 図、写真図版 43・44）

北区西側の X=-73496～-73506、Y=26016～26036 付近に位置するＬ字形に曲がる溝で、西側と南側は調査区外へ延びる。規模は、東西辺が約 20.0 m、南北辺が約 9.5 mの長さが残存しており、幅は 0.2～0.8 m、深さは 0.1～0.2 mである。底面標高は西端で 79.78 m、Ｌ字形に曲がる付近で 79.55 m、南端で 79.16 mと東側と南側に向かって下がる。溝の形状から区画溝と考えられるが、排水も兼ねた構造と考えられる。縄文土器片を少量出土しているが、細片のため時期は不明である。この他に時期を特定できる遺物は出土していないが、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝２（第 32 図、写真図版 44）

北区西側の X=-73492～-73497、Y=26035～26037 付近に位置する。溝１の屈曲部から北に延びる



第 32 図　溝１・２

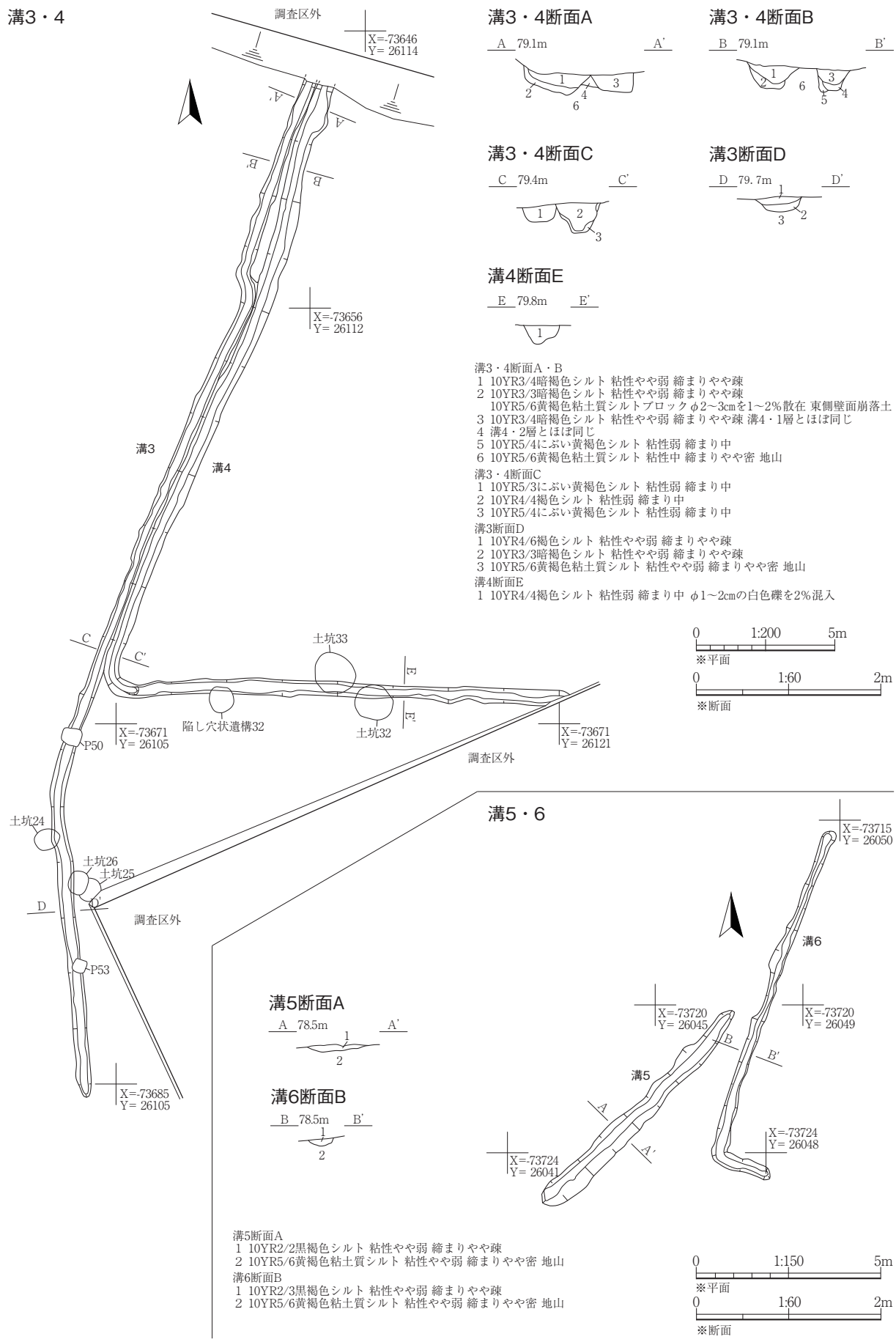
溝で、本来は繋がっていた可能性がある。規模は、長さ 4.0 m、幅 0.4 m、深さ 0.08 mである。底面標高は北端で 79.75 m、南端で 79.74 mとほぼ平坦だが、南側に向かって下がると考えられる。溝 1 との関連から区画溝と考えられるが、同じく排水も兼ねた構造と考えられる。遺物は出土していないが溝 1 との関係から、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝３（第 33 図、写真図版 44～46）

中央区東側の X=-73646～-73685、Y=26103～26114 付近に位置する。同じく南北に走る溝 4 と途中まで平行に走っているが、断面 A・C から本遺構が古い。また、P50・53 よりも古く、土坑 24・26 よりも新しい。規模は、長さ 38.0 m、幅 0.4～0.6 m、深さ 0.15～0.25 mである。底面標高は北端で 78.61 m、中央で 79.02 m、南端で 79.63 mと北側に向かって下がっている。排水溝と考えられ、南から北に向かって排水がされたと推測される。縄文時代後期土器片、剥片 4 点を出土しているが、この他に時期を特定できる遺物は出土していないことから、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝４（第 33 図、写真図版 45・46）

中央区東側の X=-73646～-73671、Y=26104～26121 付近に位置する。同じく南北に走る溝 3 と途中まで平行に走っており、断面 A・C から本遺構が新しい。また、同じく土坑 32・33、陥し穴状遺構 32 よりも新しい。規模は、長さが南北 23.5m から東に 110° 折れてさらに 17.0 mの計 40.5 m、幅 0.4～0.7 m、深さ 0.2～0.33 mである。底面標高は北端で 78.60 m、中央で 78.91 m、南端で 79.22 m と東側から西側、南側から北側に向かって下がっている。排水溝と考えられ、南から北に向かって排水がされたと推測される。また、L 字形に屈曲することから、何らかの区画溝とも考えられる。縄文


溝3・4
調査区外
X=-73646
Y= 26114
X=-73656
Y= 26112
溝3
溝4
C
C'
土坑33
E
E'
陥し穴状遺構32
土坑32
X=-73671
Y= 26105
P50
X=-73671
Y= 26121
調査区外
土坑24
土坑26
土坑25
D
D'
調査区外
P53
X=-73685
Y= 26105
溝3・4断面A
A 79.1m
A'
1
2
3
4
6
溝3・4断面B
B 79.1m
B'
1
2
3
4
5
6
溝3・4断面C
C 79.4m
C'
1
2
3
溝3断面D
D 79. 7m
D'
1
2
3
溝4断面E
E 79.8m
E'
1
溝3・4断面A・B
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロックφ2～3cmを1～2%散在 東側壁面崩落土
3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 溝4・1層とほぼ同じ
4 溝4・2層とほぼ同じ
5 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粘性弱 締まり中
6 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや密 地山
溝3・4断面C
1 10YR5/3にぶい黄褐色シルト 粘性弱 締まり中
2 10YR4/4褐色シルト 粘性弱 締まり中
3 10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粘性弱 締まり中
溝3断面D
1 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
溝4断面E
1 10YR4/4褐色シルト 粘性弱 締まり中 φ1～2cmの白色礫を2%混入
0 1:200 5m
※平面
0 1:60 2m
※断面
溝5・6
X=-73715
Y= 26050
溝6
X=-73720
Y= 26045
X=-73720
Y= 26049
B
B'
溝5
A
A'
X=-73724
Y= 26048
X=-73724
Y= 26041
溝5断面A
A 78.5m
A'
1
2
溝6断面B
B 78.5m
B'
1
2
溝5断面A
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
溝6断面B
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
0 1:150 5m
※平面
0 1:60 2m
※断面

第 33 図　溝 3～6

時代後期土器片を少量、剥片３点を出土しているが、この他に時期を特定できる遺物は出土していないことから、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝５（第 33 図、写真図版 46）

中央区南西隅の X=-73720～-73725、Y=26041～26047 付近に位置する。溝６と隣接しており、繋がる可能性もある。規模は、長さ 7.4 m、幅 0.4～0.7 m、深さ 0.08 mである。底面標高は北東端で 78.17 m、南西端で 78.30 mと北側に向かって下がっている。排水溝と考えられ、南から北に向かって排水がされたと推測される。剥片２点のみを出土しており、時期を特定できる遺物はないことから、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝６（第 33 図、写真図版 46）

中央区南西隅の X=-73715～-73724、Y=26046～26050 付近に位置し、短くＬ字形に曲がる。溝５と隣接しており、繋がる可能性もある。規模は、北西辺が 9.5 m、南東辺が 1.7 mである。底面標高は北東端で 77.80 m、屈曲部で 78.41 m、南東端で 78.47 mと北側に向かって下がっている。溝の形状から区画溝とも考えられるが、排水も兼ねた構造と考えられる。遺物は出土していないが、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝７（第 34 図、写真図版 47）

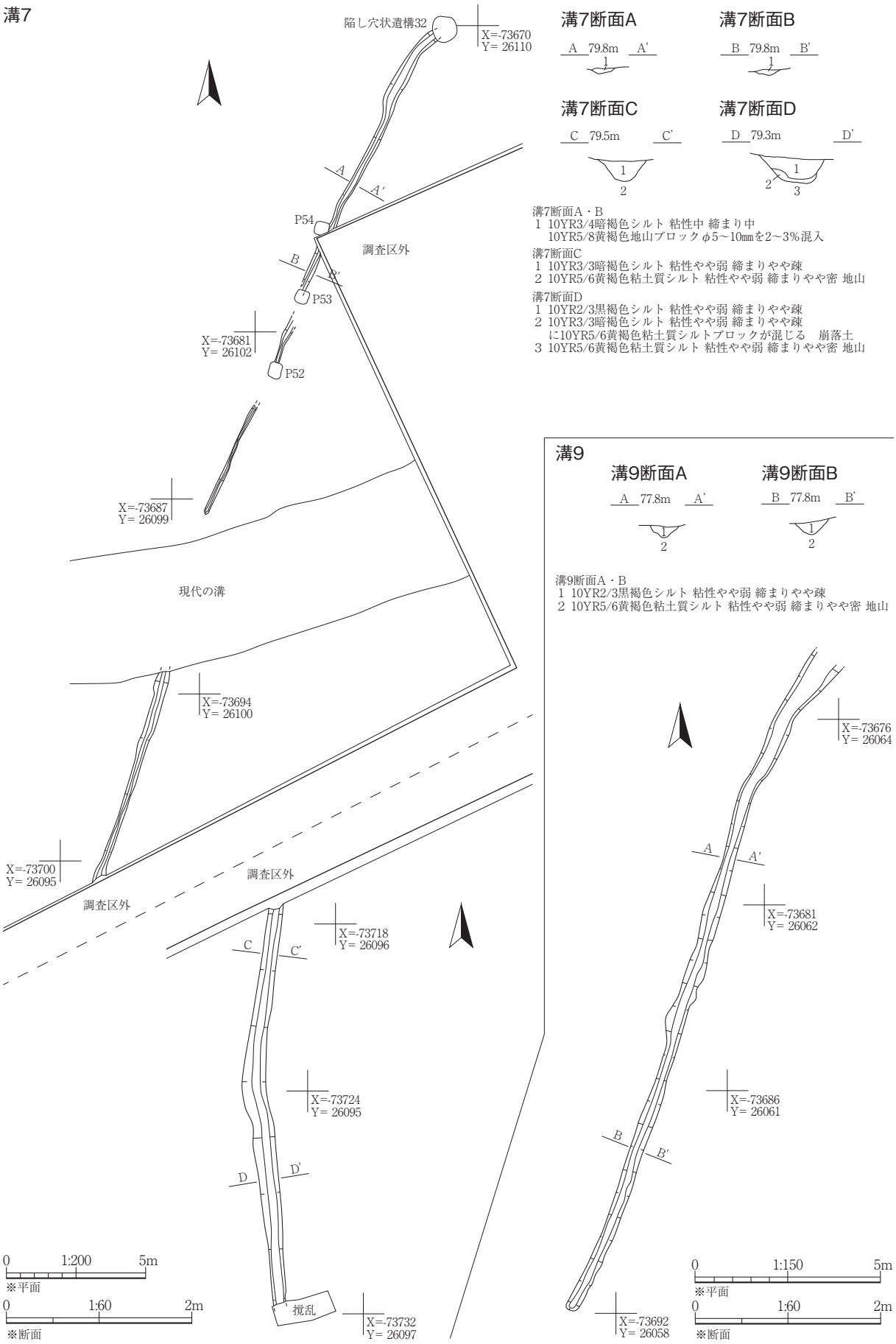
中央区東側から南区中央東寄りの X=-73670～-73732、Y=26092～26109 付近に位置する。北東端は溝４東側付近から確認されているため、溝４に繋がる可能性もある。溝３、P52・53、現代の溝と重複しており、本遺構が古い。また、北端で陥し穴状遺構 32 と重複しており、本遺構が新しい。規模は、導水管部分約 14 m分を含んだ長さは 61.5 m、幅 0.1～0.9 m、深さ 0.05～0.25 mである。底面標高は中央区の北東端で 79.43 m、中央で 79.63 m、南西端で 79.49 m、南区の北端で 79.14 m、南端で 78.90 mと、中央区の中央付近が高く、北と南に向かって下がっている。排水溝と考えられ、北と南に向かって排水がされたと推測される。縄文土器の細片を極少量と剥片 22 点を出土しているが、この他に時期を特定できる遺物は出土していないことから、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝９（第 34 図、写真図版 48）

中央区西側の X=-73674～-73692、Y=26056～26064 付近に位置する。西側谷に平行して構築されており、離れているが溝７とも平行する。規模は、長さ 19.0 m、幅 0.3～0.9 m、深さ 0.12 mである。底面標高は北東端で 77.33 m、中央部で 77.40 m、南東端で 78.58 mと北側に向かって下がっている。排水溝と考えられ、南に向かって排水がされたと推測される。遺物は出土していないが、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝 11（第 35 図、写真図版 48）

中央区東側の X=-73658～-73668、Y=26101～26103 付近に位置する。溝３の西側に隣接し、ほぼ平行して南北に走る。規模は、長さ 9.3 m、幅 0.3～0.4 m、深さ 0.05 mである。底面標高は北端で 78.65 m、中央部で 78.84 m、南端で 78.99 mと北側に向かって下がっている。排水溝と考えられ、北に向かって排水がされたと推測される。縄文土器の細片を極少量出土しているが、この他に時期を特


溝7
陥し穴状遺構32
X=-73670
Y= 26110
A
A'
P54
調査区外
B
B'
P53
X=-73681
Y= 26102
P52
X=-73687
Y= 26099
現代の溝
X=-73694
Y= 26100
X=-73700
Y= 26095
調査区外
調査区外
X=-73718
Y= 26096
C
C'
X=-73724
Y= 26095
D
D'
撹乱
X=-73732
Y= 26097
0 1:200 5m
※平面
0 1:60 2m
※断面
溝7断面A
A 79.8m A'
1
溝7断面B
B 79.8m B'
1
溝7断面C
C 79.5m C'
1
2
溝7断面D
D 79.3m D'
1
2
3
溝7断面A・B
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性中 締まり中
10YR5/8黄褐色地山ブロックφ5～10㎜を2～3%混入
溝7断面C
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
溝7断面D
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
に10YR5/6黄褐色粘土質シルトブロックが混じる　崩落土
3 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
溝9
溝9断面A
A 77.8m A'
1
2
溝9断面B
B 77.8m B'
1
2
溝9断面A・B
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
X=-73676
Y= 26064
A
A'
X=-73681
Y= 26062
X=-73686
Y= 26061
B
B'
X=-73692
Y= 26058
0 1:150 5m
※平面
0 1:60 2m
※断面

第34図　溝7・9

定できる遺物は出土していないことから、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝 12（第 35 図、写真図版 48・49）

南区東側の X=-73717～-73755、Y=26095～26132 付近に位置する。東から南に向かって大きく曲がる溝である。北辺と直角に繋がる西辺は、別遺構の可能性も考えられる。地形に沿って下がる南側は、本溝跡と溝 14～16 に枝分かれするが、本来流れていた流路が埋没して向きが徐々に変わったことによると推測される。明確な切り合いは確認していないが、溝 14 →溝 16 →溝 15 →溝 12 と流路が変化したことが想定される。規模は、長さが北辺が 28.5 m、西辺から溝 14 との交叉部までが 25 m、交叉部から南側の南辺が 30.0 mの計 63.5 mである。幅は 0.3～1.2 m、深さ 0.04～0.15 mである。底面標高は北辺東端で 78.08 m、北辺中央部で 78.82 m、北辺西端で 79.20 m、西辺中央部で 78.86 m、溝 14 との交叉部で 78.03 m、南辺中央部で 77.35 m、南辺南端で 76.89 mを測り、北辺と西辺が直角に交わる箇所から、東と南に向かって下がる。状況から排水溝と考えられ、東と南に向かって排水がされたと推測される。縄文時代晩期の土器片を少量と剥片 22 点を出土しているが、遺構の時期を特定できる遺物は出土していないことから、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝 13（第 35 図、写真図版 50）

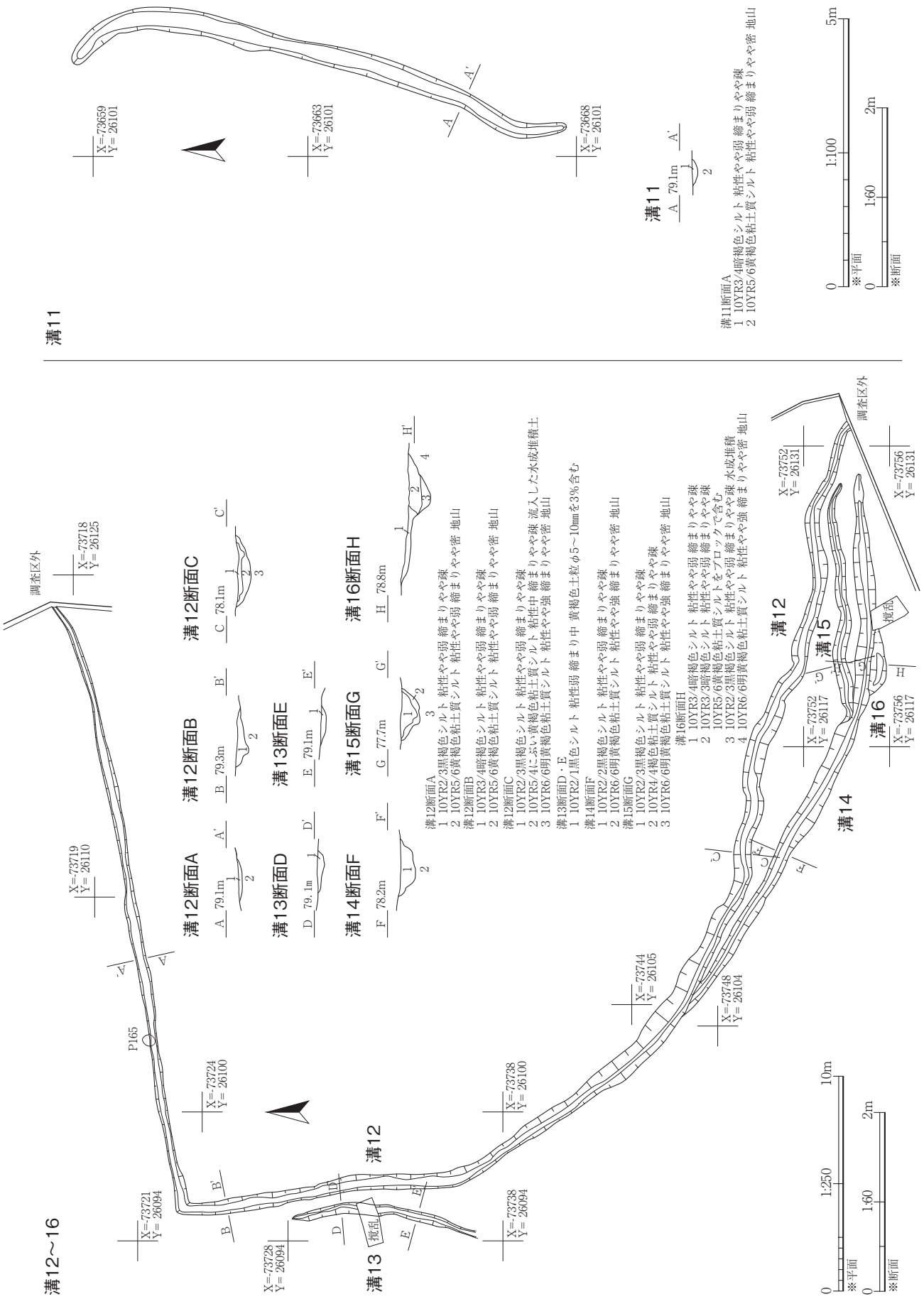
南区東側の X=-73728～-73737、Y=26094～26096 付近に位置する。溝 12 の西側に隣接し、ほぼ平行して南北に走る。規模は、長さ 11.0 m、幅 0.3～0.6 m、深さ 0.05～0.08 mである。底面標高は北端で 79.04 m、中央部で 78.98 m、南端で 78.95 mと南側に向かって下がっている。排水溝と考えられ、南に向かって排水がされたと推測される。剥片 1 点のみを出土しており、この他に時期を特定できる遺物は出土していないことから、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝 14（第 35 図、写真図版 49・50）

南区南東側の X=-73746～-73756、Y=26104～26130 付近に位置する。溝 12 から枝分かれする溝跡で、最初に流れていた流路と考えられる。溝 15・16 は、その後に続く流路と見られる。規模は、溝 12 から枝分かれする箇所からの長さが 26.5 m、幅は 0.2～1.0 m、深さ 0.16～0.25 mである。底面標高は北西端で 77.96 m、中央部で 77.53 m、南東端で 77.14 mを測り、南に向かって下がっている。溝 12 と同様に排水溝と考えられ、南に向かって排水されたと推測される。縄文時代晩期の土器片を少量と剥片 26 点を出土しているが、遺構の時期を特定できる遺物は出土していないことから、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝 15（第 35 図、写真図版 49・50）

南区南東側の X=-73753～-73755、Y=26118～26130 付近に位置する。溝 14 から枝分かれする溝跡で、溝 16 の次に流れていた流路と考えられる。規模は、溝 14 から枝分かれする箇所からの長さが 11.0 m、幅は 0.2～0.6 m、深さ 0.22 mである。底面標高は西端で 77.56 m、中央部で 77.24 m、南東端で 77.15 mを測り、東に向かって下がっている。溝 14 と同様に排水溝と考えられ、東に向かって排水されたと推測される。剥片 5 点のみを出土しており、この他に時期を特定できる遺物は出土して


溝11
X=-73659
Y= 26101
X=-73663
Y= 26101
X=-73668
Y= 26101
A
A'
溝11
A 79.1m A'
1
2
溝11断面A
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
0
1:100
5m
※平面
0
1:60
2m
※断面
溝12～16
調査区外
X=-73718
Y= 26125
X=-73719
Y= 26110
P165
X=-73724
Y= 26100
X=-73721
Y= 26094
X=-73728
Y= 26094
X=-73738
Y= 26100
X=-73738
Y= 26094
X=-73744
Y= 26105
X=-73748
Y= 26104
X=-73752
Y= 26131
X=-73756
Y= 26131
X=-73752
Y= 26117
X=-73756
Y= 26117
溝12
溝13
溝14
溝15
溝16
撹乱
溝12断面A
A 79.1m A'
1
2
溝12断面B
B 79.3m B'
1
2
溝12断面C
C 78.1m C'
1
2
3
溝13断面D
D 79.1m D'
1
溝13断面E
E 79.1m E'
1
溝14断面F
F 78.2m F'
1
2
溝15断面G
G 77.7m G'
1
2
3
溝16断面H
H 78.8m H'
1
2
3
4
溝12断面A
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
溝12断面B
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山
溝12断面C
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト 粘性中 締まりやや疎 流入した水成堆積土
3 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山
溝13断面D・E
1 10YR2/1黒色シルト 粘性弱 締まり中 黄褐色土粒φ5～10mmを3%含む
溝14断面F
1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山
溝15断面G
1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR4/4褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
3 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山
溝16断面H
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
10YR5/6黄褐色粘土質シルトをブロックで含む
3 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 水成堆積
4 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや強 締まりやや密 地山
0
1:250
10m
※平面
0
1:60
2m
※断面

第35図　溝11～16

いないことから、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝 16（第 35 図、写真図版 49・50）

南区南東側の X=−73754～−73756、Y=26121～26123 付近に位置する。溝 14 から枝分かれする溝跡で、溝 15 以前に流れていた流路と考えられる。規模は、溝 14 から枝分かれする箇所からの長さが 3.3 m、幅は 0.3～0.7 m、深さ 0.05 mである。底面標高は西端で 77.51 m、東端で 77.63 mを測り、東に向かって下がっている。溝 14 と同様に排水溝と考えられ、東に向かって排水されたと推測される。遺物は出土していないが、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝 17（第 36 図、写真図版 51）

南区北側の X=−73727～−73739、Y=26080～26085 付近に位置する。中央が途切れる小規模な溝跡である。規模は、長さ 11.6 m、幅 0.2～0.3 m、深さ 0.08 mである。底面標高は北東端で 79.29 m、中央部で 79.32 m、南西端で 79.38 mを測り、北に向かって下がっている。排水溝と考えられ、北に向かって排水されたと推測される。遺物は出土していないが、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝 18（第 36 図、写真図版 51）

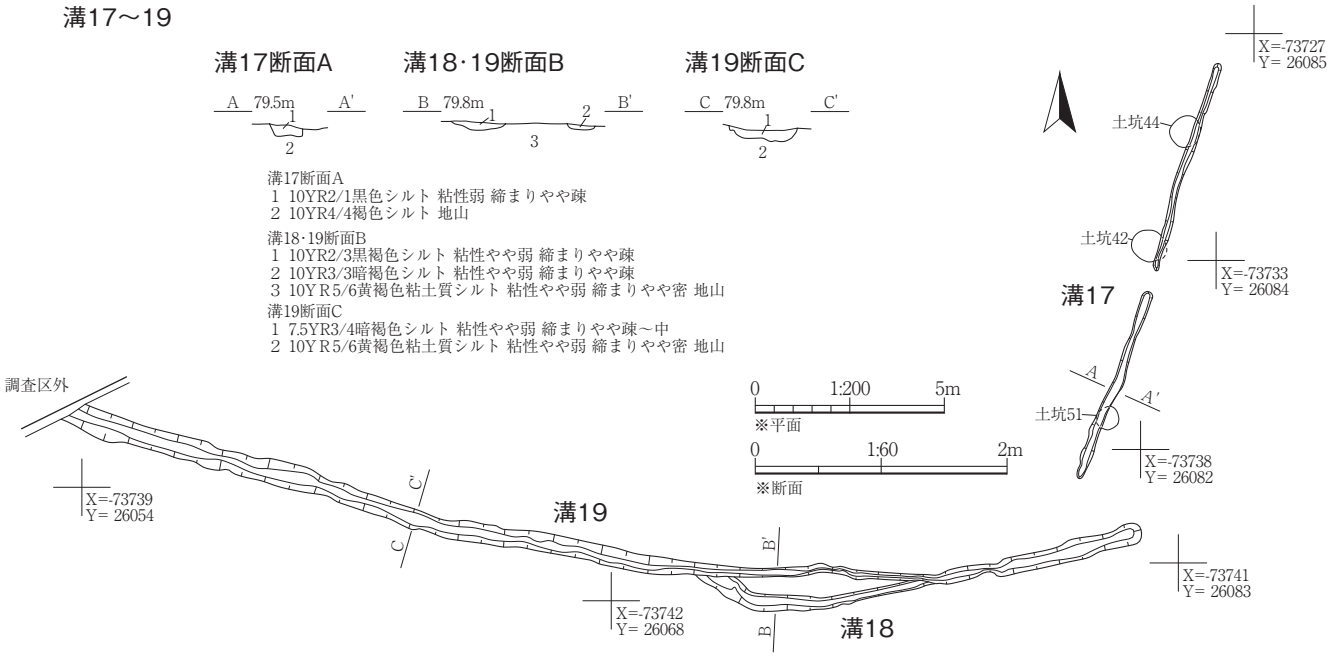
南区北側の X=−73741～−73742、Y=26070～26077 付近に位置する。導水管部分のある西側から延びる溝 19 から、枝分かれする溝である。規模は、溝 19 から枝分かれする箇所からの長さが 6.0 m、幅は 0.2～0.6 m、深さ 0.06 mである。底面標高は西端で 79.66 m、東端で 79.54 mを測り、溝 19 とほぼ同じ高さで、東に向かって下がっている。排水溝と考えられ、溝 19 と同様に排水のための溝と推測される。遺物は出土していないが、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

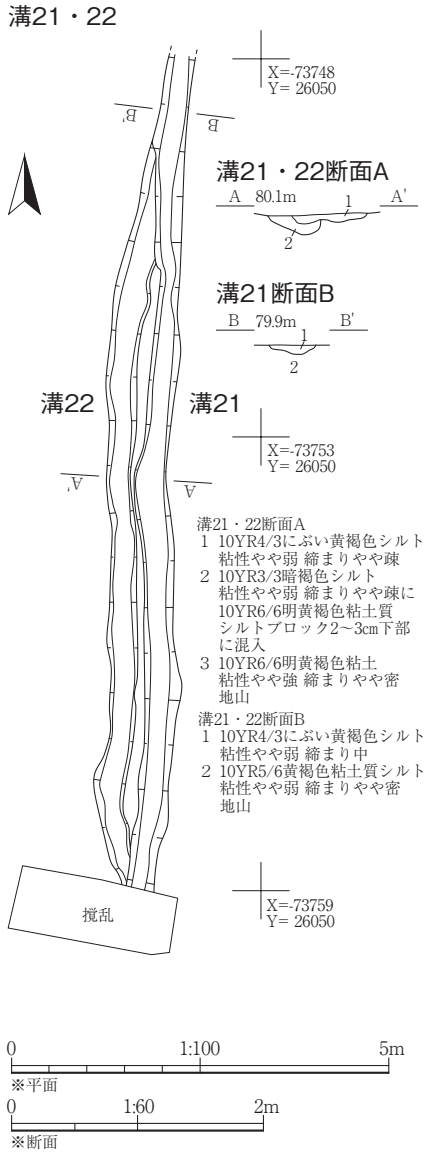
溝 19（第 36 図、写真図版 51）

南区北側の X=−73736～−73742、Y=26053～26082 付近に位置する。導水管部分のある西側から延びる溝跡で、途中から溝 18 に枝分かれする。規模は、長さ 28.8 m、幅は 0.2～0.7 m、深さ 0.03～0.08 mである。底面標高は西端で 79.24 m、中央部で 79.63 m、東端で 79.21 mを測り、中央から東西に向かって下がっている。排水溝と考えられ、中央の雨水を東西両側に向かって排水していたと推測される。遺物は出土していないが、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝 21（第 36 図、写真図版 52）

南区西側の X=−73748～−73759、Y=26048～26050 付近に位置する。南区の最も高い標高 80.0 m付近で南北に延びる溝跡で、途中から溝 22 に枝分かれする。断面Ａから、溝 21 →溝 22 に流路が変化したと考えられる。規模は、長さ 11.0 m、幅は 0.25～0.5 m、深さ 0.08～0.15 mである。底面標高は北端で 79.67 m、中央部で 79.94 m、南端で 79.92 mを測り、中央から南北に向かって下がっている。排水溝と考えられ、中央の雨水を南北両側に向かって排水していたと推測される。剥片 1 点のみを出土しており、この他に時期を特定できる遺物は出土していないことから、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。





第36図　溝17～19、21・22

溝22（第36図、写真図版52）

南区西側のX=-73748～-73759、Y=26048～26050付近に位置する。南区の最も高い標高80.0 m付近で南北に延びる溝跡で、溝21の途中から溝枝分かれする。断面Aから、溝21→溝22に流路が変化したと考えられる。規模は、溝21から枝分かれする箇所からの長さが9.8 m、幅は0.3～0.5 m、深さ0.06 mである。底面標高は北端で79.79 m、中央部で79.98 m、南端で79.97 mを測り、中央から南北に向かって下がっている。溝21から流路が変わった排水溝と考えられ、中央の雨水を南北両側に向かって排水していたと推測される。遺物は出土していないが、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝24（第37図、写真図版52・53）

南区南側のX=-73764～-73773、Y=26053～26108付近に位置する。溝25の北側に平行して東西に延びる溝跡で、西側はやや途切れるが繋がると考えられる。また、南北に走る溝28も連結する可能性がある。規模は、長さ58.0 m、幅は0.2～0.7 m、深さ0.1 mである。底面標高は西端で79.32 m、中央部で79.02 m、東端で78.40 mを測り、西から東に向かって下がっている。排水溝と考えられ、一段下がる南側に雨水を流さないために東西に走る溝を施し、東に向かって排水していたと推測される。縄文土器の細片を少量と剥片1点を出土しているが、時期を特定できる遺物は出土していないことから、中世～近現

代の時期と広く捉えておきたい。

溝 25（第 37 図、写真図版 53・54）

南区南側の X=−73768～−73775、Y=26053～26106 付近に位置する。溝 24 の南側に平行して東西に延びる溝跡で、西側は撹乱の影響を受けているが、まだ西側に延びると考えられる。また、溝 27 は枝分かれした流路と考えられる。規模は、途切れているが長さ 52.6 m、幅は 0.5～1.2 m、深さ 0.15～0.2 mである。底面標高は西端で 78.80 m、中央部で 78.63 m、東端で 78.33 mを測り、西から東に向かって下がっている。排水溝と考えられ、北側からの雨水を南側へ流さないために東西に走る溝を施し、東に向かって排水していたと推測される。縄文晩期の土器細片を少量と剥片 20 点を出土しているが、時期を特定できる遺物は出土していないことから、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝 26（第 37 図、写真図版 54・55）

南区南側の X=−73759～−73763、Y=26048～26072 付近に位置する。溝 21・22 南端付近から東西に延びる溝跡で、溝 19・24 にほぼ平行して走っている。規模は、長さ 23.5 m、幅は 0.3～0.7 m、深さ 0.08 mである。底面標高は西端で 79.83 m、中央部で 79.67 m、東端で 79.44 mを測り、西から東に向かって下がっている。排水溝と考えられ、北側からの雨水を南側へ流さないために東西に走る溝を施し、東に向かって排水していたと推測される。遺物は出土していないが、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

溝 27（第 37 図）

南区南側の X=−73770～−73773、Y=26066～26081 付近に位置する。溝 25 の南側に枝分かれする溝跡で、溝 25 の流路が一部変わった部分と考えられる。規模は、溝 25 から枝分かれする箇所からの長さが 15.0 m、幅は 0.2～0.4 m、深さ 0.03 mである。底面標高は西端で 78.74 m、中央部で 78.60 m、東端で 78.71 mを測り、東西から中央に向かって下がっている。溝 25 と同様に排水溝と考えられ、北側からの雨水を南側へ流さないために東西に走る溝を施し、東に向かって排水していたと推測される。遺物は出土していないが、溝 25 と同時期の中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

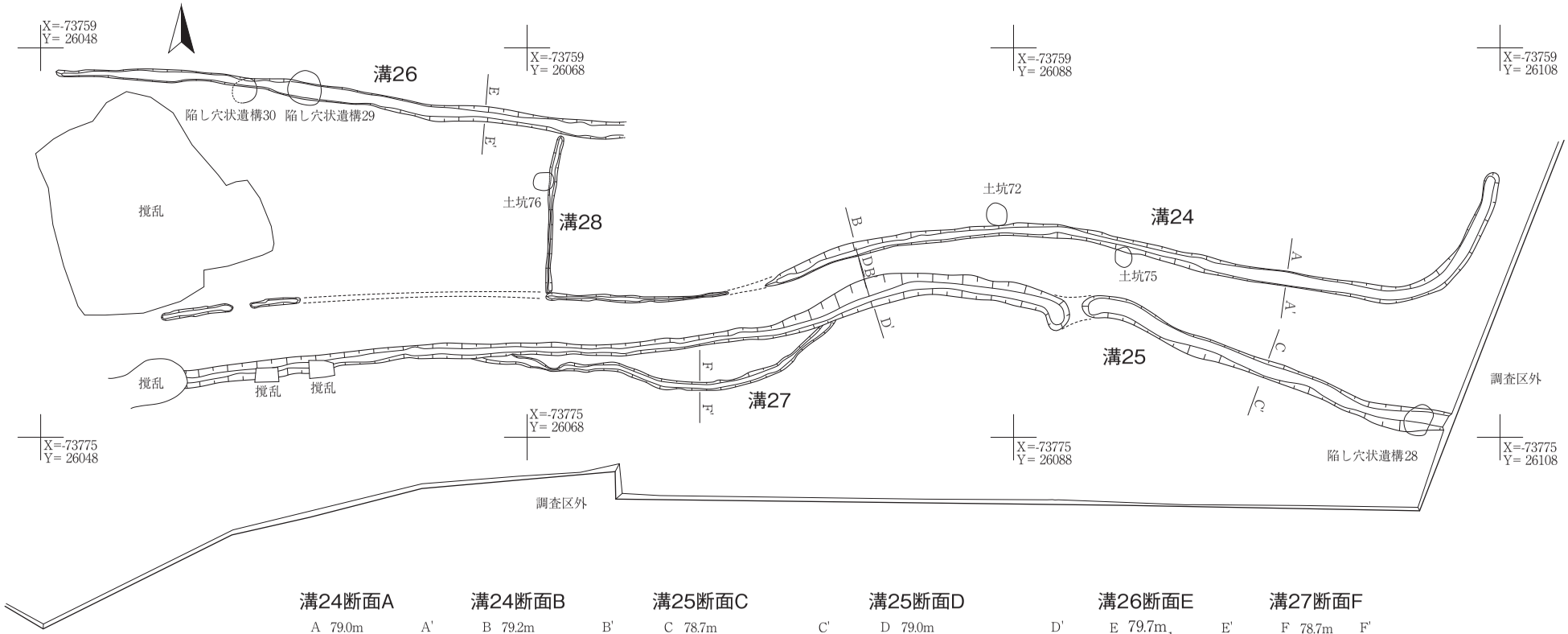
溝 28（第 37 図、写真図版 55）

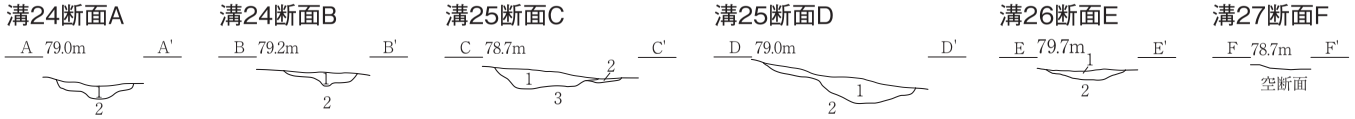
南区南側の X=−73762～−73770、Y=26068～26070 付近に位置する。東西に走る北側の溝 26 と南側の溝 24 の間に南北に延びる溝跡で、２条の溝跡を連結していた可能性もある。規模は、長さ 6.5 m、幅は 0.2～0.4 m、深さ 0.05 mである。底面標高は北端で 79.46 m、中央部で 79.33 m、東端で 79.07 mを測り、北から南に向かって下がっている。排水溝と考えられ、溝 26 の雨水を連結した溝 24 へ排水していた可能性がある。遺物は出土していないが、中世～近現代の時期と広く捉えておきたい。

現代に推定される溝（第 38 図、写真図版 57）

中央区南側の X=−73685～−73695、Y=26080～26109 付近に位置する。当初、長さ約 30 m、幅約４mの大規模なプランから、城館に伴う堀を想定して調査を行った。掘削の結果、埋土上位は明黄褐色粘土質シルトの地山埋め戻し土、埋土下位は黒褐色シルトに黄褐色粘土質シルトの地山土を筋状に堆積しており、一括土で埋め戻されていた。また、底面に轍状の窪みが認められ、工事機械による掘

溝24～28





溝24断面A
1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR6/6明黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

溝24断面B
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり疎
2 10YR4/6褐色シルト 地山

溝25断面C
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎主体に
10YR6/6明黄褐色粘土粒1cm全体に散在 溝より古い根撹乱
3 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山

溝25断面D
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

溝26断面E
1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
2 10YR6/6明黄褐色粘土 粘性やや強 締まりやや密 地山

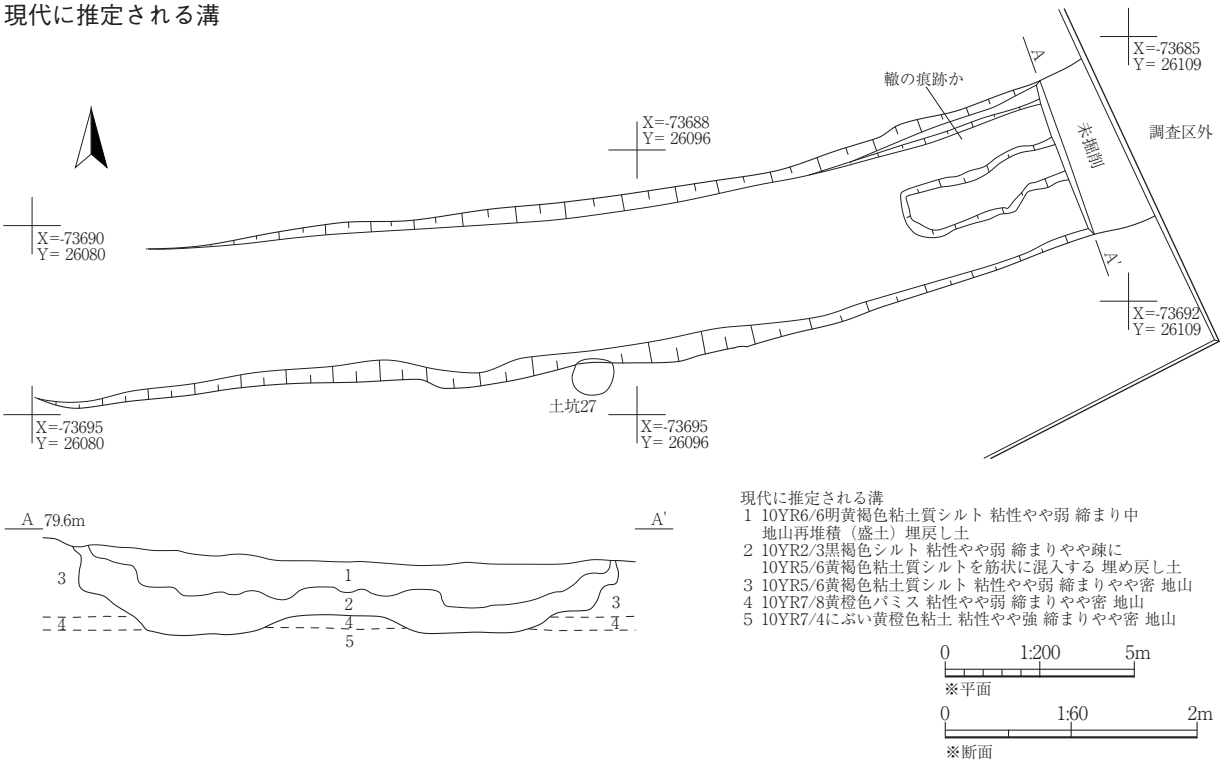
溝27断面F
注記なし

溝28断面は土坑76項目に記載

0 1:250 10m
※平面
0 1:60 2m
※断面

第37図 溝24～28

現代に推定される溝



第38図　現代に推定される溝

削と運搬車の工事用道路が想定されたことから、ごく最近の工事などに伴う掘削痕と判断した。規模は、長さ30.0 m、幅は3.9～4.4 m、深さ0.68 mである。縄文土器片を少量出土しているが、前述の堆積状況から、現代の撹乱と推定される。（北田）

（3）柱穴状ピット（第4表）

検出した柱穴状ピット207個のうち、等間隔に並ぶ方形基調のピット計110個は、標高に関係なく立地する特徴から、植栽痕である可能性がある。また、これら110個と欠番3個を差し引いた94個については、縄文時代以降の柱穴状ピットとした。大半のピットは規則性を有せず、調査区域に散在している。この中で、中央区南東端のP61・32・59・33・58は等間隔で直線に並んでおり、建物や塀跡を構成していた可能性もあるが導水管部分など調査区外へと延びており明らかでない。これら柱穴状ピットからは縄文時代の遺物のみを出土しているが、後世の遺構である可能性もある。

また、昭和63年の埋文調査の際、川沿いの工業用水道施設の建設予定地部分から建物様の配列を示す土坑55基が確認されているが、「建物跡様の配列を示す土坑群は、円形・方形の土坑の重複関係などから同一地点において2時期の形成期が存在することは明らかである。また一部の土坑では、その底面や埋土に柱痕跡に近似した状態をもってはいるものの積極的に掘立柱建物跡と言えるものはない。また所属する時代を示す資料も存在しない」と報告されており、今回検出した等間隔に並ぶ柱穴状ピット群と近似していることから、同様の植栽痕の可能性も指摘される（(財）岩文埋 1989)。

（北田）

第４表　柱穴状ピット計測表

（　）：残存値

遺構名	グリッド	規模（cm）					底面標高（m）	備考
		上端		下端		深さ		
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P1	X =-73489 Y = 26040	35	34	18	16	61	79.231	
P2	X =-73491 Y = 26041	37	32	17	10	71	79.066	
P3	X =-73488 Y = 26056	34	29	16	15	29	78.645	
P4	X =-73487 Y = 26055	32	29	20	13	13	78.868	
P5	X =-73486 Y = 26056	37	27	10	9	36	78.701	
P6	X =-73487 Y = 26057	37	32	12	9	45	78.515	
P7	X =-73488 Y = 26058	35	32	25	16	30	78.591	
P8	X =-73486 Y = 26059	35	31	26	23	11	78.813	
P9	X =-73485 Y = 26058	22	21	10	6	47	78.553	
P10	X =-73488 Y = 26054	53	41	37	24	16	78.875	
P11	X =-73482 Y = 26042	31	26	20	16	32	79.477	
P12	X =-73478 Y = 26053	28	27	12	8	55	79.013	
P13	X =-73481 Y = 26056	42	35	35	24	50	78.726	
P14	X =-73495 Y = 26043	47	33	22	20	23	79.464	
P15	X =-73495 Y = 26045	48	37	28	13	26	79.217	
P16	X =-73484 Y = 26060	65	49	48	37	29	78.767	
P17	X =-73496 Y = 26025	26	25	13	11	30	79.510	
P18	X =-73656 Y = 26131	29	24	17	14	18	78.947	
P19	X =-73652 Y = 26122	24	24	15	9	33	79.653	
P20	X =-73654 Y = 26118	32	23	14	13	26	79.560	
P21	X =-73653 Y = 26118	39	31	21	18	15	79.668	
P22	X =-73647 Y = 26104	31	24	11	6	25	78.282	
P23	X =-73643 Y = 26083	45	43	27	18	18	76.946	
P24	X =-73642 Y = 26076	50	46	31	21	20	76.800	
P25	X =-73702 Y = 26086	29	25	14	13	25	79.270	
P26	X =-73699 Y = 26088	29	26	15	12	30	79.204	
P27	X =-73699 Y = 26090	42	32	33	19	24	79.408	
P28	X =-73702 Y = 26091	30	25	17	14	35	79.218	
P29	X =-73702 Y = 26090	84	69	72	54	18	79.468	
P30	X =-73700 Y = 26089	33	30	26	21	14	79.402	
P31	X =-73702 Y = 26091	28	22	20	19	37	79.215	
P32	X =-73696 Y = 26102	68	59	32	26	79	78.743	
P33	X =-73694 Y = 26106	52	55	23	19	66	78.678	
P34	X =-73692 Y = 26109	25	25	14	12	17	79.006	
P35	X =-73691 Y = 26109	22	21	14	11	24	78.960	
P36	X =-73691 Y = 26108	26	19	15	11	14	79.157	
P37	X =-73685 Y = 26095	55	52	40	38	29	79.279	植栽痕
P38	X =-73683 Y = 26096	63	60	49	46	27	79.133	植栽痕
P39	X =-73680 Y = 26097	60	53	48	41	34	79.103	植栽痕
P40	X =-73677 Y = 26098	63	49	48	41	34	79.102	植栽痕
P41	X =-73675 Y = 26099	65	59	47	44	31	79.097	植栽痕

遺構名	グリッド	規模（cm）					底面標高（m）	備考
		上端		下端		深さ		
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P42	X =-73673 Y = 26099	56	47	44	41	14	79.036	植栽痕
P43	X =-73670 Y = 26100	51	49	44	42	17	79.005	植栽痕
P44	X =-73686 Y = 26098	61	51	47	39	30	79.338	植栽痕
P45	X =-73684 Y = 26099	64	51	45	40	25	79.338	植栽痕
P46	X =-73681 Y = 26100	62	57	46	40	30	79.276	植栽痕
P47	X =-73678 Y = 26100	70	57	40	35	31	79.266	植栽痕
P48	X =-73676 Y = 26101	51	47	44	38	17	79.329	植栽痕
P49	欠番							
P50	X =-73671 Y = 26103	71	64	64	55	16	79.170	植栽痕
P51	X =-73684 Y = 26101	70	60	50	44	21	79.502	植栽痕
P52	X =-73682 Y = 26102	57	46	43	33	25	79.485	植栽痕
P53	X =-73679 Y = 26103	49	48	36	34	22	79.472	植栽痕
P54	X =-73677 Y = 26104	51	49	38	36	19	79.456	植栽痕
P55	X =-73687 Y = 26101	61	50	48	41	22	79.489	植栽痕
P56	X =-73674 Y = 26105	63	56	46	34	27	79.382	植栽痕
P57	X =-73672 Y = 26105	54	49	45	35	27	79.335	植栽痕
P58	X =-73694 Y = 26108	57	48	36	33	44	78.759	
P59	X =-73695 Y = 26104	75	57	18	15	110	78.567	
P60	X =-73691 Y = 26106	30	25	22	19	18	79.309	
P61	X =-73697 Y = 26099	52	45	37	32	28	79.316	
P62	X =-73692 Y = 26103	26	24	13	11	22	79.380	
P63	X =-73681 Y = 26101	42	38	25	18	73	78.837	
P64	X =-73682 Y = 26101	21	18	11	9	28	79.315	
P65	X =-73681 Y =26101	26	23	13	12	22	79.367	
P66	X =-73678 Y = 26100	38	26	30	10	23	79.183	
P67	X =-73678 Y = 26101	26	22	12	10	55	78.906	
P68	X =-73677 Y = 26100	47	42	39	27	18	79.241	
P69	X =-73674 Y = 26100	24	20	9	6	33	78.968	
P70	X =-73673 Y = 26099	21	19	10	9	23	79.021	
P71	X =-73671 Y = 26101	24	22	13	13	24	78.945	
P72	X =-73676 Y = 26100	45	39	34	30	17	79.293	
P73	X =-73688 Y = 26098	34	33	24	21	25	79.340	
P74	X =-73709 Y = 26053	50	32	31	13	20	77.679	
P75	X =-73704 Y = 26056	42	38	18	11	32	77.684	
P76	X =-73698 Y = 26067	49	32	18	15	38	77.735	
P77	X =-73699 Y = 26065	27	23	12	8	24	77.832	
P78	X =-73703 Y = 26060	49	33	17	14	21	77.887	
P79	X =-73695 Y = 26075	20	17	9	7	14	78.255	
P80	X =-73695 Y = 26075	27	23	12	9	15	78.263	
P81	X =-73693 Y = 26077	73	60	43	41	17	78.339	
P82	X =-73698 Y = 26074	50	40	30	21	26	78.370	

遺構名	グリッド	規模（cm）					底面標高（m）	備考
		上端		下端		深さ		
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P83	X =-73708 Y = 26053	37	32	14	13	24	77.631	
P84	X =-73725 Y = 26041	27	19	15	7	31	78.103	
P85	X =-73727 Y = 26038	24	18	15	9	16	78.262	
P86	X =-73687 Y = 26092	59	47	51	41	17	79.153	植栽痕
P87	X =-73685 Y = 26093	50	49	46	41	29	79.003	植栽痕
P88	X =-73679 Y = 26094	59	58	43	42	30	78.885	植栽痕
P89	X =-73677 Y = 26095	57	50	41	40	32	78.837	植栽痕
P90	X =-73674 Y = 26096	68	66	44	43	32	78.826	植栽痕
P91	欠番							
P92	X =-73669 Y = 26098	59	56	45	42	19	78.773	植栽痕
P93	X =-73686 Y = 26089	57	56	46	41	28	78.832	植栽痕
P94	X =-73684 Y = 26090	62	55	43	41	32	78.773	植栽痕
P95	X =-73681 Y = 26091	64	57	47	41	36	78.670	植栽痕
P96	X =-73678 Y = 26092	66	58	48	43	34	78.583	植栽痕
P97	X =-73676 Y = 26093	(54)	(39)	(47)	(35)	33	78.586	植栽痕
P98	X =-73673 Y = 26094	60	56	47	42	27	78.573	植栽痕
P99	X =-73671 Y = 26095	61	51	47	46	25	78.580	植栽痕
P100	X =-73668 Y = 26095	53	49	44	41	19	78.543	植栽痕
P101	X =-73685 Y = 26087	59	53	45	40	28	78.629	植栽痕
P102	X =-73683 Y = 26088	63	56	49	42	31	78.487	植栽痕
P103	X =-73680 Y = 26089	62	54	51	40	32	78.398	植栽痕
P104	X =-73678 Y = 26090	63	54	49	40	26	78.331	植栽痕
P105	X =-73675 Y = 26090	64	57	45	44	10	78.317	植栽痕
P106	X =-73673 Y = 26091	58	53	52	44	19	78.289	植栽痕
P107	X =-73670 Y = 26092	60	53	50	44	18	78.315	植栽痕
P108	X =-73667 Y = 26093	56	56	51	46	17	78.218	植栽痕
P109	X =-73684 Y = 26084	61	57	48	45	27	78.361	植栽痕
P110	X =-73682 Y = 26085	58	56	48	44	31	78.255	植栽痕
P111	X =-73679 Y = 26086	58	51	48	41	24	78.217	植栽痕
P112	X =-73677 Y = 26087	53	50	44	38	18	78.152	植栽痕
P113	X =-73674 Y = 26088	57	46	46	38	18	78.077	植栽痕
P114	X =-73672 Y = 26089	52	49	42	39	17	78.024	植栽痕
P115	X =-73669 Y = 26089	50	49	46	39	10	78.073	植栽痕
P116	X =-73667 Y = 26090	(64)	(62)	71	67	13	78.059	植栽痕
P117	X =-73684 Y = 26082	58	46	43	35	13	78.215	植栽痕
P118	X =-73681 Y = 26083	48	42	36	33	12	78.085	植栽痕
P119	X =-73678 Y = 26083	51	44	45	37	10	78.017	植栽痕
P120	X =-73676 Y = 26084	(49)	(46)	46	(24)	6	77.970	植栽痕
P121	X =-73673 Y = 26085	(53)	(49)	(27)	(22)	10	77.916	植栽痕
P122	X =-73671 Y = 26086	31	22	16	10	6	77.875	植栽痕
P123	X =-73677 Y = 26064	60	60	45	50	8	77.546	植栽痕

遺構名	グリッド	規模（cm）					底面標高（m）	備考
		上端		下端		深さ		
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P124	X =-73675 Y = 26065	62	62	54	51	10	77.478	植栽痕
P125	X =-73672 Y = 26066	63	58	58	54	11	77.419	植栽痕
P126	X =-73670 Y = 26067	64	61	61	56	22	77.325	植栽痕
P127	X =-73667 Y = 26067	60	56	49	48	22	77.255	植栽痕
P128	X =-73664 Y = 26068	76	71	56	49	11	77.245	植栽痕
P129	X =-73668 Y = 26070	(62)	57	58	57	19	77.361	植栽痕
P130	X =-73671 Y = 26069	62	(59)	(56)	52	20	77.474	植栽痕
P131	X =-73673 Y = 26068	68	62	59	53	17	77.456	植栽痕
P132	X =-73673 Y = 26068	68	61	59	58	15	77.474	植栽痕
P133	X =-73676 Y = 26067	60	55	53	51	13	77.551	植栽痕
P134	X =-73679 Y = 26067	55	53	45	38	19	77.455	植栽痕
P135	X =-73679 Y = 26069	64	58	55	54	17	77.561	植栽痕
P136	X =-73677 Y = 26070	68	62	60	52	28	77.550	植栽痕
P137	X =-73674 Y = 26071	58	58	54	51	19	77.471	植栽痕
P138	X =-73671 Y = 26072	67	59	56	51	22	77.440	植栽痕
P139	X =-73669 Y = 26073	59	59	56	53	12	77.420	植栽痕
P140	X =-73666 Y = 26073	66	59	55	53	18	77.390	植栽痕
P141	X =-73677 Y = 26072	68	62	58	50	11	77.639	植栽痕
P142	X =-73678 Y = 26073	43	(27)	35	(19)	12	77.682	植栽痕
P143	X =-73675 Y = 26073	(50)	46	34	(32)	6	77.642	植栽痕
P144	X =-73672 Y = 26074	69	68	56	55	11	77.616	植栽痕
P145	X =-73670 Y = 26075	56	(45)	56	46	14	77.573	植栽痕
P146	X =-73671 Y = 26078	45	(21)	36	(18)	12	77.547	植栽痕
P147	X =-73673 Y = 26077	(50)	49	44	41	18	77.628	植栽痕
P148	X =-73676 Y = 26076	(51)	47	48	(47)	4	77.723	植栽痕
P149	X =-73678 Y = 26075	45	37	36	29	6	77.731	植栽痕
P150	X =-73681 Y = 26074	41	33	22	20	7	77.716	植栽痕
P151	X =-73680 Y = 26072	67	64	53	49	7	77.748	植栽痕
P152	欠番							
P153	X =-73671 Y = 26074	(46)	38	37	35	6	77.605	植栽痕
P154	X =-73666 Y = 26118	56	40	33	24	27	79.635	
P155	X =-73674 Y = 26108	43	33	22	12	42	79.242	
P156	X =-73671 Y = 26112	46	38	31	23	32	79.318	
P157	X =-73671 Y = 26111	41	32	22	16	25	79.382	
P158	X =-73671 Y = 26111	37	29	26	19	24	79.395	
P159	X =-73667 Y = 26112	43	34	17	15	41	79.316	
P160	X =-73655 Y = 26108	36	26	16	12	34	78.696	
P161	X =-73659 Y = 26120	56	47	36	27	33	79.641	
P162	X =-73677 Y = 26090	24	22	15	12	20	78.379	
P163	X =-73660 Y = 26083	48	45	19	16	35	77.096	
P164	X =-73724 Y = 26107	56	50	47	40	16	78.749	

遺構名	グリッド	規模（cm）					底面標高（m）	備考
		上端		下端		深さ		
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P165	X =-73721 Y = 26103	61	52	20	13	41	78.704	
P166	X =-73736 Y = 26110	40	34	26	17	18	78.215	
P167	X =-73743 Y = 26115	40	36	21	20	20	77.695	
P168	X =-73733 Y = 26111	28	26	15	12	27	78.164	
P169	X =-73738 Y = 26100	43	40	26	23	38	78.328	
P170	X =-73738 Y = 26098	35	33	24	19	34	78.470	
P171	X =-73736 Y = 26082	60	53	44	33	13	79.229	
P172	X =-73740 Y = 26100	30	24	19	17	35	78.319	
P173	X =-73737 Y = 26077	26	24	11	8	17	79.311	
P174	X =-73740 Y = 26119	31	28	13	12	45	77.380	
P175	X =-73741 Y = 26101	40	33	22	17	11	78.483	
P176	X =-73743 Y = 26093	23	21	9	8	21	78.828	
P177	X =-73747 Y = 26089	28	23	10	7	22	78.916	
P178	X =-73751 Y = 26084	57	46	29	25	14	79.151	
P179	X =-73756 Y = 26046	61	60	54	53	17	79.921	植栽痕
P180	X =-73755 Y = 26043	77	63	67	52	12	79.911	植栽痕
P181	X =-73754 Y = 26042	63	45	27	23	23	79.733	植栽痕
P182	X =-73752 Y = 26044	68	65	57	54	14	79.896	植栽痕
P183	X =-73751 Y = 26047	62	61	52	50	13	79.845	植栽痕
P184	X =-73750 Y = 26044	69	65	58	58	13	79.818	植栽痕
P185	X =-73749 Y = 26041	65	63	58	57	11	79.712	植栽痕
P186	X =-73747 Y = 26044	70	62	59	56	17	79.627	植栽痕
P187	X =-73753 Y = 26046	68	58	55	49	19	79.883	植栽痕
P188	X =-73748 Y = 26047	62	61	60	55	10	79.738	植栽痕
P189	X =-73766 Y = 26066	64	58	52	44	9	79.290	植栽痕
P190	X =-73763 Y = 26064	65	63	58	53	17	79.440	植栽痕
P191	X =-73763 Y = 26061	72	66	58	55	18	79.427	植栽痕
P192	X =-73763 Y = 26058	70	60	60	48	16	79.548	植栽痕
P193	X =-73763 Y = 26056	75	65	62	55	16	79.554	植栽痕
P194	X =-73755 Y = 26057	38	34	21	18	40	79.613	
P195	X =-73761 Y = 26068	32	31	24	21	41	79.170	
P196	X =-73766 Y = 26061	68	62	54	52	12	79.341	植栽痕
P197	X =-73765 Y = 26058	83	68	68	50	7	79.432	植栽痕
P198	X =-73754 Y = 26059	30	27	18	16	28	79.738	
P199	X =-73744 Y = 26044	74	73	60	60	14	79.452	植栽痕
P200	X =-73741 Y = 26045	67	63	54	51	8	79.293	植栽痕
P201	X =-73740 Y = 26048	68	65	59	53	14	79.218	植栽痕
P202	X =-73742 Y = 26047	75	70	64	59	18	79.396	植栽痕

遺構名	グリッド	規模（cm）					底面標高（m）	備考
		上端		下端		深さ		
		長軸	短軸	長軸	短軸			
P203	X =-73745 Y = 26047	75	69	61	58	15	79.527	植栽痕
P204	X =-73751 Y = 26068	31	26	21	19	35	79.501	
P205	X =-73758 Y = 26043	61	60	50	48	7	79.935	植栽痕
P206	X =-73757 Y = 26041	54	52	47	42	11	79.915	植栽痕
P207	X =-73662 Y = 26129	34	28	12	11	34	78.849	

竪穴１

P1	X =-73707 Y = 26082	26	23	14	13	8	79.322	
P2	X =-73707 Y = 2608	21	18	10	8	9	79.319	
P3	X =-73706 Y = 26082	19	18	11	11	12	79.321	
P4	X =-73706 Y = 26082	17	14	11	8	5	79.358	
P5	X =-73706 Y = 26083	17	15	6	5	8	79.284	

竪穴２

P1	X =-73699 Y = 26081	23	21	9	8	20	78.732	
P2	X =-73698 Y = 26080	22	19	12	7	20	78.751	
P3	X =-73698 Y = 26080	24	20	10	7	51	78.463	
P4	X =-73698 Y = 26080	24	23	14	11	9	78.883	
P5	X =-73697 Y = 26080	22	18	8	8	12	78.822	
P6	X =-73696 Y = 26081	27	24	16	14	12	78.885	
P7	X =-73697 Y = 26082	15	15	7	6	15	78.923	
P8	X =-73698 Y = 26082	19	19	10	8	9	78.981	
P9	X =-73699 Y = 26082	21	16	6	5	28	78.752	
P10	X =-73699 Y = 26081	23	17	9	7	10	78.981	
P11	X =-73700 Y = 26081	20	18	11	9	7	79.000	
P12	X =-73700 Y = 26080	24	21	13	10	13	78.961	
P13	X =-73699 Y = 26080	20	18	11	9	6	78.973	
P14	X =-73698 Y = 26080	17	17	5	4	21	78.754	

竪穴３

P1	X =-73662 Y = 26117	27	26	13	11	24	79.609	
P2	X =-73661 Y = 26115	31	30	18	13	25	79.551	
P3	X =-73659 Y = 26116	31	28	16	14	10	79.687	
P4	X =-73660 Y = 26118	28	24	15	11	23	79.673	
P5	X =-73659 Y = 26117	30	27	16	12	30	79.712	

竪穴４

P1	X =-73649 Y = 26086	19	18	14	11	12	76.935	
P2	X =-73649 Y = 26086	20	18	10	8	14	76.897	
P3	X =-73649 Y = 26086	19	14	6	5	10	76.915	

Ⅴ　出　土　遺　物

今回の調査から、縄文時代早期～晩期の土器・石器・土製品・石製品、中世～近代の陶磁器が出土した。遺物の主体は、縄文時代後期～晩期で８割ほどを占める。以下、遺物の種類別に記載する。

１　土　　器

土器は大コンテナで計３箱出土し、１～87の計87点を掲載した。今回の調査からは、縄文時代早期、中期、後期、晩期の土器が出土した。掲載にあたっては、これらの出土土器を時期ごとにⅠ～Ⅳ群に分け、その上で特徴によってさらに細分した。なお、個別の特徴については観察表に記載している。

Ⅰ群　縄文時代早期

Ａ類は、早期中葉の寺の沢式に相当する。尖底深鉢と考えられ、貝殻腹縁文や貝殻条痕文、貝殻押引文を施す（１・２・56～61）。また、胴部に鋸歯状の多重沈線文を施文する（53）。Ｂ類は、早期後葉の槻木１式に相当する。細隆起線文による文様表現を特徴とし、薄手に作られる（55・62）。遺構外を中心に出土しており、１・２は竪穴２埋土から確認されている。

Ⅱ群　縄文時代中期

中期末葉に位置付けられる土器で、63は大木10式新段階に相当する。51・67は口縁部に無文帯を持つ土器で、54は磨消縄文が施される。

Ⅲ群　縄文時代後期

Ａ類は、後期初頭～前葉の綱取Ⅰ式に相当する。ボタン状貼付文と弧線文が施される（15）。Ｂ類は、後期前葉後半の十腰内Ⅰ式（新）に相当する。渦状入組文が展開するものや弧線文、方形区画文を施す（４・６・８・18・47・52・64・65・68）。また、３・５の多重沈線文が展開するものは、新相に位置付けられる。縄文のみを施文する７・19・50・66についてもこの時期に含めた。竪穴３は、Ｂ類がまとまって出土しており、該期に廃絶した遺構と考えられる。

Ⅳ群　縄文時代晩期

Ａ類は、晩期初頭～前葉の大洞Ｂ１～２式に相当する。入組三叉文や半肉彫り的な磨消文様が展開する一群で、深鉢・鉢・壺・注口が出土している（14・25～29・31・35～43・45・46・48・69・70）。Ｂ類は、晩期前葉の大洞ＢＣ１～２式に相当し、羊歯状文や雲形文、Ｃ字状文が施される一群で、深鉢・鉢・台付浅鉢・注口が出土している（21・23・24・44・77・78）。土器埋設遺構に設置されたものを含む縄文のみを施文する深鉢（９～13・79）、胴部下半のみの深鉢（16・17・32）、20・22鉢や33壺などは晩期前半までに収まると考えた。Ｃ類は、晩期中葉の大洞Ｃ１～２式に相当し、単純化し退化した雲形文を展開する台付鉢がある（72～74）。75は、四脚の台付き鉢の脚部である。また、口縁部に多重平行沈線が施される九年橋型に類似する深鉢はこの時期に含まれる（80～85）。Ｄ類は、晩期末葉の大洞Ａ'式に相当し、変形工字文や匹字文が展開する。器種は、鉢・台付鉢・台付浅鉢が出土している（34・71・76・86・87）。　（北田）

２　石　　器

石器は中コンテナで計 12 箱出土し、計 2,225 点を登録した。このうち、88～201 の計 114 点を掲載した。出土土器の所属時期から、縄文時代早期、中期、後期、晩期に製作されたと見られるが、土器の出土量を見ると縄文時代後期～晩期が主体と考えられる。器種は、石槍、石鏃、石匙、石錐、篦状石器、楔形石器、スクレイパー類、二次加工ある剥片、微細剥離痕ある剥片、剥片、石核、磨製石斧、石鍬、礫器、特殊磨石、磨石、敲石、凹石、砥石、台石、遺跡に持ち込まれた自然礫などが出土している。以下、器種ごとに解説し、詳細については観察表に記載している。

石槍（88～92）

８点出土し、５点を掲載した。いずれも茎部を持たず、柄に挟んで使用すると考えられる。88 は竪穴４床面から出土しており、晩期後葉～末葉と考えられる。石材は、すべて奥羽山脈を産地とする頁岩製である。

石鏃（93～99）

19 点出土し、７点を掲載した。93 は有茎、94～96 は無茎凹基、97 は無茎平基、98 は基部欠損か、99 は平基かと考えられる。93 は土坑 49 から出土しており、伴出土器から晩期前葉に比定される。石材は、未掲載のうち１点が凝灰岩、その他はすべて奥羽山脈を産地とする頁岩製である。

石匙（100）

２点出土し、１点を掲載した。100 は摘まみ側を欠損した横型と考えられる。石材は、掲載した 100 が北上山地を産地とする頁岩で、未掲載の１点が奥羽山脈を産地とする頁岩製である。

石錐（101～104）

４点出土し、全点を掲載した。101 は石槍からの転用と考えられる。いずれも先端部に摩滅痕を有する。石材は、101 が凝灰岩（奥羽山脈）、102・103 が頁岩（奥羽山脈）、104 が頁岩（北上山地）である。

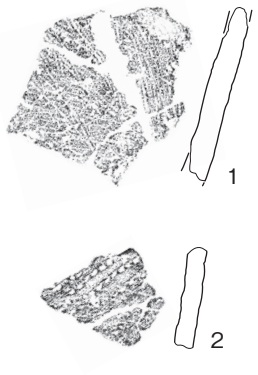
篦状石器（105～133）

74 点出土し、29 点を掲載した。105～122 は両面加工、123～133 は片面加工で、基本的に片刃に作られる。また、端部に使用による摩滅痕が認められる場合が多いことから、革なめしなど掻く動作に関連する作業に用いられていたと考えられる。今回の調査で出土した石器のうち、篦状石器の割合が高いことから、本遺跡に特徴的な事例と言える。また、打製石斧を思わせるくらい大形の成品が多いことも指摘できる。石材は、頁岩（奥羽山脈）60 点、頁岩（北上山地）３点、ホルンフェルス（奥羽山脈基盤）８点、珪質頁岩・デイサイト・凝灰岩各１点とほぼ頁岩が占める。

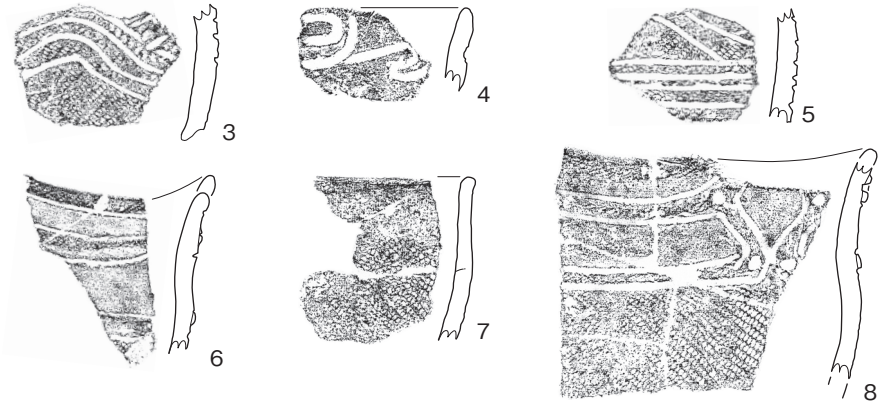
楔形石器（134・135）

６点出土し、２点を掲載した。２個一対の刃部を持つものが３点、４個二対の刃部が１点、不明が

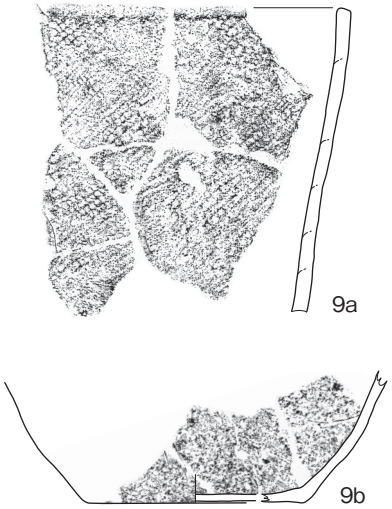
竪穴２（１・２）



竪穴３（３～８）

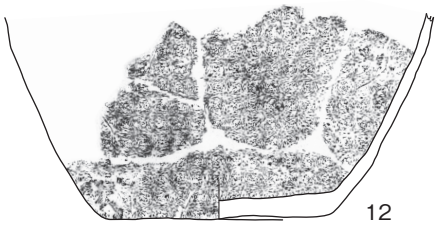


土器埋設遺構１（9a・b）



土器埋設遺構２（10・11）

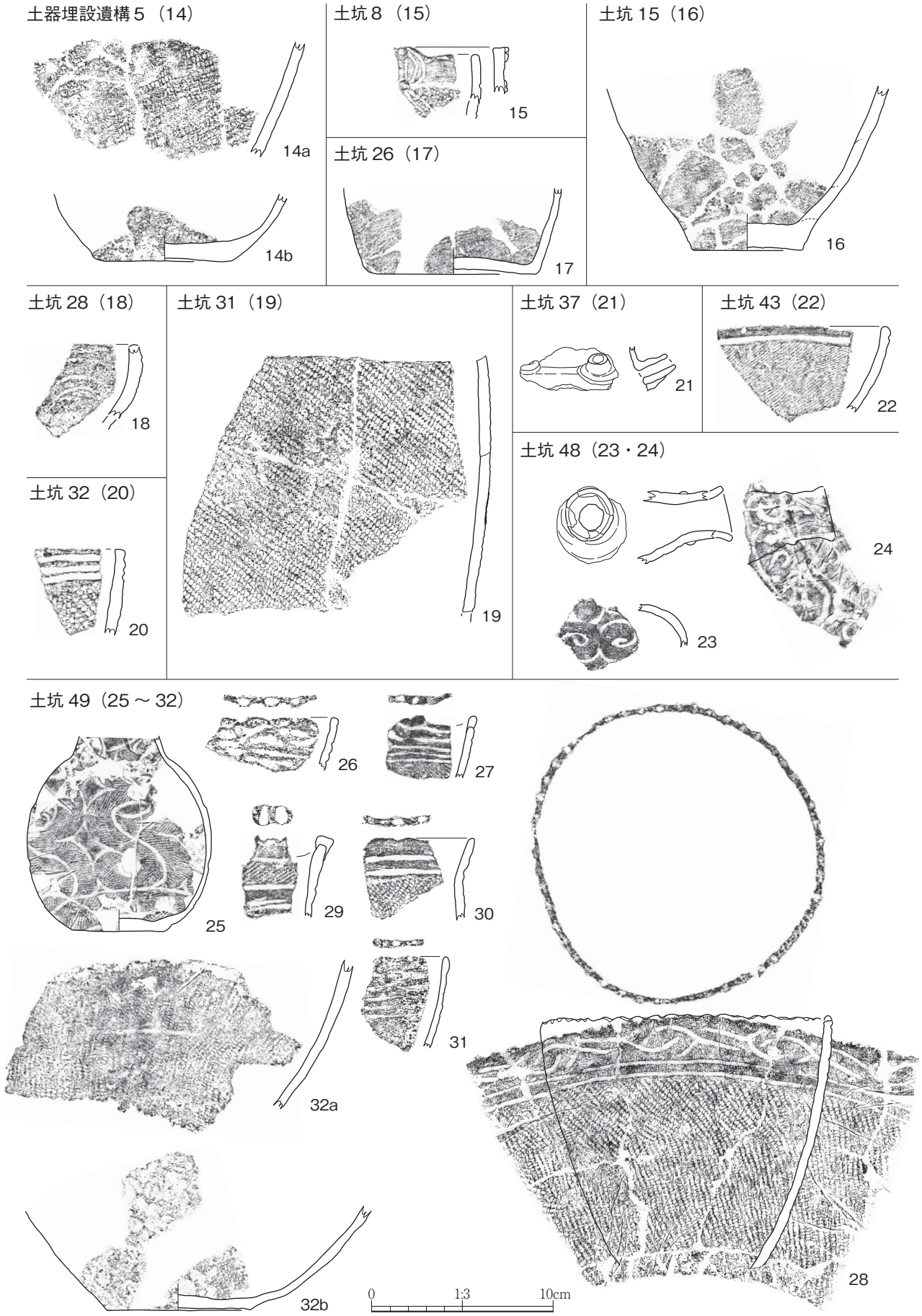
土器埋設遺構３（12）



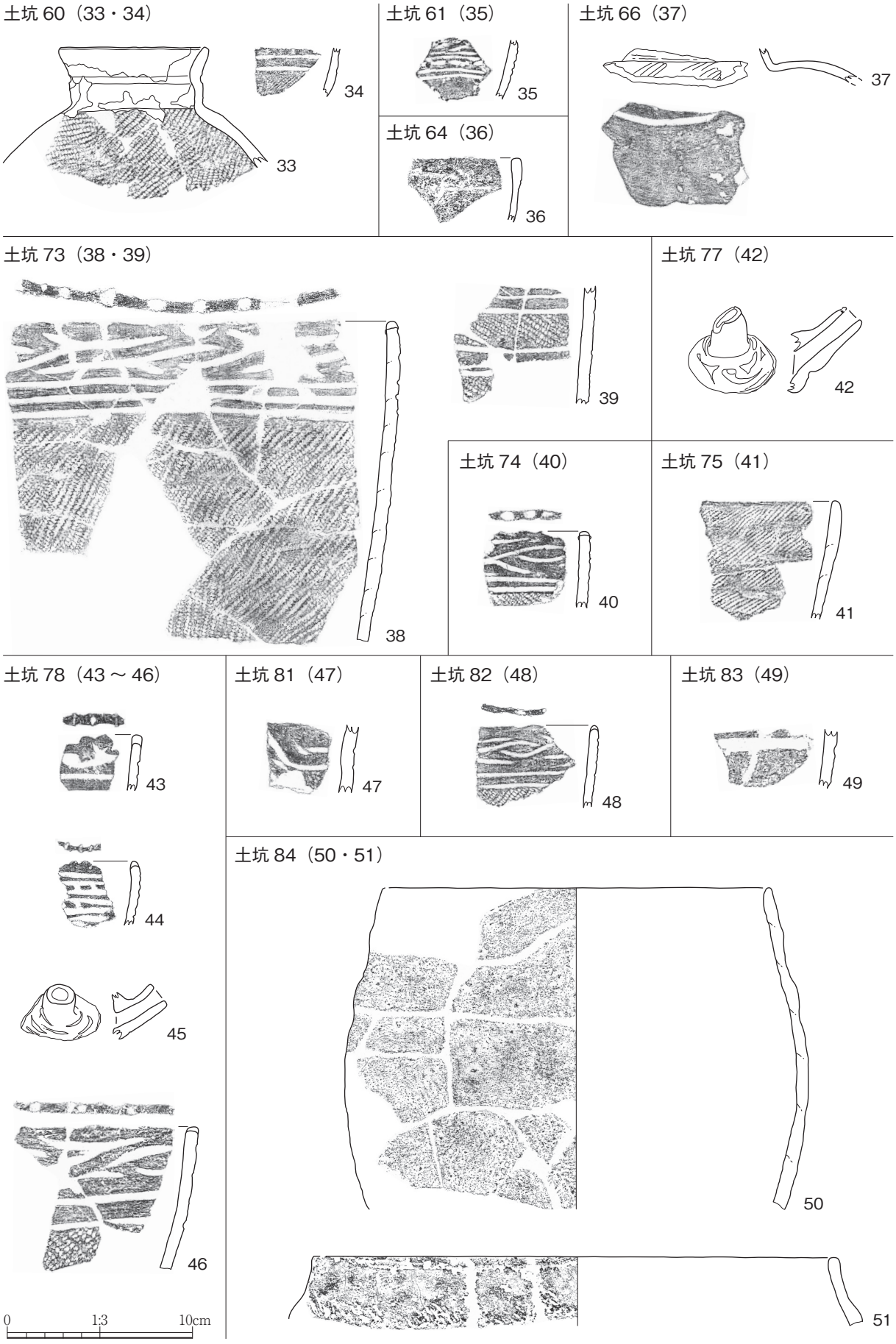
土器埋設遺構４（13）

0　1:3　10cm

第 39 図　土器（1）

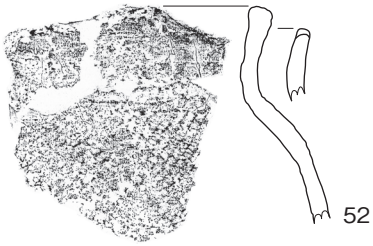

土器埋設遺構５（14）
14a
14b
土坑８（15）
15
土坑 26（17）
17
土坑 15（16）
16
土坑 28（18）
18
土坑 31（19）
19
土坑 37（21）
21
土坑 43（22）
22
土坑 32（20）
20
土坑 48（23・24）
24
23
土坑 49（25～32）
26
27
25
29
30
31
32a
32b
28
0
1:3
10cm

第 40 図　土器（２）

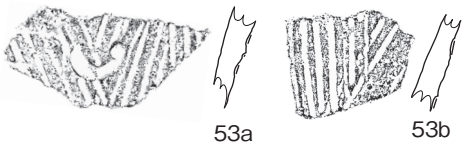

土坑 60（33・34）
33
34
土坑 61（35）
35
土坑 64（36）
36
土坑 66（37）
37
土坑 73（38・39）
38
39
土坑 77（42）
42
土坑 74（40）
40
土坑 75（41）
41
土坑 78（43～46）
43
44
45
46
土坑 81（47）
47
土坑 82（48）
48
土坑 83（49）
49
土坑 84（50・51）
50
51
0
1:3
10cm

第 41 図　土器（3）

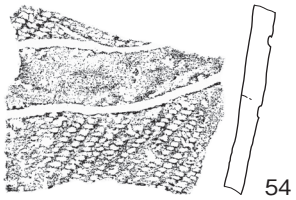
土坑 86（52）



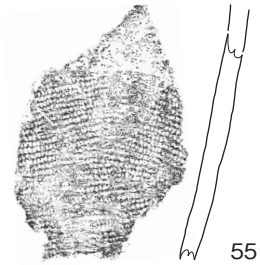
陥し穴状遺構３（53）



溝１（54）



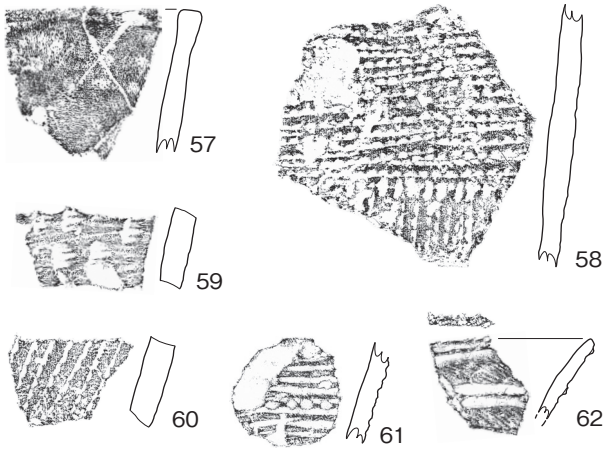
溝 24（55）



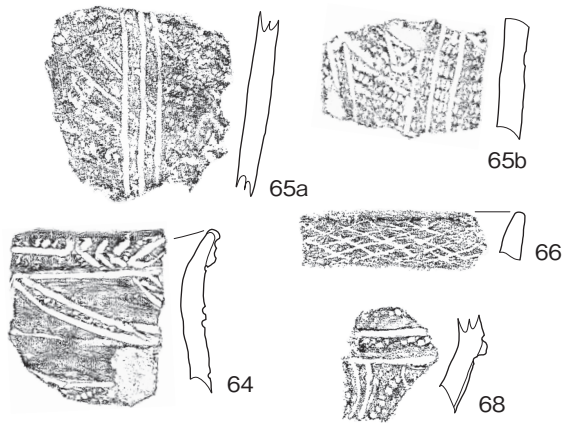
P52（56）

遺構外出土土器（57 ～ 87）

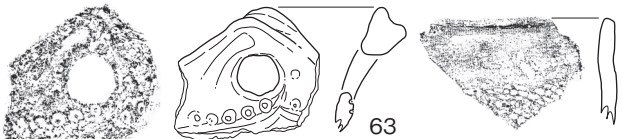
Ⅰ群（57 ～ 62）



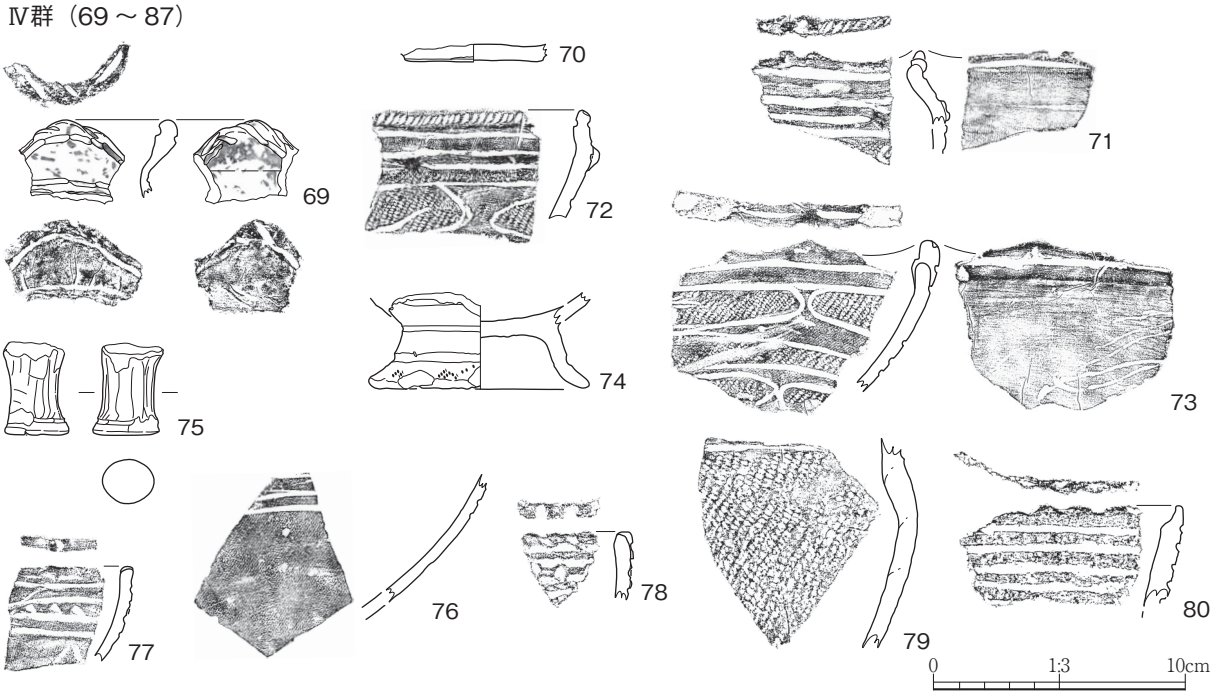
Ⅲ群（64 ～ 66、68）



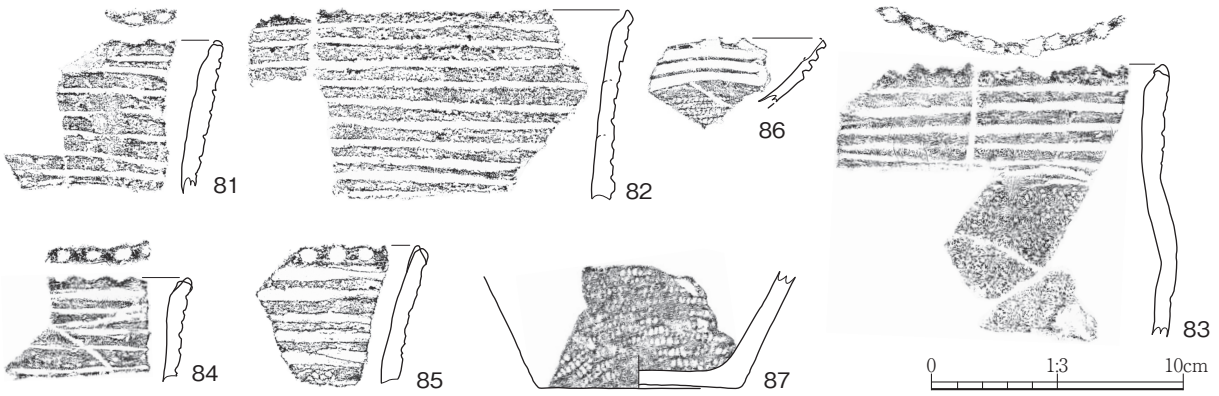
Ⅱ群（63、67）



Ⅳ群（69 ～ 87）



第 42 図　土器（４）



第43図　土器（5）

２点である。石材は、頁岩（奥羽山脈）４点、頁岩（北上山地）２点を数える。

スクレイパー類（136～146）

46点出土し、11点を掲載した。素材剥片の長辺に二次加工を施すことが多い。139は全周に加工が施される。145は石核を再利用して、刃部を形成した可能性がある。石材は、頁岩（奥羽山脈）41点、頁岩（北上山地）・砂岩（北上山地）各２点、ホルンフェルス（奥羽山脈基盤）１点である。

二次加工ある剥片（147～149）

44点出土し、３点を掲載した。スクレイパー類に加工する前段階、もしくは失敗品などと考えられる。石材は、頁岩（奥羽山脈）39点、凝灰岩（奥羽山脈）４点、珪質頁岩（奥羽山脈）１点である。

剥片（150～161）

1883点出土し、接合した12点を掲載した。この中には、石器製作が行われたと見られる竪穴４から出土した、剥片・チップ593点（541.2ｇ）も含んでいる。竪穴４から出土した剥片のうち、接合できた12点５接合資料を掲載した。接合資料１（150～153）は、90°打面転位される。接合資料２（154・155）及び接合資料３（156・157）、接合資料５（160・161）は、同一面からの剥離が考えられる。接合資料４（158・159）は、上下の180°打面転位が認められる。なお、竪穴４出土以外の残り計1290点は、時間の都合で接合作業を行えなかった。石材は、掲載した12点は頁岩（奥羽山脈）である。その他については鑑定できなかったが、９割以上は頁岩（奥羽山脈）で占められる。

石核（162～169）

42点出土し、８点を掲載した。多方向から、打面を転位して剥片剥離を行う資料は少なく、素材となる礫に打面を形成後、同一方向からのみ作業されるものが多い。石材は、頁岩（奥羽山脈）34点、碧玉（奥羽山脈）３点、珪質頁岩（奥羽山脈）２点、頁岩（北上山地）・チャート（北上山地）・デイサイト（奥羽山脈）各１点に分けられる。

磨製石斧（170～175）

13点出土し、６点を掲載した。このうち、174・175は未成品と考えられ、未掲載にも６点含まれる。171は両刃、172は片刃に加工されている。石材は、ホルンフェルス（奥羽山脈基盤）４点、凝灰岩（奥羽山脈）３点、蛇紋岩（早池峰山周辺）・頁岩（北上山地）・はんれい岩（北上山地）・ヒン

岩（北上山地）・デイサイト（奥羽山脈）・砂岩（北上山地）各１点である。

石鍬（176～178）

４点出土し、３点を掲載した。打製石斧だが、土掘り具としての使用を想定して石鍬とした。177は端部に摩滅痕が認められる。石材は、ホルンフェルス（奥羽山脈基盤）２点、赤紫色凝灰岩（一関市東山町）・頁岩（北上山地）各１点で、硬質でない石材が用いられている。

礫器（179・180）

２点出土し、全点を掲載した。礫の形状を残して刃部を作出した資料で、180は磨製石斧未成品の可能性もある。いずれも、石材はホルンフェルス（奥羽山脈基盤）である。

特殊磨石（181～189）

37点出土し、９点を掲載した。断面三角形の形状を持つ礫の角に、敲打痕及び擦痕が認められる資料で、竪穴２・P12埋土などから出土している。石材は、デイサイト（奥羽山脈）13点、ホルンフェルス（奥羽山脈基盤）７点、安山岩（奥羽山脈）６点、流紋岩（奥羽山脈）・砂岩（北上山地）各３点、凝灰岩（奥羽山脈）２点、頁岩（奥羽山脈）・頁岩（北上山地）・片麻岩（北上山地）各１点である。

敲石（190～193）

14点出土し、４点を掲載した。端部に敲打痕が認められる資料。193は全面に微細な敲打痕が認められ、手のひらに収まるサイズであることから、剥片の二次加工に用いられた可能性がある。石材は、ホルンフェルス（奥羽山脈基盤）５点、砂岩（北上山地）・安山岩（奥羽山脈）各２点、頁岩（奥羽山脈）・流紋岩（奥羽山脈）・凝灰岩（北上山地）・デイサイト（奥羽山脈）・チャート（北上山地）各１点である。

凹石（194・195）

７点出土し、２点を掲載した。正面に複数の凹痕を持つものが多い。石材は、流紋岩（奥羽山脈）・砂岩（北上山地）・溶岩（岩手山）各２点、デイサイト（奥羽山脈）１点である。

砥石（196）

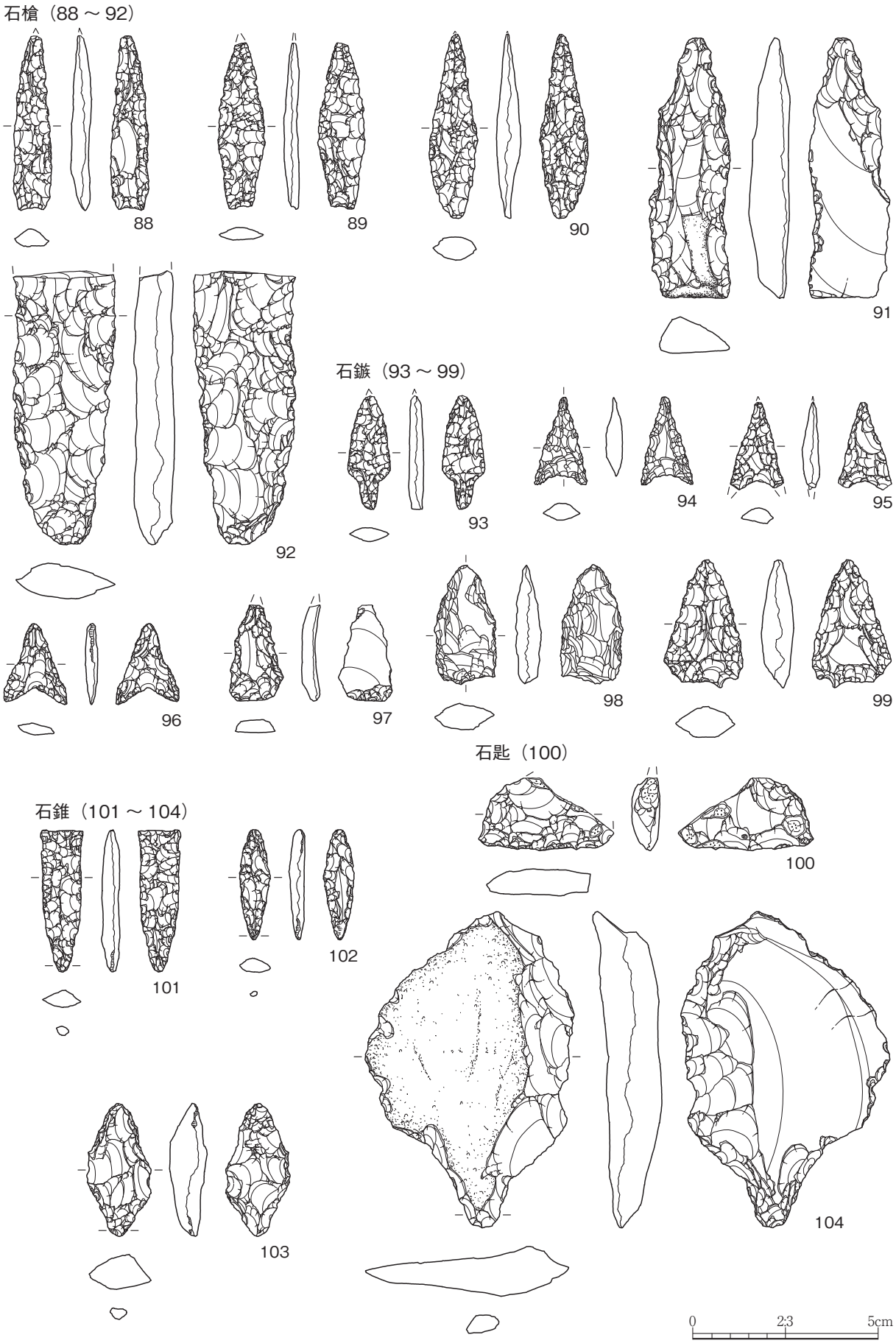
１点出土し、全点を掲載した。溝25から出土しており、新しい時期の所産の可能性がある。流紋岩（奥羽山脈）製である。

台石（197～199）

11点出土し、３点を掲載した。作業台として使用された資料で、片面に擦痕や敲打痕が認められる。石材は、安山岩（奥羽山脈）４点、凝灰岩（奥羽山脈）・ホルンフェルス（奥羽山脈）・デイサイト（奥羽山脈）各２点、流紋岩（奥羽山脈）１点で、いずれも遺跡近傍の河原から運ばれたと見られる。

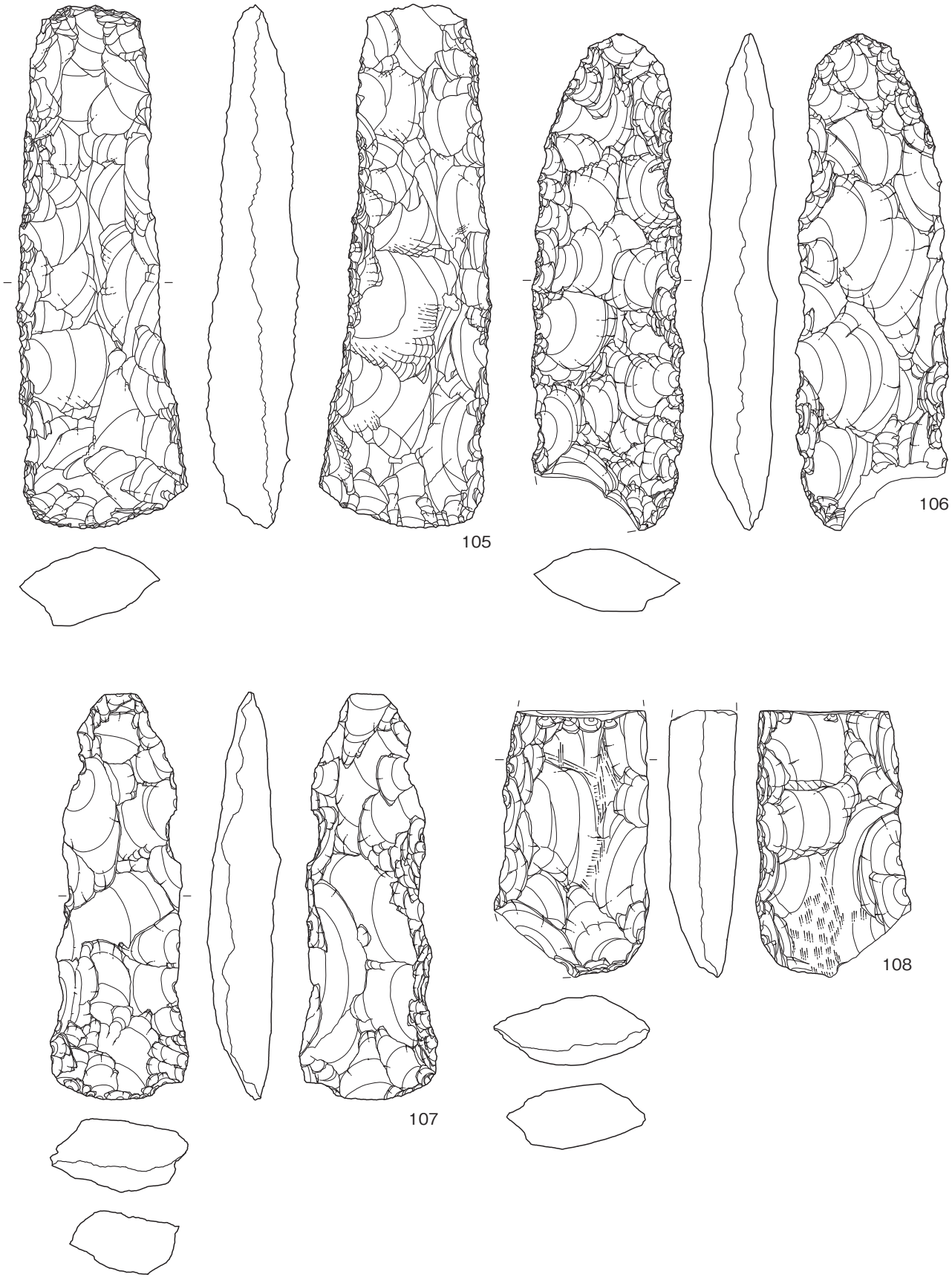
自然礫（200・201）

２点出土し、全点を掲載した。いずれも土坑８上面から出土した資料で、意図的に遺跡内に運ばれ

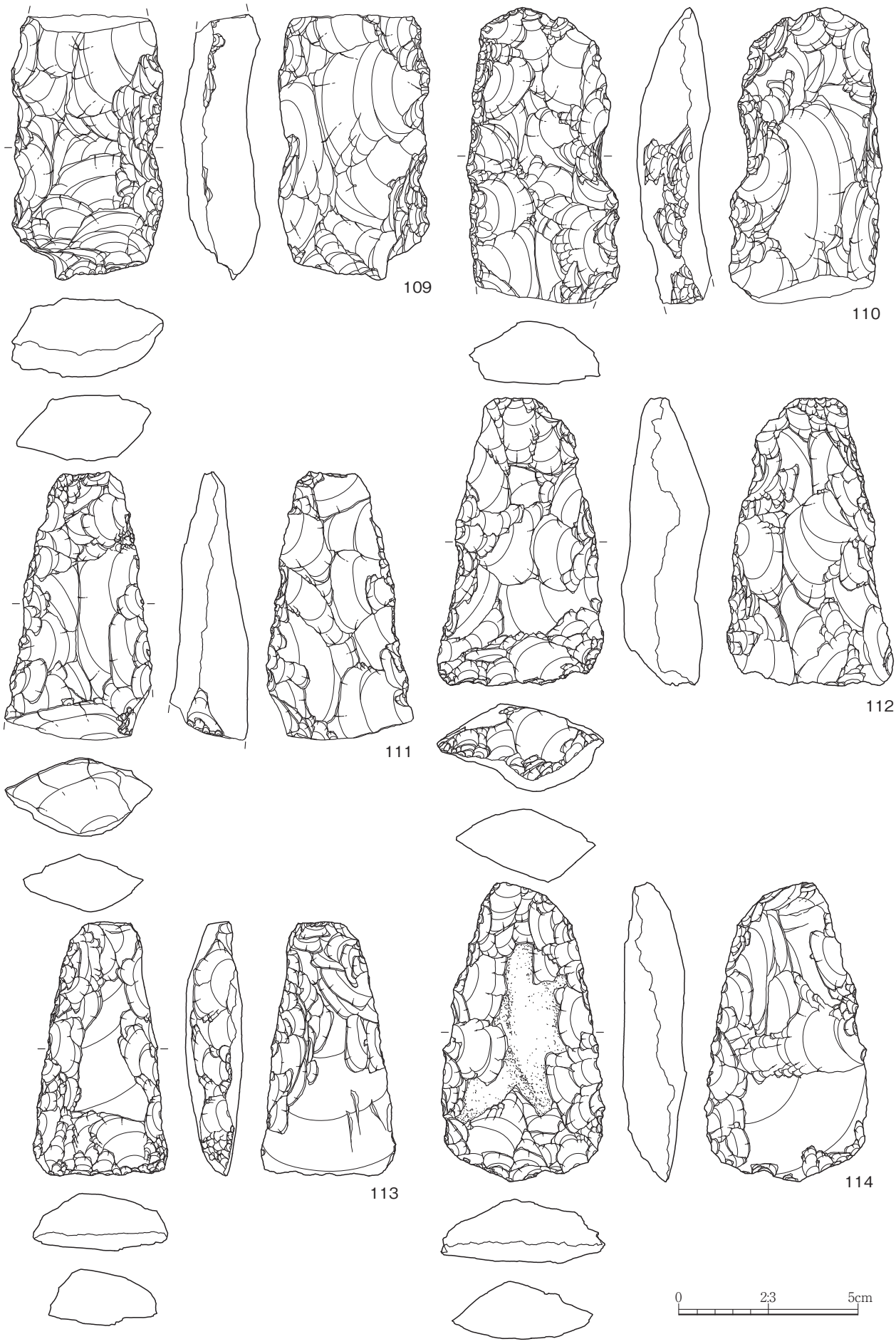

石槍（88 ～ 92）
88
89
90
91
92
石鏃（93 ～ 99）
93
94
95
96
97
98
99
石匙（100）
100
石錐（101 ～ 104）
101
102
103
104
0
2.3
5cm

第 44 図　石器（1）

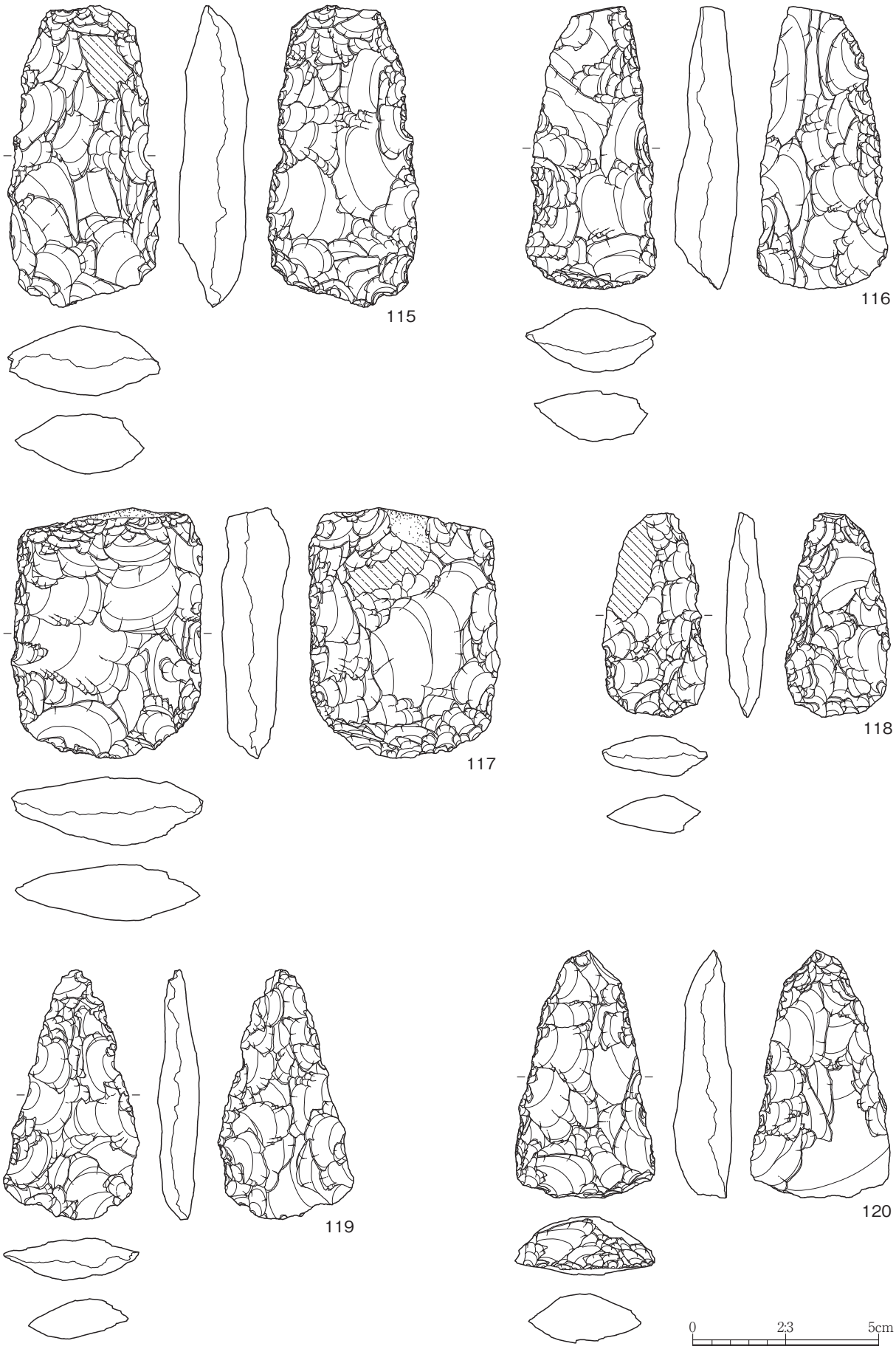
篦状石器（105 ～ 133）



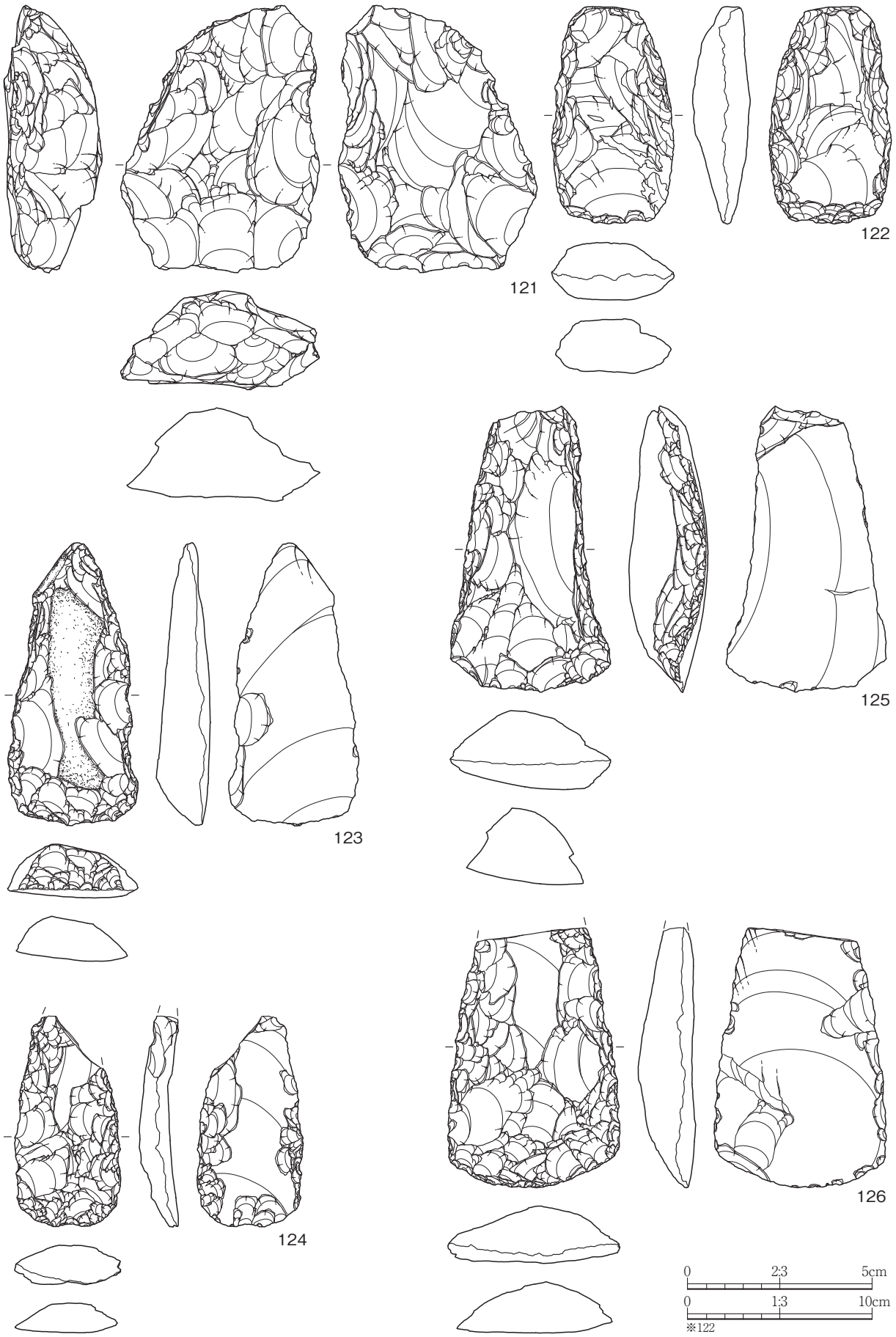
第 45 図　石器（2）



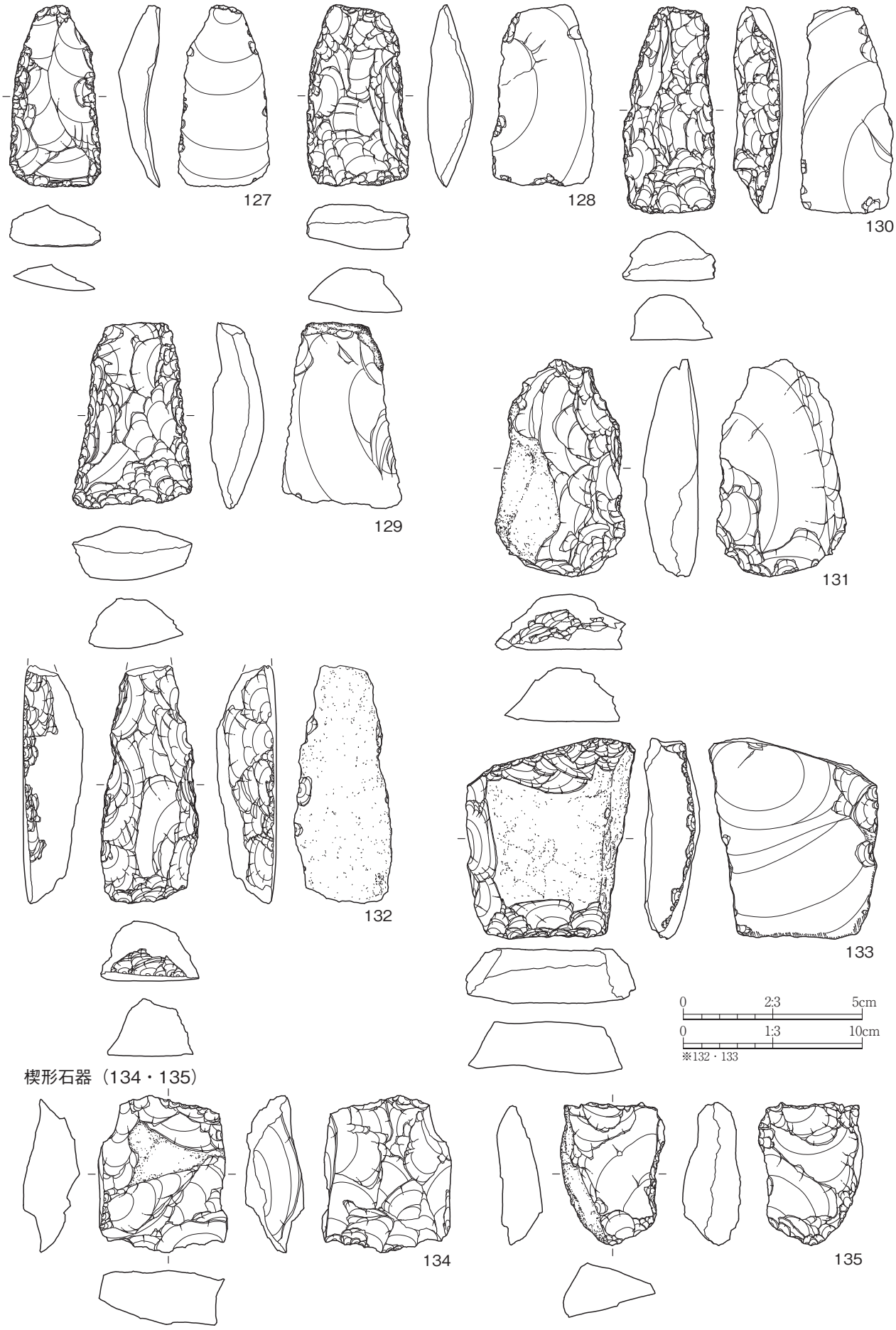
第46図　石器（3）



第 47 図　石器（4）

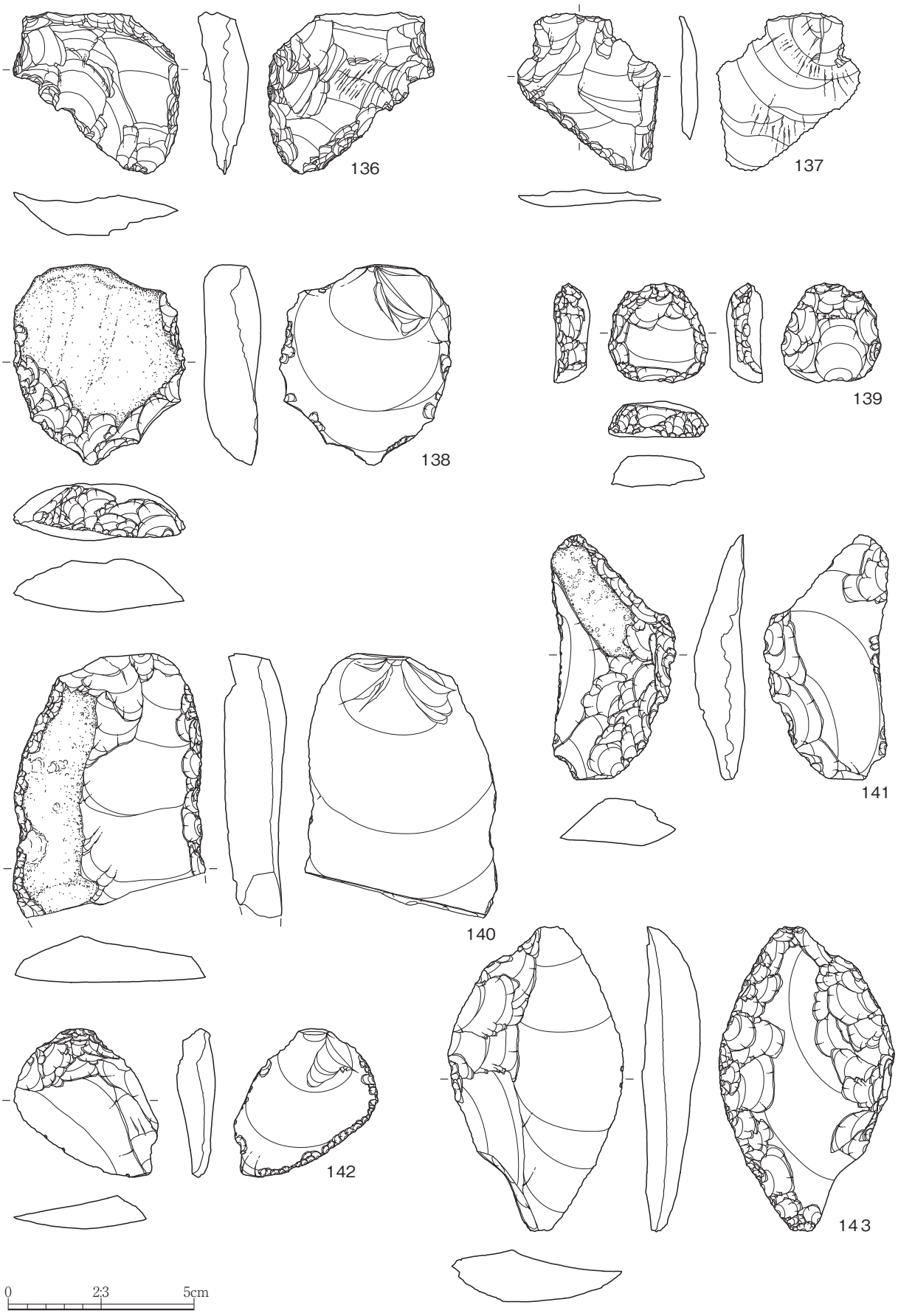


第 48 図　石器（5）

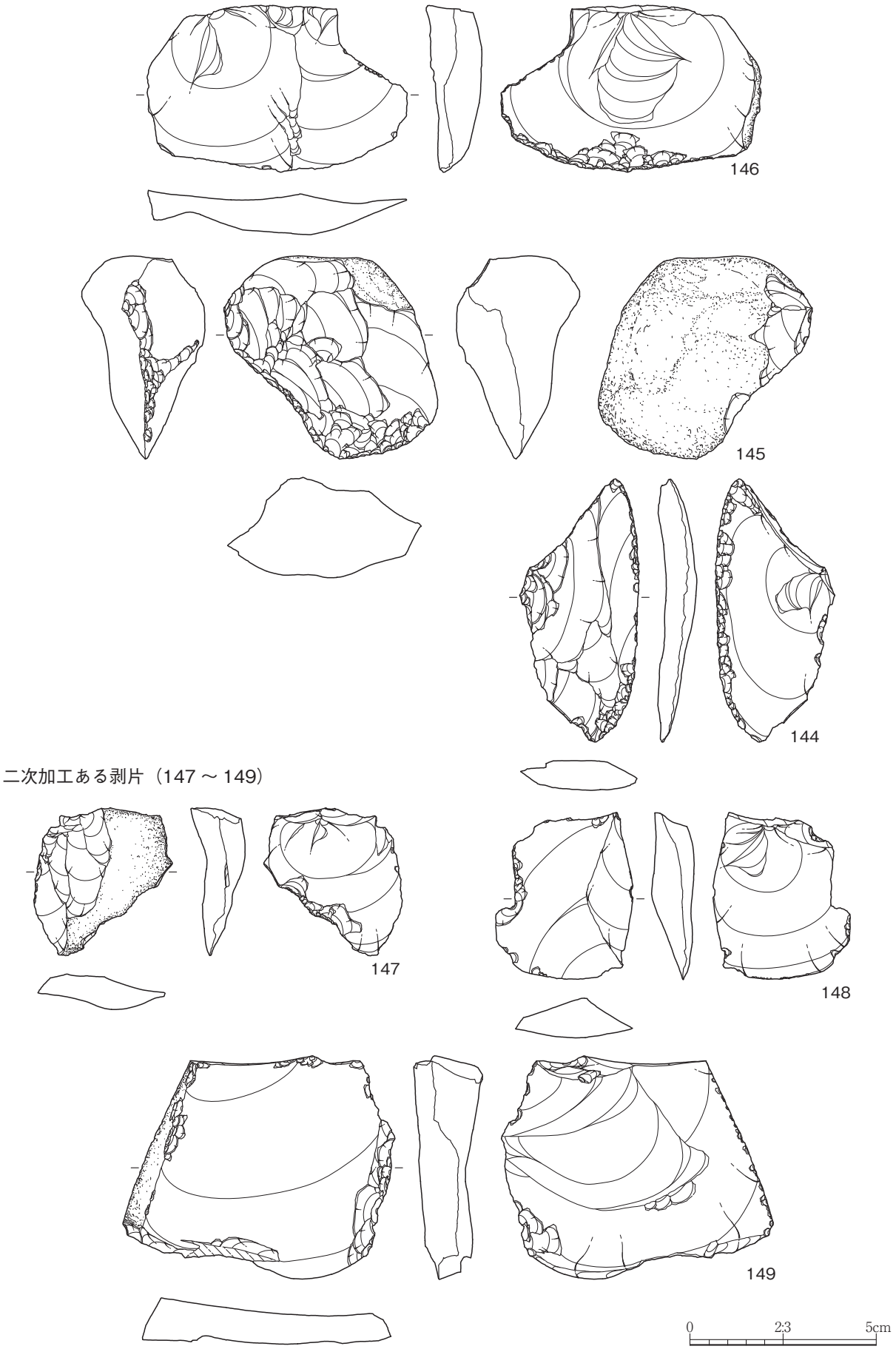

127
128
130
129
131
132
133
0　2:3　5cm
0　1:3　10cm
※132・133
楔形石器（134・135）
134
135

第 49 図　石器（6）

スクレイパー類（136 ～ 146）



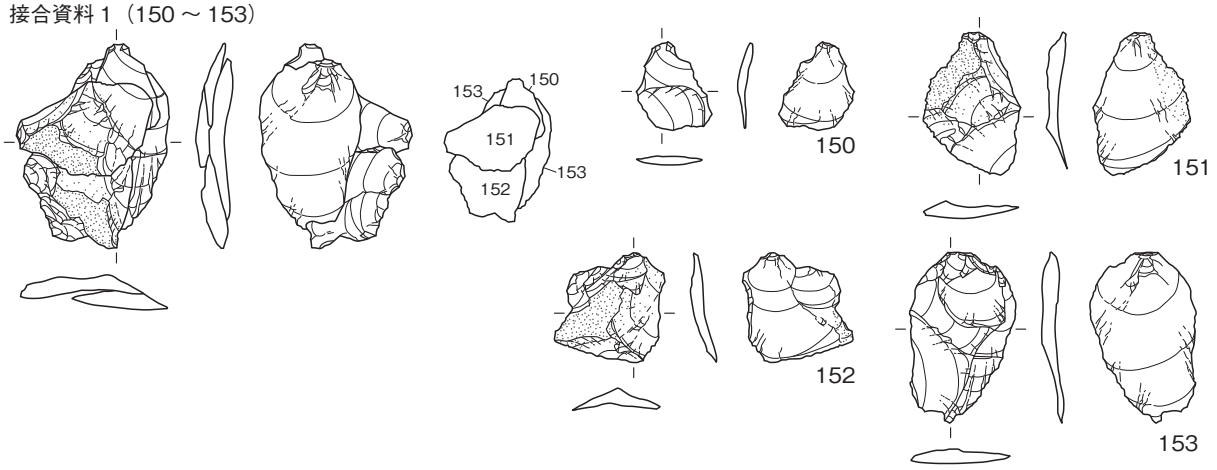
第 50 図　石器（7）



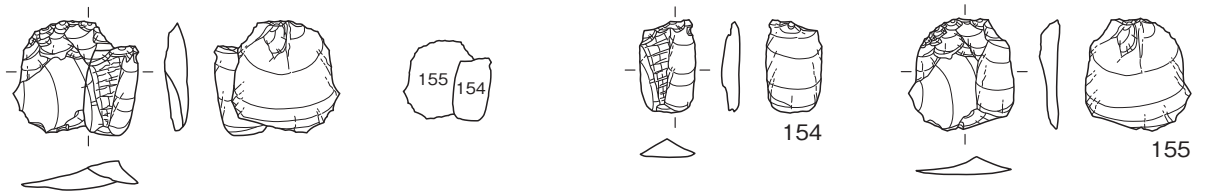
第 51 図　石器（8）

接合資料１～５（150～161）

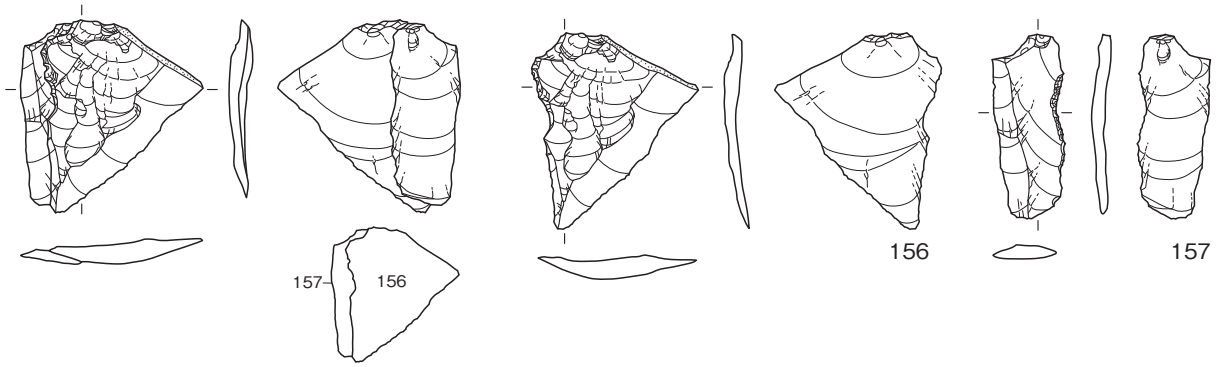
接合資料１（150～153）



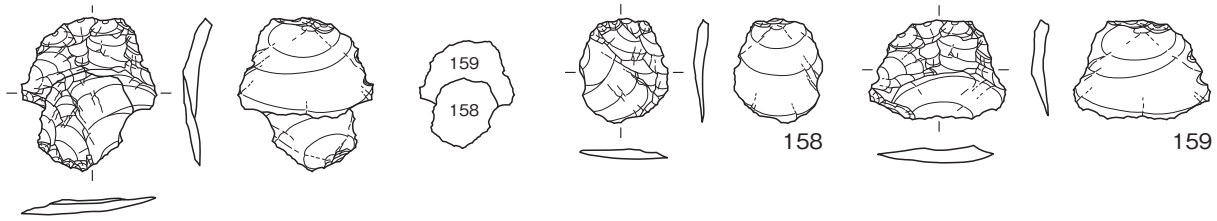
接合資料２（154・155）



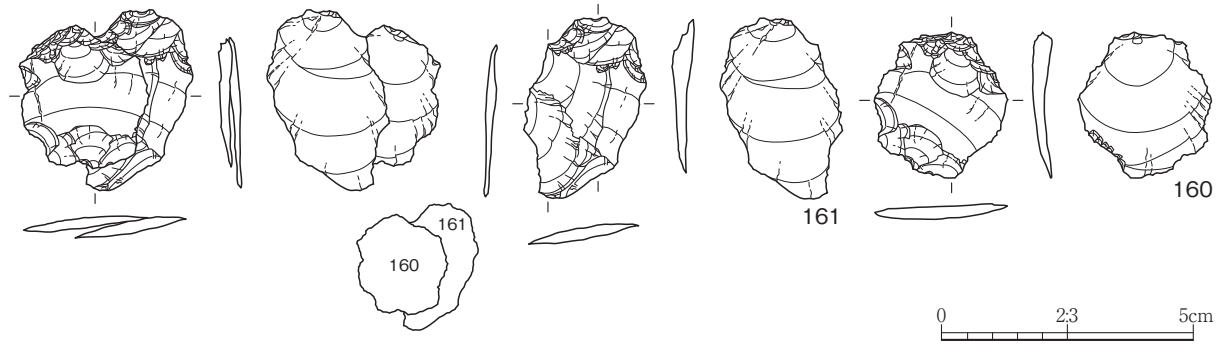
接合資料３（156・157）



接合資料４（158・159）

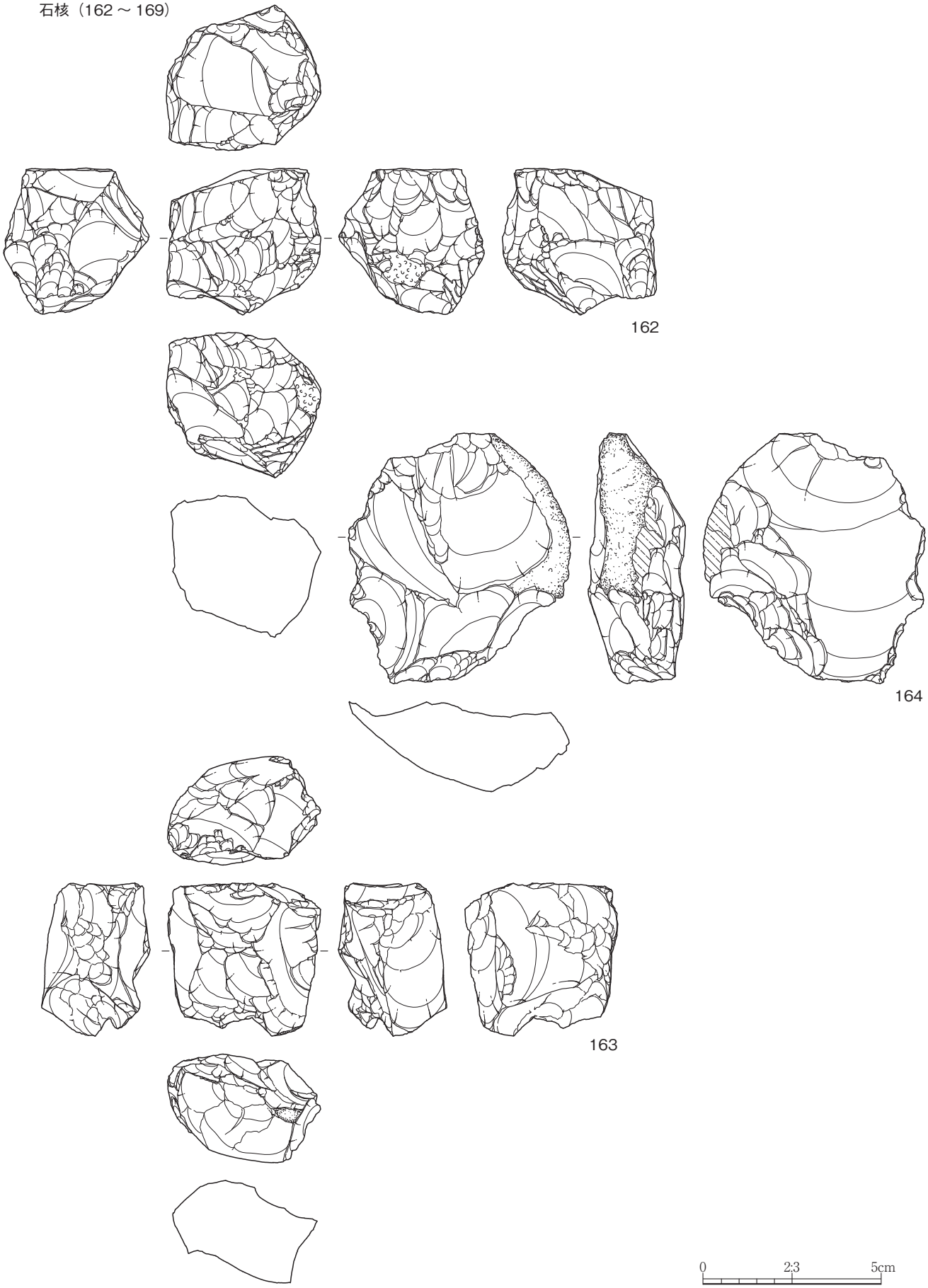


接合資料５（160・161）

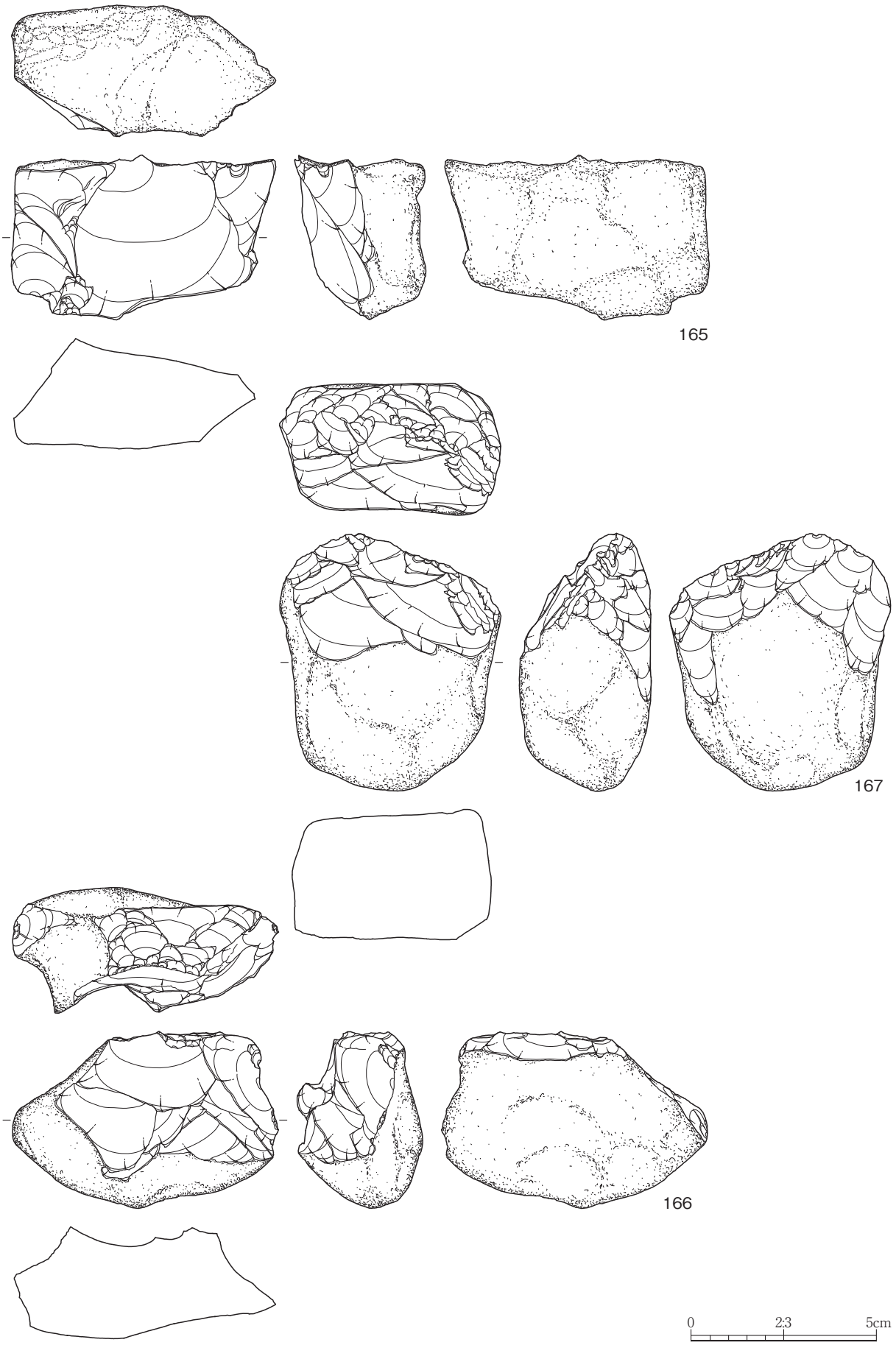


第52図　石器（９）

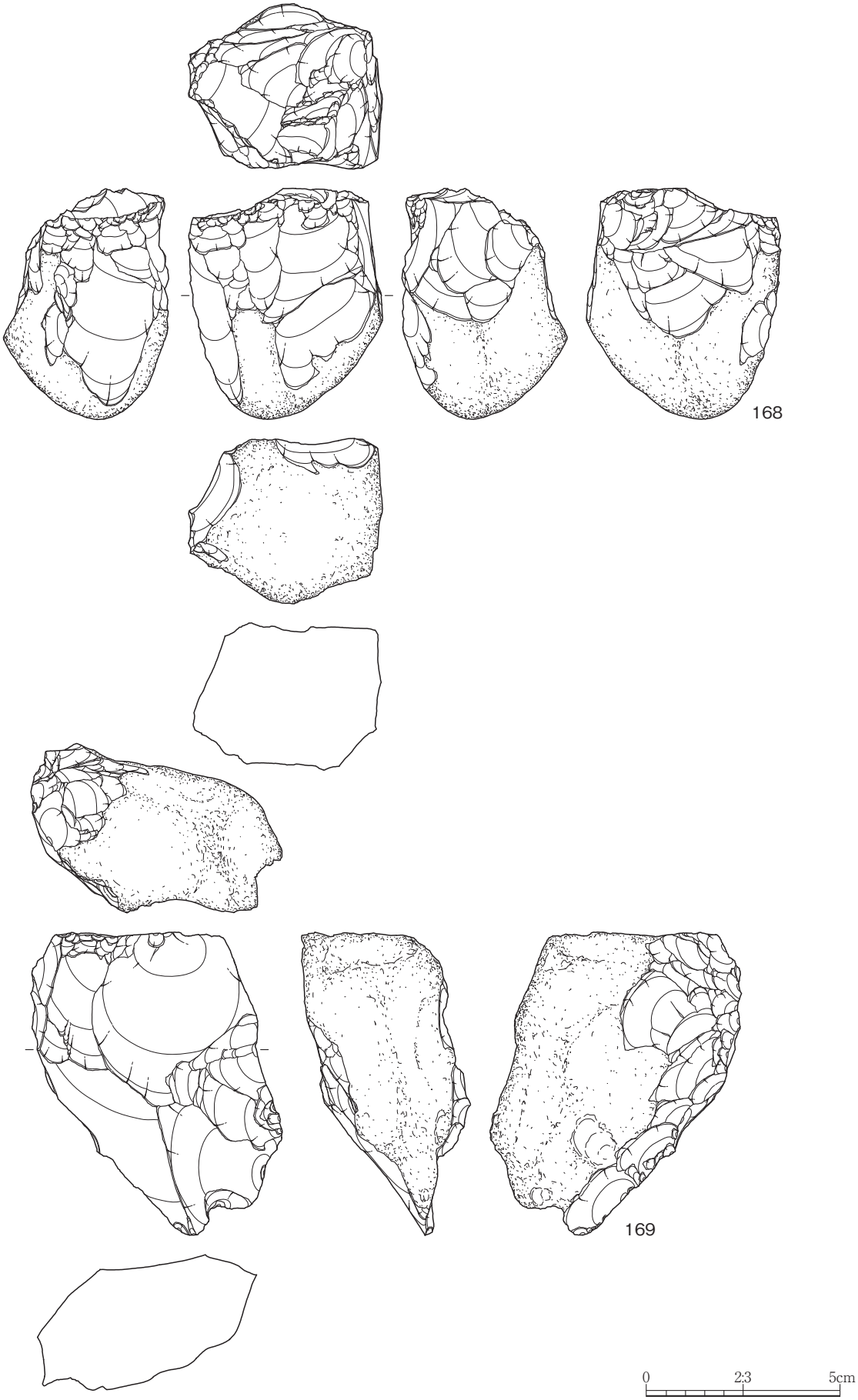
石核（162 ～ 169）



第 53 図　石器（10）

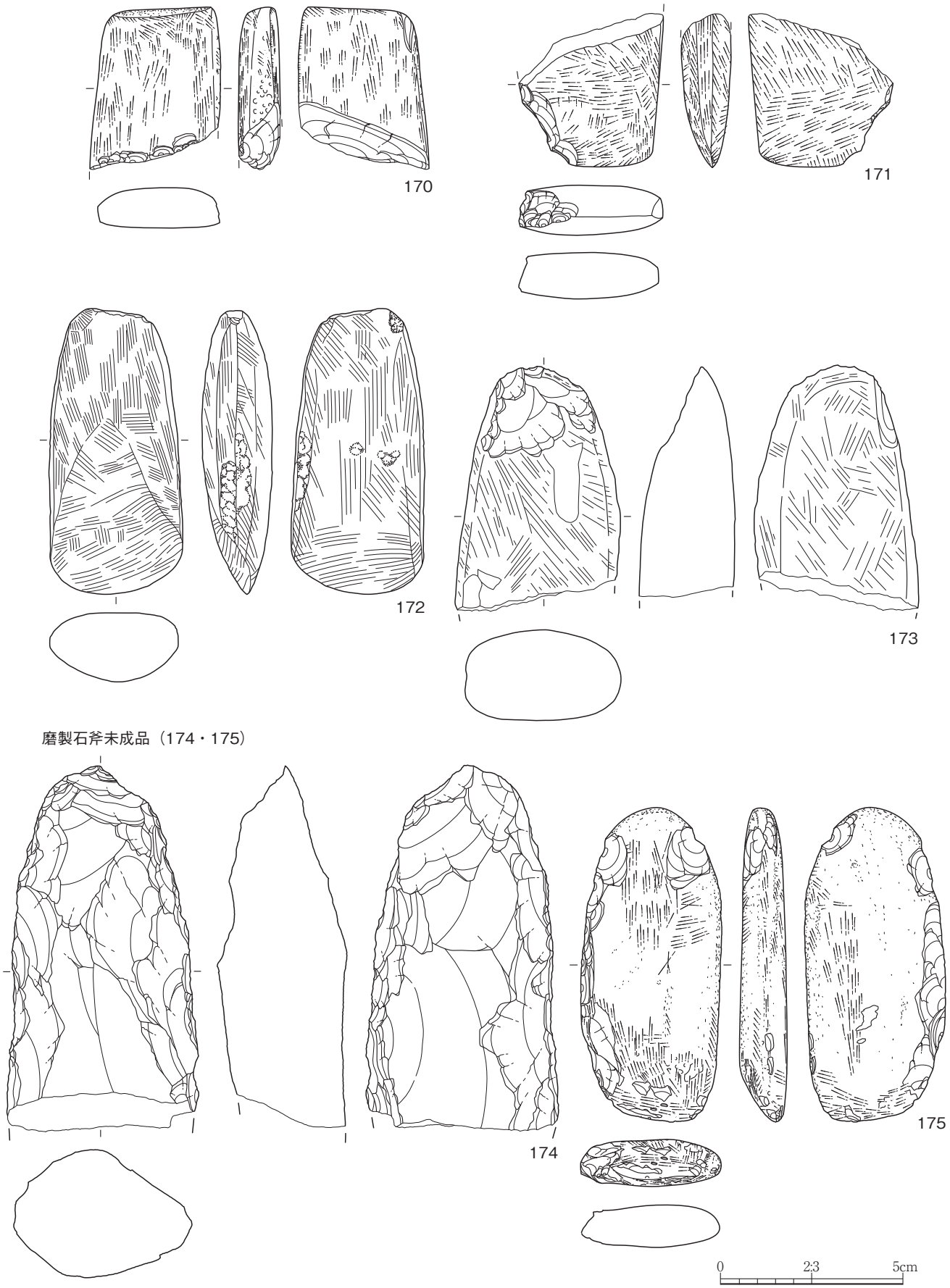


第 54 図　石器（11）



第 55 図　石器（12）

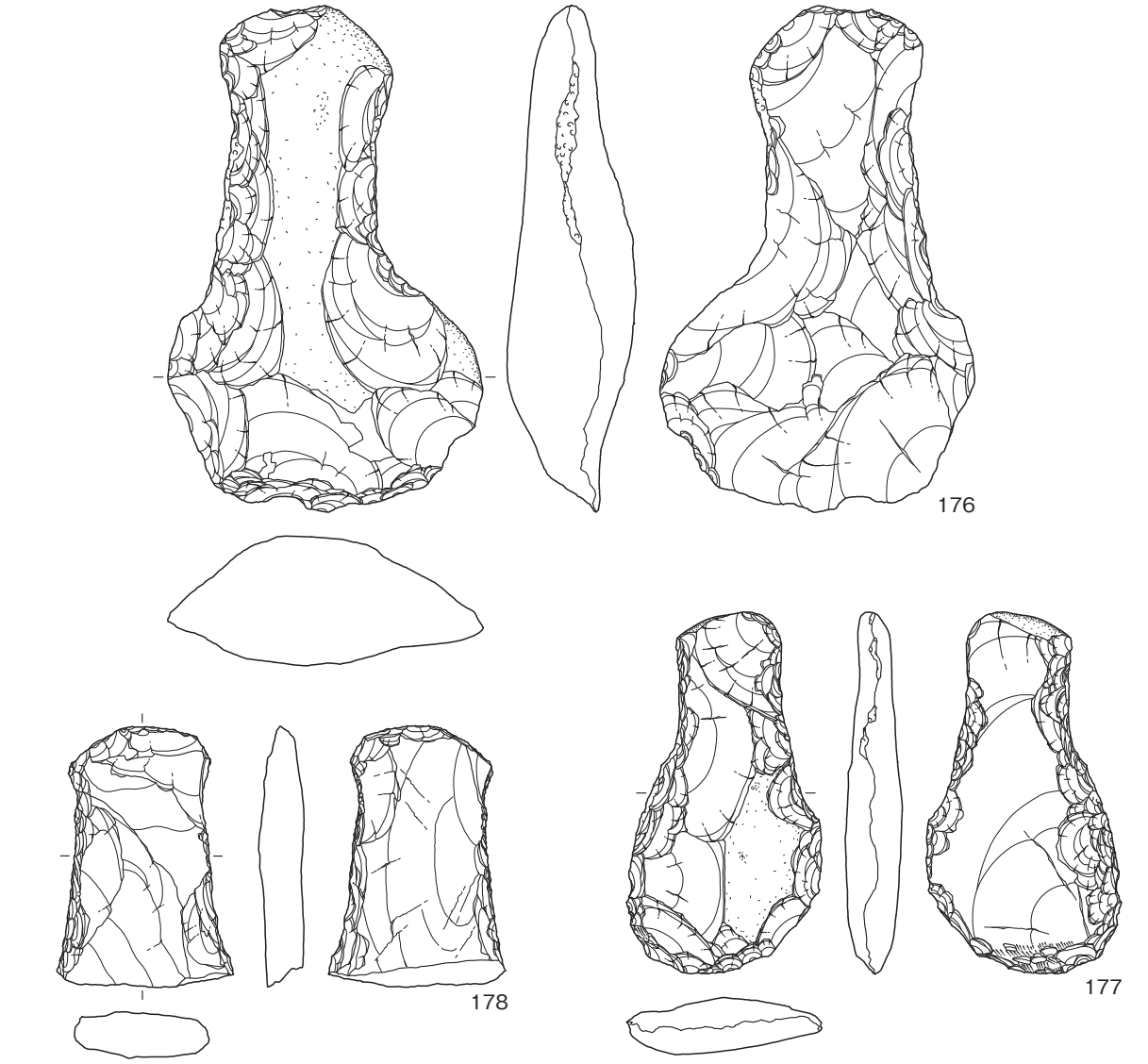
磨製石斧（170 ～ 173）



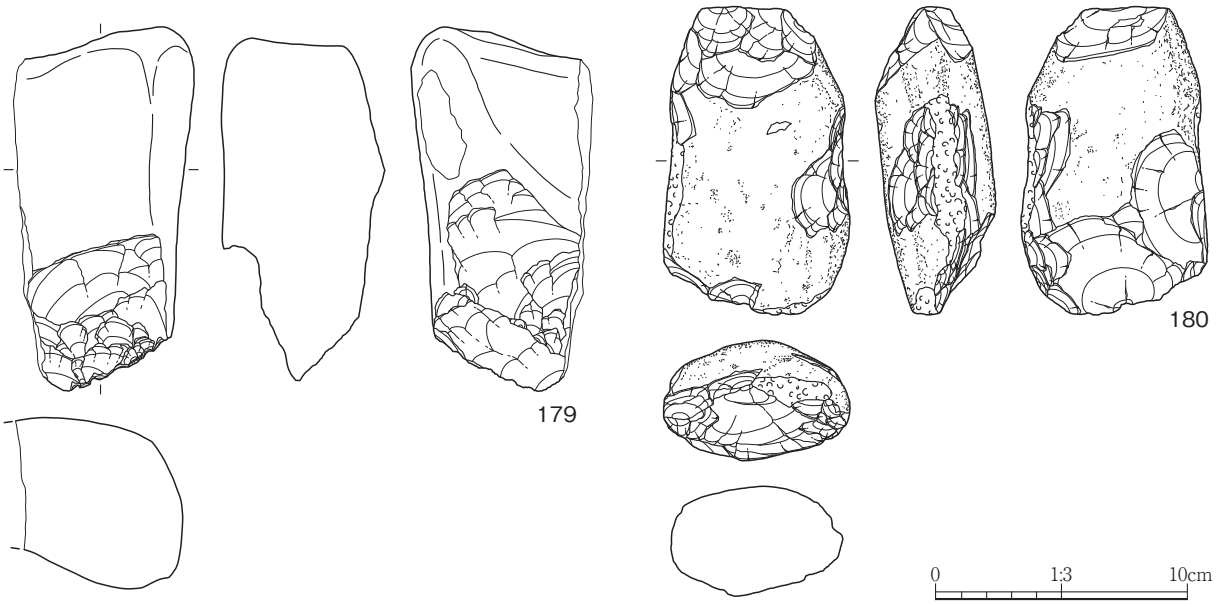
磨製石斧未成品（174・175）

第 56 図　石器（13）

石鏃（176～178）

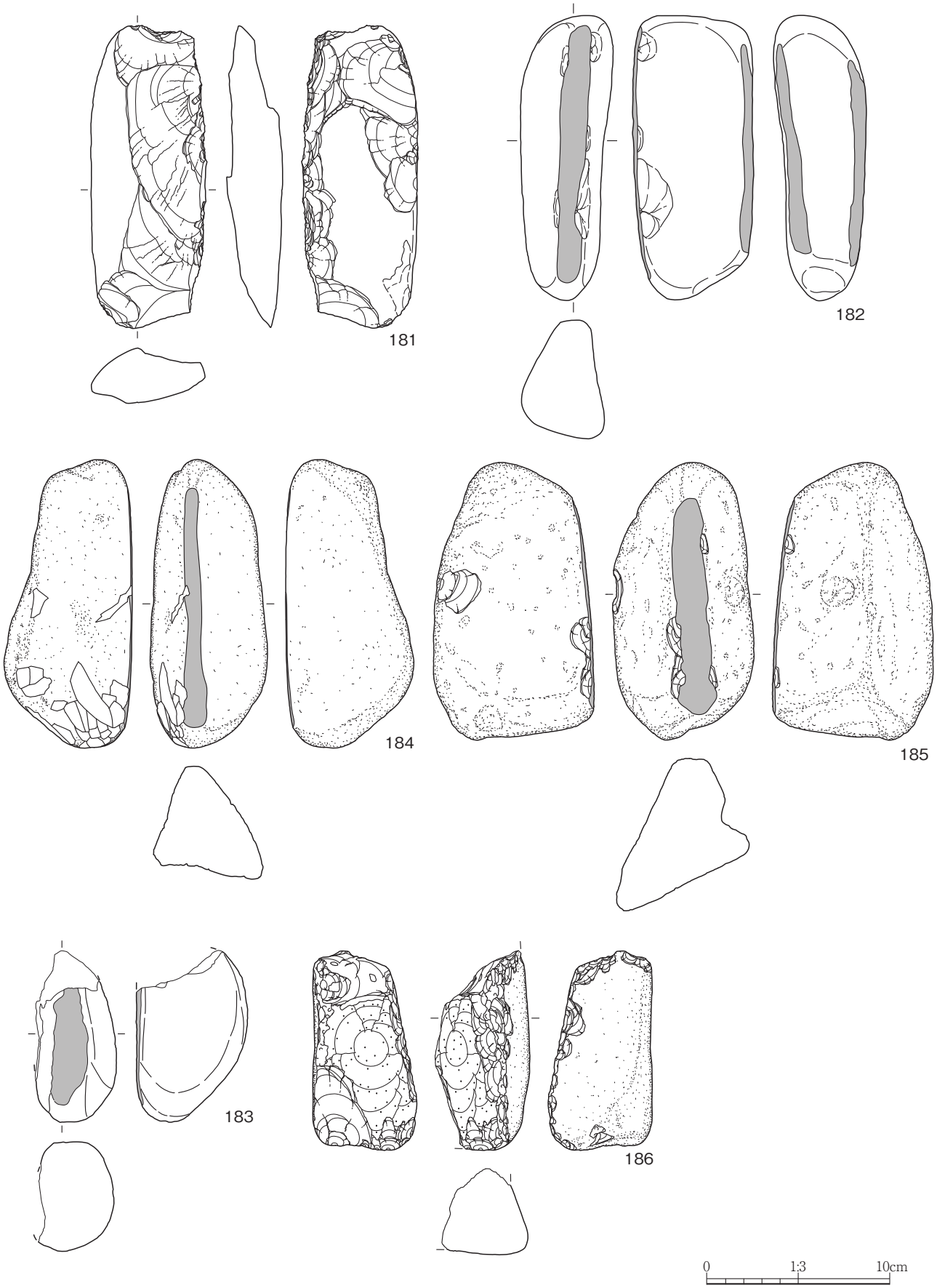


礫器（179・180）

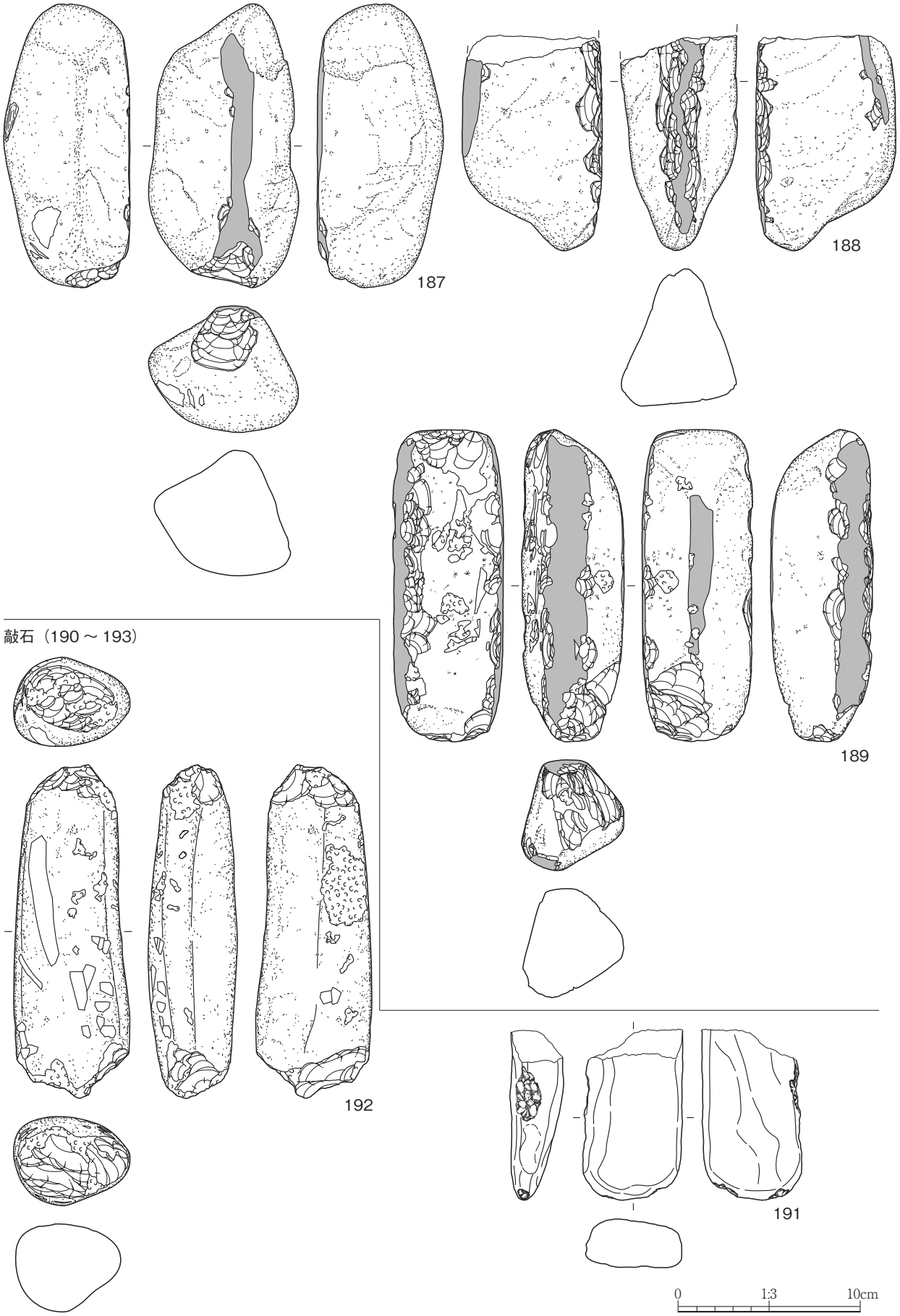


第 57 図　石器（14）

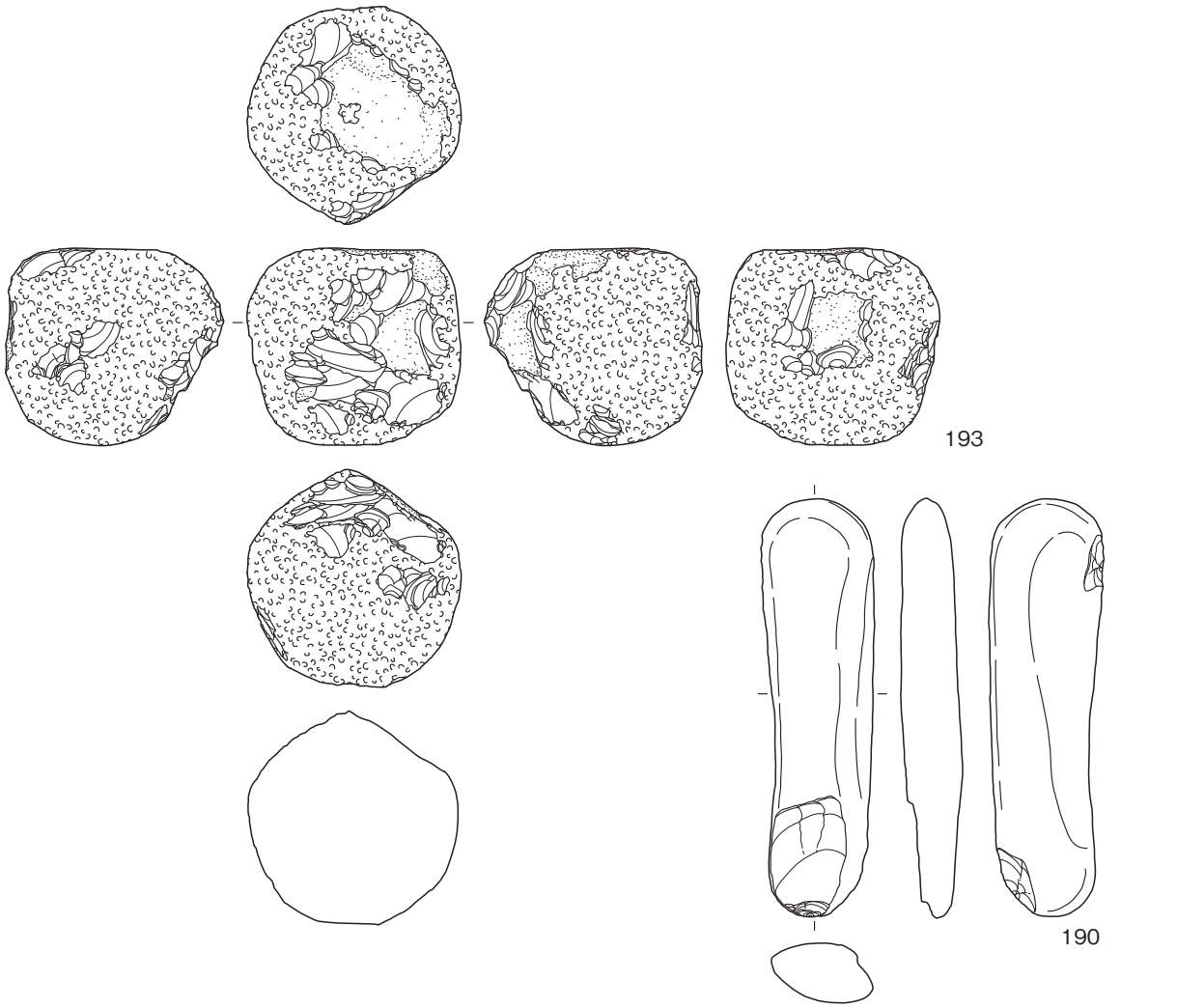
特殊磨石（181 ～ 189）



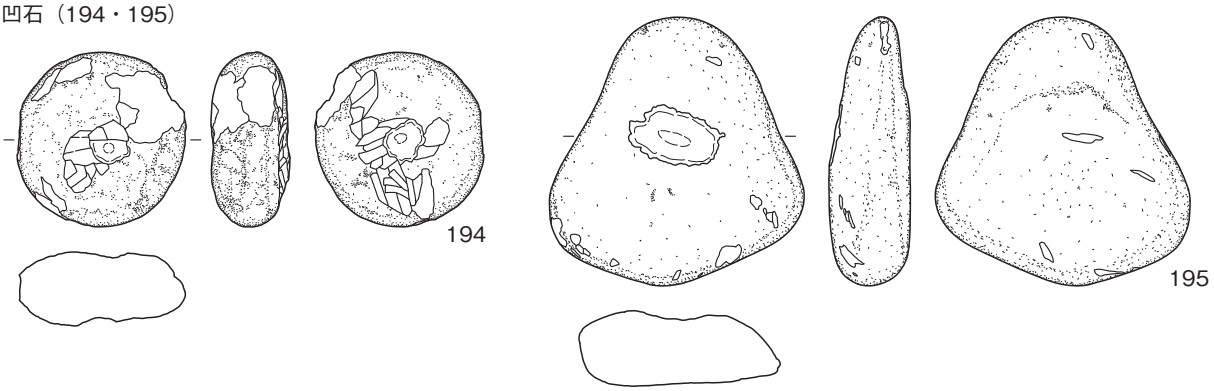
第 58 図　石器（15）



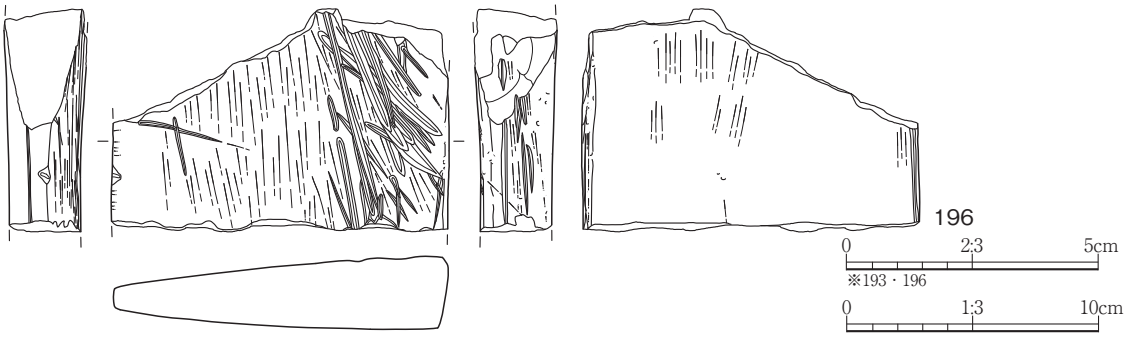
第 59 図　石器（16）



凹石（194・195）

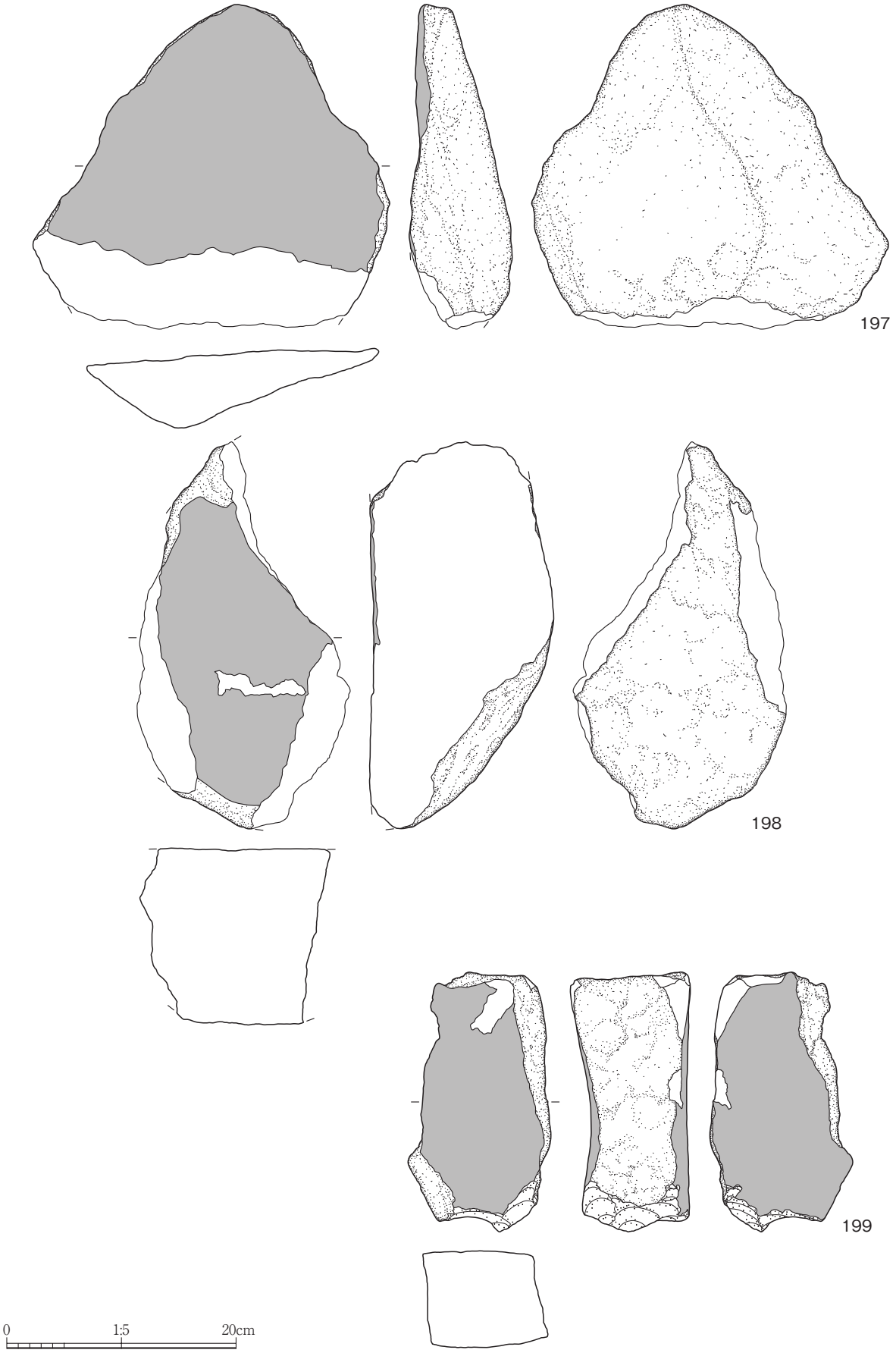


砥石（196）



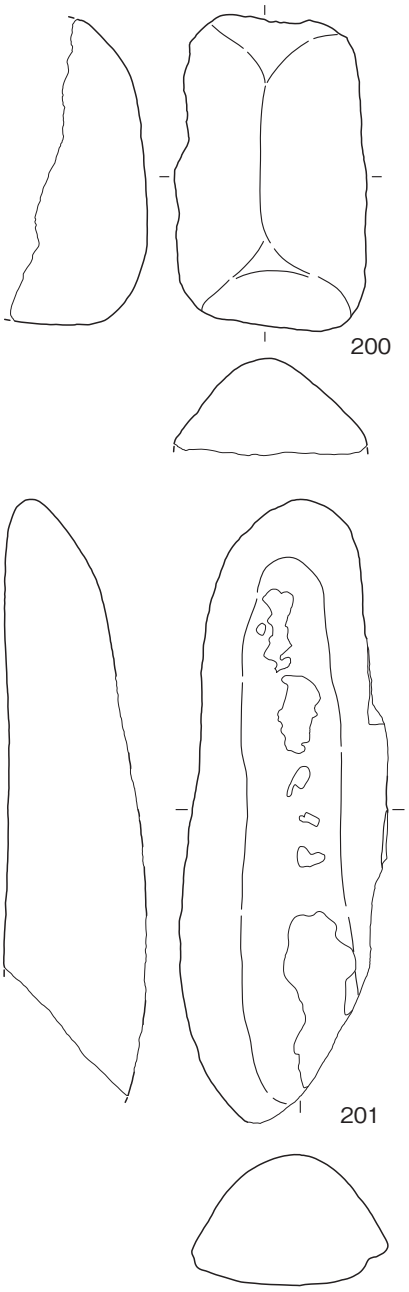
第 60 図　石器（17）

台石（197 ～ 199）

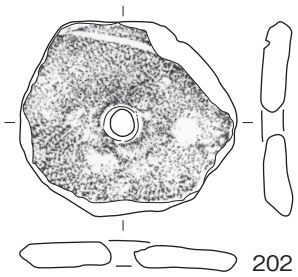


第 61 図　石器（18）

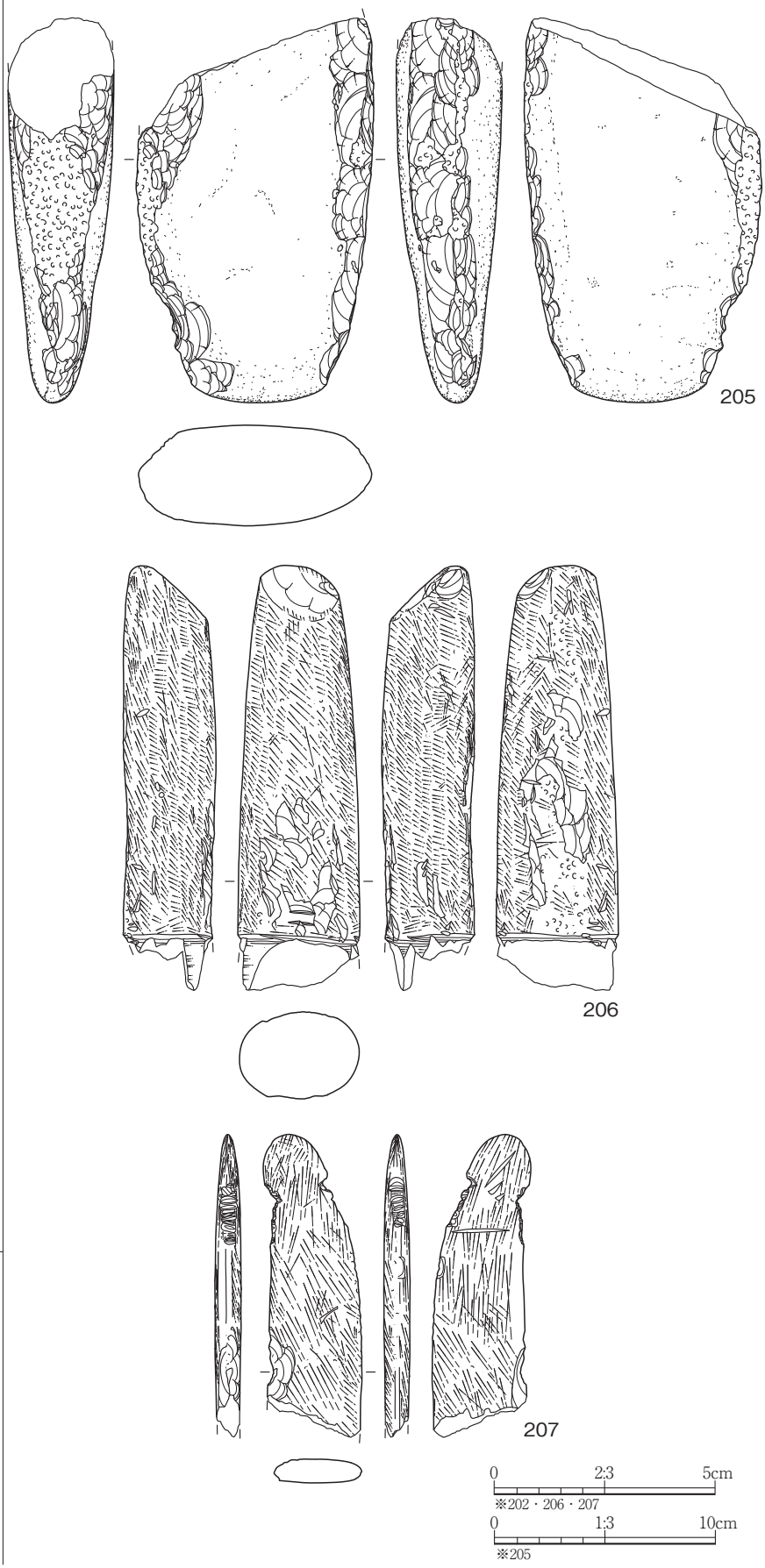
自然礫（200・201）



円盤状土製品（202）

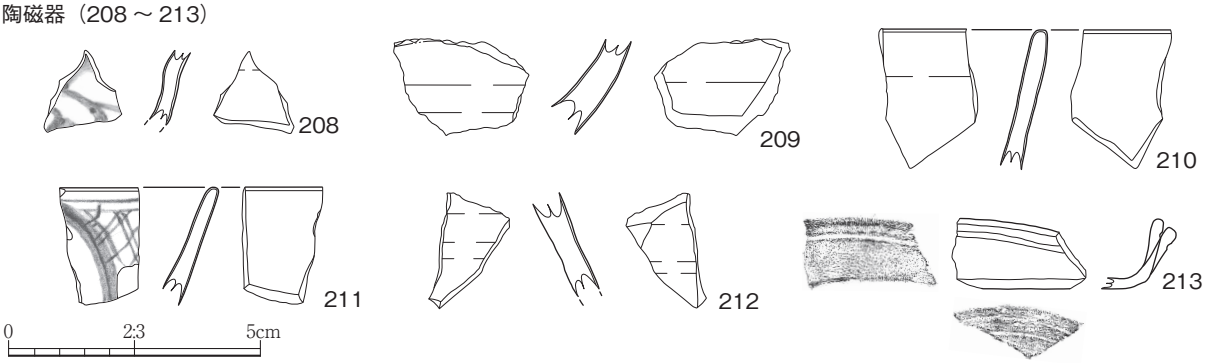


石棒類（205～207）



第62図　石器（19）、土製品、石製品

陶磁器（208～213）



第 63 図　陶磁器

たと考えられる。自然礫は人為的に設置した可能性があることから、墓坑として利用されたと考えられる。石材は、流紋岩（奥羽山脈）・デイサイト（奥羽山脈）各 1 点が出土しており、遺跡近傍の河原で採取したと考えられる。（北田）

その他（未掲載）

その他に、微細剥離痕ある剥片・磨石・異形か・石錘か・炉石各 1 点を出土している。（北田）

3　土　製　品

円盤状土製品（202）・**焼粘土塊**（203・204）

晩期前～中葉の浅鉢片の周囲を打ち欠き、中央に穿孔を行っている。焼粘土塊は、土坑 33 と土坑 75 から出土している。（北田）

4　石　製　品

石棒類（205～207）

205 は土坑 59 底面から出土した石棒類で、大形礫の側面に加工を施している。伴出土器から晩期前葉。206 は土坑 85 埋土から出土した資料で、晩期か。207 は遺構外出土で、晩期と考えられる。石材は、205 がホルンフェルス（奥羽山脈基盤）、206・207 が粘板岩（北上山地）を使用しており、加工がしやすい軟質の石材が選択されている。（北田）

5　陶　磁　器

208・211 は磁器、209・210・212 は陶器、213 は素焼きである。208 は中国産の染付碗で、16 世紀に位置付けられる。市道西側の物見崎遺跡調査の際に類似する磁器が出土しており、同一セットの可能性がある（（財）岩文埋 1990）。中世に比定されることから、二子城に関連する遺物と推測される。209・210 は大堀相馬の陶器埦で 18 世紀後半か、211 は肥前の磁器碗で 18 世紀後半～19 世紀初頭、212 は大堀相馬の徳利かとみられる陶器でいずれも 18 世紀後半かと見られる。213 は在地産のほうろくで、19 世紀代と考えられる。（北田）

第５表　土器観察表（１～87）

（　）：残存値・〈　〉：推定値

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	破片数	総破片数	種類	分類	器種	残存位置	計測値 (cm) 口径	底径	器高	外面調整・施文など	内面調整・施文など	時期	備考	登録No.
1	39	60	竪穴 2QSW	埋土	5	5	縄文土器	ⅠA	尖底深鉢	胴部	－	－	(7.1)	縦位の貝殻条痕文	斜位ナデ	早期中葉	寺の沢式	1
2	39	60	竪穴２ベルト	埋土	2	2	縄文土器	ⅠA	尖底深鉢	胴部上半	－	－	(3.8)	貝殻腹縁文	横位ナデ	早期中葉	寺の沢式	2
3	39	60	竪穴３炉	焼土上面	1	1	縄文土器	ⅢB	深鉢	胴部上半	－	－	(5.1)	縄文 LR（横）を地文に、多重沈線による入組波状文を横位に展開する	横位ナデ	後期前葉	十腰内Ⅰ式（新） 新相	3
4	39	60	竪穴３炉	埋土	1	1	縄文土器	ⅢB	深鉢	口縁部	－	－	(3.3)	平縁、渦状入組文が連結して横位に展開する	横位ナデ	後期前葉	内外面煤付着 十腰内Ⅰ式（新）	4
5	39	60	竪穴３炉	埋土	1	1	縄文土器	ⅢB	深鉢	胴部上半	－	－	(4.5)	縄文 LR（横）を地文に、多重沈線による横位・斜位文が施される	横位ヘラナデ	後期前葉	十腰内Ⅰ式（新） 新相	5
6	39	60	竪穴３炉	埋土	1	1	縄文土器	ⅢB	深鉢	口縁部	－	－	(7.0)	波状縁、縄文 LR（横）を地文に、口縁部に楕円形・四角形区画を持つ	横位ナデ	後期前葉	十腰内Ⅰ式（新）	6
7	39	60	竪穴３炉	埋土	3	3	縄文土器	ⅢB	深鉢	口縁部	－	－	(6.5)	平縁、口縁部無文帯、羽状 LR・RL 非結束	横位ナデ	後期前葉か		7
8	39	60	竪穴３炉	埋土	5	5	縄文土器	ⅢB	深鉢	口縁部～ 胴部上半	－	－	(9.9)	波状縁、隆沈線による方形区画、角に刺突文、区画内無文、縄文 LR（横）	横位ナデ	後期前葉	十腰内Ⅰ式（新）	8
9	39	60	土器埋設遺構１	埋設土器	10	10	縄文土器	ⅣA ～B	粗製深鉢	口縁部～胴部上半・胴部下半～底部	－ －	〈8.4〉 －	(5.2) (12.0)	縄文 LR（横）、風化著しい、底ナデ、上げ底風	横位ナデ	晩期初頭～前葉	内面煤少量付着	55 56
10	39	60	土器埋設遺構２ 土器埋設遺構２	埋設土器 外側土器一括	19 36	55	縄文土器	ⅣA ～B	深鉢	胴部下半～ 底部	－	8.5	(14.7)	縄文 RL（斜）、風化著しく不明瞭、底ナデ	横位ナデ	晩期初頭～前葉	11 と入れ子（10 が外、11 が内）	57
11	39	60	土器埋設遺構２	埋設土器	52	52	縄文土器	ⅣA ～B	深鉢	胴部下半～ 底部	－	7.7	(13.1)	縄文 LR（横）、底ナデ、上げ底風	縦位・横位ナデ	晩期初頭～前葉	10 と入れ子（10 が外、11 が内）	58
12	39	60	土器埋設遺構３	埋設土器一括	11	11	縄文土器	ⅣA ～B	深鉢	胴部下半～ 底部	－	9.0	(8.1)	剥落のため不明瞭、底ナデ、やや上げ底風	横位ナデと見られるが不明瞭	晩期初頭～前葉		59
13	39	60	土器埋設遺構４	埋設土器一括	18	18	縄文土器	ⅣA ～B	深鉢	口縁部～ 胴部上半	〈36.0〉	－	(12.9)	平縁、縄文 LR（横）	横位ナデ	晩期初頭～前葉	外面焦げ少量付着	60
14	40	60	土器埋設遺構５	埋設土器一括	19	19	縄文土器	ⅣA	深鉢	胴部下半～ 底部	－ －	－ 7.6	(6.3) (3.7)	縄文 LR（斜）、内外面剥落著しく不明瞭	斜位ナデ	晩期前葉	大洞 B2 式か	61
15	40	60	土坑８	埋土	1	1	縄文土器	ⅢA	深鉢	口縁部	－	－	(4.1)	平縁、山形突起、口縁部無文帯、ボタン状貼付、沈線モチーフ、縄文 LR（横）、赤色塗彩か	横位ナデ	後期初頭～前葉	綱取Ⅰ式	13
16	40	60	土坑 15 土坑 15	埋土 底面　土器１	15 20	35	縄文土器	ⅣA ～B	深鉢	胴部下半～ 底部	－	6.0	(9.1)	胴：縄文 LR（横）、底付近・底：ナデ（横）	斜位・横位ナデ	晩期初頭～前葉		14
17	40	60	土坑 26 土坑 26	底面 埋土	13 8	21	縄文土器	ⅣA ～B	深鉢	胴部下半～ 底部	－	8.9	(4.7)	胴部下半：縄文下位の横位ナデのみ、底：多方向ナデ、上げ底風	横位ナデ	晩期前葉		50
18	40	60	土坑 28	埋土	1	1	縄文土器	ⅢB	壺	口縁部付近	－	－	(4.7)	平縁、弧線文	横位ナデ	後期前葉	十腰内Ⅰ式（新）	16
19	40	61	土坑 31	埋土	6	6	縄文土器	ⅢB	深鉢	胴部	－	－	(14.6)	縄文 RL（横）	横位ナデ	後期前葉か	外面焦げ多量付着	17
20	40	61	土坑 32	埋土	1	1	縄文土器	ⅣA ～B	鉢	口縁部	－	－	(4.7)	平縁、平行沈線、縄文 LR（横）	横位ナデ	晩期前葉		18

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	破片数	総破片数	種類	分類	器種	残存位置	計測値(cm) 口径	底径	器高	外面調整・施文など	内面調整・施文など	時期	備考	登録No.
21	40	61	土坑 37	埋土	1	1	縄文土器	Ⅳ B	注口	肩部～注口部	－	－	(2.4)	C 字文か	横位ナデ	晩期前葉	大洞 BC2 式か	19
22	40	61	土坑 43	埋土	1	1	縄文土器	Ⅳ A ～ B	鉢	口縁部	－	－	(4.7)	平縁、沈線、縄文 RL（横）	横位ミガキ	晩期前葉		20
23	40	61	土坑 48	埋土	1	1	縄文土器	Ⅳ B	注口	肩部	－	－	(2.3)	雲形文、半肉彫的	横位ナデ	晩期前葉	大洞 BC1 式か	21
24	40	61	土坑 48	埋土	13	13	縄文土器	Ⅳ B	注口	注口部	－	－	(4.2)	C 字文、半肉彫的、隆線、沈線	横位ナデ	晩期前葉	大洞 BC2 式か	22
25	40	61	土坑 49 32I4	埋土上位　1 層 地山直上	67 1	68	縄文土器	Ⅳ A	壺	頸部～底部	－	5.2	(10.7)	頸部無文帯、磨消、縄文 LR（多方向）充填、半肉彫的	多方向ナデ、指頭痕	晩期前葉	大洞 B2 式か	29
26	40	61	土坑 49	埋土上位（黒褐色土）	1	1	縄文土器	Ⅳ A	鉢	口縁部	－	－	(2.9)	小波状縁、入組三叉文	横位ナデ	晩期前葉	大洞 B2 式か	25
27	40	61	土坑 49	埋土上位（黒褐色土）	1	1	縄文土器	Ⅳ A	鉢	口縁部	－	－	(3.4)	平縁、B 突起、平行する多重沈線、縄文 RL（横）	横位ミガキ	晩期前葉	大洞 B2 式か	26
28	40	61	土坑 49 土坑 49	埋土上位 一括土器（写図有り）	2 21	23	縄文土器	Ⅳ A	鉢	口縁部～ 胴部下半	16.0	－	(13.8)	小波状縁、平行沈線、入組三叉文、縄文 RL（横）	横位ナデ	晩期前葉	大洞 B2 式	28
29	40	61	土坑 49	埋土上位（黒褐色土）	1	1	縄文土器	Ⅳ A	深鉢	口縁部	－	－	(4.5)	平縁、2 個一対の刻みを持つ台形突起、縄文 LR（横）、沈線、磨消	横位ナデ	晩期初頭	大洞 B1 式	23
30	40	61	土坑 49	埋土上位（黒褐色土）	1	1	縄文土器	Ⅳ A ～ B	深鉢	口縁部	－	－	(4.5)	平縁、口端刻み目による小波状、平行沈線、縄文 LR（横）	横位ナデ	晩期初頭～前葉		24
31	40	61	土坑 49	埋土上位　1 層	1	1	縄文土器	Ⅳ A	深鉢	口縁部	－	－	(5.0)	小波状縁、入組三叉文、平行沈線、縄文 RL（横）	横位ナデ	晩期前葉	大洞 B2 式	27
32	40	61	土坑 49 土坑 49	埋土上位（黒褐色土） 埋土中位　3 層	8 1	9	縄文土器	Ⅳ A ～ B	深鉢	胴部下半～ 底部	－ －	〈8.0〉 －	(5.7) (8.2)	縄文 LR（横）、底ナデ	多方向ナデ	晩期初頭～前葉		30 31
33	41	61	土坑 60　土器No. 1 土坑 61	埋土 埋土一括	35 4	39	縄文土器	Ⅳ A ～ B	壺	口縁部～ 胴部上半	〈7.8〉	－	(6.5)	平縁、口縁部無文帯、頸部沈線、縄文 LR（横）	横位ナデ	晩期前葉		33 34
34	41	61	土坑 60　土器No. 1	埋土	1	1	縄文土器	Ⅳ D	鉢	口縁部付近	－	－	(2.6)	平行沈線、縄文 LR（横）	横位ナデ	晩期末葉か	大洞 A' 式か	32
35	41	61	土坑 61	埋土一括	1	1	縄文土器	Ⅳ A	鉢	口縁部付近	－	－	(3.2)	入組三叉文、平行沈線、匹字文風、縄文 LR（横）	横位ミガキ	晩期前葉	大洞 B2 式	35
36	41	61	土坑 64	埋土	1	1	縄文土器	Ⅳ A	深鉢	口縁部	－	－	(3.4)	平縁、入組三叉文	横位ナデ	晩期前葉	大洞 B2 式	36
37	41	61	土坑 66	埋土	1	1	縄文土器	Ⅳ A	注口	肩部	－	－	(2.0)	斜位・横位ミガキ	斜位・横位ナデ	晩期前葉	大洞 B2 式	37
38	41	61	土坑 73・陥し穴 25 土坑 73	埋土 埋土	17 4	21	縄文土器	Ⅳ A	精製深鉢	口縁部～ 胴部上半	－	－	(17.4)	口端小波状、入組三叉文、縄文 LR（横）、平行沈線	横位ナデ	晩期前葉	大洞 B2 式、内面焦げ全体に薄く付着	38
39	41	61	土坑 73・陥し穴 25	埋土	4	4	縄文土器	Ⅳ A	精製深鉢	胴部上半	－	－	(6.3)	入組三叉文、縄文 RL（横）、沈線、磨消	横位ナデ	晩期前葉	大洞 B2 式	39
40	41	61	土坑 74	埋土	1	1	縄文土器	Ⅳ A	精製深鉢	口縁部	－	－	(4.1)	口端刻み目による小波状、入組三叉文、縄文 RL（横）、沈線	横位ナデ	晩期前葉	大洞 B2 式	40
41	41	61	土坑 75	埋土	2	2	縄文土器	Ⅳ A	精製深鉢	口縁部	－	－	(6.4)	平縁、縄文 LR（横）	横位ナデ	晩期前葉	大洞 B2 式か	41
42	41	61	土坑 77	埋土	1	1	縄文土器	Ⅳ A	注口	注口部	－	－	(4.7)	入組三叉文、沈線	横位ナデ	晩期前葉	大洞 B2 式	42
43	41	61	土坑 78	埋土	1	1	縄文土器	Ⅳ A	鉢	口縁部	－	－	(3.1)	平縁、B 突起、入組三叉文、沈線	横位ナデ	晩期前葉	大洞 B2 式	43

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	破片数	総破片数	種類	分類	器種	残存位置	計測値(cm) 口径	底径	器高	外面調整・施文など	内面調整・施文など	時期	備考	登録No.
44	41	61	土坑 78	埋土	1	1	縄文土器	Ⅳ B	鉢	口縁部	−	−	(3.4)	平縁、B 突起、羊歯状文、沈線	横位ナデ	晩期前葉～中葉	大洞 BC2 式か、内外面煤少量付着	44
45	41	61	土坑 78	埋土	1	1	縄文土器	Ⅳ A	注口	注口部	−	−	(3.1)	沈線	横位ナデ	晩期前葉	大洞 B2 式	45
46	41	61	土坑 78	埋土	3	3	縄文土器	Ⅳ A	精製深鉢	口縁部	−	−	(7.7)	口端刻み目による小波状、入組三叉文、縄文 RL（横）、沈線	横位ナデ	晩期前葉	大洞 B2 式	46
47	41	61	土坑 81 北半	埋土	1	1	縄文土器	Ⅲ B	深鉢	口縁部付近	−	−	(3.6)	方形区画、縄文 LR（横）、沈線、磨消	横位ナデ	後期前葉	十腰内 I 式（新）	47
48	41	61	土坑 82	埋土	1	1	縄文土器	Ⅳ A	精製深鉢	口縁部	−	−	(4.4)	口端小波状、入組三叉文、縄文 LR（横）、沈線	横位ナデ	晩期前葉	大洞 B2 式	48
49	41	61	土坑 83	埋土	3	3	縄文土器	Ⅳ A ～ B	深鉢	口縁部付近	−	−	(3.2)	沈線	横位ナデ	晩期初頭～前葉		49
50	41	62	土坑 84	埋土上位	12	12	縄文土器	Ⅲ B	深鉢	口縁部～胴部上半	〈20.7〉	−	(17.3)	平縁、最大径が胴部上半にある深鉢、口縁部無文帯か、縄文 RL（横）、内外面剥落著しく不明瞭	横位ナデか	後期前葉	十腰内 I 式（新）	51
51	41	62	土坑 84	埋土上位	3	3	縄文土器	Ⅱ	深鉢	口縁部	〈28.3〉	−	(3.7)	平縁、内傾する口縁、口縁部無文帯、縄文 LR（横）	横位ナデ	中期末葉	大木 10 式	52
52	42	62	土坑 86	埋土	3	3	縄文土器	Ⅲ B	壺	口縁部～胴部上半	−	−	(9.0)	平縁、台形状突起、口縁部無文帯、ボタン状貼付、縄文 RL（横）、赤色塗彩か	横位ナデ	後期前葉	外面煤多量付着 十腰内 I 式（新）	15
53	42	62	陥し穴状遺構 3 西半	埋土中位	4	4	縄文土器	Ⅰ A	尖底深鉢	胴部	− −	− −	(4.0) (3.8)	U 字形の沈線文、半裁竹管による鋸歯状の多重沈線文	横位ナデ	早期中葉	寺の沢式	53 54
54	42	62	溝 1	断面 A から東へ 1m の地点 埋土下位	1	1	縄文土器	Ⅱ	深鉢	胴部	−	−	(7.4)	沈線、磨消、縄文 RL（横）	横位ナデ	中期末葉	大木 10 式	63
55	42	62	溝 24	埋土	1	1	縄文土器	Ⅰ B	尖底深鉢	胴部	−	−	(10.1)	縄文 LR（斜）	横位ナデ	早期後葉	槻木 1 式か	64
56	42	62	P52	埋土上位	1	1	縄文土器	Ⅰ A	尖底深鉢	口縁部付近	−	−	(3.7)	貝殻押引による弧線文、胴部横位ミガキ	横位ナデ	早期中葉	寺の沢式	62
57	42	62	3E4	褐色土	1	1	縄文土器	Ⅰ A	尖底深鉢	口縁部	−	−	(5.6)	平縁、斜行する貝殻腹縁文	横位ナデ	早期中葉	寺の沢式	66
58	42	62	19G4	黒褐色土	1	1	縄文土器	Ⅰ A	尖底深鉢	口縁部付近	−	−	(10.4)	貝殻腹縁文（横・縦）、貝殻押引文	斜位・横位ナデ	早期中葉	寺の沢式	67
59	42	62	21J4 落ち込み	地山直上	2	2	縄文土器	Ⅰ A	尖底深鉢	胴部	−	−	(3.2)	貝殻押引を伴う貝殻条痕文	横位ナデ	早期中葉	寺の沢式	69
60	42	62	29H3	地山直上	1	1	縄文土器	Ⅰ A	尖底深鉢	胴部	−	−	(3.6)	斜位の貝殻腹縁文	剥落著しく不明	早期中葉	寺の沢式	89
61	42	62	29I4	地山直上	1	1	縄文土器	Ⅰ A	尖底深鉢	胴部上半	−	−	(4.0)	横位の貝殻条痕文、貝殻押引文による区画	斜位ナデ	早期中葉	寺の沢式	90
62	42	62	23H3	地山直上	1	1	縄文土器	Ⅰ B	尖底深鉢	口縁部	−	−	(3.4)	平縁、口端縄文 LR 回転、細隆起線文とそれに伴う沈線、斜位の条痕文を施す	横位ナデ	早期後葉	槻木 1 式か	87
63	42	62	21H1 倒木痕	黒褐色土	1	1	縄文土器	Ⅱ	深鉢	口縁部	−	−	(4.9)	中空突起、隆線に沿う刺突列	横位ナデ	中期末葉	大木 10 式新段階	68
64	42	62	県生文課試掘トレンチ付近（22M2）	表採	1	1	縄文土器	Ⅲ B	深鉢	口縁部	−	−	(6.6)	大波状縁、折り返しによる二重口縁、縄文 LR（斜）を地文に沈線・磨消によるモチーフ、ボタン状貼付を伴うか	横位ナデ	後期前葉	十腰内 I 式（新）	83
65	42	62	22M4 試掘トレンチ（22M2）	地山直上 I 層表土	1 1	2	縄文土器	Ⅲ B	深鉢	胴部	− −	− −	(7.3) (4.8)	口縁部～胴部上半にかけて縄文 LR（斜）を地文に、2 ～ 3 条の平行沈線で文様を表出する	横位ナデ	後期前葉	十腰内 I 式（新）	84 85

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	破片数	総破片数	種類	分類	器種	残存位置	計測値(cm) 口径	底径	器高	外面調整・施文など	内面調整・施文など	時期	備考	登録No.
66	42	62	22M2 倒木痕	埋土	1	1	縄文土器	ⅢB	深鉢	口縁部	−	−	(1.9)	単軸絡条体第５類（R・横）	横位ナデ	後期前葉	十腰内Ⅰ式（新）	78
67	42	62	22L3	地山直上	1	1	縄文土器	Ⅱ	深鉢	口縁部	−	−	(4.2)	平縁、口縁部無文帯、縄文LR（横）	横位ナデ	中期末葉	大木10式	76
68	42	62	21N1	褐色土	1	1	縄文土器	ⅢB	深鉢	口縁部付近	−	−	(3.8)	隆線上の縄文LR横回転、隆線、縄文LR（横）を地文に弧線文を施す	横位ナデ	後期前葉	十腰内Ⅰ式（新）	72
69	42	62	21M1	褐色土	1	1	縄文土器	ⅣA	壺	口縁部	−	−	(3.0)	沈線、赤色塗彩（全面だが、剥落して一部残る）	横位ナデ、赤色塗彩	晩期前葉	大洞B2式か	70
70	42	62	21M2	褐色土	1	1	縄文土器	ⅣA	鉢	底部	−	5.3	(0.7)	底部縁に横走沈線	ナデ	晩期前葉	大洞B2式か	71
71	42	62	22M2	検出面	1	1	縄文土器	ⅣD	台付鉢	口縁部	−	−	(4.1)	平縁、B突起、口端に斜位刻み目、匹字文、縄文LR（横）	横位ミガキ	晩期末葉	大洞A'式か	9
72	42	62	21N3	褐色土	1	1	縄文土器	ⅣC	台付鉢	口縁部～胴部上半	−	−	(4.2)	平縁、口端刻み目、２個一対の突起、雲形文、沈線、磨消、縄文LR（横）	内面口端沈線、横位ミガキ	晩期中葉	大洞C2式か	74
73	42	62	試掘トレンチ（21N4）	褐色土	1	1	縄文土器	ⅣC	台付鉢	口縁部～胴部上半	−	−	(5.9)	緩やかな小波状縁、雲形文、沈線、磨消、縄文LR（横）、口縁部が内側に屈曲、胴部は直線的	横位ミガキ	晩期中葉	大洞C2式か、外面煤少量付着	75
74	42	62	29G4 倒木痕	黒褐色土	1	1	縄文土器	ⅣC	台付鉢	胴部下半～台部	−	8.8	(3.8)	沈線、磨消、横位ミガキ、台部に縄文LR（横）	横位ミガキ	晩期中葉	大洞C2式か	91
75	42	62	19H2	黒褐色土	1	1	縄文土器	ⅣC	台付鉢	台部（四脚）	−	−	(3.7)	四脚の付いた鉢の台部、器面に貼り付いていた上部が器形に沿って傾いている。台部に下位に横走沈線、縦位ミガキで仕上げている。		晩期中葉	大洞C2式か	94
76	42	62	22M2	検出面	1	1	縄文土器	ⅣD	台付浅鉢	胴部下半	−	−	(5.8)	平行沈線、匹字文、斜位ミガキ	斜位ミガキ	晩期末葉	大洞A'式か	11
77	42	62	22L4	地山直上	2	2	縄文土器	ⅣB	台付浅鉢	口縁部	−	−	(3.7)	平縁、二叉状突起、羊歯状文、沈線、磨消	横位ミガキ	晩期前葉	大洞BC2式か	77
78	42	62	22M2 倒木痕	埋土	1	1	縄文土器	ⅣB	精製深鉢	口縁部	−	−	(2.7)	羊歯状文	横位ナデ	晩期前葉	大洞BC2式	81
79	42	62	22M2 倒木痕	埋土	1	1	縄文土器	ⅣA～B	深鉢	胴部上半	−	−	(8.3)	沈線、縄文LR（横）	横位ヘラナデ	晩期前葉	大洞B2～BC2式か	80
80	42	62	22M2	検出面	1	1	縄文土器	ⅣC	深鉢	口縁部	−	−	(4.4)	平縁、口端に刻み目で小波状、併行する多重沈線	口端に段有り、横位ナデ	晩期中葉～後葉	大洞C2～A1式	10
81	43	62	試掘トレンチ（21N3）	褐色土	1	1	縄文土器	ⅣC	深鉢	口縁部	−	−	(6.0)	口端小波状、横走する多重沈線	内面口端に段有り、横位ナデ	晩期中葉～後葉	大洞C2～A1式	73
82	43	62	22M2 倒木痕	埋土	2	2	縄文土器	ⅣC	深鉢	口縁部	−	−	(7.5)	平縁、口端指頭による小波状縁、横走する多重沈線	内面口端に段有り、横位ナデ	晩期中葉～後葉	大洞C2～A1式	82
83	43	62	22M2 倒木痕	検出面 埋土	3 2	5	縄文土器	ⅣC	深鉢	口縁部～胴部上半	−	−	(10.8)	平縁、口端刻み目で小波状、平行する５条の多重沈線、縄文LR（横）	横位ナデ	晩期中葉～後葉	大洞C2～A1式	12
84	43	62	22M2 倒木痕	埋土	2	2	縄文土器	ⅣC	深鉢	口縁部	−	−	(4.1)	平縁、口端指頭による小波状縁、横走する多重沈線	横位ナデ	晩期中葉～後葉	大洞C2～A1式	79
85	43	62	22N1 倒木痕	埋土	1	1	縄文土器	ⅣC	深鉢	口縁部	−	−	(5.4)	平縁、口端棒状工具による刻み目で小波状縁を作る。横走する多重沈線、縄文LR（横）	横位ナデ	晩期中葉～後葉	大洞C2～A1式	86
86	43	62	27G3	地山直上（黒褐色土）	1	1	縄文土器	ⅣD	浅鉢または台付浅鉢	口縁部付近	−	−	(2.8)	平行沈線（変形工字文）、縄文LR（斜）	横位ミガキ	晩期末葉	大洞A'式か	88
87	43	62	中央区北側 試掘トレンチ西端	黒褐色土下	1	1	縄文土器	ⅣD	鉢	胴部下半～底部	−	〈7.9〉	(4.7)	縄文LR（斜）、底多方向ナデ、やや上げ底風	横位ナデ	晩期末葉	大洞A'式か	92

第６表　石器観察表（88～201）

（　）：残存値

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	種類	石質	産地	欠損部位	計測値(mm) 長さ	幅	厚さ	重量（g）	自然面	備考	登録No.
88	44	63	竪穴４	床面中央部	石槍	頁岩	奥羽山脈	先端部	(46.1)	9.9	5.0	2.8			S44
89	44	63	27F3	地山直上	石槍	頁岩	奥羽山脈	先端部	(43.9)	12.6	3.9	2.0			S45
90	44	63	22M2	風倒木痕	石槍	頁岩	奥羽山脈		49.5	12.9	6.5	3.2			S46
91	44	63	21H1	地山直上	石槍	頁岩	奥羽山脈		69.8	20.4	10.8	15.8			S47
92	44	63	22H2	地山直上	石槍	頁岩	奥羽山脈	端部	(73.5)	27.0	10.5				S48
93	44	63	土坑 49	埋土（黒褐色土）	石鏃	頁岩	奥羽山脈	先端部	30.4	11.4	3.9	1.3		有茎　アスファルト付着	S51
94	44	63	陥し穴３付近（21N1）	褐色土	石鏃	頁岩	奥羽山脈		23.5	14.0	4.5	1.0		凹基無茎	S2
95	44	63	28F1	地山直上	石鏃	頁岩	奥羽山脈	端・基部	(21.2)	14.2	4.2	1.0		凹基無茎	S57
96	44	63	竪穴２　QNE	埋土	石鏃	頁岩	奥羽山脈		17.3	16.8	3.2	0.8		凹基無茎	S58
97	44	63	24H3	地山直上	石鏃	頁岩	奥羽山脈	先端部	(25.6)	13.8	4.3	1.8		平基	S55
98	44	63	試掘Ｔ（21N2）	褐色土	石鏃	頁岩	奥羽山脈		33.0	16.5	7.0	3.5		基部欠か　平基	S3
99	44	63	21H1	地山直上	石鏃	頁岩	奥羽山脈		32.6	21.1	8.6	5.5		平基	S52
100	44	63	23K1	地山直上	石匙	頁岩	北上山地	摘まみ部	(19.4)	(35.5)	7.4	4.9		横型	S72
101	44	63	28I3	地山直上	石錐	凝灰岩	奥羽山脈		38.0	11.3	4.8	2.1		石槍を再利用	S68
102	44	63	25K1	地山直上	石錐	頁岩	奥羽山脈		29.6	8.2	4.0	0.9			S69
103	44	63	28E3	地山直上	石錐	頁岩	奥羽山脈		35.6	16.9	9.8	5.2			S70
104	44	63	32J3	表土～地山直上	石錐	頁岩	北上山地		83.9	54.9	15.3	58.0			S71
105	45	63	トレンチ中央部	地山直上	篦状石器（両面）	頁岩	奥羽山脈		139.5	45.0	25.0	142.6			S33
106	45	63	溝 25（断面Ｂ付近）	埋土	篦状石器（両面）	頁岩	奥羽山脈	刃部	(129.6)	39.9	19.8	104.0			S260
107	45	63	21I3	地山直上	篦状石器（両面）	頁岩	奥羽山脈		108.5	36.6	18.2	66.3			S116
108	45	64	粘土採掘坑２	埋土	篦状石器（両面）	頁岩	奥羽山脈	刃・基部	(70.7)	41.3	17.8	48.1			S259
109	46	64	32J3	表土～地山直上	篦状石器（両面）	頁岩	奥羽山脈	基部	(73.7)	42.0	19.2	74.3			S267
110	46	64	32J3	表土～地山直上	篦状石器（両面）	頁岩	奥羽山脈	刃部	(80.4)	41.1	18.9	71.3			S268
111	46	64	溝 12（30K1）	埋土	篦状石器（両面）	頁岩	奥羽山脈	刃部	(74.5)	39.2	21.4	51.2			S106
112	46	64	粘土採掘坑２	埋土	篦状石器（両面）	頁岩	奥羽山脈		79.8	45.3	22.0	75.1			S112
113	46	64	27F2	地山直上	篦状石器（両面）	頁岩	奥羽山脈		70.3	37.3	15.8	45.5			S97
114	46	64	北区	木根中	篦状石器（両面）	頁岩	奥羽山脈		82.8	45.1	17.6	63.1			S7
115	47	64	堀１	埋土	篦状石器（両面）	頁岩	奥羽山脈		79.8	40.0	17.9	61.5			S4
116	47	65	溝 12（28J4）	埋土	篦状石器（両面）	頁岩	奥羽山脈		75.2	34.8	16.4	40.9			S107
117	47	65	32I4　切株周辺	地山直上（黒褐色土）	篦状石器（両面）	頁岩	奥羽山脈		66.6	50.7	17.1	64.7			S130
118	47	65	30J1	地山直上	篦状石器（両面）	頁岩	奥羽山脈		54.8	27.2	10.8	14.5			S128
119	47	65	30I2	地山直上	篦状石器（両面）	頁岩	奥羽山脈		67.0	34.5	11.0	20.6			S126
120	47	65	28F1	地山直上	篦状石器（両面）	頁岩	奥羽山脈		66.3	37.2	15.3	35.9			S121
121	48	65	土坑 78	埋土	篦状石器（両面）	頁岩	奥羽山脈		70.6	52.9	25.5	95.8			S214
122	48	65	溝 14	埋土	篦状石器（両面）	デイサイト	奥羽山脈		117.2	65.9	31.1	252.5			S256
123	48	65	陥し穴状遺構 33	埋土上部	篦状石器（片面）	頁岩	奥羽山脈		75.9	34.6	14.0	34.1			S82
124	48	65	土坑 63	埋土	篦状石器（片面）	頁岩	奥羽山脈	基部	(56.9)	28.3	8.3	14.9			S83

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	種類	石質	産地	欠損部位	計測値(mm)			重量（g）	自然面	備考	登録No.
									長さ	幅	厚さ				
125	48	65	P76	埋土	篦状石器（片面）	頁岩	奥羽山脈		76.0	43.0	21.2	63.0			S89
126	48	66	21H1 倒木痕	黒褐色土中	篦状石器（片面）	頁岩	奥羽山脈	基部	(69.0)	46.4	14.4	50.5			S91
127	49	66	21I1	地山直上	篦状石器（片面）	頁岩	奥羽山脈		50.5	25.2	9.6	8.9			S92
128	49	66	24J3	地山直上	篦状石器（片面）	頁岩	奥羽山脈		50.6	28.6	12.6	18.8			S94
129	49	66	25G1	地山直上	篦状石器（片面）	頁岩	奥羽山脈		50.2	32.5	14.2	23.1			S95
130	49	66	25G1	地山直上	篦状石器（片面）	頁岩	奥羽山脈		57.3	25.6	12.9	21.8			S96
131	49	66	32E2	地山直上	篦状石器（片面）	頁岩	奥羽山脈		60.0	36.0	15.2	34.1			S100
132	49	66	27L4	地山直上	篦状石器（片面）	ホルンフェルス	奥羽山脈基盤	基部	(131.4)	53.7	33.1	262.9		石斧と同形状	S263
133	49	66	30K1	地山直上	篦状石器（片面）	頁岩	奥羽山脈		110.6	90.7	30.2	404.3			S265
134	49	66	土坑 41	埋土	楔形石器	頁岩	北上山地		42.9	35.8	16.1	27.1		２個一対	S73
135	49	66	29I4	地山直上	楔形石器	頁岩	北上山地		39.1	28.7	15.9	16.8		４個二対	S75
136	50	66	21N3	褐色土	スクレイパー類	頁岩	奥羽山脈		43.5	44.5	11.7	17.9			S11
137	50	66	21N2	褐色土	スクレイパー類	頁岩	奥羽山脈		42.3	38.0	5.0	7.9			S12
138	50	66	溝 24（32J3）	埋土	スクレイパー類	頁岩	奥羽山脈		53.7	45.9	14.9	42.7			S140
139	50	66	21H2	地山直上	スクレイパー類	頁岩	奥羽山脈		26.2	26.7	9.6	8.0		ラウンド	S142
140	50	66	竪穴 4	埋土北半	スクレイパー類	頁岩	奥羽山脈	端部	(66.4)	51.2	16.6	60.6			S147
141	50	67	陥し穴 13	埋土	スクレイパー類	頁岩	奥羽山脈		65.8	30.9	13.3	24.6			S148
142	50	66	28I3	地山直上	スクレイパー類	頁岩	奥羽山脈		36.3	35.6	10.2	10.7			S155
143	50	67	竪穴 4	埋土南半	スクレイパー類	頁岩	奥羽山脈		81.5	47.0	14.8	45.2			S159
144	51	67	陥し穴 10	埋土	スクレイパー類	頁岩	奥羽山脈		66.5	31.6	8.2	15.9			S160
145	51	67	32J3	表土～地山直上	スクレイパー類	頁岩	奥羽山脈		53.7	52.0	31.6	74.6			S170
146	51	67	試掘 T（22N2）	表土	スクレイパー類	頁岩	奥羽山脈		44.2	69.6	13.8	35.0			S172
147	51	67	竪穴 2	埋土	二次加工ある剥片	頁岩	奥羽山脈		37.3	35.9	12.8	12.1			S173
148	51	67	粘土採掘坑 2	埋土	二次加工ある剥片	頁岩	奥羽山脈		43.1	36.1	11.0	15.7			S180
149	51	67	26H2	地山直上	二次加工ある剥片	頁岩	奥羽山脈		59.6	68.0	18.2	68.4			S206
150	52	67	竪穴 4 中央	床面	剥片	頁岩	奥羽山脈		17.0	15.0	2.0	0.4		接合資料 1、90° 打面転位	S347
151	52	67	竪穴 4 中央	床面	剥片	頁岩	奥羽山脈		29.0	19.5	3.0	1.5	有	接合資料 1、90° 打面転位	S348
152	52	67	竪穴 4 南半	埋土	剥片	頁岩	奥羽山脈		22.0	22.0	3.0	1.7	有	接合資料 1、90° 打面転位	S349
153	52	67	竪穴 4 中央	床面	剥片	頁岩	奥羽山脈		34.0	21.5	3.5	2.1		接合資料 1、90° 打面転位	S350
154	52	67	竪穴 4 北半	埋土	剥片	頁岩	奥羽山脈		18.0	11.0	3.5	0.8		接合資料 2、同一面	S351
155	52	67	竪穴 4 北半	埋土	剥片	頁岩	奥羽山脈		22.0	21.0	4.5	1.4		接合資料 2、同一面	S352
156	52	67	竪穴 4 中央	床面	剥片	頁岩	奥羽山脈		39.0	33.0	5.0	3.7		接合資料 3、同一面	S353
157	52	67	竪穴 4 中央	床面	剥片	頁岩	奥羽山脈		36.5	14.0	3.0	1.4		接合資料 3、同一面	S354
158	52	68	竪穴 4 中央	床面	剥片	頁岩	奥羽山脈		21.0	17.0	3.0	0.8		接合資料 4、180° 打面転位	S355
159	52	68	竪穴 4 中央	床面	剥片	頁岩	奥羽山脈		20.0	27.0	3.0	1.4		接合資料 4、180° 打面転位	S356
160	52	68	竪穴 4 北半	埋土	剥片	頁岩	奥羽山脈		28.0	25.5	4.0	1.8		接合資料 5、同一面	S357
161	52	68	竪穴 4 南半	埋土	剥片	頁岩	奥羽山脈		36.0	24.5	5.0	2.1		接合資料 5、同一面	S358
162	53	68	土坑 27	埋土上位	石核	頁岩	奥羽山脈		40.2	42.3	39.9	75.9			S211

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	種類	石質	産地	欠損部位	計測値(mm)			重量（g）	自然面	備考	登録No.
									長さ	幅	厚さ				
163	53	68	27M3	地山直上	石核	頁岩	奥羽山脈		42.8	42.6	28.8	57.9			S226
164	53	68	粘土採掘坑 2	埋土	石核	頁岩	北上山地		68.5	62.0	26.5	104.1			S228
165	54	68	陥し穴 13	埋土上位（黒褐色土）	石核	頁岩	奥羽山脈		42.8	69.5	34.2	107.1			S230
166	54	68	陥し穴 17	埋土上位（黒褐色土）	石核	頁岩	奥羽山脈		46.3	71.5	33.2	106.2			S231
167	54	68	陥し穴 17	埋土上位（黒褐色土）	石核	頁岩	奥羽山脈		68.0	59.0	35.5	178.8			S232
168	55	68	粘土採掘坑 2	埋土	石核	頁岩	奥羽山脈		58.8	48.7	41.8	139.2			S237
169	55	69	25I1	地山直上	石核	頁岩	奥羽山脈		77.3	58.0	37.5	168.3			S242
170	56	69	21I1	地山直上	磨製石斧	蛇紋岩	早池峰山周辺	刃部	(41.5)	(34.1)	11.2	31.1			S249
171	56	69	28I3	地山直上	磨製石斧	凝灰岩	奥羽山脈	基部	(39.6)	(38.2)	13.3	28.4		両刃	S250
172	56	69	試掘 T21L2（溝 3・4 付近）	褐色土	磨製石斧	凝灰岩	奥羽山脈		78.5	36.0	19.0	83.3		片刃	S31
173	56	69	試掘 T（21N2）	褐色土	磨製石斧	はんれい岩	北上山地	刃部	(67.0)	45.0	26.0	114.0		基部のみ	S32
174	56	69	6D2	褐色土	磨製石斧未成品	ヒン岩	北上山地	刃部	(99.5)	52.8	35.5	230.6		基部側 1/2	S34
175	56	69	28K1	地山直上	磨製石斧未成品	頁岩	北上山地		85.3	37.9	12.6	62.7			S251
176	57	70	溝 14		石鍬	ホルンフェルス	奥羽山脈基盤		213.0	131.8	52.6	1164.3			S272
177	57	69	21J3	地山直上	石鍬	ホルンフェルス	奥羽山脈基盤		149.9	80.4	23.3	292.1			S273
178	57	69	20J4 倒木痕	埋土	石鍬	赤紫色凝灰岩	一関市東山町	刃部	(109.0)	(74.5)	19.5	218.0		石鍬か　基部側のみ　搬入品か	S37
179	57	70	21M1	褐色土	礫器	ホルンフェルス	奥羽山脈基盤	基部	144.0	(71.5)	64.0	944.8		両刃	S38
180	57	70	粘土採掘坑 2	埋土	礫器	ホルンフェルス	奥羽山脈基盤		121.5	73.5	44.0	585.5			S275
181	58	70	土坑 8　S2	埋土	特殊磨石	頁岩	北上山地		165.0	63.5	30.3	383.6		未成品	S36
182	58	70	20H2	黒褐色土	特殊磨石	安山岩	奥羽山脈		155.0	50.5	66.0	726.0		三角形礫素材　磨 3 面	S41
183	58	70	21M4	褐色土	特殊磨石	ホルンフェルス	奥羽山脈基盤	端部	(93.5)	(44.0)	(60.5)	326.8		磨 1	S42
184	58	70	26I3 竪穴プラン試掘 T	黒褐色土	特殊磨石	デイサイト	奥羽山脈		157.0	63.8	69.1	751.4		側 1	S296
185	58	70	竪穴 2　P12	埋土	特殊磨石	流紋岩	奥羽山脈		148.3	75.9	87.3	1008.9		側 1　図あり	S297
186	58	70	竪穴 5	埋土	特殊磨石	ホルンフェルス	奥羽山脈基盤		103.5	51.4	56.7	380.1		欠損か	S298
187	59	70	土坑 22	埋土	特殊磨石	流紋岩	奥羽山脈		155.5	82.1	69.0	1019.4		側 1、敲→端 1	S299
188	59	70	24J2	地山直上	特殊磨石	流紋岩	奥羽山脈	端部	(115.6)	63.0	76.8	608.2		側 1　欠損	S311
189	59	70	28I2	地山直上	特殊磨石	デイサイト	奥羽山脈		169.2	56.0	60.4	830.7		磨：側 3　敲：端 2	S319
190	60	71	中央区北側トレンチ中央部	地山直上	敲石	ホルンフェルス	奥羽山脈基盤		171.5	47.0	25.0	292.7		端 1	S39
191	59	71	溝 4	埋土	敲石	流紋岩	奥羽山脈	端部	(93.5)	55.0	29.5	187.1		磨斧未成品	S40
192	59	71	竪穴 5	埋土	敲石	ホルンフェルス	奥羽山脈基盤		181.7	63.4	48.6	838.9		端 2・側 1	S276
193	60	71	溝 14	埋土	敲石	頁岩	奥羽山脈		40.4	43.2	43.8	99.9		多面体	S279
194	60	71	竪穴 5	埋土	凹石	デイサイト	奥羽山脈		69.1	66.0	30.8	133.3		正裏各 1	S289
195	60	71	溝 14	埋土	凹石	流紋岩	奥羽山脈		106.2	100.8	32.0	429.5		正 1	S292
196	60	71	溝 25（32I1）	埋土	砥石	流紋岩	奥羽山脈	端部	(43.7)	66.5	16.2	60.7			S329
197	61	71	竪穴 3	床面	台石	デイサイト	奥羽山脈	端部	(280.6)	(304.6)	88.8	6500.0		写図あり	S331
198	61	71	土坑 41	底面	台石	安山岩	奥羽山脈	端部	(331.2)	(183.0)	157.8	10100.0		写図あり　擦痕	S332
199	61	71	溝 12（30L2）	埋土	台石	安山岩	奥羽山脈		223.6	118.2	104.8	4000.0		擦痕	S335
200	62	72	土坑 8　S3	埋土上面	自然礫	流紋岩	奥羽山脈	端部	(167.5)	(102.0)	(72.0)	1007.6		半欠　墓坑に設置か	S43
201	62	72	土坑 8　S1	埋土上面	自然礫	デイサイト	奥羽山脈	端部	(494.0)	(166.0)	(113.0)	11200.0		土坑上面に設置されており、意図的に遺跡内へ持ち込まれた可能性あり	S346

第７表　土製品観察表（202～204）

（　）：残存値・＜　＞：推定値

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	破片数	総破片数	種類	器種	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量（g）	外面調整・施文など	内面調整・施文など	時期	備考	登録No.
202	62	72	土坑 49	埋土上位（黒褐色土）	1	1	土製品	円盤状土製品	3.9	4.3	0.6	9.0	浅鉢からの転用か、中央に穿孔有り（内外面から）。沈線、磨消、縄文LR（横）、全周を打ち欠いている、赤色塗彩か	横位ミガキ	晩期前～中葉		93
203	－	72	土坑 33	埋土	1	1	土製品	焼成粘土塊	2.0	1.6	1.5	2.5					95
204	－	72	土坑 75	埋土	2	2	土製品	焼成粘土塊	4.2	2.8	2.5	18.5					96

第８表　石製品観察表（205～207）

（　）：残存値

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	種類	石質	産地	欠損部位	計測値（mm） 長さ	幅	厚さ	重量（g）	自然面	備考	登録No.
205	62	72	土坑 59	底面　S1	石棒類	ホルンフェルス	奥羽山脈基盤	頭部	(164.6)	105.9	47.6	1250.1	有	未成品か	S340
206	62	72	土坑 85	埋土	石棒類	粘板岩	北上山地	体部	(94.9)	27.5	20.6	84.7		石棒	S341
207	62	72	30H4	地山直上	石棒類	粘板岩	北上山地	体部	(62.8)	21.2	5.8	12.8		石刀	S342

第９表　陶磁器観察表（208～213）

（　）：残存値

掲載No.	図	写図	出土地点	層位	破片数	総破片数	種類	器種	生産地	時期	残存位置	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	外面調整・施文など	内面調整・施文など	胎土	色調	備考	登録No.
208	63	72	21H3	地山直上	1	1	磁器	碗	中国	16 世紀	口縁部付近～体部上半	－	－	(1.6)	透明釉、染付	透明釉	白色	白色	明代	98
209	63	72	北区東側試掘トレンチ中央付近	表土下褐色土	1	1	陶器	埦	大堀相馬	18 世紀後半か	体部下半	－	－	(2.4)	下半のみ灰釉を重ねる	灰釉	淡黄色	灰色		100
210	63	72	22H2	地山直上	1	1	陶器	埦	大堀相馬	18 世紀後半か	口縁部～体部上半	－	－	(2.8)	灰釉	灰釉	灰色	黄緑色		99
211	63	72	23J3	地山直上	1	1	磁器	碗	肥前か	18 世紀後半～19 世紀初頭	口縁部～体部上半	－	－	(1.9)	透明釉、圏線、二重網目文	透明釉	淡黄色	白色		101
212	63	72	溝 10	埋土	1	1	陶器	徳利か	大堀相馬	18 世紀後半か	体部上半	－	－	(2.3)	灰釉	無釉	灰色	黄緑色		97
213	63	72	溝 25（32I4）	埋土	1	1	素焼	ほうろく	在地	19 世紀か	片口部分～底部	－	－	(2.8)	ロクロ成形、口縁部に沈線１条、底部ヘラ切り、回転ナデ無調整	回転ナデ無調整	黄橙色	黄橙色		65

Ⅵ　自然科学的分析

１　放射性炭素年代測定（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

（１）測定対象試料

二子城跡（県企業局）は、岩手県北上市二子町坊舘地内（北緯 39° 20′ 08″、東経 141° 08′ 08″）に所在し、北上川右岸の河岸段丘上（標高 78～80m）に立地する。測定対象試料は、竪穴や土坑から出土した炭化物７点である（表１）。

推定年代は、FJ-２が縄文時代後期前葉、FJ-３～７が縄文時代晩期前葉と考えられ、FJ-１については縄文時代早期中葉の可能性が指摘されている。

（２）測 定 の 意 義

遺構の廃絶時期を明らかにする。

（３）化学処理工程

〈１〉メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
〈２〉酸-アルカリ-酸(AAA：Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ(１M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。
〈３〉試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO_2)を発生させる。
〈４〉真空ラインで二酸化炭素を精製する。
〈５〉精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
〈６〉グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（４）測　定　方　法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

（５）算　出　方　法

〈１〉δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度(^{13}C/^{12}C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表１)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
〈２〉^{14}C年代(Libby Age：yrBP)は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表１に、

補正していない値を参考値として表２に示した。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差(±1σ)は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

〈３〉pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表２に示した。

〈４〉暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差(1σ＝68.2%)あるいは２標準偏差(2σ＝95.4%)で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下１桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表２に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

（６）測　定　結　果

測定結果を表１、２に示す。

試料７点の測定結果は大きく２群に分かれる。

FJ-１、２、７の３点の^{14}C年代は、FJ-１、２が3700±30yrBP、FJ-７が3730±30yrBPである。暦年較正年代(1σ)は、最も古いFJ-７が2196～2045cal BCの間に３つの範囲、最も新しいFJ-２が2135～2036cal BCの間に２つの範囲で示され、縄文時代後期前葉頃に相当する(小林編2008、小林2017)。推定年代に対して、FJ-２は一致するが、FJ-１は新しく、FJ-７は古い値となった。

FJ-３～６の４点の^{14}C年代は、3060±30yrBP(FJ-５)から2930±20yrBP(FJ-３)の間にまとまる。暦年較正年代(1σ)は、最も古いFJ-５が1387～1281cal BCの間に２つの範囲、最も新しいFJ-３が1208～1110cal BCの範囲で示され、FJ-５が縄文時代後期後葉から晩期初頭頃、他の３点が縄文時代晩期初頭頃に相当する(小林編2008、小林2017)。推定年代に対して、おおむね一致するか、若干古い値となった。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林謙一 2017 縄文時代の実年代　―土器型式編年と炭素14年代―, 同成社

小林達雄編 2008 総覧縄文土器，総覧縄文土器刊行委員会，アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表１．放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）(AMS)	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-190830	FJ-1	竪穴2　埋土	炭化材	AAA	−27.83±0.47	3,700±30	63.06±0.22
IAAA-190831	FJ-2	竪穴3　埋土	炭化材	AAA	−25.06±0.46	3,700±30	63.10±0.21
IAAA-190832	FJ-3	土坑31　埋土下位	炭化材	AAA	−25.72±0.44	2,930±20	85.38±0.21
IAAA-190833	FJ-4	土坑50　埋土	炭化材	AAA	−27.54±0.42	2,970±20	84.91±0.21
IAAA-190834	FJ-5	土坑60　底面	炭化材	AAA	−22.97±0.33	3,060±30	85.98±0.22
IAAA-190835	FJ-6	土坑78　埋土	炭化材	AAA	−27.61±0.49	2,960±20	83.85±0.21
IAAA-190836	FJ-7	土坑84　埋土	炭化材	AAA	−26.96±0.49	3,730±30	85.61±0.20

［IAA 登録番号：#9796］

表２．放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-190830	3,750±30	62.70±0.21	3,700±27	2138cAlBC - 2114cAlBC (18.1%) 2100cAlBC - 2038cAlBC (50.1%)	2150cAlBC - 2023cAlBC (86.4%) 1989cAlBC - 1985cAlBC (0.4%)
IAAA-190831	3,700±30	63.09±0.21	3,698±27	2135cAlBC - 2113cAlBC (17.6%) 2101cAlBC - 2036cAlBC (50.6%)	2196cAlBC - 2170cAlBC (6.0%) 2146cAlBC - 2020cAlBC (87.8%) 1993cAlBC - 1983cAlBC (1.6%)
IAAA-190832	2,950±30	69.29±0.20	2,934±24	1208cAlBC - 1110cAlBC (68.2%)	1216cAlBC - 1050cAlBC (95.4%)
IAAA-190833	3,010±20	68.72±0.20	2,970±24	1226cAlBC - 1156cAlBC (52.4%) 1147cAlBC - 1128cAlBC (15.8%)	1266cAlBC - 1114cAlBC (95.4%)
IAAA-190834	3,030±20	68.59±0.21	3,061±25	1387cAlBC - 1339cAlBC (38.6%) 1319cAlBC - 1281cAlBC (29.6%)	1408cAlBC - 1260cAlBC (95.4%)
IAAA-190835	3,000±20	68.84±0.20	2,955±24	1211cAlBC - 1127cAlBC (68.2%)	1259cAlBC - 1245cAlBC (2.3%) 1234cAlBC - 1074cAlBC (92.0%) 1065cAlBC - 1057cAlBC (1.1%)
IAAA-190836	3,760±20	62.63±0.19	3,726±25	2196cAlBC - 2171cAlBC (18.4%) 2146cAlBC - 2127cAlBC (14.8%)	2201cAlBC - 2110cAlBC (51.1%) 2105cAlBC - 2036cAlBC (44.3%)

［参考値］

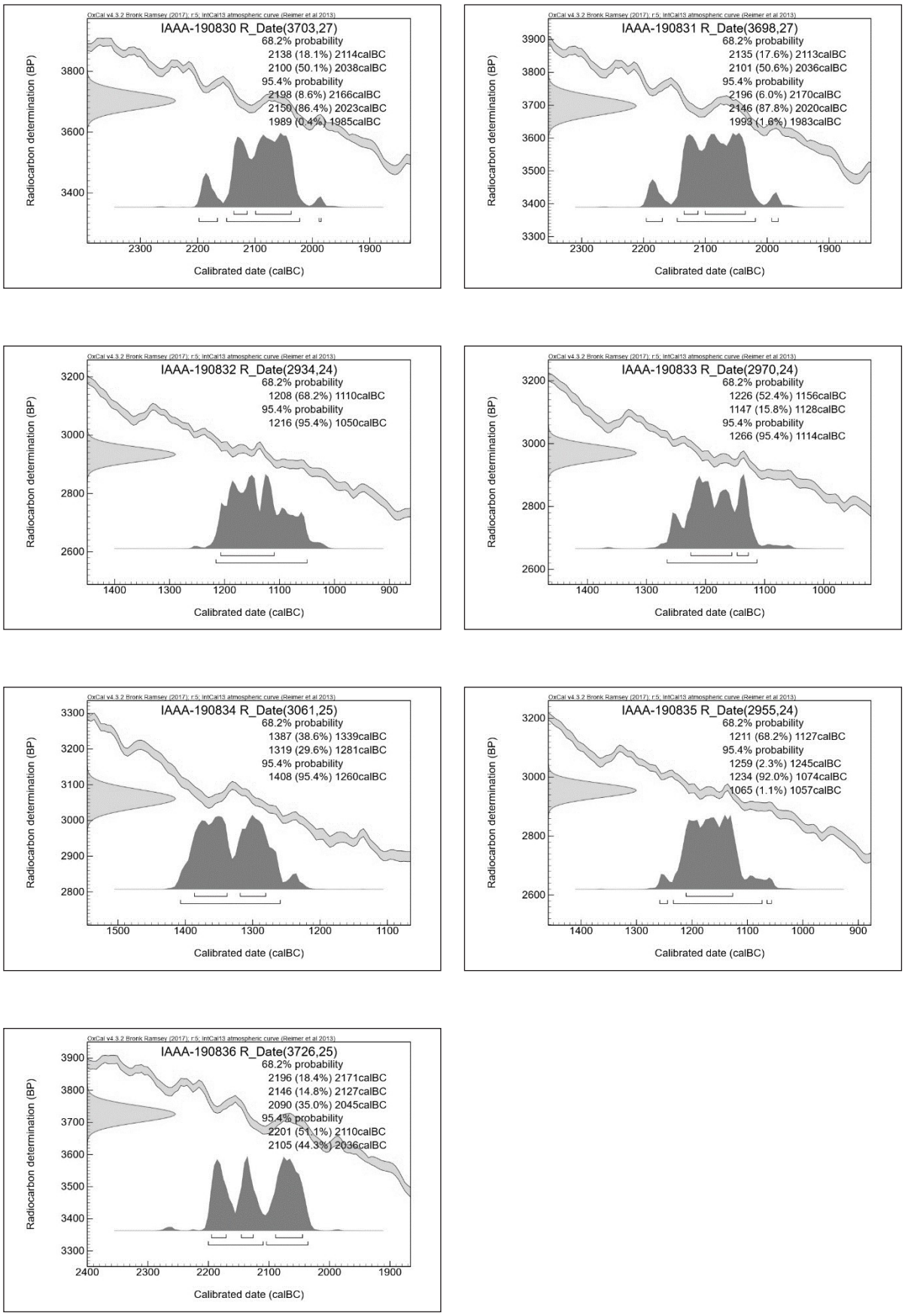


図１．暦年較正年代グラフ（参考）

Ⅶ　調査のまとめ

1　縄　文　時　代

今回の調査から、後期前葉の竪穴住居跡２棟と晩期前葉、晩期後葉の竪穴住居跡各１棟の計４棟が確認された。第９図に示した通り、隣接する過去の調査範囲でも竪穴住居跡が見つかっており、昭和63年の坊館跡調査から後期後葉１棟と後期末葉～晩期初頭１棟の計２棟、平成元年の物見崎遺跡調査から前期前葉14棟と後期２棟、弥生時代初頭２棟の計18棟が確認されている。今回の調査で確認した西側の深い谷は、物見崎遺跡の東から南側にも回り込むように入っていることから、谷を挟んで北西側には前期前葉を中心とする物見崎遺跡の集落、南東側には後～晩期を中心とする昭和63年の坊館跡と今回の調査区が広がると考えられる。ただ、昭和63年検出の竪穴住居跡を含めた南東側の遺構密度は低く、東側に偏る。また、土器埋設遺構や土坑についても、北東から南西にかけて標高が高い79.0～80.0ｍの尾根から川側にかけて多く分布している。陥し穴状遺構は、平面形状から方形基調が早期、円形基調が前期初頭～前葉、溝状基調が中～後期に分けられる。方形基調は南区中央の標高79.0～80.0ｍ付近、円形基調は中央区から南区にかけての標高の高い79.0～80.0ｍの尾根部分、溝状基調は北区、中央区から南区の尾根部分から東側に集中して認められる。

出土遺物は多くないが、土器の量に比べて石器が多く見つかっており、特に晩期後葉の竪穴４のように、石器製作に関わると見られる遺構も確認されている。また、石器の中では篦状石器の占める割合が高く、石器製作とともに革鞣し作業が集中して行われたと推測され、川辺の集落の営みを垣間見ることができる。

2　古 代 ～ 中 世

古代の竪穴の一部と考えられる竪穴５は南区南端から確認されたが、過去の隣接する遺跡調査でも見つかっておらず集落の様相は明らかでない。竪穴５の南側も中世の普請か切り土となっており、集落の広がりが遺跡南側から認められるかは、中世の普請の影響も関係すると考えられる。今回の調査区と、昭和52、63年の調査区は坊館跡の中心域を調査したことになるが、大規模な堀など普請の痕跡や竪穴建物や掘立柱建物など作事遺構は確認されなかった。伝承によれば、和賀氏の祖先が居城を更木から飛勢ヶ森に移した時、坊館の場所に「正法寺」を建立したとされるが、調査からは寺院跡を思わせる痕跡は認められていない。ただ、中世二子城本体の八幡山と秋葉山の北側に立地する環境から見れば、搦手口を守る防衛上の要地であったことは確かであろう。二子城を構成する家臣屋敷と伝えられる加賀館や監物館、筒井内膳屋敷に囲まれ、西から北側、また南側を深い谷で区切られる立地と調査区南側の現況から認められる曲輪、土塁、堀から、城館を想定しても差し支えないだろう。今後、南側の様相が明らかになれば、今回の調査範囲の防衛上の意味も明らかになると考えられる。　（北田）

参考文献

北上市教育委員会 1977『二子城跡坊舘遺跡調査報告書』文化財調査報告第21集

（財）岩文埋 1989『坊館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第145集

（財）岩文埋 1990『物見崎遺跡・監物館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第157集